

白井遺跡群 - 集落編 I - (白井二位屋遺跡)

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1994

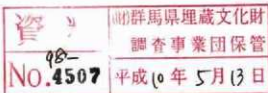
建設省
群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

『白井遺跡群』— 集落編 I —

(白井二位屋遺跡)

正誤表

頁・行	誤	正
89P 31行	須恵器高台付き杯	須恵器高台付き碗
143P 第103図78PL-67	底部 1/2	頸部 1/2
147P 第101図54	図の天地が逆	

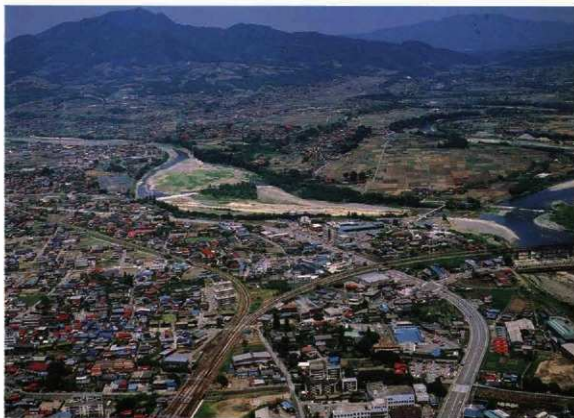


白井遺跡群 - 集落編 I - (白井二位屋遺跡)

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1994

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景（南から）



遺跡から子持山を望む



1・2区 空撮



1号住居



74号住居竈



74号住居竈

序

鯉沢バイパスは、渋川市内と子持村内の交通混雑の改善を図るために計画された5.5kmのバイパスです。

昭和62年度に起点の渋川バイパスから一般国道353号バイパスとの交差までの区間2.3kmが事業化し、用地取得が進んだ子持村白井地区から平成2年度より埋蔵文化財の発掘調査を始めました。

ご承知のように、子持村白井地区は西暦6世紀に大爆発した軽石に埋もれた遺跡として、全国的に著名となった史跡黒井峯遺跡に近接しています。白井地区も黒井峯遺跡同様に軽石があることから貴重な遺構・遺物等が発見されることが予測されました。予測どおり白井北中道遺跡をはじめとする各遺跡からは、西暦6世紀の我が国初めての馬の放牧場と畠跡が発見・調査され、農業史を解明する上で貴重な遺跡として、県内外から注目されています。

これまで調査した遺跡の白井二位屋・白井南中道の2遺跡の中世関係については、平成4年度に調査報告書を刊行しましたが、今回白井二位屋遺跡について平成4年度より行っている奈良・平安時代の集落の整理作業が完了しましたので、ここに「白井遺跡群—集落編Ⅰ—」の調査報告書を刊行することにしました。本報告書には、堅穴住居跡69軒と注目すべき遺物として「大長」の刻書のある甕、和銅開珎、多数の骨角加工製品等が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、子持村教育委員会、地元関係者の方々から種々、ご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成6年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に先行して行われた白井二位屋遺跡発掘調査の記録である。これらの遺跡は事業名称を「仁位屋遺跡」と呼称していたが、その後遺跡名の適正化が図られ、遺跡所在地の大字・小字名を併記する方法をとることになった。その結果、本遺跡については、「白井二位屋遺跡」という名称に変更している。また、白井地区の鯉沢バイパス関係の各遺跡は、互いに関連する遺構が多いため、全ての遺跡をとりまとめて「白井遺跡群」の名称を、使用することとする。
2. 白井二位屋遺跡は、群馬県北群馬郡持村大字白井に所在する。
3. 鯉沢バイパス改築工事は建設省関東地方建設局が事業主体であり、これに伴う発掘調査及び整理作業を(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 調査、整理体制及び期間は次のとおりである。

《発掘調査》

平成2年4月1日～平成3年3月31日

調査担当 飯島義雄、神谷佳明、黒田 晃、石北直樹、麻生敏隆、南雲芳昭

事務局 邊見長雄、松本浩一、田口紀雄、神保脩史、能登 健、岩九大作、国定 均
小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏
野島のお江、並木綾子、今井もと子、松井美智代、角田みづほ

平成3年11月1日～平成4年1月31日

調査担当 大木紳一郎、南雲芳昭、黒田 晃

事務局 邊見長雄、松本浩一、佐藤 勉、神保脩史、能登 健、岩九大作、国定 均
須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、松下 登
野島のお江、並木綾子、今井もと子、松井美智代、角田みづほ、塩浦ひろみ

《整理作業》

平成4年10月1日～平成5年3月31日

整理担当 黒田 晃

図版作成 伊藤淳子、岩淵節子、大友美代子、金子吉江、岸トキ子、柴田敏子、田中富子
藤井輝子、木原幸子

事務局 邊見長雄、松本浩一、近藤 功、佐藤 勉、神保佑史、能登 健、岩丸大作
斎藤俊一
国定 均、須田朋子、吉田有光、笠原秀樹、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義
松下 登
野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、松井美智代、角田みづほ、塩浦ひろみ

平成5年4月1日～平成5年9月30日

整理担当 黒田 晃

図版作成 岩淵節子、大友美代子、岸トキ子、木原幸子、田中富子、藤井輝子、吉田文子

事務局 中村英一、近藤 功、佐藤 勉、神保佑史、能登 健、斎藤俊一
国定 均、須田朋子、吉田有光、笠原秀樹、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義
松下 登、吉田恵子、松井美智代、角田みづほ、塩浦ひろみ

- 発掘作業に当たっては、地元の方々を初めとして、遠方からも多数の作業員の方にお世話になった。夏の炎天下、冬の寒さにも負けず毎日作業を続けていただいた作業員の方々にここで感謝の意を述べたい。
- 遺構写真撮影は各調査担当者、遺物写真撮影は当事業団技師佐藤元彦が行った。
- 出土遺物の保存処理は、当事業団技師岡 邦一と、小村浩一が行った。
- 出土遺物の分析については、以下の方々、団体に依頼した。

石材同定	飯島静男氏
獣骨・人骨鑑定	宮崎重雄氏
テフラ分析	株式会社古環境研究所
鉄滓分析	新日本製鉄(株)八幡製鉄所 TACセンター 大澤正己氏
- 尚、化学分析については、特別の場合を除き、依頼した報告者の原文をそのまま掲載している。分析データと写真資料は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。
- この報告書を作成するに関しては、数多くの方々に指導、助言を受けている。また、発掘調査に際しては子持村教育委員会、及び地元関係者の多大なるご支援をいただいた。改めて感謝の意を表したい。
- 遺構の名称は、原則として発掘調査時のものを踏襲するが、重番や欠番による混乱を避けるため、一部において修正がなされている。
- 報告書の編集は、黒田 晃が担当した。執筆は黒田 晃が主体となり、各項目の執筆者については、目次に記した。
- 本遺跡の記録保存資料、及び出土遺物は、現在群馬県埋蔵文化財調査センター及び(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

凡 例

1. 本書は白井二位屋遺跡の奈良・平安時代の集落を中心とした報告書である。
2. 挿図中の方位記号は全て国家座標上の北を基準としている。
3. 本書では、テフラの呼称として、浅間A軽石→As-A、浅間B軽石→As-B、浅間C軽石→As-C、榛名山二ツ岳噴出火山灰→FA(Hr-S)・FP(Hr-I)を用いる。
4. 遺構図の縮尺は1/60を基準として掲げたが、一部縮尺の異なるものがあるので各挿図中のスケールを参照されたい。
5. 遺構図中のスクリーントーンは下記のとおりである。



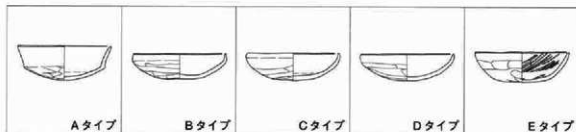
6. 遺物図は基本的に1：3の縮尺で掲載したが、鉄製品については1：2、骨角器については1：2その他小形製品も1：2、あるいは1：1の縮尺を採用した。各挿図中のスケールを参照されたい。
7. 遺物図中のスクリーントーンは下記のとおりである。



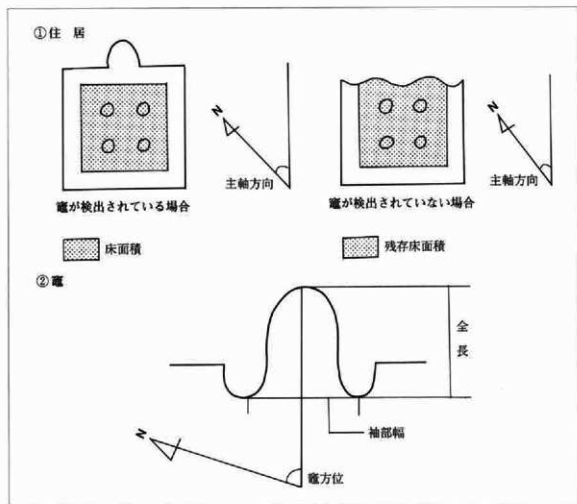
8. 遺物写真のスケールは遺物実測図のスケールと必ずしも一致しない。
9. 遺物図のトレースにおいて、須恵器その他の襷轆使用の痕跡、土師器杯の口縁部上で、ヘラケズリとヨコナデとの境に、調整を行わない部分がある場合、内面のヨコナデとヘラナデの境の線は2箇所を削って、破線状に表現している。また、手持ち、回転を問わずヘラケズリの線は、実線で表現している。
10. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院	1：25,000	「鯉沢」	「渋川」
	1：200,000	「長野」	「宇都宮」
子持村都市計画図	1：2,500	「No23」	「No25」
11. 土師器杯は以下の分類基準で仮の分類を行った。

- Aタイプ：口縁部と体部を分ける稜を持ち、一般に模倣杯と呼ばれる古墳時代からの伝統的な杯。
 Bタイプ：口縁部が鋭く屈曲し、内傾する杯。
 Cタイプ：丸底の体部から緩やかに立ち上がり口唇部が内湾するもの。
 Dタイプ：Cタイプに似るが、口唇部が直立、あるいは外反さみのもの。
 Eタイプ：丸底、やや厚手で、外反さみに立ち上がり、内面に暗文を持つ杯。



12. 遺物観察表の「出土位置」の数値は原則的に遺物の床からの垂直距離である。
13. 遺物観察表(土器)の口径、底径、器高の単位は全てcmである。各値で、全体像が復元できるものについては、復元された値を括弧付きで示した。莞などで、下半を欠損し、全体の高さが不明なものについては、残存高を示し、残cmで標記した。
14. 遺物観察表(土器)の色調は、農林省農林水産技術会議監修、財団法人 日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帳」に拠った。
15. 遺物観察表(鉄器、石器、骨角器)の長さ、幅、厚さの単位は全てcmである。また重さの単位は全てgである。
16. 住居の面積については、遺構の下場の壁際を、デジタルプランメーターで3回計測し、そこから平均値を出した値を採用した。住居跡の全体像が復元できるものについては、復元された住居跡の面積を求めた。また復元不可能な住居跡については残存面積を測定した。
17. 住居及び竈の主軸方位については、以下の基準で計測し、標記した。
 - ①住居の主軸方位は、竈が付設されている辺に直交する辺の角度を、北を基準に東回りに計測し、 $N-角度-E$ と標記した。
竈が検出されなかった住居に関しては、東西方向の辺を主軸方向として計測した。
 - ②竈の主軸方位は、竈の中心軸を、北を基準に東回りに計測し、 $N-角度-E$ と標記した。



目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

写真図版目次

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査の方法	3
第4節 調査区の設定	4
第5節 基本層序	5

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 遺跡周辺の地形	7
第2節 周辺の遺跡	10

第3章 検出された遺構

第1節 竪穴住居	14
第2節 土坑その他	239

第4章 調査のまとめと理科学分析

第1節 二位屋遺跡出土炭化材の樹種同定 株式会社パレオラボ 藤根 久	249
第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製 鉄関連遺物の金属学的調査 大澤 正己	253
第3節 埋めもどされた住居跡について 神谷 佳明	290
第4節 白井二位屋遺跡の獣骨類 大間々高校教諭 宮崎 重雄	292

挿図目次

第1図 国道17号無沢バイパス路線図	1
第2図 白井二位屋遺跡調査範囲	2
第3図 調査区設定図	4
第4図 白井二位屋遺跡土層柱状図	6
第5図 遺跡位置図	8
第6図 遺跡周辺における段丘面の分布	9
第7図 周辺遺跡図	11
第8図 1号住居・出土遺物(1)	16
第9図 1号住居竈	17
第10図 1号住居出土遺物(2)	18
第11図 1号住居出土遺物(3)	19
第12図 1号住居掘り方	20
第13図 2号住居・掘り方・出土遺物	22
第14図 3号住居・掘り方・出土遺物(1)	23
第15図 3号住居出土遺物(2)	24
第16図 4号住居	26
第17図 4号住居竈	27
第18図 4号住居掘り方・出土遺物(1)	28
第19図 4号住居出土遺物(2)	29

第20図 4号住居出土遺物(3)	30
第21図 4号住居出土遺物(4)	31
第22図 5号住居	33
第23図 5号住居竈・出土遺物(1)	34
第24図 5号住居掘り方	35
第25図 5号住居出土遺物(2)	36
第26図 6号住居・出土遺物	37-38
第27図 6号住居掘り方・竈	39-40
第28図 7号住居・出土遺物(1)	42
第29図 7号住居掘り方・出土遺物(2)	43
第30図 8号住居	45
第31図 8号住居竈	46
第32図 8号住居掘り方	47
第33図 8号住居出土遺物(1)	48
第34図 8号住居出土遺物(2)	49
第35図 8号住居出土遺物(3)	50
第36図 9号住居・掘り方・出土遺物	52
第37図 10号住居・掘り方・出土遺物	53
第38図 11号住居・出土遺物	55

第399回	11号住居	56
第400回	11号住居掘り方	57
第41回	12・32号住居、32号住居竈、出土遺物	59
第42回	13・14号住居、掘り方、出土遺物	60
第43回	15号住居、出土遺物	62
第44回	16号住居、掘り方、竈	64
第45回	16号住居出土遺物(1)	65
第46回	16号住居出土遺物(2)	66
第47回	16号住居出土遺物(3)	67
第48回	18号住居、掘り方、竈、出土遺物	68
第49回	19・20号住居、19号住居出土遺物	70
第50回	19号住居、19・20号住居掘り方	71
第51回	20号住居出土遺物	72
第52回	21号住居、掘り方、竈	73
第53回	22号住居、掘り方、出土遺物	74
第54回	23・24・25・27・35号住居、24号住居出土遺物	77
第55回	28号住居	79
第56回	28号住居竈	80
第57回	28号住居掘り方	81
第58回	28号住居出土遺物(1)	82
第59回	28号住居出土遺物(2)	83
第60回	29号住居、掘り方、出土遺物(1)	85
第61回	29号住居出土遺物(2)	86
第62回	30号住居	87
第63回	30号住居掘り方、出土遺物	88
第64回	31号住居	91
第65回	31号住居竈、出土遺物(1)	92
第66回	31号住居出土遺物(2)	93
第67回	31号住居出土遺物(3)	94
第68回	31号住居掘り方	95
第69回	34号住居、竈	96
第70回	34号住居掘り方、出土遺物	97
第71回	36号住居、掘り方	99
第72回	37号住居、竈	101
第73回	37号住居掘り方、出土遺物	102
第74回	38・41号住居、38号住居竈	104
第75回	41号住居竈、38号住居出土遺物	105
第76回	38・41号住居掘り方、41号住居出土遺物	106
第77回	39号住居	109
第78回	39号住居竈	110
第79回	39号住居出土遺物(1)	111
第80回	39号住居出土遺物(2)	112
第81回	39号住居出土遺物(3)	113
第82回	39号住居出土遺物(4)	114
第83回	39号住居掘り方	115
第84回	40号住居	118
第85回	40号住居竈	119
第86回	40号住居掘り方	120
第87回	40号住居出土遺物(1)	121
第88回	40号住居出土遺物(2)	122
第89回	42号住居、掘り方、竈、出土遺物	124
第90回	43号住居、竈	126
第91回	43号住居出土遺物	127
第92回	43号住居掘り方	128
第93回	45号住居	130
第94回	45号住居掘り方、出土遺物	131
第95回	46号住居、掘り方、出土遺物	133
第96回	47号住居、出土遺物	135
第97回	48・49号住居、48号住居竈、48号住居出土遺物	136・137
第98回	48・49号住居掘り方	144
第99回	49号住居出土遺物(1)	145
第100回	49号住居出土遺物(2)	146

第101回	49号住居出土遺物(3)	147
第102回	49号住居出土遺物(4)	148
第103回	49号住居出土遺物(5)	149
第104回	49号住居出土遺物(6)	150
第105回	44号住居、竈	157
第106回	50号住居、石櫃、出土遺物(1)	158
第107回	50・51号住居掘り方、50号住居出土遺物(2)	159・160
第108回	51号住居	161
第109回	51号住居出土遺物(1)	162
第110回	51号住居出土遺物(2)	163
第111回	51号住居出土遺物(3)	164
第112回	51号住居出土遺物(4)	165
第113回	51号住居出土遺物(5)	166
第114回	51号住居出土遺物(6)	167
第115回	52・55・56号住居竈	168
第116回	52・55・56号住居、55号住居出土遺物	173・174
第117回	52・55・56号住居掘り方	175
第118回	52号住居出土遺物(1)	176
第119回	52号住居出土遺物(2)	177
第120回	56号住居出土遺物(1)	178
第121回	56号住居出土遺物(2)	179
第122回	53・54号住居、53号住居出土遺物(1)	182
第123回	53号住居出土遺物(2)	183
第124回	53・54号住居掘り方、54号住居出土遺物	185
第125回	57・58号住居、58号住居竈、57号住居出土遺物(1)	186
第126回	57・58号住居掘り方、57号住居出土遺物(2)	187
第127回	61・65・66号住居、66号住居出土遺物	189
第128回	61号住居出土遺物	190
第129回	61・65・66号住居掘り方、66号住居出土遺物	191
第130回	62号住居	193
第131回	62号住居掘り方	194
第132回	62号住居出土遺物	195
第133回	63号住居、掘り方、出土遺物(1)	197
第134回	63号住居出土遺物(2)	198
第135回	67号住居、竈	200
第136回	67号住居掘り方、出土遺物	201
第137回	68号住居、出土遺物	203
第138回	68号住居掘り方	204
第139回	68号住居出土遺物	205
第140回	69号住居	208
第141回	69号住居掘り方	209
第142回	69号住居竈、出土遺物(1)	210
第143回	69号住居出土遺物(2)	211
第144回	70号住居、竈	212
第145回	70号住居掘り方、出土遺物	213
第146回	71号住居、出土遺物(1)	214
第147回	71号住居竈、出土遺物(2)	215
第148回	71号住居掘り方、出土遺物(3)	216
第149回	72号住居	221
第150回	72号住居掘り方	222
第151回	72号住居竈	223
第152回	72号住居出土遺物(1)	224
第153回	72号住居出土遺物(2)	225
第154回	72号住居出土遺物(3)	226
第155回	73号住居、掘り方、出土遺物	228
第156回	73号住居竈	229
第157回	74号住居	230
第158回	74号住居、出土遺物(1)	232
第159回	74号住居竈	233
第160回	74号住居出土遺物(2)	234
第161回	74号住居出土遺物(3)	235

第162図	76号住居・竈・掘り方・出土遺物(1)	237
第163図	76号住居出土遺物(2)	238
第164図	182号土坑・出土遺物	240
第165図	185号土坑・出土遺物	241
第166図	191号土坑・出土遺物	242
第167図	205号土坑・出土遺物	243

第168図	290号土坑・出土遺物	244
第169図	1号掘立・出土遺物	245
第170図	焼成土坑1群	246
第171図	焼成土坑2群	247
付図1	白井二位階遺跡全体図	
付図2	白井二位階遺跡周辺地帯図	

写真図版目次

PL.1	道路遺蹟(東中5)・道路遺蹟(西中5)
PL.2	1区全景・1区全景斜方向
PL.3	2区全景・3区部分
PL.4	1号住居平面・掘り方・竈・竈掘り方・2号住居平面
PL.5	2号住居掘り方・3号住居平面・竈・4号住居平面・掘り方・竈・5号住居平面・掘り方
PL.6	5号住居竈・6号住居遺東部分・遺西部分・竈 竈天井除去・竈基部・7号住居平面・8号住居平面
PL.7	8号住居竈・9号住居平面・掘り方・10号住居平面 11号住居平面
PL.8	11号住居FP造成状況・掘り方・竈・12-32号住居平面 13-14号住居平面・15号住居平面・16号住居平面・掘り方
PL.9	16号住居竈・18号住居平面・掘り方・19号住居平面・掘り方 20号住居平面・掘り方・21号住居平面
PL.10	21号住居掘り方・22号住居平面・掘り方・23号住居平面 28号住居平面
PL.11	28号住居掘り方・竈側面・竈正面・竈基部・24号住居平面
PL.12	25号住居平面・27号住居平面・29-30号住居平面 28-30号住居掘り方・31号住居平面
PL.13	31号住居掘り方・竈・竈角出土状況・34号住居平面・掘り方 35号住居平面・36号住居平面・37号住居平面
PL.14	37号住居掘り方・竈・38-41号住居平面・掘り方・竈 41号住居竈・39号住居平面・掘り方
PL.15	39号住居竈2・床下土坑1・床下土坑2・紡錘車出土状況 灰輪軸出土状況・40号住居平面・掘り方
PL.16	1群1・2・4・8・10・11・13・14号焼成土坑
PL.17	1群14-15-16号焼成土坑・43号住居平面・竈・掘り方・骨 出土状況・44号住居平面・竈・45号住居平面
PL.18	45号住居掘り方・46号住居平面・47号住居平面 48号住居平面・掘り方・竈・49号住居平面・掘り方
PL.19	49号住居紡錘車出土状況・50号住居平面・掘り方・51号 住居平面・掘り方・竈角出土状況・52号住居平面・掘り方
PL.20	52号住居竈・53号住居平面・掘り方・遺物出土状況 54号住居平面・和銅圓珎出土状況・55号住居平面・掘り方
PL.21	56号住居平面・遺物出土状況・竈角出土状況・竈・57号 住居平面・57号住居掘り方・58号住居平面・掘り方
PL.22	61号住居平面・掘り方・61-62-63号住居平面・62号住居 平面・壁灰塗・63号住居平面・65-66号住居平面・66 号住居灰化材
PL.23	67号住居平面・掘り方・竈・竈掘り方・68号住居平面
PL.24	68号住居掘り方・69号住居平面・掘り方・竈・70号住居 平面
PL.25	70号住居掘り方・竈・71号住居平面・掘り方・竈・72号 住居竈・竈掘り方
PL.26	72号住居平面・掘り方
PL.27	73号住居平面・掘り方・74号住居遺北・遺南・竈・竈正面 竈基部・碑状焼成土状況
PL.28	74号住居竈基部・須臾器器出土状況・76号住居平面・掘り 方・遺物出土状況・壁PA貼付状況
PL.29	182・185・191・290号土坑平面・焼成土坑2群・2群1 号焼成土坑セクション・焼土・平面
PL.30	1号住居出土遺物
PL.31	1号住居・2号住居出土遺物

PL.32	2号住居・3号住居・4号住居出土遺物
PL.33・34	4号住居出土遺物
PL.35	5号住居出土遺物
PL.36	5号住居・6号住居・7号住居出土遺物
PL.37	7号住居・8号住居出土遺物
PL.38	8号住居出土遺物
PL.39	8号住居・9号住居・10号住居出土遺物
PL.40	10-12号住居・14号住居・32号住居出土遺物
PL.41	13号住居・15号住居・16号住居出土遺物
PL.42	16号住居出土遺物
PL.43	16号住居・18号住居・19号住居・20号住居出土遺物
PL.44	20号住居・22号住居・24号住居・28号住居出土遺物
PL.45	28号住居出土遺物
PL.46	28号住居・29号住居・30号住居出土遺物
PL.47	30号住居・31号住居出土遺物
PL.48	31号住居出土遺物
PL.49	31号住居・34号住居出土遺物
PL.50	34号住居・37号住居・38号住居出土遺物
PL.51	38号住居・39号住居出土遺物
PL.52・53	39号住居出土遺物
PL.54・55	40号住居出土遺物
PL.56	40号住居・41号住居・42号住居出土遺物
PL.57	42号住居・43号住居出土遺物
PL.58	43号住居・45号住居出土遺物
PL.59	46号住居・47号住居出土遺物
PL.60	47号住居・48号住居出土遺物
PL.61	48号住居・49号住居出土遺物
PL.62-67	49号住居出土遺物
PL.68	49号住居・50号住居出土遺物
PL.69	50号住居・51号住居出土遺物
PL.70-75	51号住居出土遺物
PL.76	51号住居・52号住居出土遺物
PL.77	52号住居出土遺物
PL.78	52号住居・55号住居・56号住居出土遺物
PL.79・80	56号住居出土遺物
PL.81	56号住居・53号住居出土遺物
PL.82	53号住居・54号住居出土遺物
PL.83	54号住居・57号住居・62号住居・66号住居出土遺物
PL.84	61号住居・62号住居出土遺物
PL.85	61号住居・63号住居・66号住居・67号住居出土遺物
PL.86	67号住居・68号住居出土遺物
PL.87	68号住居・69号住居出土遺物
PL.88	69号住居・70号住居出土遺物
PL.89	70号住居・71号住居出土遺物
PL.90	71号住居・72号住居出土遺物
PL.91-93	72号住居出土遺物
PL.94	72号住居・73号住居出土遺物
PL.95	74号住居出土遺物
PL.96	74号住居・76号住居出土遺物
PL.97	76号住居・182号土坑出土遺物
PL.98	182・185・191・205・290号土坑出土遺物・1号掘 立出土遺物

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

鯉沢バイパスは、一般国道17号線の、子持村鯉沢交差点付近の慢性的な渋滞を緩和し、沿道環境の改善を図るために計画された。バイパスはまず渋川市東町付近で国道17号線から分岐し、吾妻川に架けられる新しい橋を渡って子持村白井に入り、字北中道付近で吾妻方面から延長された国道353号線と合流する。この約2.3kmの間が第1期工事区間となる。また字北中道から上白井字梅木に至る、約3.2kmの間が第2期工事区間となる。

工事に伴う埋蔵文化財の分布調査は、昭和62年の建設省の照会に答える形で実施され、第1期工事区間では東町遺跡、白井二位屋遺跡(事業名称仁位屋遺跡)、白井南中道遺跡(下宿遺跡)、白井丸岩遺跡(中宿遺跡)、白井北中道遺跡(白井1遺跡)の5遺跡が確認された。また第2期工事区間では、白井2遺跡、吹屋原遺跡、長坂1遺跡、長坂2遺跡、長坂3遺跡の5遺跡が確認され(全て事業名称)、発掘調査による記録保存の必要性が指摘された。

発掘調査は、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団によって1990(平成2)年より、国道353号線延長部分と接続するまでの、第1期工事区間において実施されることになった。実施にあたっては、白井二位屋遺跡、白井南中道遺跡、白井北中道遺跡の調査を、1990(平成2)年度より行い、1991(平成3)年度には白井二位屋遺跡南端部と、白井南中道遺跡、白井北中道遺跡、白井丸岩遺跡の調査を行い、1992(平成4)年度には白井南中道遺跡北端部と、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡の調査を行った。

また鯉沢バイパスに接続する国道353号線の延長部分についても1991(平成3)年度より発掘調査を行った。1991(平成3)年度には白井十二ノ下遺跡、1992(平成4)年度には吹屋犬子塚遺跡の調査を行っている。



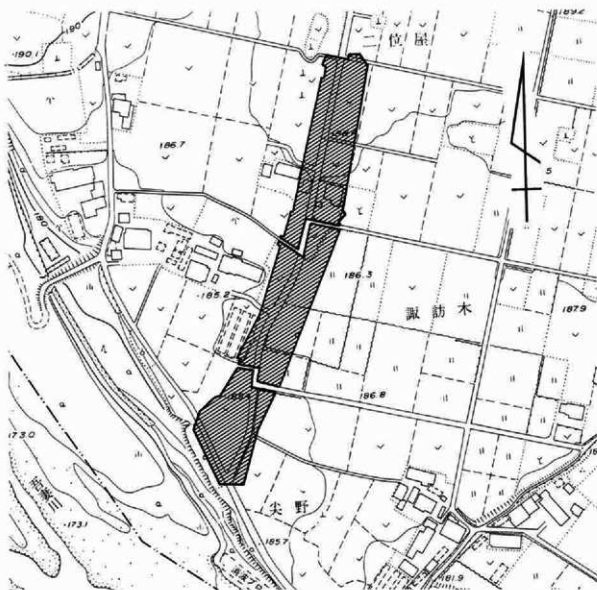
第1図 国道17号鯉沢バイパス路線図 (S=1/10,000)

第2節 調査の経過

白井二位屋遺跡の発掘調査は、1990(平成2)年4月1日より11月15日までの8箇月間、7,600㎡を対象に行われ、次いで平成3年11月1日から平成4年1月31日までの3箇月間、調査区の南端部600㎡を対象に行われた。

発掘調査は、基本層中に見られるFP、FA層の上・下面とローム層上面とローム層中を遺構検出面として、6面の文化層が存在すると推定して調査を行った。

調査は、基本土層I層に相当する暗褐色土(FA、FP粒、As-Bを含む)を除去し、II層上面(FP上面)の遺構から開始した。FPの堆積は、平均して40cm前後見られ、北へいくほど厚みを増した。FP上面からは、69軒の堅穴住居と多数の土坑、溝等が検出された。土坑は中・近世の遺物を出土し、人骨を伴うもの(1)、遺物がほとんど出土せず、時期の確定が困難なもの(2)、住居と同じ時期の遺物を伴うもの(3)に分類され、



第2図 白井二位屋遺跡調査範囲

(1)を中・近世の墓塚、(2)を中・近世から現代にかけての耕作に伴う土坑、(3)を竪穴住居に伴うものとし、前者と二位屋城に伴う堀、池、石積み遺構は「白井遺跡群—中世編—」で報告した。

竪穴住居の調査は、1990(平成2)年(以下同じ)5月10日から3区の道路東側と1区の道路西側において開始された。住居は白いFPの上に、明瞭に黒く検出されるため、その分布を知るのは比較的容易であった。最初に調査された3区道路東側と1区道路西側が二位屋遺跡の中でも住居の分布が薄い部分であったために、当初はさほど多くの住居は検出されないのではないかとも思われた。しかし、3区道路西側においては、FPがほとんど見えなほどに住居が重複しており、調査区の中で、極端に住居が集中する部分と、殆ど住居が見られない部分があることがわかった。

6月14日には最初のアドバルーンによる航空撮影が行われた。また、6月21日には1区において、旧石器時代の試掘調査を行っている。9月19日に接近した台風19号の被害は発掘現場においても各所に見られ、翌20日には終日水汲みや、崩れた壁の復旧作業を行っている。10月13日、14日には、現地説明会が行われ、1,000人を超える見学者が現場を訪れた。

FPより下からは、住居は全く検出されなかった。したがって、調査された範囲においては、白井二位屋遺跡の集落は、FP降下以降に営まれたものであることがわかった。FP下からは無数の馬の蹄の痕跡が確認され、白井二位屋遺跡の北に存在する白井南中道遺跡、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡と同様に、馬の放牧が行われていたことが判明した。

第3節 調査の方法

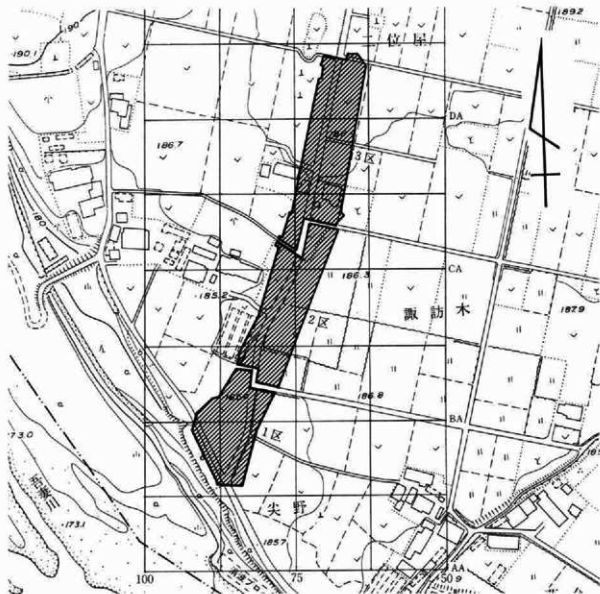
発掘調査にあたっては、排土の置き場が十分確保されていないため、調査範囲を南北に2分する道路と東西に細かく分割する農道を境に調査区を設定して行われた。また各区の調査は、原則として以下の調査方法により実施された。

1. 掘削機(バックホー)による表土(1層:FA、FP粒、As-B粒を含む暗褐色土)の掘削を行う。
2. 遺構確認作業、住居、土坑、溝、堀等を検出する。
3. 平板を使用し、縮尺1/100で平面測量図を作成し、遺構の概念図とする。
4. 埋没土堆積状況の観察用ベルトを残して遺構を掘削する。ベルトは住居、大形の土坑は十字に2本設定し、小形の土坑は、1本設定した。また、堀その他特に大形の遺構については、必要に応じて数本のベルトを設定した。遺構の発掘作業は、移植ごてによる手掘りを基本とするが、堀など、特に大形の遺構については、掘削機である程度掘り下げた後、スコップを利用した手掘りも行った。
5. 住居の竪部分については、遺構に残されたベルトの軸に、「キ」の字を基本とする3本のベルトを設定し、更に細かい調査を行った。
6. 遺構を床まで掘り上げると、ベルト部分でセクション図を作成した。セクション図は、1/20で作成され、竪部分については1/10で作成した。また土層の色調については、農林省農林水産技術会議監修、財団法人 日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帳」を参考にした。
7. 遺構平面図の作成は、平板測量で行った。測量は1/20を基本とし、場合により1/40も使用した。住居掘り方の平面図は、基本的に測量会社(株式会社 測研)に委託し、1/20で行った。
8. 記録写真の撮影には、基本的に6×7・35mmの白黒と、35mmのリバーサルで行い、遺構全景の撮影にはモニタリングカメラ、全体写真の撮影には高所作業車、気球を用いて行った。

第4節 調査区の設定

白井二位屋遺跡の調査区の設定は、下記によって行った。

1. 調査区の設定には、群馬県を網羅している国家座標第Ⅱ系を利用して行い、グリッドが後に国家座標と置き換えられるように設定した。
2. 調査区の最小単位は、4 m四方とし、その設定は国家座標Ⅱ系と同様に座標軸の第2象限にあてはめ、西方面をX軸(国家座標Y軸)、北方向をY軸(国家座標X軸)とする。
3. グリッドの呼称は、基準となる点をAA-00と称し、アルファベットはY軸方向に4 m進むごとにAB、AC、ADとし、100mでBA、200mでCAのように、100mごとに前のアルファベットを変化させる。また、X軸方向に4 m進むごとに01、02、03と無限大に変化させていき、アルファベットと数字の組み合わせにより各グリッドを呼称する。



第3図 調査区設定図

4. 白井二位屋遺跡の基準点(AA-00)は、国家座標第Ⅸ系(第Ⅸ系の原点は、北緯36°、東経139°50')
X=55.650、Y=-72.800である。それぞれのグリッド杭の国家座標は以下のようになる。

AA	X=55.650	00	Y=-72.800	BA	X=55.750	25	Y=-72.900
CA	X=55.850	50	Y=-73.000	DA	X=55.950	75	Y=-73.100
EA	X=56.050	100	Y=-73.200	FA	X=56.150	125	Y=-73.300

5. 方眼杭の設定は、株式会社 測研に委託した。
6. 調査の便宜上、調査区域を3つの区に分け、南から1区、2区、3区と呼称する。

第5節 基本層序

白井二位屋遺跡の基本土層は、第4図の土層柱状図のとおり、段丘礫層の上にロームその他の火山噴出物が堆積して形成されている。

遺跡地は利根川の右岸、吾妻川左岸の河岸段丘上の、北から南へ緩やかに傾斜する緩斜面に立地する。

現地表面から、最初の遺構確認面であるFP(Hr-I)までのI層は、FA、FP粒、As-B粒等を含む暗褐色土で、石のように堅くしまっている部分も見られた。I層は30~50cmの厚みで堆積しており、上面は耕作により擾乱を受けている。As-Bは、浅間山がそれまでの最大規模で噴出した際に噴出した火山噴出物で、子持村内では殆ど見られない。噴火の時期については、天仁元(1108)年説と弘安四(1281)年説があったが、「中右記」の記載や、堆積物の調査の結果から、天仁元年説がとられるようになっている。「中右記」は中御門右大臣藤原宗忠の寛治元(1087)年から保延四(1138)年までの日記であり、この天仁元年9月5日の段に火山噴火の記載がある。当遺跡ではAs-Bの純堆積は確認されていない。

II層はFP(Hr-I)の純堆積層である。FP(Hr-I)は、6世紀中頃に、榛名山の現在の二ツ岳の位置で大爆發が起こった際に空高く舞い上げられた軽石層である。子持村内では、どこでもこの軽石を見ることができる。軽石は現在の二ツ岳を中心に、北東の方向に流され、群馬県だけでなく遠く福島県、宮城県にまで達しているという。子持村内での分布の中心は、八幡・稲荷付近から伊熊にかけてであり、この線に沿った地域が最も厚く軽石の堆積が見られる。遺跡地は、この分布の中心線から僅か東にずれており、北に向かうほど分布の中心線に近づく。したがって、FP(Hr-I)の厚みも北へ向かうほど厚くなる。

III層は暗褐色土層で、FA(Hr-S)を噴出した噴火とFP(Hr-I)を噴出した噴火の間に土壌化した層である。III層の上面(FP(Hr-I)直下)からは、住居その他の施設は検出されておらず、無数に見られる馬の蹄の痕跡と、畑の畦の痕跡が確認された。これらの遺構は、II層を注意深く剥がしていくことにより検出が可能となったのである。

IV層はFA(Hr-S)の純堆積層である。FA(Hr-S)は、6世紀初頭に、榛名山の現在の二ツ岳の位置で繰り返し起こった噴火の際に噴出した火山灰が堆積したもので、これも子持村内ではどこでも見ることができる。遺跡内では、20~40cmの厚みで検出され、更に多くのユニットに分類することが可能である。すなわち、最下部から細粒火山灰層(S-1下部降下火山灰層)、細かく成層した火山灰層(S-1上部火山灰層)、細粒の降下軽石(S-3降下軽石)、細粒火山灰の薄層(S-4降下火山灰層)、粗粒の降下軽石(S-5火砕流)に先行する降下テフラ、火砕流堆積物(S-5火砕流、あるいはS-5火砕流とS-10火砕流)に分けられる。

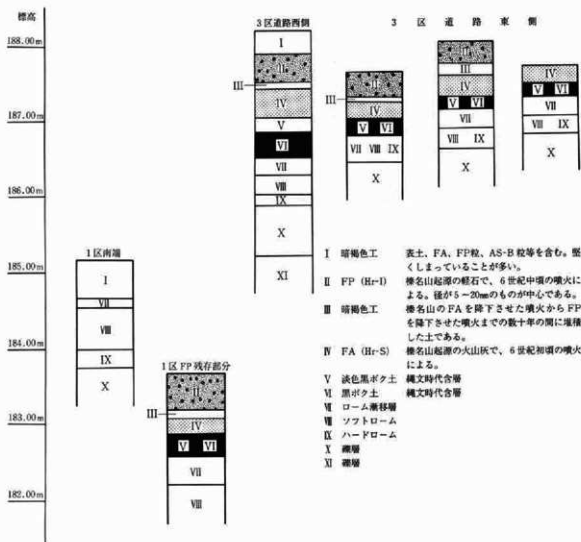
V、VI層は黒ボク土と呼ばれるやや粘性をもつ黒色の土層である。やや色調が明るい淡色黒ボク土と分類可能な部分もあった。黒ボク土はアンド土壌ともいわれ、台地の非常に多くの部分、丘陵地または山地など

第1章 調査の経過と方法

で火山灰に覆われた地域に発達する土壌である。基本的には厚く、腐食植物の含有率が高いA層と、粘土移動のないB層をもつ。容積量が低く、水分の含有率が高く、多くは塩基に欠乏しているが酸度は高くない。またリン酸欠乏土壌でもある。これらの土壌の中には、有機物の生成がそのうえに降灰するために中断された形をとったり、厚い有機質層をもつ形態を取るものがあるといわれる。縄文土器の殆どは、この黒ボク土からローム漸移層にかけて検出された。

Ⅴ層はローム漸移層、Ⅵ層はソフトローム、Ⅶ層はハードロームである。Ⅴ層とⅦ層は、北にいくほど境が曖昧になり、分類不可能になる。ロームの下は砂礫層となる。砂と拳大の礫を主体とするⅩ層、大形の礫を主体とするⅪ層に細分できる。

調査区全体を眺めてみると、北から南にかけて緩やかに傾斜しており、また西から東にかけて、やや急な角度で傾斜している。また、調査区南端部分ではⅡ～Ⅳ層は検出できなかった。



第4図 白井二位屋遺跡土層柱状図

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 遺跡周辺の地形

遺跡の位置する子持村は、群馬県の中央やや北よりに位置し、北は沼田市、東は勢多郡赤城村、南は渋川市、西は北群馬郡小野上村に接している。村の東には赤城山、西には榛名山、北には子持山、小野子山と三方を山に囲まれ、南東に広がる関東平野の北端部にあたる。また東には利根川が北東から南西へ向かって流れ、西には吾妻川が北西から南東へ向かって流れている。子持村の平野部は、この二つの川が接する点を頂点として、子持山南麓に広がる扇状地の扇端部を結ぶ線を辺とした逆三角形を描く。遺跡はまさにこの三角形の頂点部分に位置している。遺跡周辺の平野部は、一続きのものではなく、高さの異なる幾つかの面が組み合わさって形成され、典型的な段丘地形を見ることができる。段丘地形は利根川の右岸淵上付近から南西に向けて展開しており、昭和62年に刊行された『子持村誌 上巻』によれば古い(高い)面から雙林寺面、長坂面、西伊熊面、白井面、浅田面と名付けられている。

1 子持火山噴出物

子持山の南西から北西にかけて形成された火山麓扇状地の緩やかな裾は、現在では畑地として利用されている。この火山麓扇状地が形成されたのはかなり古く、最も古い段丘面である雙林寺面より更に古い時代に形成されたと考えられている。

2 雙林寺面

子持山南麓の緩やかな斜面に接して雙林寺面が存在する。雙林寺面は、標高250~300m付近に広がっており、利根川からの比高は約60m、吾妻川からの比高は約65mである。雙林寺面の表面は、西組付近から南南西に流れる不動川によって侵食を受けているために、川の方角にやや傾いている。雙林寺面は子持村で最も高い段丘面であり、最も古い時代に形成されたものであるが、その形成時期については中部ローム層より下のロームが粘土化しているためはっきりしたことはわからない。しかし、次の長坂面よりも僅かに高いことから、沼田面とほぼ同じ時期に形成されたと考えられている。

3 長坂面

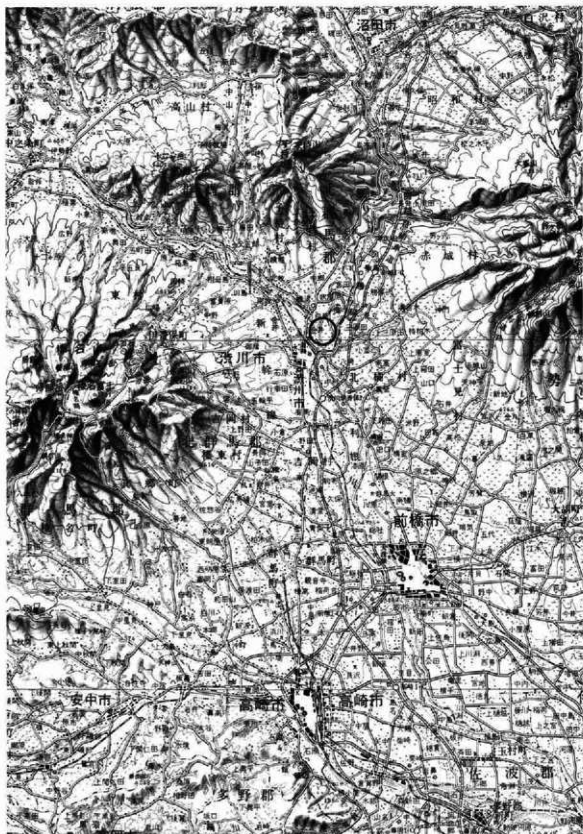
長坂面は、北は直松から南は白井城が存在する吹屋まで子持村に最も広く展開する平地で、標高200m付近から北に向かって徐々に高くなり、直松周辺では290mに達する。白井十二ノ下遺跡の西側、吹屋大子塚遺跡、吹屋中原遺跡はこの面に存在する。利根川との比高は直松付近で約80m、長坂付近で45m、吹屋付近で37mである。長坂面が形成された時期は、中部ローム層よりも古いと考えられ、およそながら6、7万年前であると推定される。

4 西伊熊面

西伊熊付近に存在し、標高は220~240m前後である。段丘面の幅は、広いところで僅かに150mしかなく、長さは約1.5kmである。ボーリング調査によれば、西伊熊面の上には上部ローム層が堆積していることが確認されており、今から約2万2千年前に形成されたものと考えられている。

5 白井面

白井を中心として広がる面で、標高は190~210m前後、利根川からの比高は15m程である。白井遺跡群の白井二位屋遺跡、白井南中道遺跡、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡と白井十二ノ下遺跡の東側、また白井大



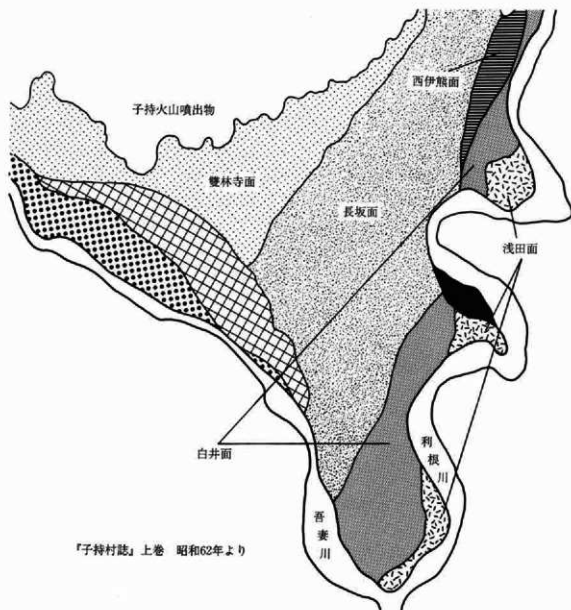
第5図 遺跡位置図

昭和60年国土地理院発行1/200,000
地形図「長野」「宇都宮」より作成

宮遺跡はこの面に存在する。白井面は現状ではほぼ平坦であり、北から南に向けて緩やかに傾斜している。白井面の形成された時期は、段丘礫層の上に僅かに上部ローム層の一部が堆積していたことから、今から約1万年前に形成されたものと考えられる。現在白井面には河川は見られず、極めて水に乏しい地域であり、水田経営に適しているとは言えない。集落が形成されたFP降下以降、10世紀代も現在と殆ど変わらない環境であったと考えられ、生産域は現在のところこの面では確認されていない。

6 浅田面

浅田の東側にある段丘で、白井面より低い。利根川からの比高は数mにすぎず、標高は180m前後である。同じ時代にできた段丘が、白井面と利根川に挟まれた地域や吾妻川の河原一区や河原二区にも分布している。関東ローム層は全くのつておらず、数千年前にできたごく新しい段丘である。



第6図 遺跡周辺における段丘面の分布

第2節 周辺の遺跡

白井二位屋遺跡の周辺は、関越自動車道やそれに伴う関連遺跡の調査、また市町村による数多くの遺跡の調査の結果、県内の歴史を考える上で、重要な発見が相次いでいる。ここでは遺跡の位置する子持村、また周辺の渋川市、赤城村の遺跡を中心に、その分布を時代を追って概観して行きたいと思う。

旧石器時代

子持村、渋川市では殆ど旧石器の遺跡は確認されていない。子持村では押手遺跡(32)で、渋川市では行幸田山遺跡(62)で当該期の遺物が検出されている。北橋村では分郷八崎遺跡(68)で、赤城村では、見立溜井遺跡(40)、諏訪西遺跡(41)、中畦遺跡(42)で当該期の遺構が確認されている。それぞれの遺跡は子持山、榛名山、赤城山の裾部分に立地しており、同様の立地条件の下、今後更に遺構数が増加する可能性がある。

縄文時代

○草創期

見立溜井遺跡で8点の有舌尖頭器、尖頭器の出土が報告されている。また房谷戸遺跡(45)でも尖頭器を主体とするブロックが確認されている。

○早期

子持村内では数点破片のみで確認されている。渋川市では空沢遺跡(59)、行幸田山遺跡で当該期の遺構が確認されている。北橋村では分郷八崎遺跡、赤城村では見立溜井遺跡、諏訪西遺跡、三原田城遺跡(43)等で撫糸文系・押型文系の土器が確認されている。

○前期

前期になると遺跡数は増加する。子持村では黒井峯遺跡(9)、押手遺跡その他で当該期の遺構が確認されている。渋川市では中筋遺跡(60)、空沢遺跡、半田南原遺跡その他で、北橋村では分郷八崎遺跡、赤城村では三原田城遺跡、見立溜井遺跡、中畦遺跡、諏訪西遺跡等で遺構が確認されている。

○中期

中期になると遺跡数はやや減少傾向にあるが、立地はより広い台地を求める傾向にある。渋川市内では空沢遺跡、行幸田山遺跡で、北橋村では分郷八崎遺跡、赤城村では諏訪西遺跡、見立大久保遺跡、三原田遺跡(44)、房谷戸遺跡等で確認されている。

○後期・晩期

三原田遺跡、空沢遺跡、半田南原遺跡(82)で確認されている。

弥生時代

前期後半から中期の遺跡として渋川市南大塚遺跡(29)があげられる。水神平式の模倣と考えられる壺を使用した再葬墓は昭和54年市道の拡幅工事で偶然に発見された。中期の遺跡として他に押手遺跡が上げられる。いずれも糸痕文系の土器を出土した再葬墓である。また行幸田山遺跡では岩櫃式土器が見られ、中村遺跡(69)、有馬条里遺跡(64)からは中期後半の竜見町式土器を伴う住居跡が確認されている。中村遺跡からは当該期の住居が3軒確認されたが、この集落は、周囲に堀をもつ環濠集落である。後期に入ると遺跡数の増加が見られる。方形周溝墓は押手遺跡、空沢遺跡、中村遺跡、有馬遺跡(71)、有馬条里遺跡で見られる。また有馬条里遺跡では、竪床墓も確認されている。また、後期の住居は有馬寺遺跡(74)、中筋遺跡、有馬遺跡、有馬条里遺跡、後田東遺跡(67)等で確認され、また赤城村には棒式土器の標識遺跡である棒遺跡(36)が存在する。



第7図 周辺遺跡図 (S=1/50,000)

古墳時代

群馬県における古墳時代は、榛名山の2回の噴火によって明確に時期区分を行うことができる。特に遺跡の周辺は榛名山に近接することもあるため、その影響は、計り知れないものがあったと推定される。4～5世紀代の遺跡は、渋川市、子持村内に点在している。有馬遺跡からはS字状口縁の台付甕を伴う住居と甕が検出されており、行幸田山遺跡でも古式の古墳、方形周溝墓が確認されている。また中筋遺跡では、遺構は確認されていないがS字状口縁の台付甕の破片が出土しており、周辺に集落が存在することを物語っている。また、黒井峯遺跡からは4～5世紀代の方墳が検出されている。6世紀初頭の榛名山の噴火は、大量の火山灰を降下させ、火砕流は周辺の村落を襲った(この火山噴出物はFA(Hr-S)と呼ばれる)。この時期の遺跡としては、中筋遺跡が最も有名である。中筋遺跡からはFA(Hr-S)に埋もれた竪穴式住居4軒、平地式建物7軒、祭祀場、道、甕等が検出されている。この時期の生産跡としては有馬遺跡、有馬条里遺跡、中村遺跡からFA(Hr-S)に埋もれた水田、甕が検出されている。また、FA(Hr-S)に埋もれた古墳としては、金井前原古墳(21)、石原東古墳群(58)、大崎古墳群(47)等があげられる。6世紀中頃の噴火では、大量の軽石が周辺に降下した(FP(Hr-I)と呼ばれる)。FP(Hr-I)直下の遺跡として黒井峯遺跡、西組遺跡(33)がある。これらの遺跡はFP(Hr-I)に覆われることによって、一つの村が完全な形で保存された極めて希な例であり、竪穴式住居、平地式住居の他、橋によって囲まれた園地、畠、陸苗代、道、水場等が確認されている。有馬条里遺跡、中村遺跡からはFP(Hr-I)埋没水田が確認されている。またこの時期の古墳としては、中ノ峯古墳(30)、積石塚の有瀬1号墳、伊照古墳等が上げられる。また、FP(Hr-I)降下後の古墳群としては、遺跡周辺にかつて白井古墳群があり、21の円墳が存在したことが記録されているが、現在墳丘が確認できるのは数基に過ぎない。数少ない残存古墳として加藤塚古墳(34)、稲荷塚古墳(10)があげられる。また、同時期の古墳として不動塚古墳(24)、吹屋I・Ⅲ号墳(13)(12)、丸子山塚古墳(31)、金井丸山古墳(14)等がある。

奈良・平安時代

有馬条里遺跡、中村遺跡、その他数多くの遺跡で集落が確認されている。遺跡に近接する白井城南郭遺跡では、白井二位屋遺跡とはほぼ同じ時期の、石組み竈を持つ住居が確認されている。また有馬島牧の推定地である半田南原遺跡でも、白井二位屋遺跡とはほぼ同じ時期の大集落が検出されている。また金井製鉄遺跡(23)は半地下式の整形炉を持つ8世紀代の製鉄跡であり、大量の鉄滓を出土した白井二位屋遺跡と麓、吹屋の製鉄跡との関係を考える上で、非常に興味深い。

番号	遺跡名	時代	種類	資料	備考	番号	遺跡名	時代	種類	資料	備考
1	白井二位屋遺跡	奈良・平安時代	集落	1	掘沢バイパス関係 今留橋跡遺跡	17	吾妻山遺跡	縄文-歴史	7		
2	白井南中道遺跡	奈良・平安時代	集落	1	掘沢バイパス関係	18	金高中学校敷地内遺跡	縄文-歴史古墳地	29	遺跡は金高中学校所蔵	
3	白井丸石遺跡	F P 直下島・馬廻任直	2	掘沢バイパス関係	19	西原遺跡	縄文古墳地	29			
4	白井北中道遺跡	F P 直下島・馬廻任直	3	掘沢バイパス関係	20	二本橋遺跡	縄文古墳地	7	遺跡台帳No.1138		
5	白井十二丁遺跡	F P 直下島・馬廻任直	2	掘沢バイパス関係	21	金井前原古墳	古墳時代集落	6	円墳		
6	吹屋大子塚遺跡	F P 直下島・馬廻任直	2	掘沢353号線関係	22	逆川遺跡	弥生時代集落	6	中筋集落		
7	吹屋中原遺跡	F P 直下島・馬廻任直	2	掘沢353号線関係	23	金井製鉄遺跡	平安時代集落	8			
8	白井大宮遺跡	F P 直下島・馬廻任直	2	掘沢353号線関係	24	不動塚古墳	古墳時代集落	5	遺跡台帳No. 2575		
9	黒井峯遺跡	F P 直下島・馬廻任直	4	F P 直下島遺跡、古墳	25	白井城跡	中世城跡	5,9	遺跡台帳No. 2572		
10	稲荷塚古墳	古墳時代集落	5	F P 上古墳	26	白井城南郭遺跡	平安時代集落	5			
11	東原区遺跡	古墳時代集落	5	F P 上古墳	27	白井荘	中世城下町	5	夜間には市場町		
12	吹屋島号墳	古墳時代集落	5	F P 上古墳	28	田中中道遺跡	中世馬場跡	7	遺跡台帳No.1160		
13	吹屋I号墳	古墳時代集落	5	F P 上古墳	29	南大坂遺跡	弥生再集落	6			
14	白井丸山古墳	古墳時代集落	6	竪穴式石室	30	中ノ峰古墳	古墳時代集落	10			
15	金井城跡	中世城跡	6	環状土塁	31	丸子山塚	古墳時代集落	5	平成5年調査		
16	西原遺跡	古墳時代集落	29	遺跡は金高中学校所蔵	32	押手遺跡	縄文配石、弥生再集落	11			
					33	西組遺跡	F P 直下島古墳時代集落	12			

第1節 遺跡周辺の地形

番号	遺跡名	時代種別	資料	備考	番号	遺跡名	時代種別	資料	備考
34	加藤古墳	古墳時代墳墓	5	縮見長尾村書17号	60	中野遺跡	FⅡ直下古墳時代墳墓	28	史跡公園となっている
35	白井遺跡	古墳時代墳墓	5	縮見長尾村書18-34号	61	十二山古墳	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳No.1166
36	藤遺跡	弥生時代集落	13	遺跡台帳No.2104	62	行幸田山遺跡	旧石器-古墳時代・中世跡	27	
37	弁天塚古墳	古墳時代墳墓	14	遺跡台帳No.2107	63	行幸田古墳群	古墳時代墳墓	29	円墳10数基
38	橋岡古墳	古墳時代墳墓	14	遺跡台帳No.2108	64	有馬坐立遺跡	弥生時代坐立遺跡	33	遺跡台帳No.1173
39	見立久保遺跡	縄文時代集落	15		65	中井遺跡	弥生時代・古墳時代包蔵地	7	
40	見立原遺跡	旧石器・縄文・古墳	16		66	横出遺跡	古墳時代包蔵地	7	遺跡台帳No.1169
41	源田西遺跡	縄文時代	15		67	後田東遺跡	弥生時代集落	28	
42	中野遺跡	旧石器時代・縄文時代	16		68	分郷八崎遺跡	旧石器-中・近世	23	
43	三原田遺跡	縄文前期集落・中世城跡	17		69	中村遺跡	弥生-近世	29	
44	三原田遺跡	縄文時代集落	18-20		70	真下屋	古墳時代墳墓	29	
45	原谷戸遺跡	縄文時代集落	21		71	有馬遺跡	弥生時代-奈良・平安時代	31	
			22		72	愛宕遺跡	縄文・弥生時代集落	29	昭和55年調査
46	岩地遺跡	奈良時代鍛冶工人集落	23		73	有馬小戸遺跡	古墳時代墳墓	29	古立東四保有馬西北側
47	大崎古墳群	弥生包蔵地・古墳時代墳墓	6	遺跡台帳No.1154	74	有馬庵寺遺跡	弥生時代-奈良・平安時代	32	
48	金井古墳群	古墳時代墳墓	29	円墳4基	75	有馬赤戸遺跡	古墳時代包蔵地	29	
49	中之町遺跡	弥生包蔵地	7	遺跡台帳No.1145	76	有馬神戸遺跡	縄文時代-奈良・平安時代	29	
50	延保古墳	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳No.1162	77	神戸2号墳	古墳時代墳墓	29	
51	かね塚古墳	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳No.1155	78	神戸1号墳	古墳時代墳墓	29	
52	入沢2号墳	古墳時代墳墓	6		79	外貝戸古墳	古墳時代墳墓	29	
53	中野谷遺跡	平安時代製鉄遺跡	7	遺跡台帳No.1163	80	城の上遺跡	中世城址・縄文包蔵地	7	遺跡台帳No.1172
54	汎川古城址	縄文包蔵地・中世城跡址	7	遺跡台帳No.1140	81	若馬堂山古墳群	古墳時代墳墓	6	遺跡台帳No.1168
55	の上遺跡	縄文時代-奈良・平安時代	7	遺跡台帳No.1141	82	平田南原遺跡	古墳時代-奈良・平安時代	6	地蔵跡、古墳、牧
56	成山古墳群	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳No.1165	83	手田南原古墳群	古墳時代墳墓	29	
57	石原西浦遺跡	古墳時代-近世集落	24		84	八崎城址	中世城跡	23	
58	石原東古墳群	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳No.1149	85	養林寺	寺院	5	
59	惣沢遺跡	縄文-奈良・平安時代集落	25		86	汎川遺跡	散布地	5	遺跡台帳No.2585

- (1) 『白井遺跡群-中世編-』一般国道17号(新沢バイパス)改修に伴う埋蔵文化財調査報告書 第1集 (財)群像文 1993
- (2) 『年報 11』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (3) 『年報 10』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (4) 『狐井茅草遺跡Ⅰ』子持村教育委員会 1985
- (5) 『子持村誌 上巻』1987
- (6) 『汎川市誌 第二巻』通史編・上 原始-近世 1993
- (7) 『群馬県遺跡台帳Ⅱ 西毛編』群馬県教育委員会 1972
- (8) 『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』汎川市教育委員会 1975
- (9) 『群馬県古城址址の研究』山崎一 1972
- (10) 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子持村教育委員会 1980
- (11) 『神手遺跡発掘調査報告』子持村文化財調査報告 第5集 子持村教育委員会 1987
- (12) 『西蔵遺跡発掘調査報告書』子持村文化財調査報告 第2集 子持村教育委員会 1985
- (13) 『上野博遺跡調査概報』『考古学』第10巻10号 杉原在介 1939
- (14) 『群馬県遺跡台帳Ⅰ 東毛編』群馬県教育委員会 1971
- (15) 『見立原遺跡-見立久保遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 KC-V 赤城村教育委員会 1985
- (16) 『中野遺跡-関越西遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第9集 (財)群像文 1986
- (17) 『三原田城遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第13集 (財)群像文 1987
- (18) 『三原田遺跡』住居編 群馬県企業局 1980
- (19) 『三原田遺跡』I 群馬県企業局 1989
- (20) 『三原田遺跡』II 群馬県企業局 1992
- (21) 『原谷戸遺跡』I 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第27集 (財)群像文 1989
- (22) 『原谷戸遺跡』II 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第40集 (財)群像文 1992
- (23) 『分郷八崎遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 北碓村教育委員会 1985
- (24) 『石原西浦遺跡』汎川市教育委員会 1986
- (25) 『笠沢遺跡』汎川市文化財発掘調査報告書Ⅲ 汎川市教育委員会 1979 地
- (26) 『中野遺跡』汎川市発掘調査報告書第13集 汎川市教育委員会 1987 地
- (27) 『行幸田山遺跡』汎川市発掘調査報告書 第12集 汎川市教育委員会 1987
- (28) 『市町遺跡発掘調査報告書』汎川市発掘調査報告書 第19集 汎川市教育委員会 1988
- (29) 『中村遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 KCⅡ 汎川市教育委員会 1986
- (30) 『有馬Ⅰ遺跡-大久保遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第25集 (財)群像文 1989
- (31) 『有馬Ⅱ』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第32集 (財)群像文 1990
- (32) 『有馬庵寺跡発掘調査報告書』汎川市発掘調査報告書 第16集 汎川市教育委員会 1988
- (33) 『有馬坐立遺跡Ⅰ』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第29集 (財)群像文 1989

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居

白井二位屋遺跡からは当初7軒の住居が検出されたが、調査中、あるいは整理の作業を経て、最終的に69軒が報告の対象となった。従って、住居に付けられている番号(遺構名)と住居の総数は一致していないのであらかじめお断りしておきたい。

白井二位屋遺跡からは、調査区のはほぼ全域から住居が検出されている。しかしその分布状態を見ると、疎密の偏りが見られる。1区からは、1～3・42・43・74号の6軒の住居が検出されているが、分布は散在的である。その理由の一つとして、1区の大部分が早い時期に削平されていることが上げられる。1区では、1号住居と74号住居を結ぶ直線上以外にFPが見られず、1号住居の西では、表土の下は直ぐにロームが露出していた。また1号住居が深さ1m以上残存しているのと比較して、ローム上で検出された2・3号住居は、0.3～0.6m残存していたに過ぎない。また、同じく1区から検出された42・43号住居も、1・74号住居を結んだ直線の延長線上に存在する。従って、検出された住居をもって1区の住居分布を述べるのは甚だ危険ではあるが、後述する2区と比較すると、住居の重複が少ないことは事実であり、遺跡中で、比較的住居の分布が少ない地区と見てほぼ問題無いと考えられる。なお、1号住居と74号住居は、極めて保存の良い石組み竈を持つ住居であることも注目される。2区は33軒の住居が検出された。この2区から3区の南端部にかけて、最も住居が濃密に分布している。この集中した住居の分布は南北に伸びる現有道路を挟んで、北東方向に展開しているようである。2区から検出された住居の中で注目されるのは、廃絶された住居の窪みから大量の鉄滓が検出された40号住居、大量の鉄製品と灰軸陶器が出土した39号住居、埋土の殆どがFP粒のみであった11号住居、段をもつ構造の28号住居等である。3区からは30軒の住居が検出されている。3区の南端部は最も住居の重複が激しい地点であり、なおかつ大量の土器や獣骨等の特殊な遺物が出土した場所でもある。『大長』の刻書を持つ甕や大量の土師器・須恵器が出土した51号住居、最古の皇朝十二銭である「和同開珎」が出土した44号住居など、他の住居で見られない要素が多い。従って、白井二位屋遺跡から検出された集落の中心的存在がこの地点に居住していたとも考えられる。

1号住居(第8～12図 PL 4・30・31)

位置 AV・AW-86・87 74号住居の北側に位置し、二位屋遺跡の集落の中では南端部の一帯に属する。平面形状 東辺がやや膨らんだ隅丸方形を呈する。 残存深度 比較的良好に残存し、平均して約1.10mの深さを測る。 重複住居 単独で検出された。 規模 東辺は4.80m、西辺は4.40m、南辺は4.00m、北辺は4.25mを測る。 主軸方位 N-117°-E

埋没土 FP粒を含む褐色土、暗褐色土を主体とし、ほぼ水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。7層は、壁の上位に見られる地山のFPが崩落し、溜まったものと考えられる。また9層は壁を押えていたFAが崩落したものと考えられる。 壁の状況 床面から約119°の角度で立ち上がる。

床面 面積は12.933㎡を測る。掘り方床面から、暗褐色土で25cm前後盛土(11層)、その上に褐灰色土のブロックを含む薄い暗褐色土の層(6層)を貼って床としている。床は1面しか検出されなかった。

周溝 住居の北辺で、周溝らしきものが一部検出されたのみである。

貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 東西間隔2.4m、南北間隔2.4mで、柱穴間を直線で結ぶと正方形

を掘く。深さは床面から0.70～1.65mを測る。掘り方 掘り方の床面はほぼ平坦であるが、住居南西端部を大きく抉っている。

竈位置 東辺中央 方位 N-118°-E 規模 全長は2.05m(屋外長1.15m、屋内長0.90m)、袖部幅0.60mを測る。形状その他 袖部から煙道部まで石で組まれた石組み竈である。袖部はFP粒を混合した褐色土で作られており、補強のための袖石が埋め込まれている。炊き口付近には堯が2個体、竈の軸に対して直行する形で検出された(第10図5・6)。これは、竈前面を補強するために、材として袖の上にかけていたものと推定される。燃焼部には、主軸より左にずれて支脚が検出されている。このことから、1号住居の竈は堯を2個体かけるタイプであったことがわかる。竈にかけられていた堯は見当たらないことから、住居廃絶の際に抜き取られたものと推定される。燃焼部と煙道部の境には、住居東壁のラインに合わせて石が2段積まれている。煙道部は平石を暗渠状に組んで作られている。煙道部の石の外側には裏込めとして準大の石、あるいはFPが詰められていた。煙道は緩やかな角度で立ち上がり、奥壁の部分で角度を変え煙突へと続いている。煙突の施設は検出されていないが、煙道部先端付近に河原石が数点散乱していたことから、一部は石で組んで作られていたものと推定される。近接する74号住居の例を見ると、やや長めの河原石を四角に組んだものを何段か重ねて煙突としている。恐らく1号住居の煙突も同様の構造を持ったものであろう。

遺物 土師器の杯、堯、須恵器の蓋、こも羅み石などが検出されている。土師器は模倣杯の流れと考えられるAタイプのものが1個体(第8図1)のみ検出されている。また、土師器堯は長胴のものと胴部上位にやや膨らみをもつもの2種類が検出されているが、前述したように、竈で使用されていたものではなく、竈前面に材としてかけられていたものと推定される(5・6)。

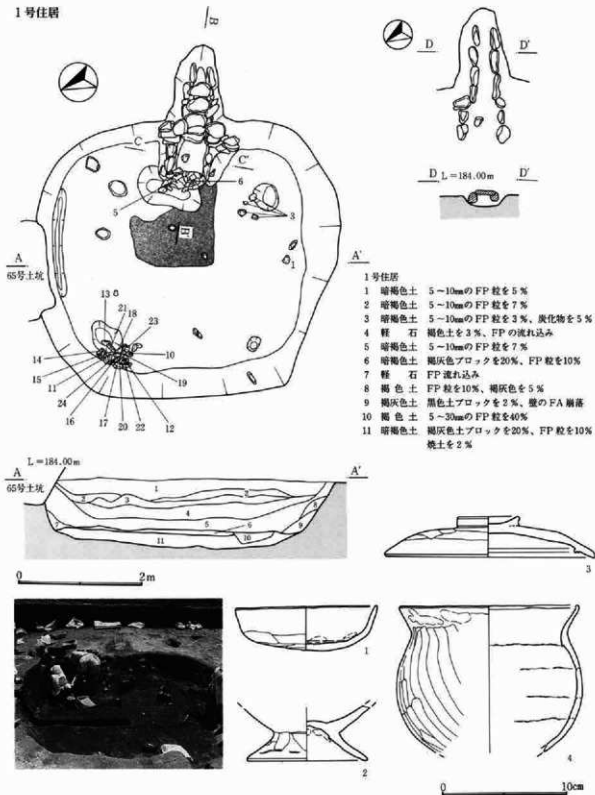
所見 出土した遺物から見て、1号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

1号住居出土遺物

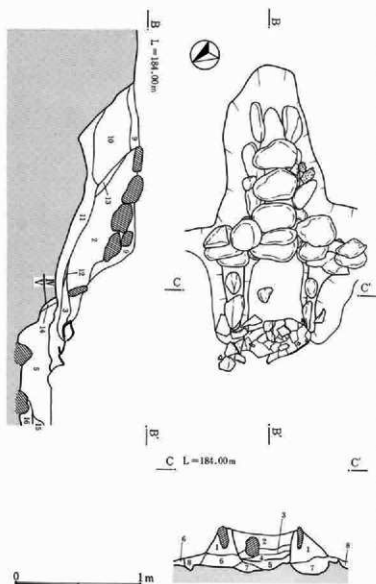
拝見番号 図録番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-8図 1 PL-30	土師器 杯	10cm 口縁部1/4 欠損	口径 11.2 底径 - 器高 3.4	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-8図 2 PL-30	土師器 台付堯	埋土 底部のみ	口径 - 底径 9.4 器高残 4.1	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	胴内面ヨコナデ、胴接合後脚内面よりユビオ サエ、接合部ヘラケズリ	
第-8図 3 PL-30	須恵器 堯	23~30cm ほぼ完形	口径 16.5 つまみ 4.6 器高 3.2	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪壁整形、外面手持ちヘラケズリ 回転ヘラケズリ、つまみ貼付ヨコナデ	
第-8図 4 PL-30	土師器 台付堯	埋土 口縁部~ 体部1/3	口径 14.0 底径 - 器高残11.5	細砂粒 酸化炭 に深い赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ	
第-10図 5 PL-30	土師器 堯	床面密着 ほぼ完形	口径 23.6 底径 3.4 器高 42.0	粗砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ	
第-10図 6 PL-30	土師器 堯	床面密着 1/2	口径 23.0 底径 - 器高 31.8	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-10図 7 PL-30	土師器 堯	埋土 口縁部1/4	口径 23.0 底径 - 器高残 7.1	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-10図 8 PL-30	土師器 堯	南辺 口縁部1/3	口径 14.9 底径 - 器高 4.4	やや粗砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-10図 9 PL-31	須恵器 堯	埋土 体部1/3	口径 - 底径 - 器高残19.7	細砂粒 還元炭 灰	胴部で製造、内面タタキ目・上平・外面頸部 輪壁整形・タタキ目、胴部タタキ目	

第3章 検出された遺構と遺物

1号住居



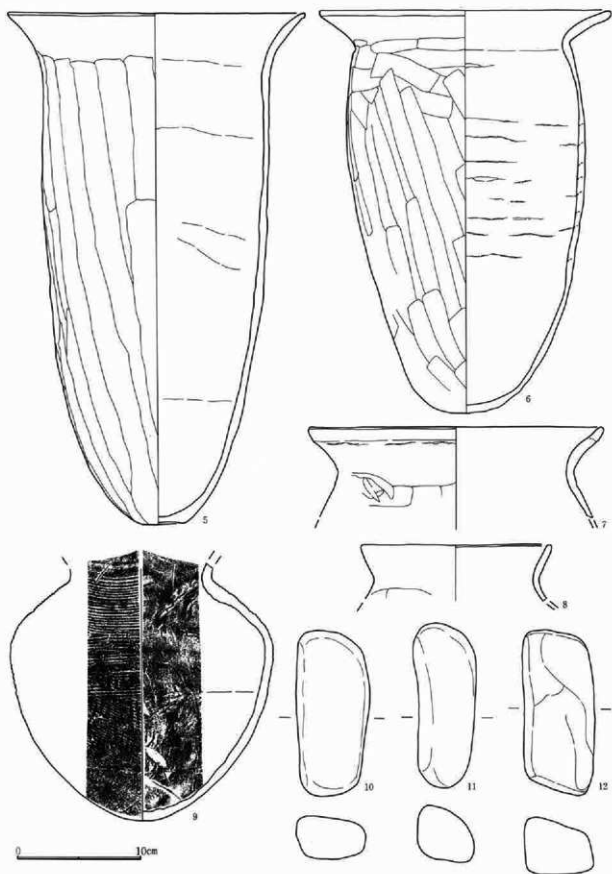
第8図 1号住居・出土遺物(1)



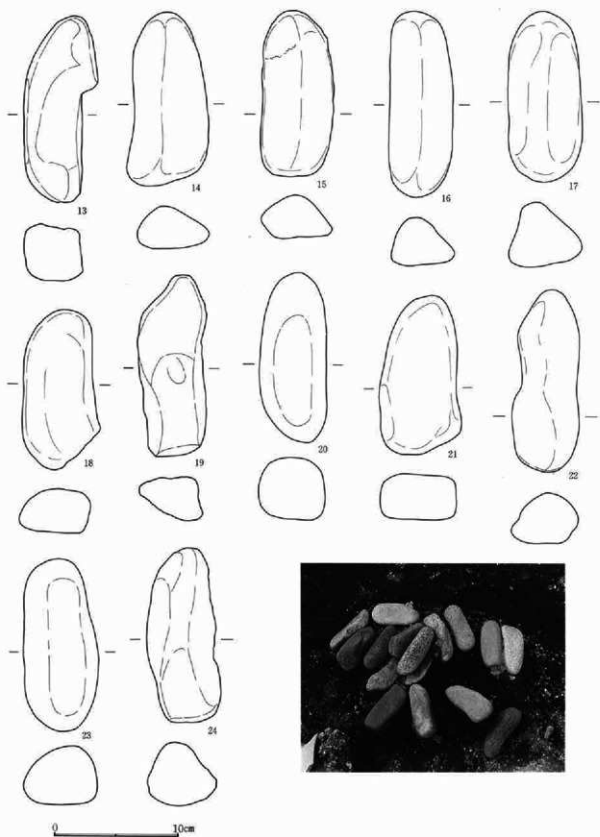
1号住居蔵

- | | |
|---------|---------------------------------|
| 1 褐色土 | 2-3mmのFP粒を7% (側部) |
| 2 褐色土 | 炭化物を2%、焼土を10% (天井部) |
| 3 褐色土 | 焼土を20%、炭化物を5% (天井下部) |
| 4 褐色土 | 灰、炭化物を30%、焼土を5% (側壁部) |
| 5 褐色土 | 2-5mmのFP粒を10%、FA小ブロックを20%、焼土を7% |
| 6 褐色土 | 黒褐色土を20% |
| 7 ローム土 | |
| 8 褐色土 | 2-3mmのFP粒を10% |
| 9 褐色土 | 2-10mmのFP粒を15% |
| 10 暗褐色土 | 3-7mmのFP粒を10% |
| 11 黒褐色土 | 3-10mmのFP粒を10%、ロームブロックを5-10% |
| 12 軽石 | FP流れ込み |
| 13 黄褐色土 | 黄褐色砂を20%、硬化している |
| 14 黄褐色土 | 焼土を20% |
| 15 暗褐色土 | 3-5mmのFP粒を5%、焼土を10% |
| 16 褐灰色土 | 黒色土を15% |

第9図 1号住居蔵

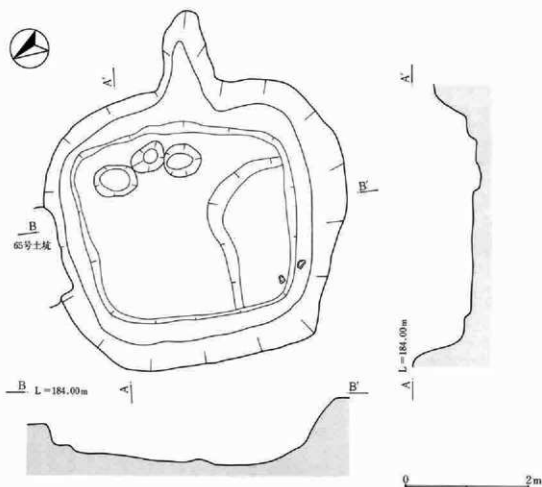


第10図 1号住居出土遺物 (2)



第11図 1号住居出土遺物 (3)

第3章 検出された遺構と遺物



第12図 1号住居掘り方

埴田番号	図版番号	製品名	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第 10 図10	PL-31	棒状鏝	床面密着	粗粒安山岩	13.0	5.9	3.4	441.0	集中出土
第 10 図11	PL-31	棒状鏝	9.5cm	粗粒安山岩	12.9	5.2	4.5	390.0	集中出土
第 10 図12	PL-31	棒状鏝	2.3cm	粗粒安山岩	13.0	5.8	4.6	622.9	集中出土
第 11 図13	PL-31	棒状鏝	9.8cm	粗粒安山岩	14.7	4.6	4.5	607.3	集中出土
第 11 図14	PL-31	棒状鏝	7.0cm	石英閃緑岩	13.7	6.7	3.3	441.9	集中出土
第 11 図15	PL-31	棒状鏝	6.5cm	粗粒安山岩	13.0	5.8	3.3	431.3	集中出土
第 11 図16	PL-31	棒状鏝	7.3cm	ひん岩	14.7	5.2	3.8	441.8	集中出土
第 11 図17	PL-31	棒状鏝	7.3cm	粗粒安山岩	13.4	5.8	5.1	615.3	集中出土
第 11 図18	PL-31	棒状鏝	4.7cm	粗粒安山岩	12.6	6.2	3.5	451.2	集中出土
第 11 図19	PL-31	棒状鏝	2.0cm	粗粒安山岩	14.4	5.6	3.5	393.0	集中出土
第 11 図20	PL-31	棒状鏝	2.3cm	粗粒安山岩	13.4	5.3	5.0	607.5	集中出土
第 11 図21	PL-31	棒状鏝	19.3cm	粗粒安山岩	12.6	6.5	3.6	550.1	集中出土
第 11 図22	PL-31	棒状鏝	4.3cm	粗粒安山岩	14.4	5.3	4.0	421.9	集中出土
第 11 図23	PL-31	棒状鏝	床面密着	ひん岩	13.6	5.9	4.7	591.5	集中出土
第 11 図24		棒状鏝	11.5cm	粗粒安山岩	13.8	6.6	5.1	524.3	集中出土

2号住居(第13図・PL4・5・31・32)

位置 BE・BF-88・89 発掘区域の西端部に検出された。平面形状 隅丸方形と推定される。残存深度 住居上半が削平を受けているためにやや残存状態が悪く、最大深度で0.65mである。重複住居 3号住居より新しい。規模 北辺のみ残存し、3.50mを測る。主軸方位 N-90°-E 埋没土 FP 粒を含む褐色土を主体とし、堆積がやや乱れていることから埋め戻しを行った可能性がある。壁の状況 床面から122°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は確認できなかった。床面 面積は残存部分で2.259㎡を測る。掘り方から直ぐ床となり、顕著な貼り床は確認できなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 竈右袖部に円形のもの確認されたが、遺物は検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 掘り方の床面はほぼ平坦であるが、住居北側を大きく挟んでいる。竈位置 東辺中央 方位 N-88°-E 規模 全長は1.50m(屋外長0.75m、屋内長0.75m)、袖部幅0.60mを測る。形状その他 ローム部分を掘り抜いて煙道部になっているものと考えられる。袖部はロームを主体に大きく張り出した形状を呈し、袖の両端には河原石が据えられていた。竈内からは、この住居で使用されていたと考えられる甕が1点出土している(第13図7)。

遺物 竈から出土した甕の他には、土師器の杯が出土している。甕は口縁部のみであるが、長胴の甕と推定される。杯はDタイプとEタイプが見られ、Eタイプのものには内面に放射状と螺旋状の暗文が見られる。所見 D、Eタイプの杯から、2号住居には8世紀初頭の時期が想定できる。

2号住居出土遺物

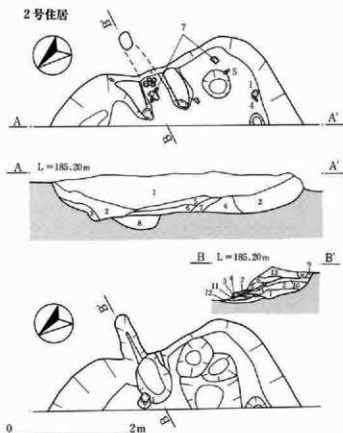
探図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考				
第-13図 1 PL-31	土師器 杯	19cm ほぼ完形	口径 14.2 底径 - 器高 4.7	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面放射状暗文・螺旋状暗文					
第-13図 2 PL-31	土師器 杯	埋土 1/2	口径 12.7 底径 - 器高 3.4	細砂粒 酸化炎 明赤焼	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ					
第-13図 3 PL-31	土師器 杯	埋土 1/2	口径 13.1 底径 - 器高 3.4	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ					
第-13図 6 PL-32	土師器 甕	埋土 口縁部一 体部上半	口径 23.9 底径 - 器高残 8.3	細砂粒 酸化炎 暗赤焼	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-13図 7 PL-32	土師器 甕	埋土 4.5~16.5cm 口縁部一 体部上半	口径 22.8 底径 - 器高残 8.8	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
探図番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第13図4	PL-32	棒状甕	14.0cm		内緑岩	11.5	3.8	2.6	193.2	
第13図5	PL-32	棒状甕	5.0cm		粗粒安山岩	9.5	5.5	3.0	258.1	

3号住居(第14・15図 PL5・32)

位置 BE・BF-88・89 発掘区域の西端部に検出された。平面形状 方形と推定される。残存深度 最大深度で0.30mである。重複住居 2号住居より古い。規模 復元された辺の長さは4.30mである。主軸方位 N-80°-E 埋没土 水平に自然堆積していると思われる。壁の状況 床面から約125°の角度で立ち上がる。床面 残存部分で9.180㎡を測る。周溝 南辺から西辺にかけて検出。掘り方 ほぼ平坦である。竈位置 東辺中央 方位 N-100°-E 規模 屋外長0.75m、袖部幅0.35mを測る。形状その他 住居東辺中央が一旦住居内部に折れ込むように入り竈が構築されている。残存する煙道部先端は住居東辺のラインにはほぼ一致する。炊き口には、甕が倒

第3章 検出された遺構と遺物

2号住居

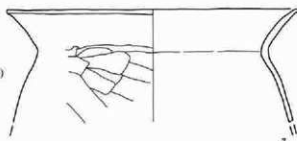
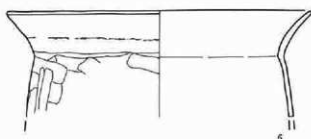
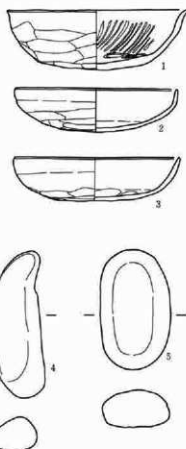


2号住居

- 1 褐色土 3-20mmのFP粒を20%
- 2 褐色土 1よりやや細かい
- 3 暗褐色土 2-10mmのFP粒を10%、ローム粒、ロームブロックを20-30%
- 4 暗褐色土 2-10mmのFP粒を10%、焼土粒・小ブロックを2-3%ローム粒を5%
- 5 暗褐色土 4よりFP粒が少ない
- 6 明褐色土 2-5mmのFP粒を5%、焼土粒を5%
- 7 明褐色土 6に似るがFP粒をほとんど含まない
- 8 褐色土 2-5mmのFP粒を10%、ローム粒・ブロックを10%

2号住居産

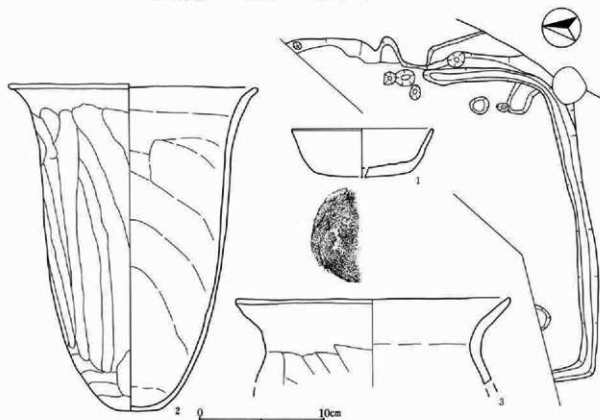
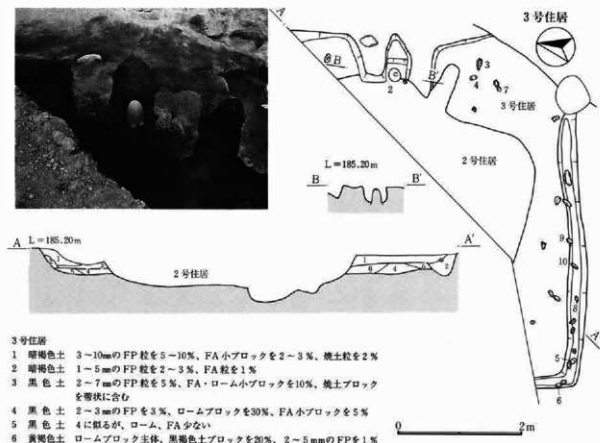
- 1 赤褐色土 6の焼土化したもの
- 2 黄色土 黄色砂を20-30%、焼土を5%、1mmのFP粒を1%
- 3 黒色土 黄色砂、炭化物を含む
- 4 赤褐色土 2の焼土化したもの
- 5 黄色土 黄色砂を10%、焼土粒を1-2% (天井部)
- 6 黄褐色土 焼土、2-5mmのFP粒を3-5% (天井部崩落土)
- 7 黒色土 3と同じ、黄色砂を10-20%
- 8 暗褐色土 2-3mmのFP粒を1-2%、ローム粒・小ブロックを20%、焼土粒を3%
- 9 暗褐色土 30mmのFP粒、ローム粒・小ブロックを10-20%
- 10 黄褐色土 ローム粒・ブロックを10%、黒褐色土ブロックを20-30%、焼土を含む
- 11 黒褐色土 炭化物、焼土、黄色砂を含む
- 12 赤褐色土 黄色砂の焼土化 (大床面)
- 13 黄褐色土 2-5mmのFP粒を2%、焼土粒を1%



0 10cm

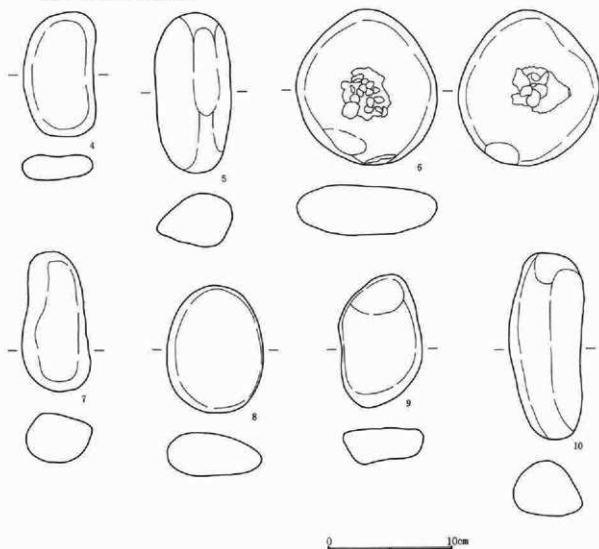
第13図 2号住居・掘り方・出土遺物

第1節 竪穴住居



第14図 3号住居・掘り方・出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第15図 3号住居出土遺物(2)

置で支脚として据えられている。遺物 土師器甕の他に、底部全面に手持ちヘラケズリを施した須恵器杯が見られる。所見 3号住居には7世紀末の時期が想定できる。

3号住居出土遺物

神国番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考				
第-14図 1 PL-32	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 11.4 底径 7.6 器高 3.8	細砂粒 還元炎 暗緑灰	内面・外面輪壁整形、底部手持ちヘラケズリ					
第-14図 2 PL-32	土師器 甕	火床密着 完形	口径 19.8 底径 (4.2) 器高 25.7	やや粗砂粒 酸化炎 にぶい黄橙	口縁部ヨコナゲ、内面ナゲ、外面ヘラケズリ					
第-14図 3 PL-32	土師器 甕	床面密着 口縁部1/5	口径 21.8 底径 - 器高残 6.8	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナゲ、内面ヨコナゲ、外面ヘラケズリ					
神国番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第15図4	PL-32	棒状礎	- 4.5cm		凝灰安山岩	9.8	5.7	2.0	166.6	
第15図5	PL-32	棒状礎	1.6cm		凝灰安山岩	12.7	6.0	4.3	519.9	
第15図6	PL-32	棒状礎	4.5cm		凝灰安山岩	12.3	11.3	4.0	812.0	
第15図7	PL-32	棒状礎	- 4.0cm		凝灰安山岩	11.1	5.5	3.9	322.8	
第15図8	PL-32	棒状礎	6.5cm		凝灰安山岩	10.0	7.7	3.5	411.3	
第15図9	PL-32	棒状礎	13.5cm		凝灰安山岩	10.4	6.4	2.8	273.7	
第15図10	PL-32	棒状礎	28.5cm		凝灰安山岩	14.7	6.1	4.4	585.0	

4号住居(第16~21図 PL5・32~34)

位置 CY・DA-66・67 平面形状 隅丸方形 残存深度 0.85m 規模 東辺 5.20m 主軸方位 N-112°-E 壁の状況 床面から141°の角度で立ち上がる。床面 掘り方から約30cmをFA、炭化物、焼土、褐色土を5~10mmの厚みで互層にし、突き固めて床としている。周溝 竈部分以外に存在 貯蔵穴 竈右袖脇 柱穴 東西間隔1.8m、南北間隔3.2m 竈位置 東辺中央 方位 N-118°-E 規模 全長1.10m、袖幅0.55m 遺物 土器類の他に鉄製整、ウマの歯が出土している。所見 土師器甕、須恵器杯から、4号住居には9世紀後半の時期が想定できる。

4号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-18図 1 PL-32	土師器 甕	43cm 口縁部1/4	口径 20.0 底径 - 器高残 7.2	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-18図 2 PL-32	土師器 甕	埋土 口縁部1/4	口径 21.4 底径 - 器高残10.7	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-18図 3 PL-32	土師器 甕	埋土 口縁部1/5	口径 22.3 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ	
第-18図 4 PL-32	土師器 甕	竈 4~63cm 1/4	口径 19.0 底径 - 器高残15.6	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-18図 5 PL-33	土師器 甕	埋土 底部~体 部下半	口径 - 底径 4.8 器高残13.3	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-19図 6 PL-33	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 14.8 底径 9.2 器高 4.2	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転ヘラケズリ	
第-19図 7 PL-33	須恵器 杯	16cm 完形	口径 12.9 底径 7.5 器高 3.2	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕	
第-19図 8 PL-33	須恵器 杯	13.5cm 1/2	口径 14.0 底径 6.8 器高 3.5	やや粗砂粒 還元炭 黒	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-19図 9 PL-33	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 13.1 底径 7.6 器高 3.9	粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整、いぶし	
第-19図 10 PL-33	須恵器 杯	28cm 3/4	口径 13.3 底径 7.6 器高 3.4	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-19図 11 PL-33	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 6.1 器高 3.8	やや粗砂粒 還元炭 暗オリーブ灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整、いぶし	
第-19図 12 PL-33	須恵器 杯	埋土 底部~口 縁部	口径 12.2 底径 6.7 器高 3.8	やや粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-19図 13 PL-33	須恵器 杯	埋土 1/5	口径 12.1 底径 5.3 器高 3.9	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-19図 14 PL-33	須恵器 杯	埋土 1/3	口径 12.0 底径 5.5 器高 3.8	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-19図 15 PL-33	須恵器 杯	埋土 1/2	口径 12.0 底径 6.4 器高 (3.4)	粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-19図 16 PL-33	須恵器 杯	31.5cm 1/3	口径 15.0 底径 6.6 器高 4.3	細砂粒 還元炭 灰黄褐色	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り無調整、いぶし	

第3章 検出された遺構と遺物

4号住居



4号住居

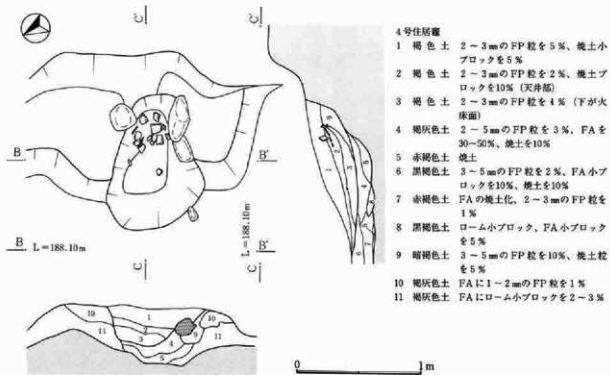
- 1 暗褐色土 3～10・30mmのFP粒を20%
- 2 暗褐色土 3～7mmのFP粒を10%、炭化物を2～3%
- 3 暗褐色土 3～7mmのFP粒を5%、炭化物を2～3%
- 4 暗褐色土 3～5mmのFP粒を2～3%、FA小アブロックを5%
- 5 黒褐色土 3～5mmのFP粒を3%、FA小アブロックを10%
- 6 軽石 FPの崩落
- 7 黒色土 3～5mmのFP粒を3%
- 8 軽石 FPの流れ込み

- 9 黒褐色土
- 10 褐色土 2～3mmのFP粒を10%
- 11 褐色土 2～5mmのFP粒を10%、黒色土を10%
- 12 黒色土 1～2mmのFP粒を5%、FAを10%
- 13 褐色土 12に似るが、色調がやや濃い
- 14 褐灰色土 スクリントーン張り付け部分、FAを主体に炭化物、焼土、褐色土等が5～10mmの層で互層に堆積しており床の敷度におたる修復、整備が見られる。(上照像)

第16図 4号住居

第-19図 17 PL-34	須置器 椀	埋土 1/3	口径 15.4 底径 — 器高残 5.4	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸変形痕	
第-19図 18 PL-34	須置器 椀	埋土 口縁部1/4	口径 13.2 底径 — 器高残 2.7	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸変形痕	
第-19図 19	須置器 杯	埋土 底部のみ	口径 — 底径 6.4 器高残 1.1	細砂粒 還元炭 オリーブ灰	底部回転糸切り	
第-19図 20	須置器 杯	埋土 底部1/2	口径 — 底径 7.0 器高残 1.5	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸変形痕、底部回転糸切り、いぶし	
第-19図 21	須置器 杯	埋土 底部1/2	口径 — 底径 7.4 器高残 1.6	細砂粒 還元炭 褐灰	底部回転糸切り	
第-19図 22	須置器 杯	埋土 底部のみ	口径 — 底径 6.0 器高残 1.2	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸変形痕、底部回転糸切り、いぶし	
第-20図 23	須置器 杯	埋土 底部のみ	口径 — 底径 7.4 器高残 2.2	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸変形痕、底部回転糸切り	

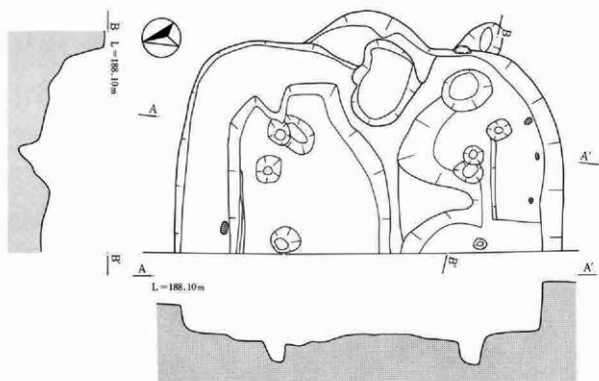
第1節 竪穴住居



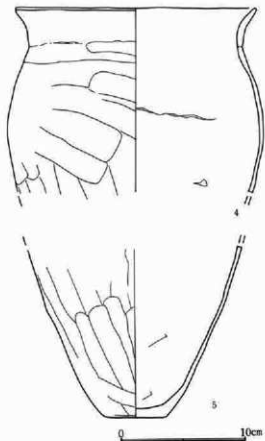
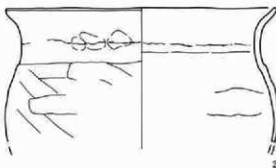
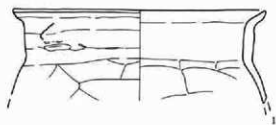
第17図 4号住居竈

第-20図 24	須恵器 杯	埋土 底部のみ	口径 - 底径 7.2 器高残 1.0	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り、いぶし	
第-20図 25	須恵器 杯	埋土 底部のみ	口径 - 底径 6.4 器高 2.4	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り後高台貼付	
第-20図 26	須恵器 杯	埋土 底部のみ	口径 - 底径 6.8 器高残 2.2	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り後高台貼付、高台端部に植物繊維圧痕	
第-20図 27	須恵器 碗	埋土 底部のみ	口径 - 底径 7.6 器高残 2.2	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り後高台貼付ナゲ	
第-20図 28	須恵器 碗	埋土 底部のみ	口径 - 底径 7.2 器高残 2.9	細砂粒 還元炭 黒	内面・外面輪縁整形痕、高台貼付、底部回転糸切り、いぶし	
第-20図 29 PL-34	須恵器 皿	36.5cm	口径 13.4 底径 7.6 器高 2.3	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り後高台貼付ココナゲ	
第-20図 30	須恵器 杯	埋土 底部のみ	口径 - 底径 - 器高残 1.4	細砂粒 酸化炭 にぶい殻	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り後高台貼付、内面布目痕	表裏に糸切り痕を持つ
第-20図 31 PL-34	須恵器 羹	甕中央 口縁部	口径 19.4 底径 - 器高残 4.9	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕	
第-20図 32 PL-34	須恵器 杯	甕中央0.5m 1/4	口径 16.4 底径 12.0 器高 2.7	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転ヘラ切り	
第-20図 33	須恵器 壺	埋土 底部1/2	口径 - 底径 13.6 器高残 1.7	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、高台貼付	
第-20図 34 PL-34	須恵器 壺	29cm 底部1/4	口径 - 底径 11.8 器高残 5.2	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、高台貼付底部回転ヘラケズリ	

第3章 検出された遺構と遺物

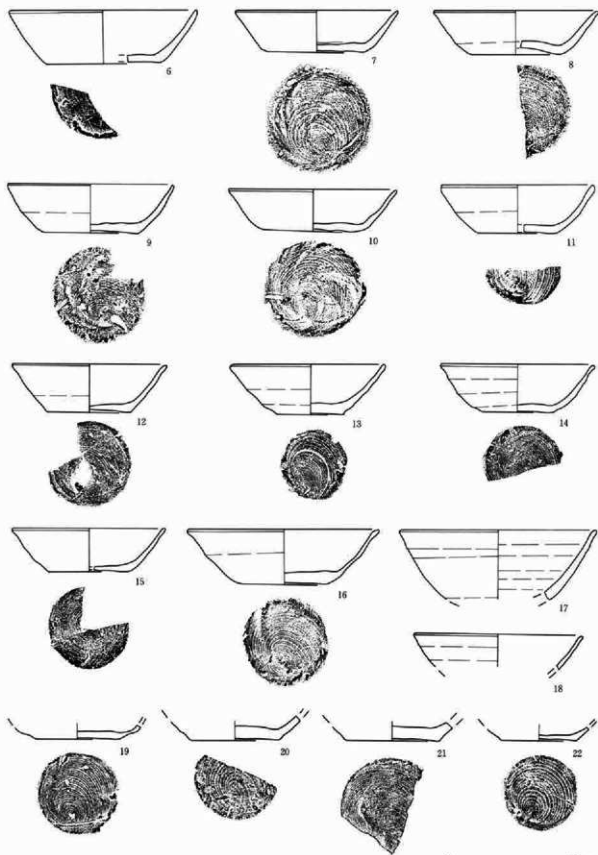


0 2m

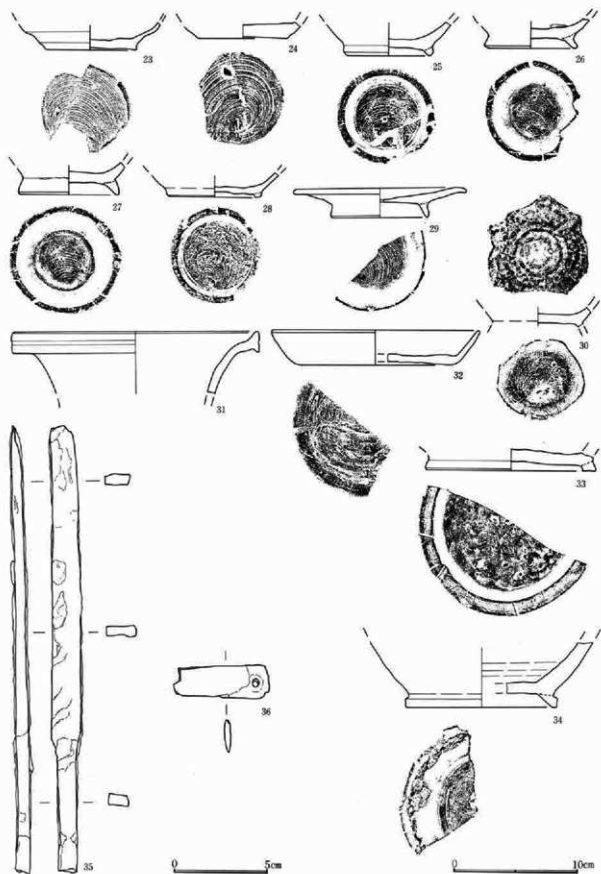


第18図 4号住居掘り方・出土遺物(1)

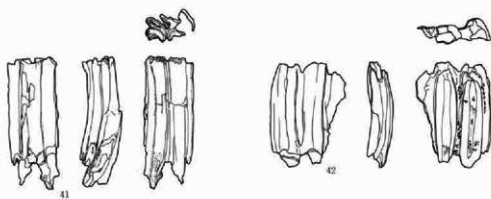
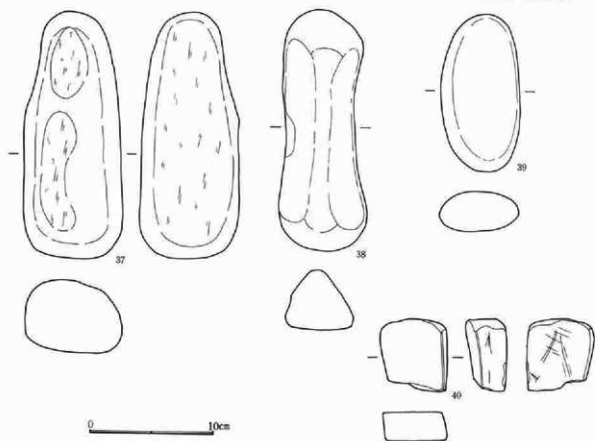
第1節 竪穴住居



第19図 4号住居出土遺物(2)



第20図 4号住居出土遺物(3)



第21図 4号住居出土遺物(4)

棟図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考		
第20図35	PL-34	壺	23.0cm	ほぼ完形	23.7	1.6	0.6				
第20図36	PL-34	刀子	燧土	柄部のみ	5.2	1.8	0.4				
棟図番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備	考
第21図37	PL-34	棒状鏢	24.0cm	石英閃緑岩		19.5	8.1	5.3	1513.4		
第21図38	PL-34	棒状鏢	7.0cm	ひん岩		19.0	7.1	4.7	917.7		
第21図39	PL-34	棒状鏢	35.5cm	流紋岩		12.3	6.2	3.2	354.7		
第21図40	PL-34	砥石	16.3cm	砥沢石		5.7	5.1	2.3	120.5		
棟図番号	図版番号	製品名	部	位置	長さ	備	考				
第21図41	PL-34	ウマ		左上顎臼歯	7.0	床から37.5cm					
第21図42	PL-34	ウマ		下顎臼歯	5.6	床から54.5cm					

第3章 検出された遺構と遺物

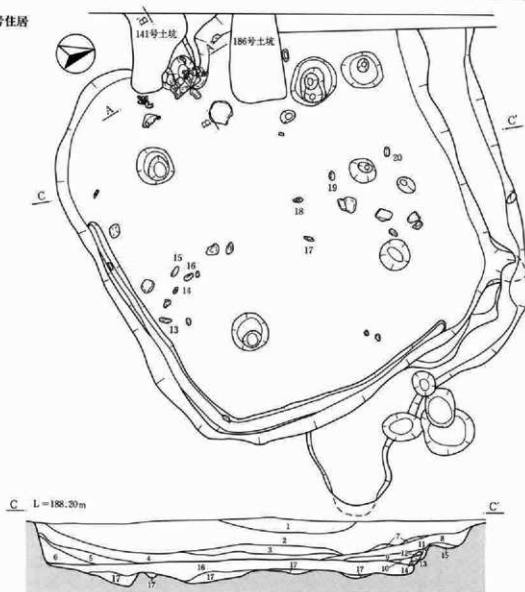
5号住居(第22～25図 P L 5・6・35・36)

位置 DI・DJ-62～64 平面形状 隅丸方形 残存深度 1.0mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 東辺は6.05m、西辺は5.25m、南辺は6.00mを測る。主軸方位 N-77°-E
埋没土 FP粒、FAを含む褐色土を主体に自然堆積で埋まったものと推定される。住居の北側は、露出していたFAが流れて壁の隅に溜まった様子が伺える。壁の状況 床面から約108°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は復元で32.067㎡を測る。掘り方からFA、黒色土を含む暗褐色土で約20cm前後盛土し(16層)、床としている。床は1面しか検出されなかった。住居北辺は、テラス状になっており、古い住居の床をそのまま利用した可能性もある。しかしテラス部分共に一気に埋められていることから1軒の住居として扱うこととする。周溝 住居の北東コーナーから検出されている。貯蔵穴 北西コーナーから径0.65mの円形のものが検出されている。柱穴 東西間隔3.10m、南北間隔2.70mで、深さは0.47～0.65mである。掘り方 住居の南半を溝状に抉っている部分がある。竈位置 東辺中央 方位 N-68°-E 規模 袖部幅1.30mを測る。形状その他 炊き口前面には2個体の甕が材としてかけられていたと推定される(第23図1、2) 遺物 Aタイプの土師器杯が出土している。所見 土師器の杯から5号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

5号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-23図 1 PL-35	土師器 甕	床面密着 ほぼ完形	口径 21.8 底径 3.4 器高 37.7	細砂粒 酸化炭 にぶい黄褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-23図 2 PL-35	土師器 甕	床面密着 口縁部2/3 底部欠損	口径 20.0 底径 - 器高残28.8	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-23図 3 PL-35	土師器 甕	5.5cm 底部一体 部下半	口径 - 底径 4.9 器高残 7.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	
第-25図 4 PL-35	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (3.1)	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-25図 5 PL-35	土師器 杯	床面密着 完形	口径 11.4 底径 - 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面一部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ 底部に植物圧痕	
第-25図 6 PL-35	土師器 杯	2.7cm 1/2	口径 11.8 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-25図 7 PL-35	土師器 杯	埋土 口縁部1/2 欠損	口径 11.8 底径 - 器高 4.1	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ、風化進んで分からない	
第-25図 8 PL-35	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.8 底径 - 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、縁に比織・種を彫りだしている	
第-25図 9 PL-35	土師器 杯	埋土 1/2	口径 12.6 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-25図 10 PL-35	土師器 杯	埋土 3/4	口径 13.0 底径 - 器高 4.3	細砂粒 酸化炭 にぶい黄褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-25図 11 PL-35	土師器 杯	埋土 1/4	口径 14.0 底径 - 器高残 3.6	細砂粒 酸化炭 黒褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-25図 12 PL-35	土師器 杯	埋土 口縁部1/2	口径 13.0 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	

5号住居



5号住居

- 1 黒褐色土 FP粒を多く含む
 2 暗褐色土 1よりやや茶色味が強い
 3 暗褐色土 2に似るが、10mm前後のFP粒を含む
 4 黒褐色土 FP粒をやや多く含む
 5 褐灰色土 FA主体、3~5mmのFP粒を2%
 6 褐灰色土 5に似るが、FP粒が少ない
 7 褐色土 FA主体、FP粒を僅かに含む
 8 暗褐色土 FP粒を多く含む
 9 暗褐色土 8に似るが、FP粒が少ない

- 10 褐色土 8に似るが、やや黄色味が強く、FAブロック、黒色土ブロックを含む
 11 褐色土 10に似るが、やや黄色味が強い
 12 黄褐色土 FA上層部崩落土
 13 褐灰色土 FA下層部崩落土
 14 黒色土 FA下層部崩落土
 15 褐灰色土 FAブロック、黒色土ブロック、FP粒を含む
 16 暗褐色土 FA、黒色土を含む、FP粒を僅かに含む
 17 褐色土 16に似るが、黒色土ブロックを僅かに含む

第22図 5号住居

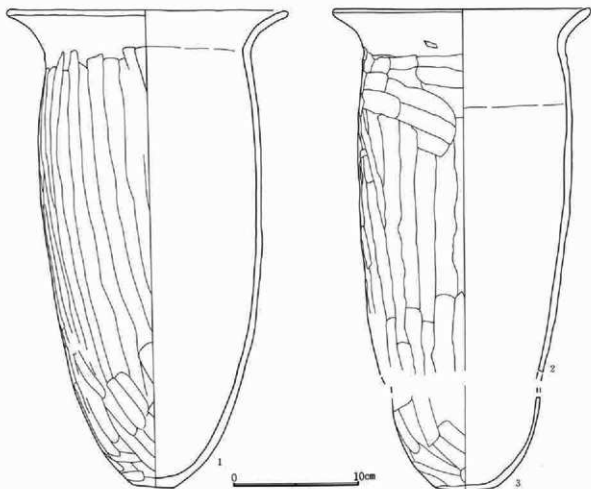
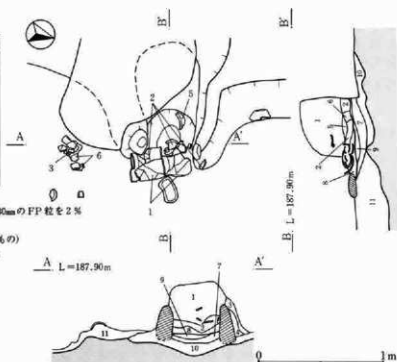
採回番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第25図13	PL-36	棒状礎	11.5cm	粗粒安山岩		16.7	6.6	5.3	844.1	
第25図14	PL-36	棒状礎	6.0cm	粗粒安山岩		14.8	5.9	5.1	824.3	
第25図15	PL-36	棒状礎	27.2cm	粗粒安山岩		15.6	5.5	4.2	639.3	
第25図16	PL-36	棒状礎	4.5cm	粗粒安山岩		14.4	7.6	4.0	561.9	
第25図17	PL-36	棒状礎	5.0cm	地質頁岩		13.8	6.1	4.2	444.0	
第25図18	PL-36	棒状礎	- 2.0cm	粗粒安山岩		13.3	5.9	4.9	667.1	
第25図19	PL-36	棒状礎	17.0cm	石英閃緑岩		13.4	6.4	4.7	653.8	
第25図20	PL-36	棒状礎	5.0cm	石英閃緑岩		14.2	7.3	4.0	626.1	

第3章 検出された遺構と遺物

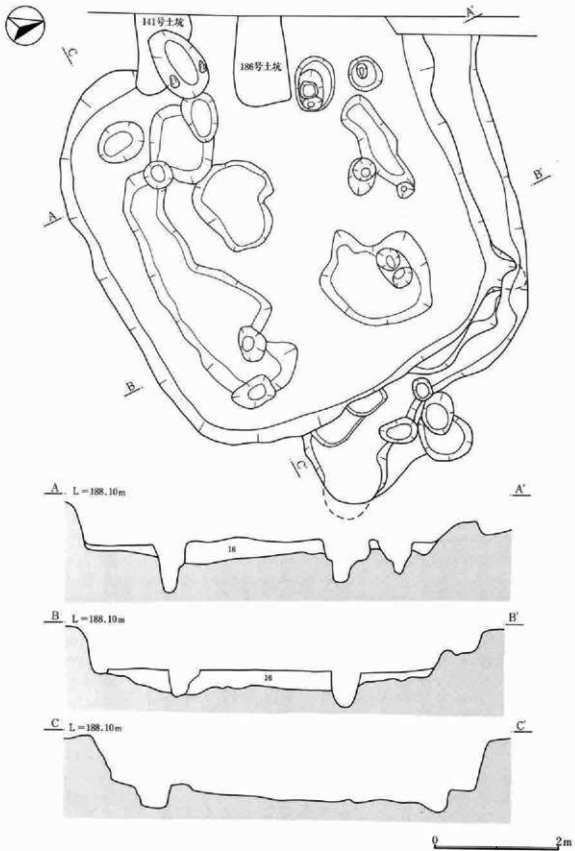


5号住居竈

- 1 褐色土 2~10mmのFP粒を5%, 30mmのFP粒を2%
- 2 焼土 天井部崩落土と考えられる
- 3 褐灰色土 FA主体(細部が流れ出したもの)
- 4 褐色土 砂粒を30%, 雑糠は粗である
- 5 褐色土 2~5mmの焼土粒を10%
- 6 褐色土 1~3mmの焼土粒を30%
- 7 茶褐色土 焼土粒を10%, 灰を含む
- 8 褐灰色土 焼土を30%
- 9 灰色土 灰、骨片を含む
- 10 暗褐色土 焼土粒、炭化物を5%
- 11 暗褐色土 住居16号と同じ

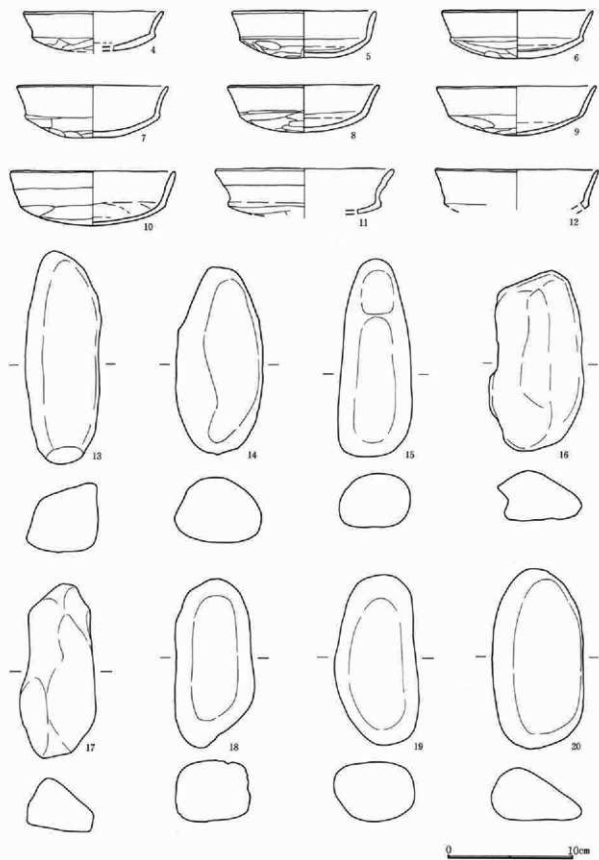


第23図 5号住居竈・出土遺物(1)



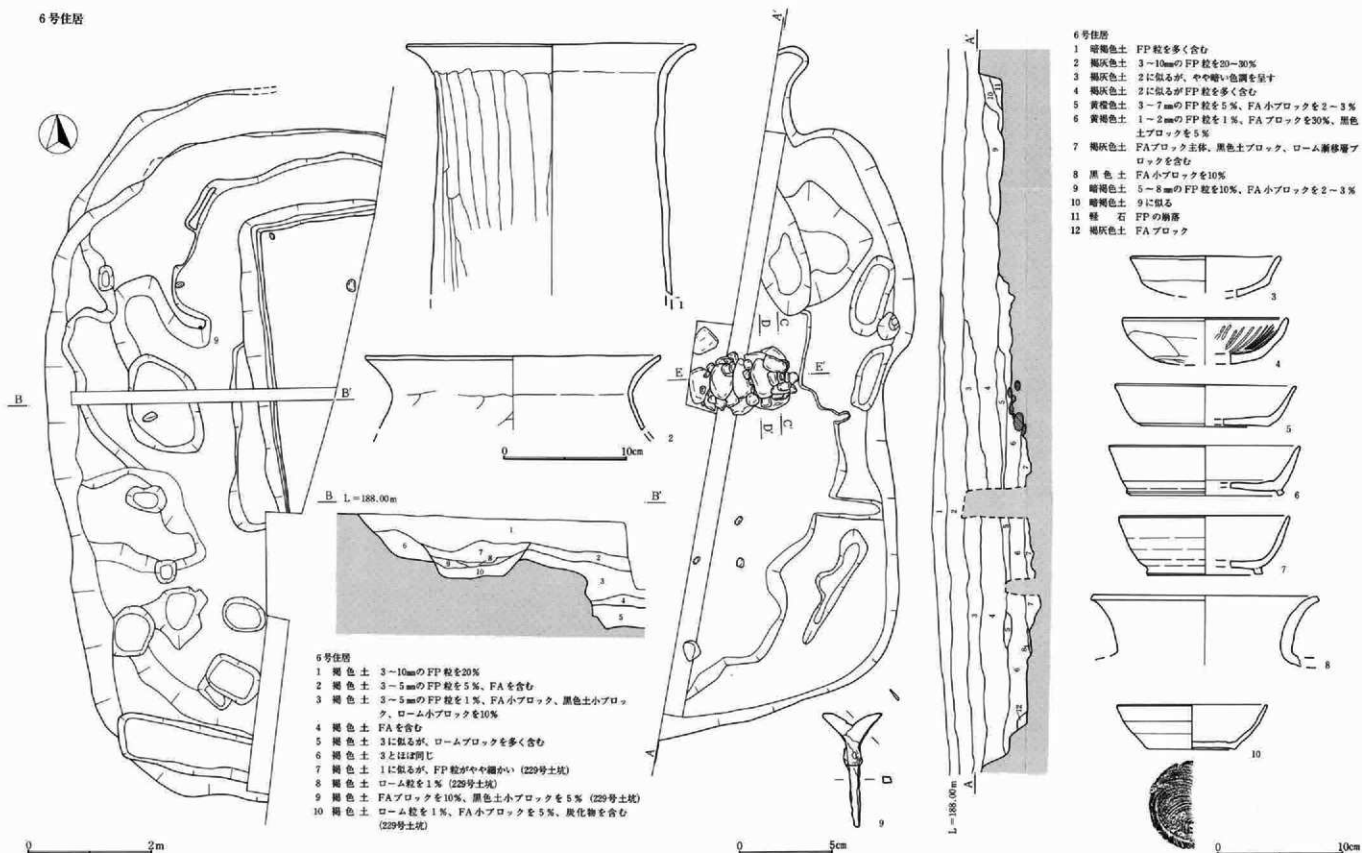
第24図 5号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物

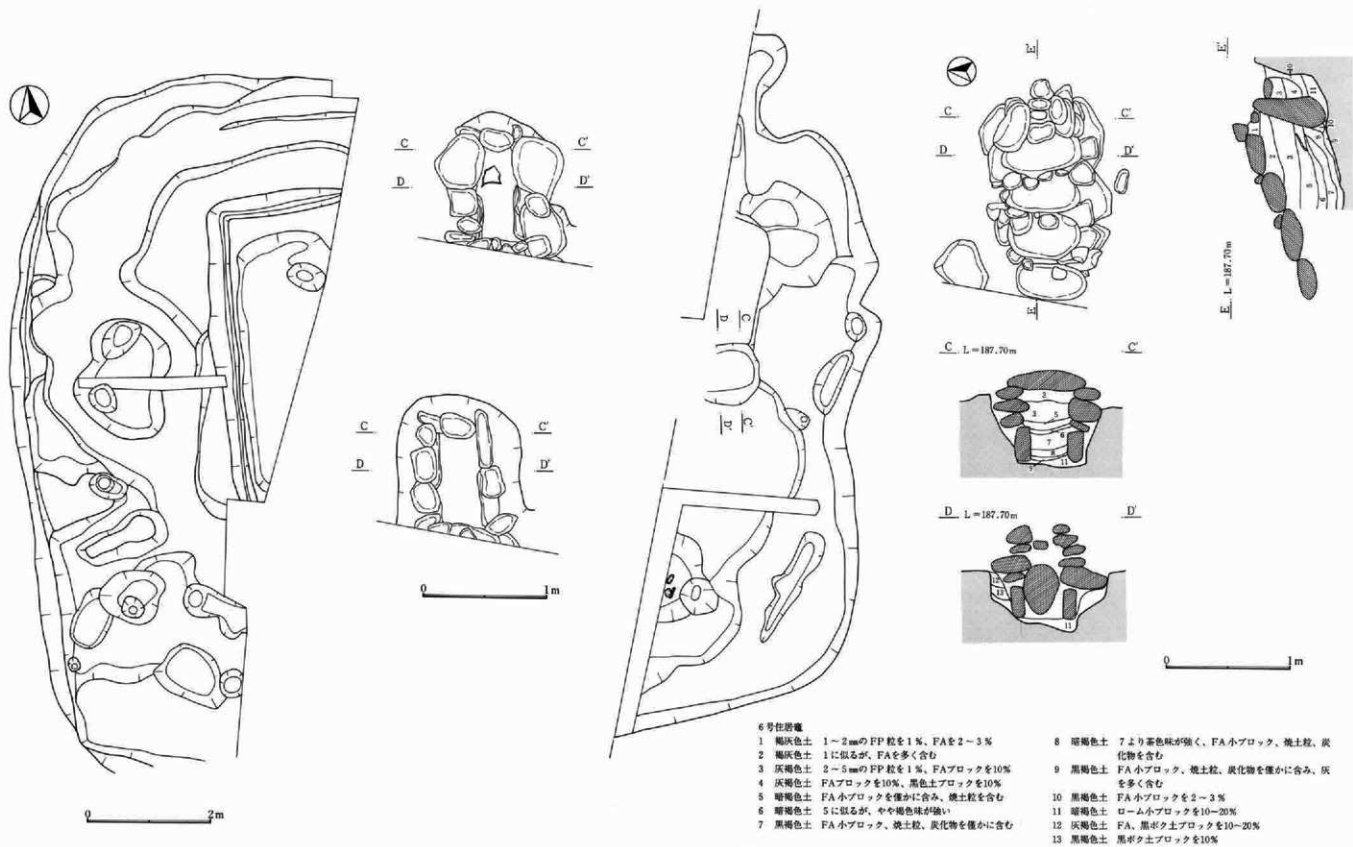


第25図 5号住居出土遺物(2)

6号住居



第26図 6号住居・出土遺物



第27図 6号住居掘り方・竈

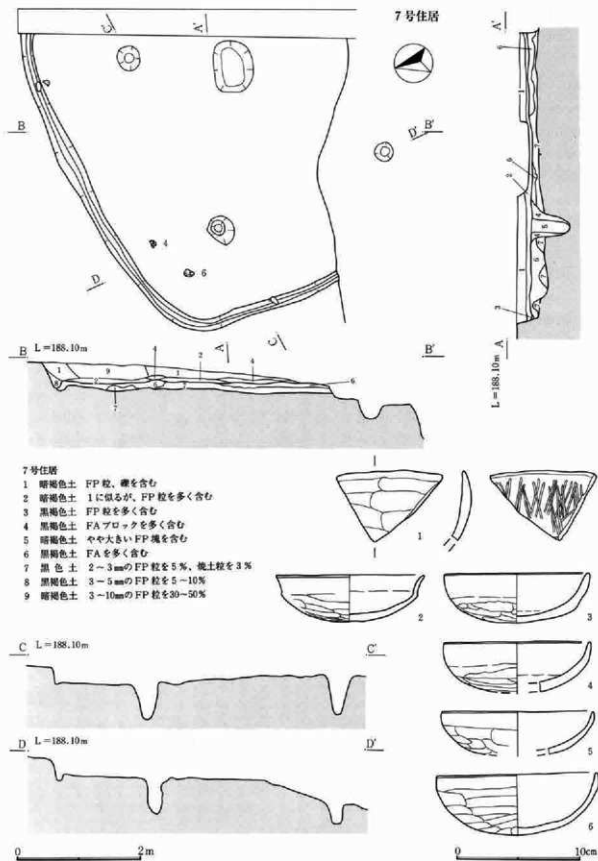
6号住居(第26・27図 PL 6・36)

位置 CU・CX-67-70 住居の大部分は現有道路の下になっており、確認できたのは道路の東では竈と広い掘り方部分で、西は西辺の一部と広い掘り方部分である。平面形状 隅丸方形と推定される。残存深度 1.40mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 辺7m程度の規模であったと推定される。主軸方位 N-85°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とし、水平に堆積していることから、自然堆積であると推定される。住居の周囲約3.5mの範囲は、大きく掘られているが、住居と同時に埋没していることから、新旧関係ではなく、住居の一部であると判断した。壁の状況 床面から約100°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 掘り方からFP粒を僅かに含む褐色土で約30cm前後盛土(5層)、床としている。床は1面しか確認できなかった。周溝 検出されている西辺と、北辺の一部には確実に巡っている。貯蔵穴 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。掘り方 住居の内部には顕著な凹凸は確認できなかったが、周囲を約3.5mにわたって、掘り込んでいる。掘り込みはFAの下面にまで達し、緩やかに傾斜しながら、大きく凹凸を持っている。その形は、中世編で報告したローム採掘坑に似ており、住居を立てる際に必要な材料のFAを取った跡とも考えられる。竈位置 東辺方位 N-85°-E 規模 残存している長さで1.7mを測る。形状その他 石組み竈の煙道部から煙突の一部が確認されている。アーチ状の煙道部は、2個の河原石を並べた上に、更に3段石を組み、大きな平石で塞いでいる。最深部には大形の平石を立てて奥壁とし、煙突として機能している。遺物 土師器、須恵器の杯が数点出土している。所見 出土した須恵器の杯から見て、6号住居には8世紀前半の時期が想定できる。

6号住居出土遺物

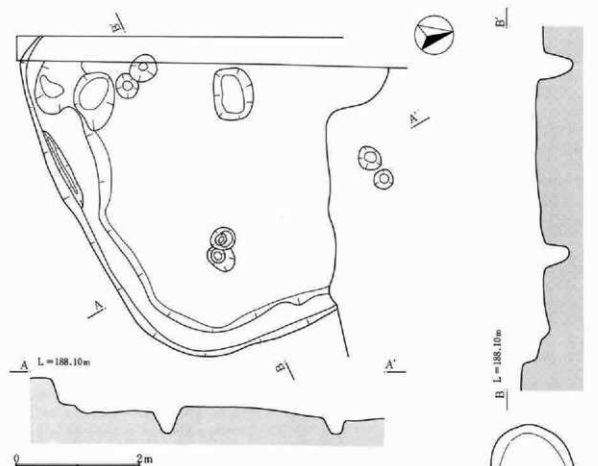
棟図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考		
第-26図 1 PL-36	土師器 甕	埋土 口縁部~ 体部上半	口径 23.0 底径 - 器高残19.8	細砂粒 酸化灰 にぶい褐	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ			
第-26図 2 PL-36	土師器 甕	埋土 口縁部1/4	口径 23.5 底径 - 器高残 5.8	細砂粒 酸化灰 明赤褐	口縁部ナデ・ヨコナデ、内面ヘラケナ、外面ヘラケズリ			
第-26図 3 PL-36	土師器 杯	埋土 1/5	口径 11.8 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 酸化灰 明褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ			
第-26図 4 PL-36	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高 (3.6)	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状暗文			
第-26図 5 PL-36	須恵器 杯	埋土 1/5	口径 14.2 底径 10.0 器高 3.2	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪轆整形痕、底部回転ヘラケズリ			
第-26図 6 PL-36	須恵器 杯	埋土 1/5	口径 15.2 底径 11.8 器高 3.9	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付			
第-26図 7 PL-36	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 13.6 底径 9.2 器高 4.6	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪轆整形痕、高台貼付			
第-26図 8 PL-36	須恵器 甕	埋土 口縁部1/5	口径 17.8 底径 - 器高残 5.4	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆整形痕			
第-26図 10 PL-36	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 11.8 底径 6.8 器高 3.5	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪轆整形痕、底部回転糸切り、いぶし			
棟図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状況・特徴	長さ	幅	厚さ	備考
第26図9	PL-36	鉄線	7.0cm	変形	6.0	0.8	0.4	

第3章 検出された遺構と遺物



第28図 7号住居・出土遺物(1)

第1節 竪穴住居



第29図 7号住居掘り方・出土遺物(2)

7号住居(第28・29図 PL.6・36・37)

位置 DG・DH-61~63 発掘区域北端部で、5号住居のすぐ南に位置する。住居の南半分を二位屋城の1号堀に切られる(「白井遺跡群—中世編—」参照)。平面形状 隅丸方形と推定される。残存深度 0.50mを測る。重複住居 単独で検出された。主軸方位 N-82°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とした自然堆積である。壁の状況 床面から約64°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 残存部の面積は17.793㎡を測る。掘り方から、FP粒を含む黒色土を約10cm盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出部分の全体で確認されている。周溝は、FP粒を含む黒褐色土で埋められていた。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 東西間隔3.10m、南北間隔2.90mを測る。掘り方 ほぼ平坦である。床下から新たに柱穴が確認され、ほぼ同じプランで立て直しが行われたことが確認されている。竈 検出されなかった。遺物 A、Cタイプの土師器杯が出土している。杯のうち1は赤く焼かれており、内面に放射状の暗文を持つ。所見 土師器杯から見て、7号住居には7世紀末から8世紀初頭の時期が想定できる。

第3章 検出された遺構と遺物

7号住居出土遺物

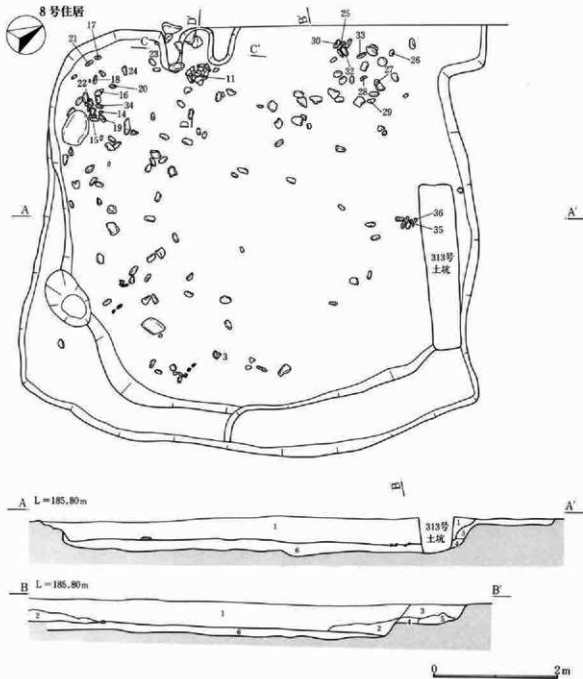
検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考				
第-28図 1	土師器 杯	埋土 破片	口径 - 底径 - 器高 -	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状暗文	赤く焼き上がっている				
第-28図 2 PL-36	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.6 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-28図 3 PL-36	土師器 杯	埋土 完形	口径 11.4 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 淡黄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ					
第-28図 4 PL-37	土師器 杯	3cm 1/2	口径 11.6 底径 - 器高 (4.0)	細砂粒 酸化炭 淡黄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ作りは厚手、焼成も他と異なる					
第-28図 5 PL-37	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-28図 6 PL-37	土師器 杯	7cm 1/2	口径 12.6 底径 - 器高 4.8	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第-29図	7	PL-37 棒状器	埋土		粗粒安山岩	17.0	8.3	3.6	810.3	

8号住居(第30~35図 PL.6・7・37~39)

位置 BU・BW-74~76 平面形状 隅丸方形 残存深度 0.55m 規模 東辺は7.25m、西辺は6.65m、南辺は6.65m。主軸方位 N-130°-E 埋没土 暗褐色土の自然堆積。壁の状況 床面から138°の角度で立ち上がる。床面面積は復元で41.463㎡を測る。貯蔵穴 検出されなかった。竈位置 西辺中央方位 N-294°-E 規模 全長0.65m、袖部幅0.60m、煙道部の先端は、住居の西辺に揃う。遺物 Aタイプの杯と長胴の甕が出土している。所見 土師器の杯から、7世紀後半の住居であると考えられる。集落の中でも希な西竈の住居である。

8号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-33図 1 PL-37	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.0 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-33図 2 PL-37	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.0 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-33図 3 PL-37	土師器 杯	床面密着 口縁部を一部欠損	口径 11.2 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-33図 4 PL-37	土師器 杯	埋土 口縁部1/4	口径 11.4 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-33図 5 PL-37	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.8 底径 - 器高 (3.1)	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、風化進む	
第-33図 6 PL-37	土師器 杯	埋土 1/5	口径 12.0 底径 - 器高残 3.6	細砂粒 酸化炭 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-33図 7 PL-37	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.8 底径 - 器高 (4.9)	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-33図 8 PL-37	土師器 杯	埋土 1/2	口径 14.4 底径 - 器高 5.3	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	



8号住居

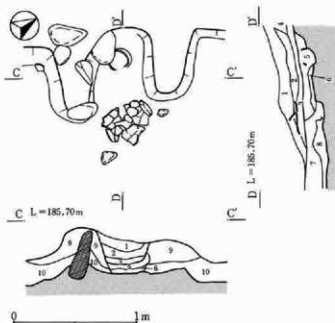
- 1 暗褐色土 3~30mmのFP粒を20%、FAを10%
- 2 黒褐色土 2~5mmのFP粒を3%、ローム粒を2%
- 3 暗褐色土 3~10mmのFP粒を10%、FA小ブロックを5%
- 4 暗褐色土 2~5mmのFP粒を3%、ローム粒を5%

- 5 暗灰色土 FA中心、3~5mmのFP粒を3%
- 6 黄褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックからなり、3~8mmのFP粒を3~5%

第30図 8号住居

第-33図 9 PL-37	土師器 杯	埋土 1/4 底部欠く	口径 15.9 底径 - 器高 (5.4)	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-33図 10 PL-37	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.0 底径 - 器高 4.3	細砂粒 酸化炭 黒褐色	口縁部ヨコナデ、内面ミガキ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ、いぶし	

第3章 検出された遺構と遺物

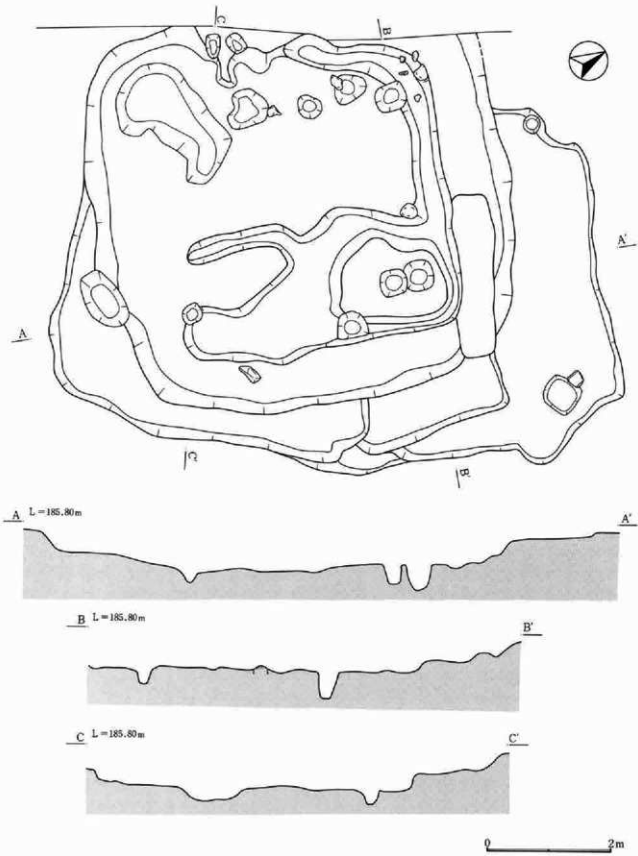


8号住居

- 1 暗褐色土 1-2mmのFP粒を1%、ローム粒暗褐色粘土粒を5%、焼土粒を含む
- 2 黄褐色土 粘質土、焼土、灰を含む(天井部)
- 3 黒色土 灰、焼土、黄褐色粘質土を含む
- 4 黄褐色土 2に似るがやや暗い色調を呈す
- 5 赤灰色土 灰に焼土を5%
- 6 焼土層
- 7 褐色土 焼土粒、炭化物、ローム粒を5-10%
- 8 褐色土 ローム小ブロックを10%
- 9 褐色土 焼土粒を1%、FAを10%
- 10 褐色土 ローム粒、小ブロックを10%、焼土粒を1%

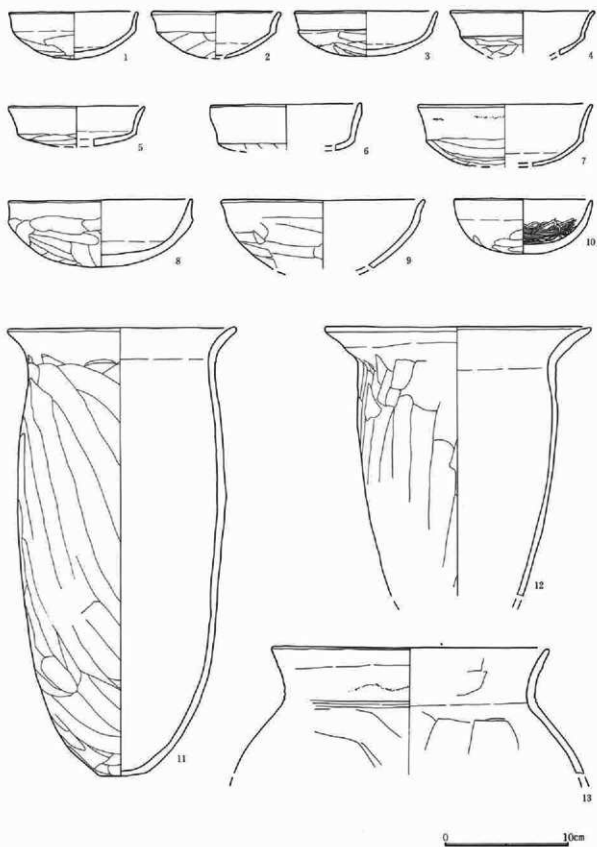
第31図 8号住居

図番	土師器	口径	口径部	口径	底径	器高	内容物	位置		
第-33図 11 PL-38	土師器 壺	3.5cm	口径部1/2 欠損	口径 18.0 底径 3.9 器高 35.4	粗砂粒 酸化炭 にぶい糖	口径部ココナデ、内面ナデ・ヘラナデ、外面ヘラケズリ				
第-33図 12 PL-38	土師器 壺	壺土 1/4		口径 21.0 底径 - 器高残21.4	粗砂粒 酸化炭 にぶい糖	口径部ココナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ				
第-33図 13 PL-38	土師器 壺	壺土 口径部1/4		口径 22.0 底径 - 器高残10.0	やや粗砂粒 酸化炭 糖	口径部ココナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ				
種別番号	図番番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 34 図14	PL-38	棒状磚	- 6.5cm	粗粒安山岩		13.6	6.4	5.7	703.3	
第 34 図15	PL-38	棒状磚	8.5cm	石英閃緑岩		13.1	5.3	4.0	389.1	
第 34 図16	PL-38	棒状磚	10.0cm	石英閃緑岩		16.3	6.9	4.2	666.5	
第 34 図17	PL-38	棒状磚	22.5cm	粗粒安山岩		11.1	5.5	3.8	364.2	
第 34 図18	PL-38	棒状磚	8.0cm	粗粒安山岩		13.5	5.6	4.0	503.5	
第 34 図19	PL-38	棒状磚	- 4.5cm	粗粒安山岩		14.2	7.6	5.4	905.5	
第 34 図20	PL-38	棒状磚	14.0cm	粗粒安山岩		9.4	7.4	5.0	436.3	
第 34 図21	PL-38	棒状磚	- 6.0cm	溶結凝灰岩		14.0	6.7	4.2	675.0	
第 34 図22	PL-38	棒状磚	- 5.0cm	粗粒安山岩		15.5	9.1	4.4	820.0	
第 34 図23	PL-38	棒状磚	3.5cm	粗粒安山岩		12.7	6.4	4.8	620.2	
第 34 図24	PL-38	棒状磚	- 1.5cm	石英閃緑岩		13.9	5.7	3.3	351.5	
第 34 図25	PL-38	棒状磚	床面密着	粗粒安山岩		15.7	7.0	3.9	641.6	
第 34 図26	PL-38	棒状磚	- 4.5cm	粗粒安山岩		11.0	8.1	2.6	302.4	
第 35 図27	PL-39	棒状磚	床面密着	粗粒安山岩		10.9	7.4	3.3	406.7	
第 35 図28	PL-39	棒状磚	- 2.0cm	洗紋石		11.1	4.3	3.8	276.6	
第 35 図29	PL-39	棒状磚	1.5cm	粗粒安山岩		10.8	6.2	4.9	449.8	
第 35 図30	PL-39	棒状磚	床面密着	粗粒安山岩		14.6	6.8	4.1	724.1	
第 35 図31	PL-39	棒状磚	床面密着	実質安山岩		13.0	6.6	2.8	415.7	
第 35 図32	PL-39	棒状磚	床面密着	粗粒安山岩		14.7	6.3	4.0	654.7	
第 35 図33	PL-39	棒状磚	床面密着	粗粒安山岩		13.9	6.5	5.5	703.9	
第 35 図34	PL-39	棒状磚	10.0cm	溶結凝灰岩		11.8	7.1	3.6	535.5	
第 35 図35	PL-39	棒状磚	- 9.0cm	石英閃緑岩		13.3	5.5	4.0	583.1	
第 35 図36	PL-39	棒状磚	- 4.5cm	粗粒安山岩		11.8	5.9	4.7	412.9	
第 35 図37	PL-38	切り子玉	埋土	水晶		1.6	1.4	1.3	3.4	
第 35 図38	PL-38	玉	埋土	滑石		1.5	1.6	0.8	2.7	
第 35 図39	PL-39	石器片	埋土	一		6.5	7.2	1.7	48.5	

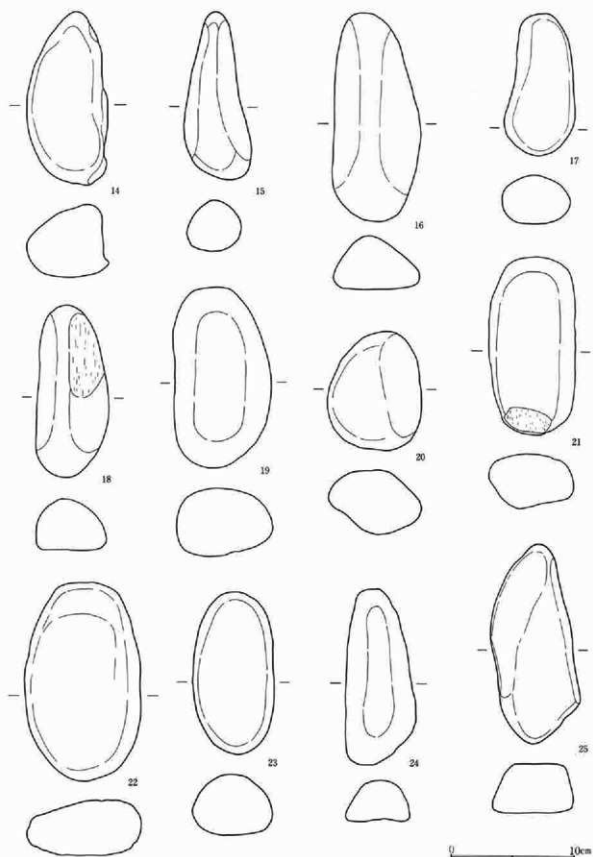


第32図 8号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物

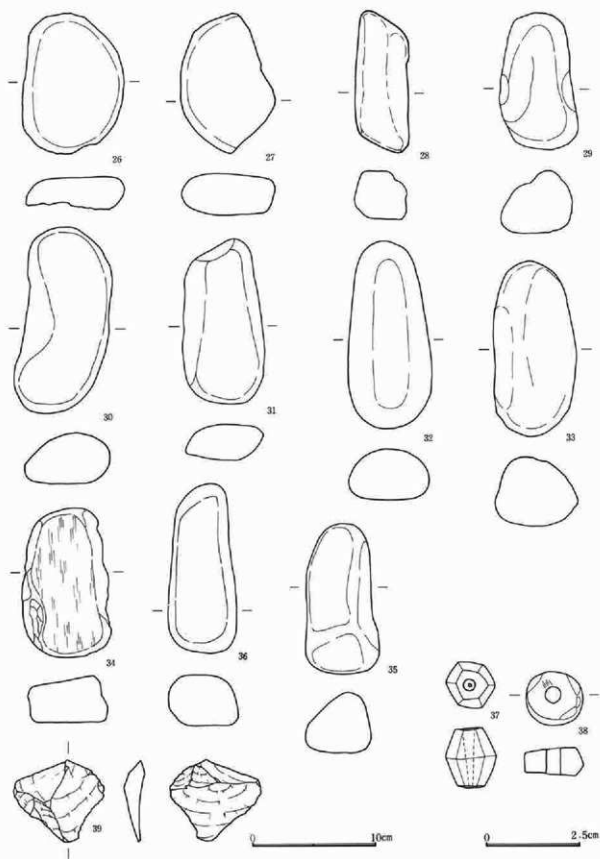


第33図 8号住居出土遺物(1)



第34図 8号住居出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第35図 8号住居出土遺物(3)

9号住居(第36図 PL.7・39)

位置 BU-BV-73・74 318号土坑(中世編報告)より古い。平面形状 やや崩れた隅丸方形を呈する。残存深度 0.65mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 東辺は2.80m、西辺は2.20m、南辺は2.80m、北辺は3.25mを測る。主軸方位 N-85°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土で一気に埋められている。人為的に埋め戻したものであろう。壁の状況 床面から114°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は5.265㎡を測る。掘り方から10cm前後貼り床をしている。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 ほぼ平坦である。竈 検出されなかった。遺物 Eタイプの土師器杯が出土しており、内面に1段の放射状暗文と、螺旋状暗文が見られる。所見 土師器杯の時期を住居の時期とすれば、9号住居には7世紀後半から8世紀前半の時期が想定できる。

9号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考				
第36図3 PL-39	土師器 杯	埋土 1/4	口径 14.9 底径 8.0 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状暗文、螺旋状暗文					
第36図5 2	須臾器 杯	埋土 底部のみ	口径 - 底径 9.0 器高残 1.3	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラ切り					
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第36図3	PL-39	棒状磚	埋土	粗粒安山岩		12.7	6.0	3.4	424.6	
第36図4	PL-39	棒状磚	埋土	粗粒安山岩		13.0	6.7	2.7	406.6	
第36図5	PL-39	棒状磚	埋土	粗粒安山岩		13.1	5.4	4.9	412.5	
第36図6	PL-39	棒状磚	埋土	粗粒安山岩		12.3	6.3	3.5	329.5	

10号住居(第37図 PL.7・39・40)

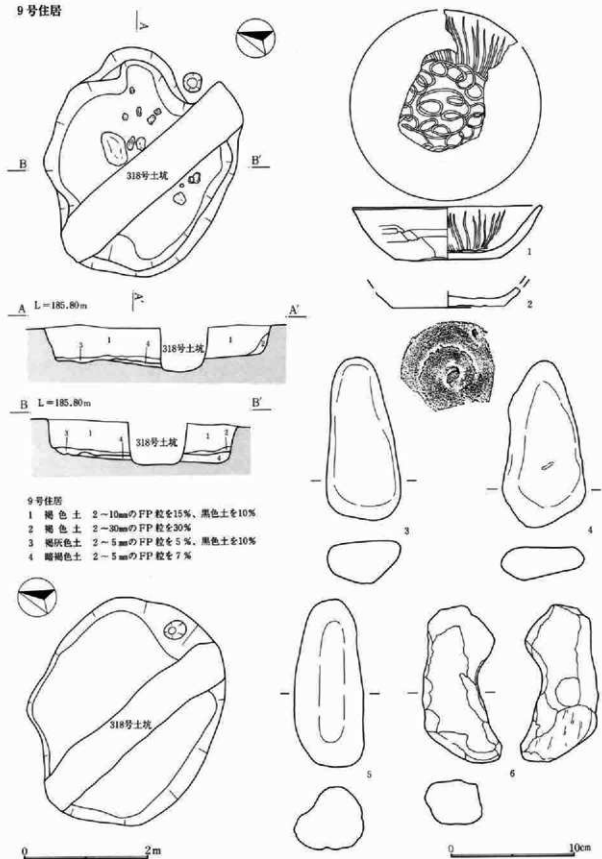
位置 BU-72 発掘区西端部 平面形状 隅丸方形 残存深度 1.00m 重複住居 単独で検出された。規模 西辺は4.03mを測る。主軸方位 N-109°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とした自然堆積である。中に炭化物の層が見られる。壁の状況 床面から123°の角度で立ち上がる。遺物 「コ」の字口縁に近い土師器壺や、酸化炭焼成の須臾器碗が見られる。所見 出土した遺物から見て、10号住居には9世紀後半の時期が想定できる。

10号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第37図1 PL-39	土師器 壺	埋土 口縁部	口径 18.0 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 酸化炭 赤褐色	口縁部ヨコナデ(2段)、内面ヘラナデ・ヨコナデ(強い)、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第37図2 PL-39	土師器 壺	埋土 口縁部1/5	口径 21.8 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第37図3 PL-39	須臾器 碗	埋土 1/5	口径 12.0 底径 5.0 器高 4.0	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り	
第37図4 PL-40	須臾器 碗	埋土 1/4高台制 離	口径 15.0 底径 - 器高残 5.2	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り、高台貼付(剥離)	表裏に同じ墨書が見られる
第37図5 PL-39	須臾器 碗	埋土 底部1/4	口径 - 底径 5.4 器高残 1.4	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸調整、底部回転糸切り無調整	墨書有説不可能
第37図6 PL-40	須臾器 碗	埋土 1/5	口径 13.0 底径 6.0 器高 3.0	細砂粒 還元炭 灰	口縁部・内面輪軸整形痕、高台貼付	

第3章 検出された遺構と遺物

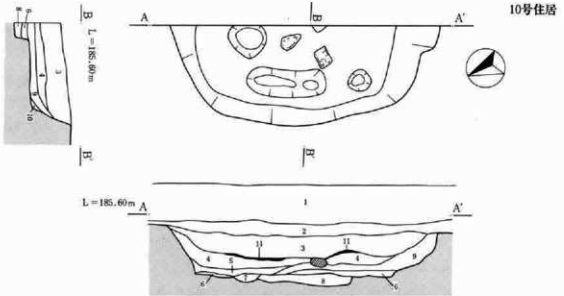
9号住居



9号住居

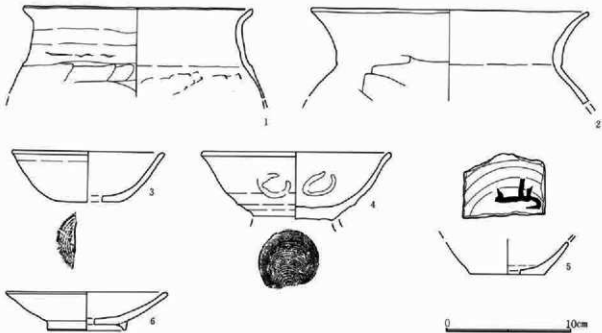
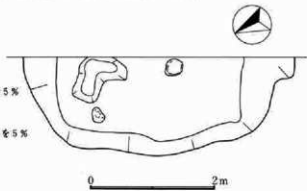
- 1 褐色土 2~10mmのFP粒を15%、黒色土を10%
- 2 褐色土 2~30mmのFP粒を30%
- 3 褐色土 2~5mmのFP粒を5%、黒色土を10%
- 4 暗褐色土 2~5mmのFP粒を7%

第36図 9号住居・掘り方・出土遺物



10号住居

- 1 暗褐色土 3-10mmのFP粒を5%
- 2 黒褐色土 3-7mmのFP粒を3-5%、As-B粒を含む
- 3 暗褐色土 5-20mmのFP粒を50-70%
- 4 暗褐色土 5-20mmのFP粒を50%
- 5 暗褐色土 3-5mmのFP粒を2-3%、FA小ブロックを5%
ローム小ブロックを5%
- 6 黄褐色土 3mmのFP粒を1%
- 7 暗褐色土 3-4mmのFP粒を2-3%、ローム小ブロックを5%
- 8 暗褐色土 3-7mmのFP粒を30-50%
- 9 暗褐色土 3-5mmのFP粒を30-70%
- 10 褐灰色土 暗褐色土、ローム、FA小ブロックを含む
- 11 炭化物 (厚板材か)



第37図 10号住居・掘り方・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

11号住居(第38～40図 PL7・8・40)

位置 BT・BU-73・74 8、9、10号住居に接して存在する。旧地形を見ると、1区南西端部から続いている微高地(表土の下にすぐロームが露出している)とFPが完全に残っているやや低い部分の接点に位置するため、すぐ隣に存在する8号住居(微高地上に存在)とは著しく深度が異なる。平面形状 隅丸方形を呈する。FAを掘り残したテラス状の段を持つ特異な形状をしている。テラスは0.3～0.7m幅で住居の周囲を一周しており、竈の部分もそのまま巡っているので、使用時には煙道とテラスを区切る何らかの施設が存在していたものと推定される。テラス部分に明瞭な硬化面は確認できなかった。残存深度 1.20mを測る。

重複住居 8号、9号住居と壁を接するように検出されたが、重複関係は無かった。

規模 東辺は5.15m、西辺は4.70m、南辺は4.70m、北辺は4.35mを測る。主軸方位 N-210°-E埋没土 11号住居はその殆どがFP粒によって埋め戻されていた。FP粒は褐色土を含んで汚れた部分と、汚れの見られない純堆積に近い部分に分けられた。検出された当初は周辺のFPと見分けにくかったが、断面を見ると、両者の差は歴然としていた(写真参照)。FP粒は、住居の壁に沿って流れるように堆積しており、住居の周囲からFP粒を集めて埋め戻した様子が伺える。壁の状況 床面から約123°の角度で立ち上がる。テラス部分からの立ち上がりもほぼ同じ角度である。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出されなかった。床面 面積は10.584㎡を測る。掘り方床面から、FA、ローム、黒色土の小ブロックを含む褐色土(6層)で10～30cm盛土し、上面を床としているが、顕著な硬化面は存在しない。床は1面しか確認できなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 床面確認時点でははっきりしなかったが、掘り方検出時に4本確認できた。東西間隔1.80m、南北間隔1.95mで、柱穴間を直線で結ぶとほぼ正方形を描く。深さは床面から0.20～0.50mを測る。

掘り方 南東コーナーがやや抉られている他はほぼ平坦である。

竈位置 南辺中央 方位 N-213°-E 規模 全長は2.95m(屋外長1.45m、屋内長1.50m)、袖部幅0.45mを測る。形状その他 袖部が大きく張り出した大形の竈である。袖部はFP粒を混合したFAを用いており、補強のために河原石を埋め込んでいる。炊き口前面には、暗渠状にかけたと考えられる平石が落下したままの状態で見出された。燃焼部から奥は、やや膨らみを持ち、オーバーハング気味に奥壁に至る。奥壁はほぼ垂直で、緩やかな傾きを持つ煙道部へとつながる。煙道部には石が組まれていた痕跡は見られない。

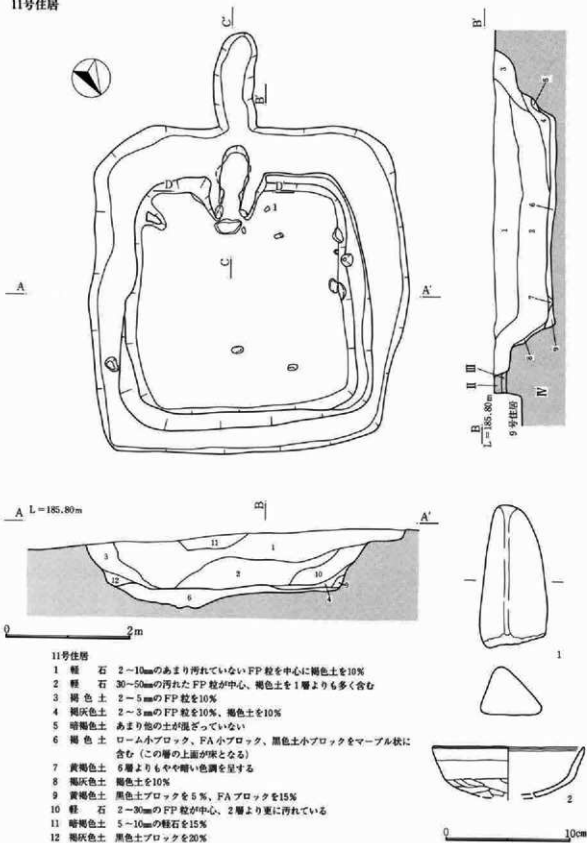
遺物 住居は廃絶後一気に埋め戻したため残りが良かったが、遺物は皆無に等しかった。このことは、家財道具を持ち出しての引っ越しを彷彿とさせる。唯一出土した土器はAタイプの杯で、竈右袖部脇で発見された(第38図2)。

所見 遺物が殆ど見られないので時期を決定するのは困難であるが、床直で出土したAタイプの杯は、口縁部と体部の高さがほぼ同じであり、二位屋遺跡出土の土師器の杯では比較的古いタイプであると考えられる。従って、11号住居には、疑問符付きではあるが7世紀後半の時期を想定したい。

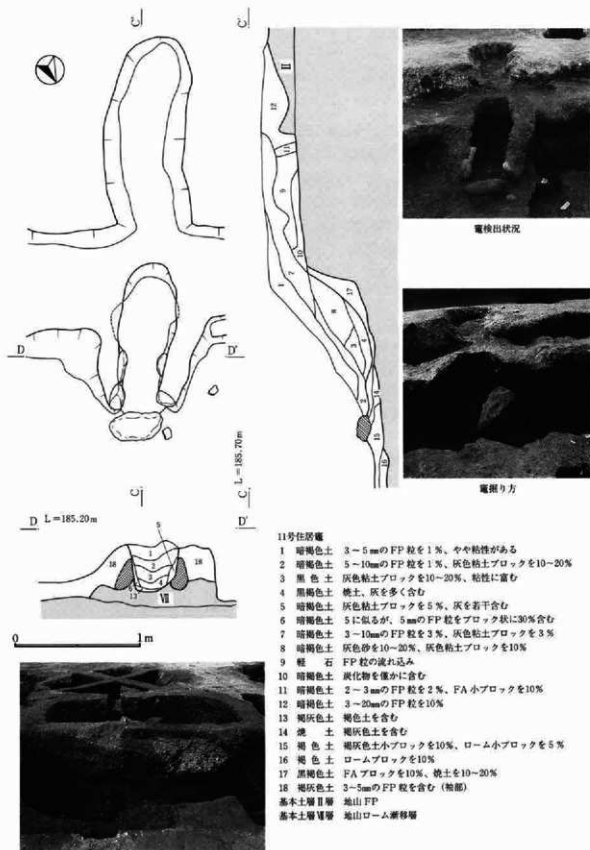
11号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	粘土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考			
第-38図 2 PL-40	土師器 杯	9.5cm 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.9	細砂粒 酸化炎 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ				
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第 38 図 1	PL-40	棒状罐	竈右袖脇	粗粒安山岩	11.3	4.9	3.7	314.8	

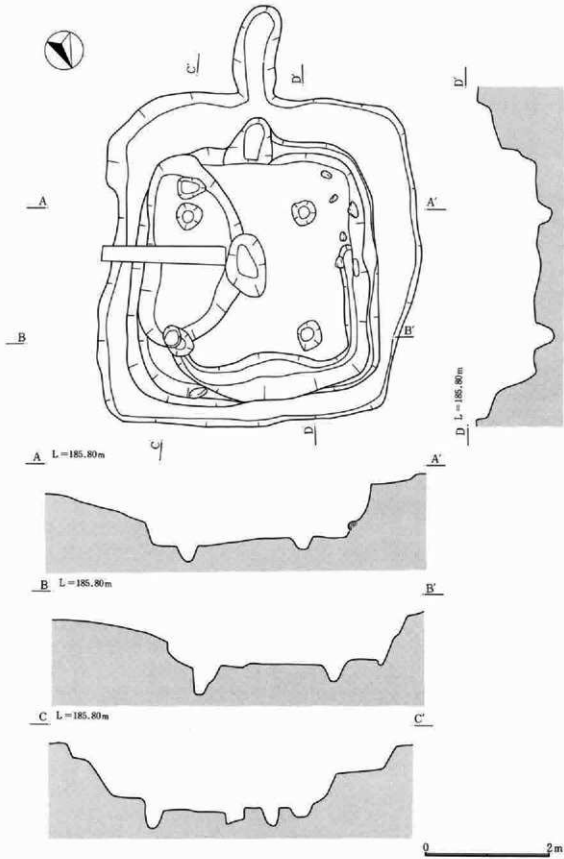
11号住居



第38図 11号住居・出土遺物



第39図 11号住居



第40図 11号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物

12号住居(第41図 PL.8・40)

位置 CF・CG-71・72 平面形状 隅丸方形であると推定される。 残存深度 0.60mを測る。
 重複住居 32号住居より新しい。 規模 東辺は3.20m、南辺は残存部分で1.20mを測る。
 主軸方位 N-118°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とする自然堆積である。 壁の状況 床面から104°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。 床面積は残存部分で36.63㎡を測る。掘り方床面からFP粒とロームを含む褐色土で盛土し、床としている。床面に顕著な硬化面は確認できなかった。また床は1面しか検出されなかった。 周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 東の隅に窪みがあるが、ほぼ平坦であった。竈 検出されなかった。遺物 手捏ね土器とDタイプの杯が出土している。
 所見 遺物が殆ど出土していないので時期を決定するのは極めて困難であるが、土師器の杯は8世紀代のものと考えらる。

12号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考			
第-41図 1 PL-40	手捏ね 杯	埋土 1/2	口径 - 底径 3.8 器高残 3.5	細砂粒 酸化炭 灰 にふい橙	浅鉢状に成形、外面に手のひらの圧痕を残す				
第-41図 2 PL-40	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.4 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 酸化炭 灰 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に極めて幅の広い無調整帯を持ち下部 をヘラケズリ				
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 41 図 3	PL-40	棒状礎	10.0cm	粗粒安山岩	13.5	5.8	3.4	415.5	

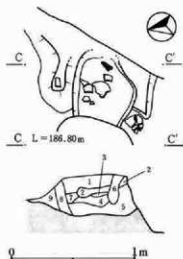
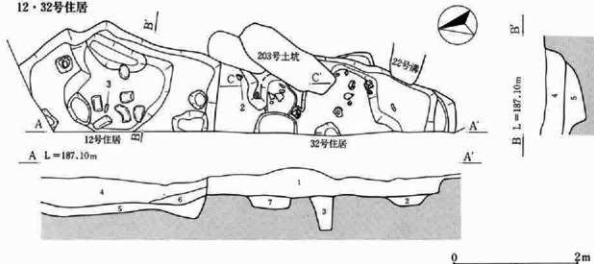
32号住居(第41図 PL.8・40)

位置 CF・CG-71・72 平面形状 隅丸方形と推定される。 残存深度 0.40mを測る。 重複住居 12号住居より古い。 規模 東辺は復元で3.75m、南辺は残存部分で0.70mを測る。
 主軸方位 N-103°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とした、自然堆積であると推定される。
 壁の状況 床面から122°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。
 床面 ロームまでを掘り下げ、そのまま床面としている。顕著な硬化面は確認できなかった。
 周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。
 竈位置 東辺中央 方位 N-128°-E 規模 残存長で0.5m、袖部幅は0.65mを測る。
 形状その他 土坑に埋されているのでその全体像をとらえにくい。然焼部、及び右袖部には土師器の甕の胴部破片が散乱していた。遺物 Dタイプの土師器杯と口縁が直線的に開きながら立ち上がり、底部に回転ヘラ切りを持つ須恵器杯が出土している。 所見 不確定であるが、8世紀代の年代を与えたい。

32号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考			
第-41図 1 PL-40	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 酸化炭 灰 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ				
第-41図 2 PL-40	須恵器 杯	2.5cm 1/4	口径 14.0 底径 8.1 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 灰	内面・外面縦線彫り、底部回転ヘラ切り、 口唇部輪付着痕、自然輪、東ね焼き痕				
第-41図 3 PL-40	土師器 甕	埋土 口縁部1/4	口径 16.0 底径 - 器高残 3.3	やや粗砂粒 酸化炭 灰 にふい赤褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ				
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 41 図 4	PL-40	棒状礎	埋土	粗粒安山岩	14.1	6.1	3.3	408.8	

12・32号住居

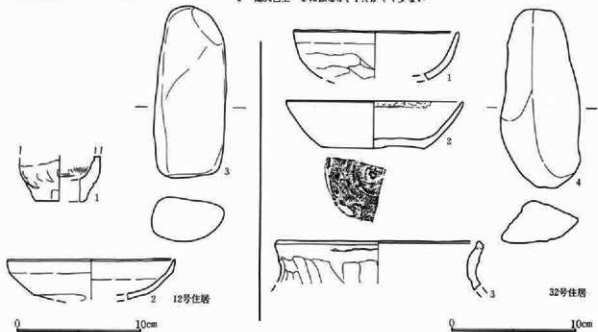


12・32号住居

- 1 褐色土 3-5mmのFP粒を15% (32号住居)
- 2 褐色土 3-5mmのFP粒を3% (32号住居)
- 3 褐色土 3-5mmのFP粒を3%、焼土粒、炭化物粒を若干含む (32号住居)
- 4 褐色土 3-5mmのFP粒を3%、2層に広がる (12号住居)
- 5 褐色土 3-5mmのFP粒を1%、ローム粒を若干含む (12号住居)
- 6 褐色土 3-5mmのFP粒を5%、4層よりややFP粒を多く含む (12号住居)
- 7 褐色土 炭化材を若干含む (32号住居)

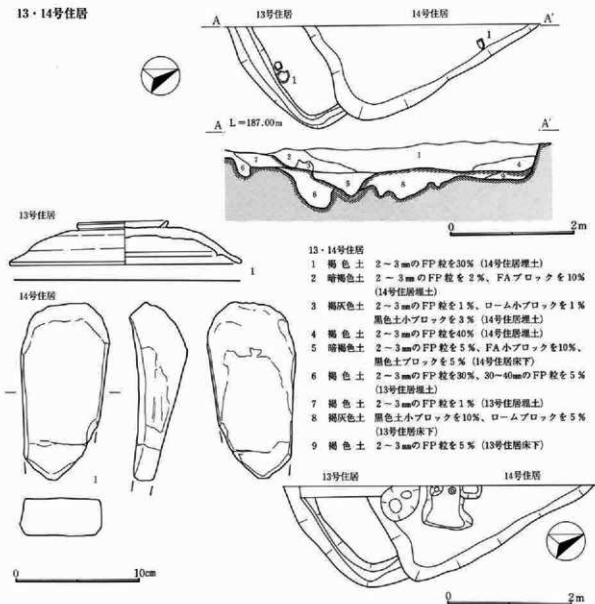
32号住居

- 1 暗褐色土 焼土粒、焼土小ブロックを10%
- 2 褐色土 暗褐色粘土の焼土化したもの
- 3 黄褐色土 焼土、灰を含む
- 4 褐色土 暗褐色土の焼土化
- 5 褐色土 焼土 (火床面)
- 6 暗褐色土 焼土粒、炭化物を2-3%
- 7 暗褐色土 灰色粘土ブロックを5-10%
- 8 黄灰色土 3-20mmのFP粒を10%、FA粒を10-20%
- 9 黄灰色土 8に似るが、FAがやや少ない



第41図 12・32号住居・32号住居産・出土遺物

13・14号住居



第42図 13・14号住居・掘り方・出土遺物

13号住居(第42図 PL.8・41)

位置 CB・CC-77・78 平面形状 隅丸方形と推定される。 残存深度 0.50mを測る。
 重複住居 14号住居より古い。 規模 東辺は残存部分で0.70m、南辺は残存部分で2.00mを測る。
 主軸方位 N-73°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とする。掘め戻したもののなか自然堆積かは不明である。 壁の状況 床面から約107°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は確認できなかった。 床面 面積は残存部分で1.584㎡を測る。掘り方床面から黒色土とロームを混合したPAを主体に10~50cm盛土し(8層)、床としている。床は1面しか検出されなかった。 周溝 検出された南東コーナー部分では確実に存在する。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 掘り方 床面はかなり凹凸に富む。 竈 検出されなかった。 遺物 かえりを持つ須恵器の蓋が1点出土している。 所見 不確実であるが、13号住居には7世紀後半の時期を想定したい。

13号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-42回 1 PL-41	須恵器 蓋	13m ほぼ完形	口径 18.2 つまみ 7.0 器高 3.3	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面輪縁整形痕、上面回転ヘラズリ、つまみ貼付、外面自然釉	

14号住居(第42回 PL 8・40)

位置 CB・CC-77・78 平面形状 隅丸方形と推定される。 残存深度 0.90mを測る。

重複住居 13号住居より新しい。 規模 東辺は残存部分で3.30m、南辺は残存部分で1.75mを測る。

主軸方位 N-78°-E 埋没土 FP粒、FAブロックを含む暗褐色土、褐色土を主体とし、1次埋没土(2・4層)が住居のコーナー部分を埋めた後、2次埋没土(1層)が一気に埋めている。自然堆積と思われるが、人為的な埋め戻しの可能性もある。 壁の状況 床面から106°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は確認できなかった。 床面 面積は残存部分で2.420㎡を測る。掘り方をそのまま床としている。床に顕著な硬化面はなく、1面しか確認できなかった。 周溝 確認できなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 掘り方 一部に深く掘り下げた部分(5層)がある他はほぼ平坦である。 竈 検出されなかった。 遺物 磁石が1点のみ出土している。 所見 時期を決定する遺物は出土していないが、13号住居と方位、壁等共通する部分が多く、13号住居の建て直しの可能性もある。

14号住居出土遺物

採回番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第42回1	PL-40	磁石	床面密着	-		13.9	7.0	3.0	426.4	

15号住居(第43回 PL 8・41)

位置 BX・BY-78・79 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.20mを測る。 重複住居

16号住居、191号土坑より新しく、188号土坑より古い。 規模 東辺は土坑に壊されているので確認できなかった。西辺は3.40m、南辺は残存部分で3.00m、北辺は残存部分で1.45mを測る。 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とし、水平堆積している。自然堆積であると思われる。 壁の状況 床面から122°の角度で立ち上がる。壁を構成した材あるいはその痕跡は検出できなかった。 床面 面積は残存部分で12.654㎡を測る。掘り方床面からFP粒とFAの混合土で盛土し、床としている。床面はやや硬化し、薄いFAの層が何層か確認できた。 周溝 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。 掘り方 ほぼ平坦である。 竈 検出されなかった。

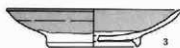
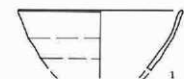
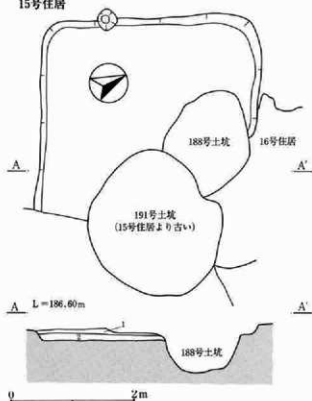
遺物 須恵器碗の他に、灰釉皿(第43回3)、四方に輪花を持つ皿(4)、羽釜(5,6)が出土している。 所見 灰釉皿は高台がややシャープさに欠け、口唇部は直線的である。羽釜は還元が完全でなく、酸化炎に近い焼成である。したがって、15号住居には10世紀後半の時期が想定できる。

15号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-43回 1 PL-41	須恵器 碗	埋土 1/4 底部欠く	口径 12.8 底径 - 器高残 4.7	やや粗砂粒 還元炎 暗オリーブ	内面・外面輪縁整形痕	
第-43回 2 PL-41	須恵器 碗	埋土 口縁部1/4	口径 14.6 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面輪縁整形痕、いぶし	

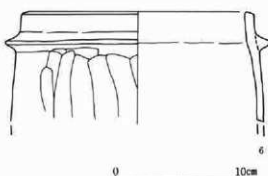
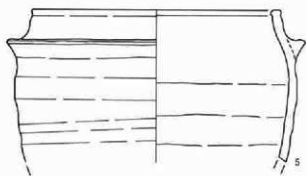
第3章 検出された遺構と遺物

15号住居



15号住居

- 1 褐色土 1-2mmのFP粒を2%, FAを1-2mmの層状に15%
 2 褐色土 2-3mmのFP粒を5%, 黒色土小ブロックを5%



第43図 15号住居・出土遺物

第-43E 3 PL-41	灰釉 皿	埋土 1/4	口径 14.0 底径 7.3 器高 2.9	細砂粒 還元灰 黄灰・灰白	内面・外面轆轤整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付	
第-43E 4 PL-41	灰釉 皿	埋土 1/3	口径 15.3 底径 7.0 器高 3.3	細砂粒 還元灰 灰白・明オリープ灰	内面・外面轆轤整形痕、高台貼付、施釉つけがけ、輪花4ヶ所	
第-43E 5 PL-41	須恵器 羽釜	埋土 口縁部~ 体部1/3	口径 19.3 底径 - 器高残12.0	細砂粒 還元灰 暗灰黄	口縁部、内面轆轤整形痕、外面ヨコナデ、隅貼付ヨコナデ	
第-43E 6 PL-41	須恵器 羽釜	埋土 口縁部~ 体部上半	口径 17.0 底径 - 器高 8.7	細砂粒 還元灰 灰黄	口縁部・内面轆轤整形痕、外面ヘラケズリ、隅貼付	

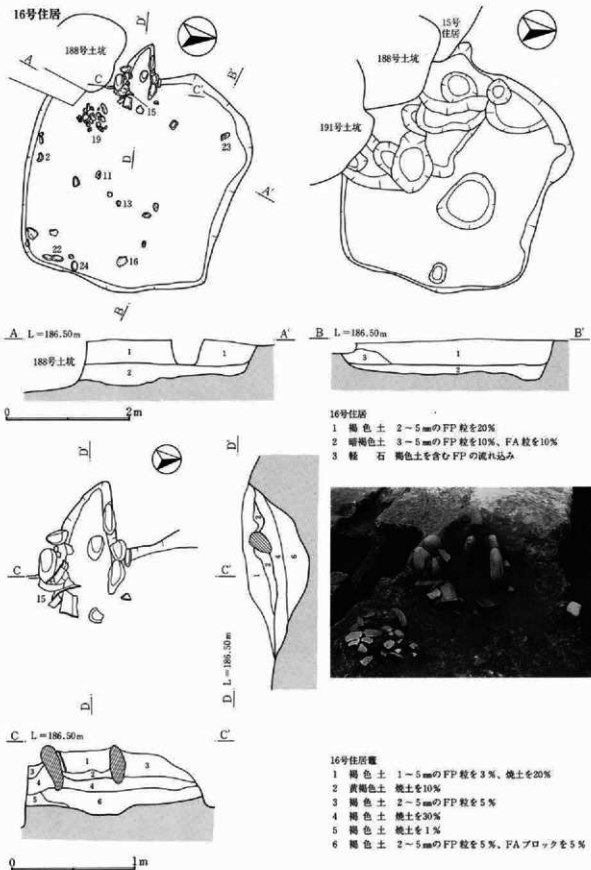
16号住居(第44~47図 PL.8・9・41~43)

位置 BY-77・78 平面形状 やや歪んだ隅丸方形を呈する。残存深度 0.70mを測る。重複住居 15号住居、188号土坑より古い。規模 東辺は3.00m、西辺は3.30m、北辺は3.25mを測る。主軸方位 N-97°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とし、ほぼ水平堆積している。コーナー部分には、壁のFPが崩落して溜まった、軽石の層(3層)が見られる。壁の状況 床面から114°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は確認できなかった。床面 面積は復元で9.432m²を測る。掘り方床面から10~20cm盛土をし(2層)床としている。顕著な硬化面はなく、床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 住居南西コーナー部分が大きく掘り返されている他はほぼ平坦である。竈位置 西辺中央方位 N-260°-E 規模 全長は0.85m(屋外長0.50m、屋内長0.35m)、袖部幅0.50mを測る。形状その他 補強のために竈のプランに沿って河原石が据えられている。左袖部に張り付くように土師器甕が見られる(第46図15)。これも竈の壁を補強するための材として用いられたものと考えられる。燃焼部中央右よりには長めの河原石が立てて据えられており、支脚として用いられたものと考えられる。支脚が主軸からそれるのは、甕を2個体架けるタイプであった可能性を示している。遺物 A、Dタイプの土師器杯の他に、内面に放射状、螺旋状の暗文をもつEタイプの杯(第45図5、6)も出土している。また回転ヘラケズリによる僅かな削り出し高台を持つ須恵器杯(11、12)、かえりを持つ蓋、やや古い様相であるが内外面にカキ目を持つ高杯が出土している。また、竈左袖部前には、胴部上部部に膨らみを持つ土師器甕が置かれていた。所見 二位屋遺跡では希な西竈の住居である。出土した遺物から見て、16号住居には8世紀初頭の時期が想定でき、重複関係にある191号土坑とはほぼ同じ時期の遺構であったと考えられる。

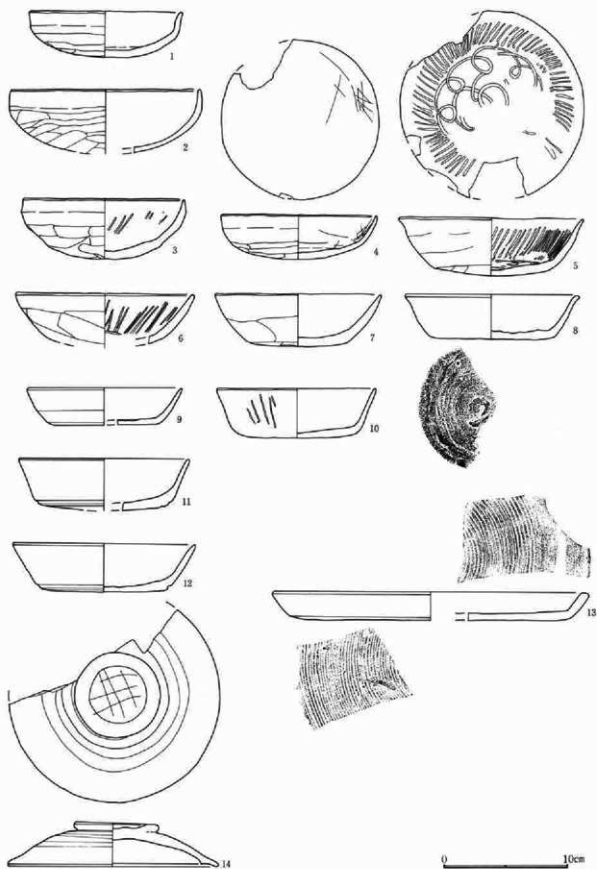
16号住居出土遺物

揮回番号 図版番号	種別 砂 様	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-45図 1 PL-41	土師器 杯	埋土 1/2	口径 12.0 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-45図 2 PL-41	土師器 杯	5cm 1/3	口径 14.9 底径 - 器高 (5.0)	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-45図 3 PL-41	土師器 杯	埋土 1/2	口径 12.6 底径 - 器高 4.7	細砂粒 酸化炭 にふい澄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ、内 面放射状暗文	
第-45図 4 PL-41	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 12.4 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 にふい澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	内面刷印 「X」
第-45図 5 PL-41	土師器 杯	埋土 口縁部一 部欠損	口径 14.5 底径 - 器高 4.6	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 ヘラケズリ、放射状暗文、螺旋状暗文	
第-45図 6 PL-41	土師器 杯	埋土 1/4	口径 14.0 底径 - 器高残 3.9	細砂粒 酸化炭 にふい澄	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面放射 状暗文	
第-45図 7 PL-42	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.2 底径 - 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ・ナデ、外面 ヘラケズリ、暗文を持つタイプだが内面風化し 不明	
第-45図 8 PL-42	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 13.6 底径 9.5 器高 3.5	細砂粒 還元炭 暗灰	内面・外面輪軸整形、底部回転ヘラケズ リ、内面強い機械痕、いぶし	
第-45図 9 PL-42	須恵器 杯	埋土 1/3	口径 12.2 底径 8.0 器高 2.9	やや粗砂粒 還元炭 にふい黄澄	内面・外面輪軸整形、下半回転ヘラケズ リ、底部回転ヘラケズリ	

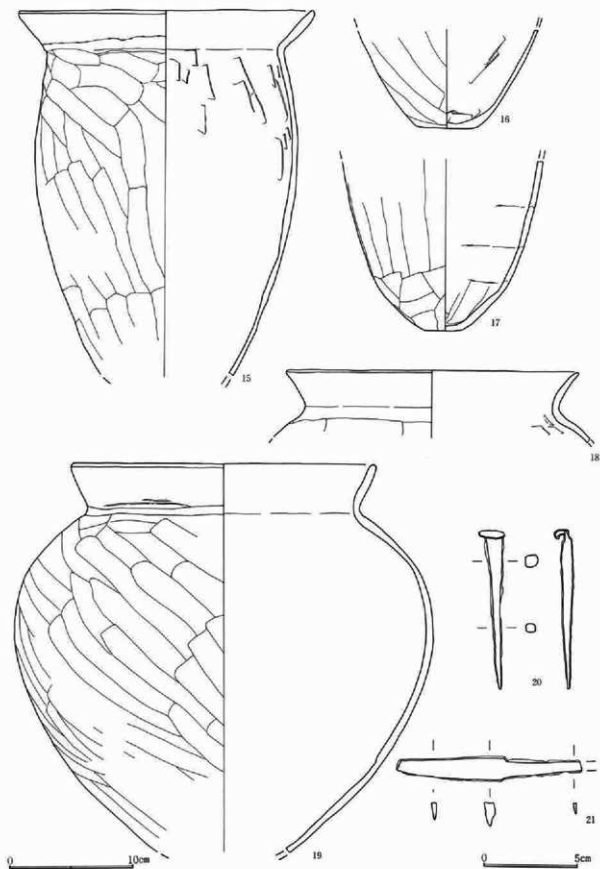
第3章 検出された遺構と遺物



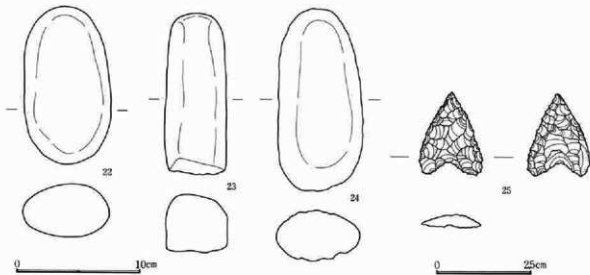
第44図 16号住居・掘り方・縦



第45图 16号住居出土遺物 (1)



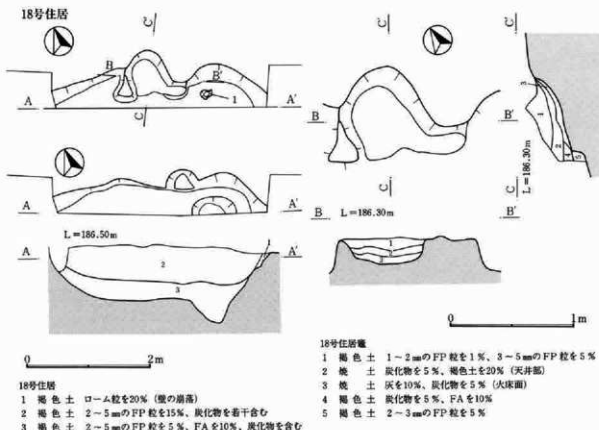
第46図 16号住居出土遺物 (2)



第47図 16号住居出土遺物(3)

第-45図 10 PL-42	須恵器 杯	埴土 1/3	口径 12.6 底径 (8.0) 器高 3.9	やや粗砂粒 還元炎 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部手持ちヘラケズリ	刻印「×」					
第-45図 11 PL-42	須恵器 杯	19cm 1/4	口径 13.4 底径 (9.0) 器高 (4.1)	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズリ、削り出し高台						
第-45図 12 PL-42	須恵器 杯	埴土 1/3	口径 14.4 底径 9.6 器高 3.8	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズリ、削り出し高台						
第-45図 13	須恵器 高杯	中央部 杯部1/5	口径 25.2 底径 (21.0) 器高残 2.2	細砂粒 還元炎 灰	口縁部輪軸整形痕、内面カキ目、外面カキ目						
第-45図 14 PL-42	須恵器 蓋	埴土 1/2	口径 16.4 つまみ 6.4 器高 3.4	細砂粒 還元炎 灰	口縁部、内面輪軸整形痕、外面回転ヘラケズリ、つまみ貼付	つまみ上 面に刻印					
第-46図 15 PL-42	土師器 壺	亀反輪輪 2cm 1/3	口径 23.2 底径 - 器高残28.8	細砂粒 酸化炎 にぶい殻	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-46図 16 PL-42	土師器 壺	5cm 底部	口径 - 底径 5.0 器高残 7.6	細砂粒 酸化炎 明赤釉	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-46図 17 PL-42	土師器 壺	埴土 底部	口径 - 底径 3.1 器高残13.9	やや粗砂粒 酸化炎 黒釉	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-46図 18 PL-42	土師器 壺	埴土 口縁部1/4	口径 23.0 底径 - 器高残 5.3	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-46図 19 PL-43	土師器 壺	床面密着 1/4	口径 24.0 底径 - 器高 30.6	やや粗砂粒 酸化炎 赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
採国番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考		
第46図20	PL-42	釘	埴土	ほぼ完形	8.4	0.7	0.6				
第46図21	PL-42	刀子	埴土	先端部欠損	9.9	1.3	0.6				
採国番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備	考
第47図22	PL-42	棒状鏝	床面密着	粗粒安山岩	12.4	7.0	4.2	573.5			
第47図23	PL-42	棒状鏝	10.0cm	粗粒安山岩	12.7	4.9	4.6	609.7			
第47図24	PL-43	棒状鏝	3.0cm	粗粒安山岩	14.4	6.7	4.0	551.2			
第47図25	PL-43	石鏝	埴土	黒曜石	2.2	1.7	3.5				

第3章 検出された遺構と遺物



第48図 18号住居・掘り方・竈・出土遺物

18号住居(第48図 PL 9・43)

位置 BX・BY-78・79 平面形状 隅丸方形であったと推定される。残存深度 0.75mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 東辺は残存部分で3.75mを測る。主軸方位 N-95°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とし、ほぼ水平堆積しており、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から126°の角度で立ち上がる。埋土に炭化物を含むが、壁あるいは屋根の一部であった可能性もある。床面 面積は残存部分で1.116㎡を測る。掘り方 床面からFP粒、FAを含む褐色土で盛土をし、床としている。掘り方 竈右袖部前を深く掘り下げている他は平坦である。竈位置 東辺中央方位 N-95°-E 規模 全長は0.75m(屋外長0.60m、屋内長0.15m)、袖部幅0.70mを測る。遺物 須恵器壺の口縁部が出土している。所見 時期を決定する遺物は出土していない。

18号住居出土遺物

検出番号 図面番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-48図 1 PL-43	須恵器 壺	2cm 口縁部	口径 15.7 底径 - 器高残 6.3	細砂粒 濯光亮 灰	口縁部縮輪変形痕、外面ヘラケズリ	

19号住居(第49・50図 PL.9・43)

位置 BU・BV-79・80 平面形状 隅丸方形であったと推定される。残存深度 0.70mを測る。重複住居 20号住居より新しい。規模 東辺は3.35mを測る。主軸方位 N-99°-E
埋没土 埋土が壁に沿って斜めに堆積しており、人為的な埋戻しも考えられる。壁の状況 床面から140°の角度で立ち上がる。床面 面積は残存部分で7.290m²を測る。掘り方床面からFAとロームを混合した土で10~20cm前後盛土し、床としている。周溝 検出された部分では全周確認されている。掘り方 細かい凹凸が多く見られる。竈位置 東辺中央 方位 N-93°-E 規模 全長は1.00m(屋外長0.55m、屋内長0.45m)、袖幅0.90mを測る。遺物 D、Eタイプの土師器杯と、底部径が比較的大きく、体部が直線的に立ち上がる須恵器杯が出土している。所見 遺物にまとまりがなく年代を決定するのが困難な住居であるが、8世紀代の時期を想定しておきたい。

19号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-49図 1 PL-43	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 3.2	細砂粒 酸化灰 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-49図 2 PL-43	土師器 杯	埋土 1/4 底部欠く	口径 13.0 底径 - 器高残 3.6	細砂粒 酸化灰 橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状暗文	
第-49図 3 PL-43	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 13.6 底径 7.5 器高 4.0	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部手持ちヘラケズリ	
第-49図 4 PL-43	須恵器 杯	埋土 1/5	口径 13.8 底径 11.0 器高 3.3	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転ヘラケズリ	

20号住居(第49~51図 PL.9・43・44)

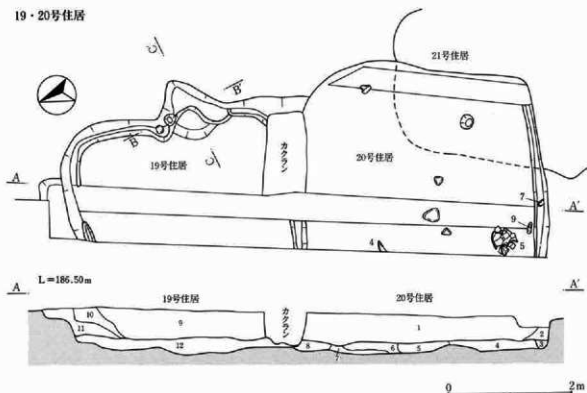
位置 BU・BV-79・80 平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.55mを測る。重複住居 19号住居より古い。規模 東辺は3.50mを測る。主軸方位 N-104°-E 壁の状況 床面から122°の角度で立ち上がる。床面 面積は残存部分で10.260m²を測る。掘り方床面から、黒ボク土を混合したFAを20cm前後盛土し、床としている。周溝 南壁部分で検出されている。遺物 Bタイプの土師器杯が出土している。所見 19号住居よりやや古い時期を想定できる。

20号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-51図 1 PL-43	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.8 底径 - 器高 (3.5)	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-51図 2 PL-43	土師器 杯	埋土 1/4	口径 4.0 底径 - 器高残 3.7	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-51図 3 PL-43	土師器 甕	埋土 底部	口径 - 底径 3.8 器高残 6.7	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	内面ナデ・ヘラナデ、外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	
第-51図 4 PL-43	土師器 甕	1.5cm 口縁部1/4	口径 23.2 底径 - 器高残 5.6	細砂粒 酸化灰 におい赤褐色	口縁部ヨコナデ	
第-51図 5 PL-44	土師器 甕	2.5cm ほぼ完形	口径 21.2 底径 - 器高 31.2	やや粗砂粒 酸化灰 黒褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-51図 6 PL-44	須恵器 甕	埋土 つまみ1/4 欠損	口径 11.6 つまみ 9.5 器高残 2.8	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪縁整形痕	

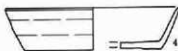
第3章 検出された遺構と遺物

19・20号住居



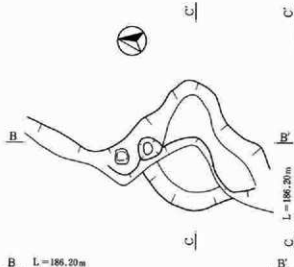
19・20号住居

- 1 暗褐色土 3-10mmのFP粒を10%、FA粒を5% (20号住居埋土)
- 2 暗褐色土 3-10mmのFP粒を10%、FA小ブロックを10% (20号住居埋土)
- 3 暗褐色土 3-20mmのFP粒を5%、FA小ブロックを20% (20号住居埋土)
- 4 暗灰色土 3-5mmのFP粒を2-3%、FAブロックを50%、ロームブロックを30% (20号住居床下)
- 5 暗灰色土 FAとロームブロックの混土 (20号住居床下)
- 6 暗灰色土 3-5mmのFP粒を2-3%、FA小ブロックを20%、ロームブロックを5% (20号住居床下)
- 7 ローム土 (20号住居床下)
- 8 暗灰色土 3-5mmのFP粒を2-3%、FA小ブロックを50%、ロームブロックを30% (20号住居床下)
- 9 暗褐色土 3-30mmのFP粒を20%、黒ボク土小ブロックを2-5% (19号住居埋土)
- 10 暗褐色土 3-30mmのFP粒を20%、黒ボク土小ブロックを20% (19号住居埋土)
- 11 暗褐色土 3-30mmのFP粒を30% (19号住居埋土)
- 12 暗灰色土 3-5mmのFP粒を5%、FAと黒ボク土の混土 (19号住居床下)

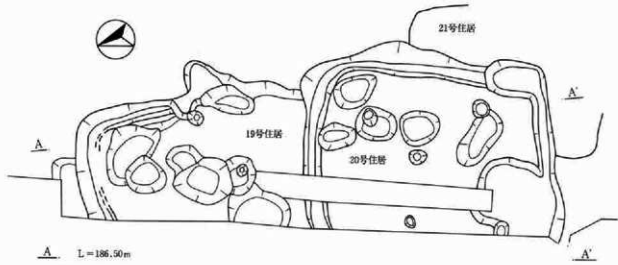
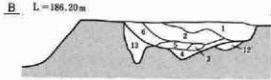


0 10cm

第49図 19・20号住居・19号住居出土遺物

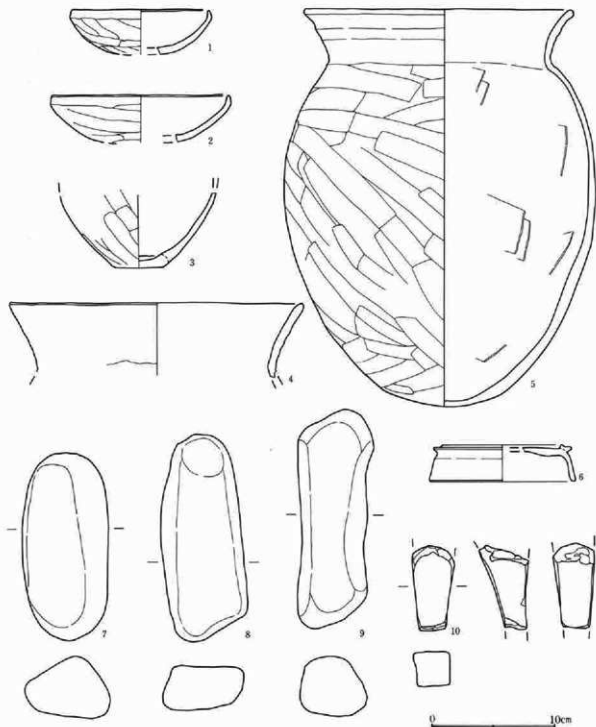


- 19号住居
- 1 暗褐色土 3-7mmのFP粒を5%、FA粒を3%
 - 2 暗褐色土 3-7mmのFP粒を3%、FA粒を5%、焼土粒を含む
 - 3 褐色土 2-3mmのFP粒を2%、焼土を含む
 - 4 暗褐色土 FA小ブロック、ローム小ブロック焼土を含む
 - 5 黒褐色土 2-4mmのFP粒を5%
 - 6 暗褐色土 2-8mmのFP粒を10%
 - 7 褐色土 焼土粒、灰を含む
 - 8 褐色土 焼土、2-3mmのFP粒を1%
 - 9 褐色土 やや焼土化したFA
 - 10 暗褐色土 1-3mmのFP粒を20%
 - 11 灰褐色土 1-3mmのFP粒を5%、FAを10%
 - 12 黒褐色土 2-5mmのFP粒を20-30%
 - 13 黒褐色土 12とは同じ



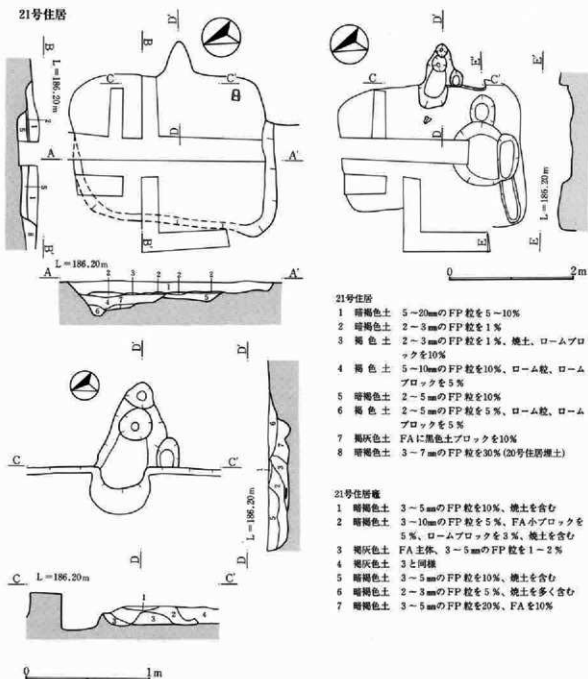
第50図 19号住居・20号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第51図 20号住居出土遺物

挿図番号	図版番号	製品名	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第 51 図 7	PL-44	棒状礫	- 6.5cm	楕粒安山岩	14.9	6.8	4.9	729.2	
第 51 図 8	PL-44	棒状礫	2.5cm	楕粒安山岩	16.3	6.9	3.6	798.2	
第 51 図 9	PL-44	棒状礫	3.5cm	楕粒安山岩	17.4	6.1	4.8	890.0	
第 51 図 10	PL-43	砥石	埋土		6.7	3.9	2.7	82.9	



第52図 21号住居・掘り方・竈

21号住居(第52図 PL.9・10)

位置 BU-79・80 平面形状 歪んだ隅丸方形を呈する。残存深度 0.45m 重複住居 20号住居より新しい。規模 東辺は2.95m、西辺は3.00m、南辺は2.50m、北辺は2.05mを測る。

主軸方位 N-110°-E 増設土 FP粒を含む暗褐色土の水平堆積であり、自然堆積であると思われる。

壁の状況 床面から132°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。

床面 面積は6.147㎡を測る。掘り方床面からFP粒を含む褐色土で10-30cm前後盛土し、FP粒を混合した暗褐色土を薄く張り付けて床としている。竈位置 東辺中央 方位 N-118°-E 規模 全長0.95m(屋外長0.45m、屋内長0.40m)、袖部幅0.65mを測る。遺物 検出されなかった。

第3章 検出された遺構と遺物

22号住居(第53回 PL10・44)

位置 BU・BV-77~79 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.55m 重複住居 27号住居より新しい。 規模 西辺は4.20m、北辺は残存部分で3.25mを測る。 主軸方位 N-93°-E 壁の状況 床面から115°の角度で立ち上がる。 床面 面積は残存部分で13.599㎡を測る。 周溝 調査された全ての壁の内側で確認されている。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 掘り方 殆ど平坦である。 竈 検出されなかった。 遺物 かえりを持たない大形の須恵器蓋が出土している。 所見 1点の遺物しか出土していないので住居の年代を決定するのは困難であるが、須恵器の蓋は径が大きく、かえりを持たないことから、8世紀前半の時期が与えられる。

22号住居出土遺物

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考				
第-53回 1 PL-44	須恵器 蓋	3cm 3/4	口径 18.6 つまみ 3.1 器高 3.3	粗砂粒 還元赤 灰	内面・外面曜変形痕、上部回転ヘラケズリ、つまみ貼付					
押印番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第53回2	PL-44	棒状礎	-3.0cm	ひん岩		12.9	5.6	4.8	482.3	
第53回3	PL-44	棒状礎	2.5cm	瀬粒安山岩		14.1	6.4	3.8	426.4	
第53回4	PL-44	棒状礎	3.5cm	実質安山岩		13.7	6.0	4.7	413.3	
第53回5	PL-44	棒状礎	-13.0cm	瀬粒安山岩		16.9	10.0	5.8	1340.4	

23号住居(第54回 PL10)

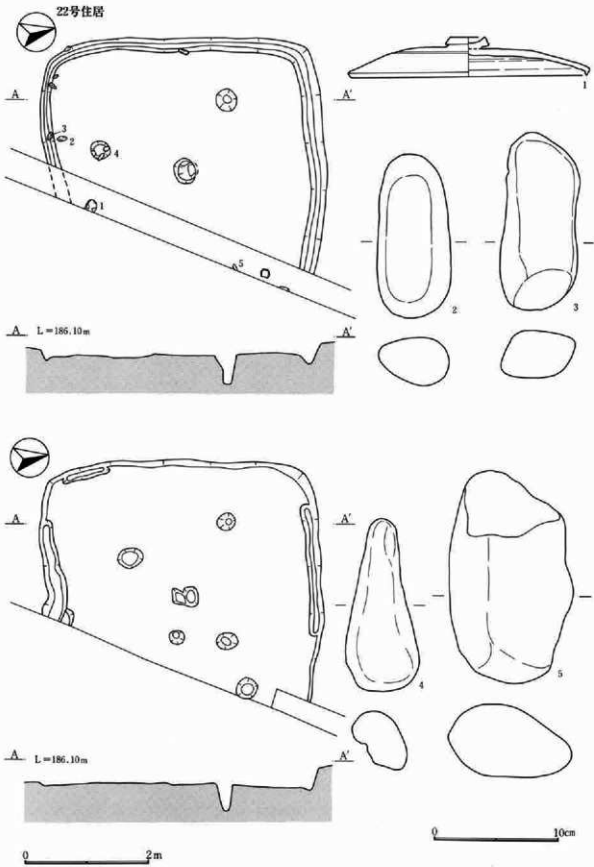
位置 BS・BU-78~80 19、20、21号住居の直ぐ西から検出された。 微高地上に位置し、残存状態は極めて悪い。 平面形状 かなり丸みを帯びた隅丸方形を呈する。 残存深度 0.30m 重複住居 35号住居より新しい。 規模 北辺は残存部分で2.55mを測る。 主軸方位 N-98°-E 壁の状況 床面から119°の角度で立ち上がる。 床面 面積は残存部分で5.346㎡を測る。 周溝 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 掘り方 平坦である。 竈 検出されなかった。 遺物 検出されなかった。

35号住居(第54回 PL13)

位置 BS・BU-78~80 19、20、21号住居の直ぐ西から検出された。微高地上に位置し、残存状態は極めて悪い。 平面形状 隅丸方形であったと推定される。 残存深度 0.23m 重複住居 23号住居より古い。 規模 西辺は残存部分で4.10mを測る。 主軸方位 N-120°-E 壁の状況 床面から82°の角度で立ち上がる。 床面 面積は残存部分で5.076㎡を測る。 周溝 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 掘り方 平坦である。 竈 検出されなかった。 遺物 検出されなかった。

24号住居(第54回 PL11・44)

位置 BR-80・81 23、35号住居の南に位置し、現有道路と農道に北半分を壊されている。この住居も微高地上で検出されたため、残りは極めて悪い。 平面形状 隅丸方形であったと推定される。 残存深度 0.45mを測る。 重複住居 単独で検出された。 規模 西辺は残存部分で2.50m、南辺は残存部分で2.60mを測る。 主軸方位 N-20°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とし、ほぼ水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。 壁の状況 床面から約110°の角度で立



第53図 22号住居・掘り方・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

ち上がる。床面面積は残存部分で5.913㎡を測る。掘り方床面から盛土をせずに直接地山のローム部分を床にしているが、一部FAを含むロームを貼っている所もある。周溝検出されなかった。貯蔵穴検出されなかった。柱穴検出されなかった。掘り方ほぼ平坦である。竈検出されなかった。遺物Cタイプの土師器杯が出土している。所見8世紀前半か。

24号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-54図 1 PL-44	土師器 杯	埋土 1/5	口径 17.0 底径 - 器高 (6.6)	細砂殻 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	

25号住居(第54図 PL.12)

位置 BY-76・77 15、16号住居の北東に位置する。微高地上で検出されたため、残りは極めて悪い。平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.30mを測る。重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は2.90m、西辺は2.80m、南辺は残存部分で2.25m、北辺は2.75mを測る。壁の状況 床面から104°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面面積は復元で6.426㎡を測る。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 平坦である。竈 検出されなかった。遺物 検出されなかった。

27号住居(第54図 PL.12)

位置 BV・BW-77・78 微高地上で検出されたため、残りは極めて悪い。平面形状 住居の大部分が土坑等に壊されているため不明。残存深度 0.35mを測る。重複住居 22号住居より古い。

壁の状況 床面から102°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。

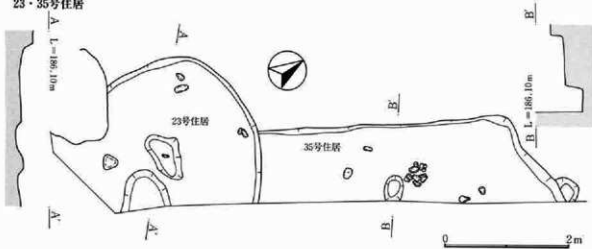
周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

竈 検出されなかった。遺物 検出されなかった。

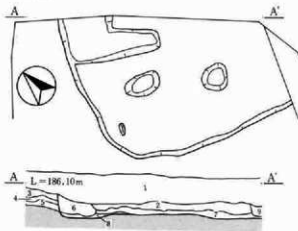


22号住居から南を望む。他の住居と比べ残存深度が浅いことがわかる。

23・35号住居



24号住居

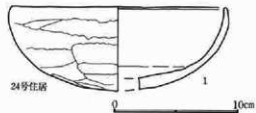
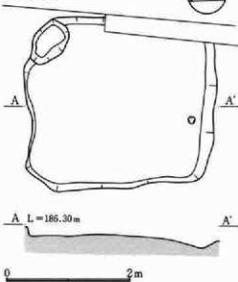


24号住居

- 1 黒褐色土 3-20mmのFP粒を20-30%、FA小ブロックを2%非常に固くしまっている
- 2 暗褐色土 5-30mmのFP粒を30%、FAを10-20%
- 3 黄褐色土 FAブロックを5%、やや暗い
- 4 黒褐色土 黄褐色土ブロックを30%
- 5 黄褐色土
- 6 暗褐色土 2-10mmのFP粒を1-2%、FAブロック、ロームブロックを30-70%
- 7 暗褐色土 FA、黒ボク土、ローム小ブロックを20%
- 8 黄色土 FA小ブロックを2-3%
- 9 黒褐色土 3-20mmのFP粒を10%

0 2m

25号住居



27号住居



第54図 23・24・25・27・35号住居・24号住居出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

28号住居(第55～59図 PL10・11・44～46)

位置 BQ・BR-74～76 11号住居の南西に位置する。平面形状 隅丸方形を呈し、住居南辺にテラスを持つ。規模、形態共に隣接する11号住居に似る。残存深度 平均して1.10mを測る。

重複住居 単独で検出された。規模 東辺は5.65m、西辺は5.45m、南辺は4.80m、北辺は4.15mを測る。主軸方位 N-48°-E 埋没土 FP粒、FAを含む黒褐色土、暗褐色土を主体とし、ほぼ水平堆積していることから、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から127°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は14.499㎡を測る。掘り方床面からローム、FA、黒色土の混合土で10cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。

周溝 検出されなかった。貯蔵穴 竈右袖部脇で検出された。平面形状は長軸は0.80m、短軸は0.70mのほぼ円形で、深さは約50cmである。貯蔵穴の内部からはこも編み石と礫が数点出土したのみで、他の遺物は検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 ほぼ平坦である。28号住居周辺はロームの堆積が薄く、掘り方床面は礫層の上面にまで達している。

竈の位置 北辺中央 方位 N-40°-E 規模 屋内の大部分は破壊されており、残存長は1.55m(屋外長0.90m、屋内長0.65m)である。形状その他 袖部から煙道部まで石で組まれた石組み竈である。屋外の煙道部が他の石組み竈と比較して短く、北向きに作られているのも特徴的である。袖部は失われており、使用されたと思われる袖石も見当たらないことから、住居廃絶にあたり、袖部分の石を再利用するために置き取ったと思われる。竈前面に火を受け、直立した河原石があり、これが支脚であると仮定すれば、竈の全長は2m以上であったことになる。煙道部は石を暗渠状に組んで作られている。また住居の壁のラインに沿って石が2段積まれており、これより外側(屋外)は竈が破壊された形跡はない。煙道部奥壁には大形の平石が立てて据えられ、煙突の一部となっている。燃焼部周辺には土師器甕が碎片となって散布している(第58図8)。遺物 Aタイプの土師器杯の他、長胴の土師器甕が出土している。

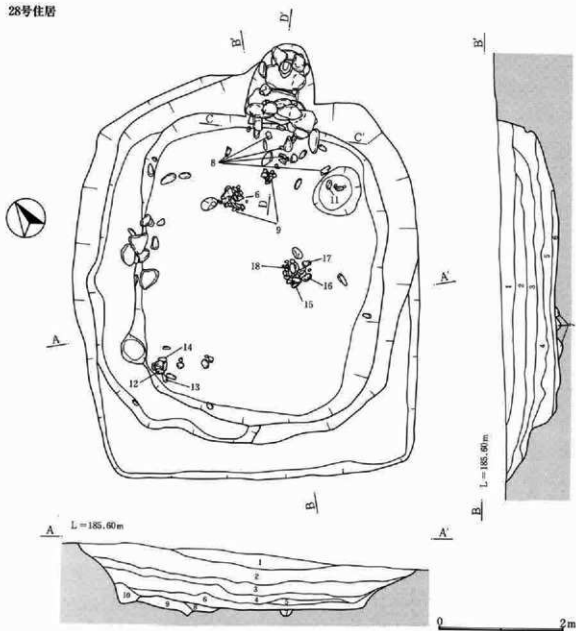
所見 出土した遺物からみて、28号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

28号住居出土遺物

神宮番号 図版番号	種別	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-58図 1 PL-44	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (3.2)	細砂粒 酸化灰 にぶい褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-58図 2 PL-44	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.3 底径 - 器高 4.1	細砂粒 酸化灰 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-58図 3 PL-45	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.2 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 酸化灰 にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-58図 4 PL-45	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 11.8 底径 - 器高 (4.2)	細砂粒 酸化灰 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-58図 5 PL-45	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.6 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 酸化灰 黒褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-58図 6 PL-45	土師器 杯	床面密着 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.2	細砂粒 酸化灰 にぶい褐	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-58図 7 PL-45	須恵器 甕	埋土	口径 - つまみ - 器高残 5.8	細砂粒 還元灰 灰	内面ナデ・ヨコナデ、外面ヨコナデ、つまみ 貼付ヨコナデ	

観察表の続きは83ページ

28号住居

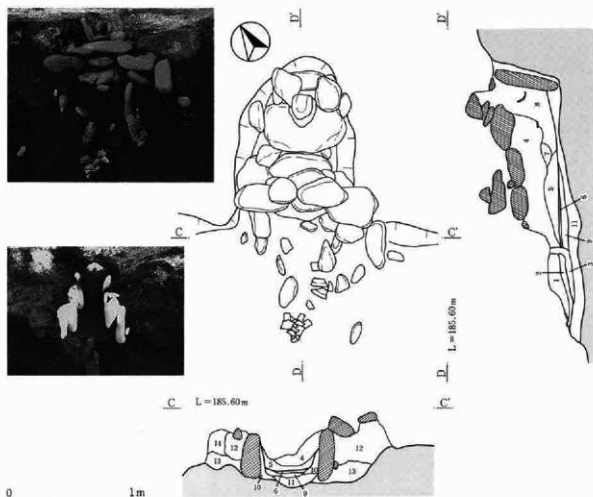


28号住居

- 1 黒褐色土 5~20mmのFP粒を20%、10~30mmの円礫を5%
- 2 暗褐色土 1に類似、2~30mmのFP粒を30~40%
- 3 暗褐色土 2~15mmのFP粒を10%、FAを1~2%
- 4 褐色土 2~10mmのFP粒を2%、FAブロックを5~20%、黒色土ブロックを1%
- 5 褐色土 1~5mmのFP粒を1%、FAブロックを20%、黒色土ブロックを2%
- 6 褐色土 1~3mmのFP粒を1%、FAブロックを20%、黒色土ブロックを2%、ロームブロックを3%
- 7 褐色土 FP粒は含まず、FAブロックを10%、黒色土ブロックを2%、ロームブロックを10%、やや黄色味を帯びる
- 8 暗褐色土 FA、黒色土を3%、やや黄色味を帯びる
- 9 暗褐色土 2~4mmのFP粒を20~30%、FAを10%
- 10 黄褐色土 5~10mmのFP粒を5%

第55図 28号住居

第3章 検出された遺構と遺物

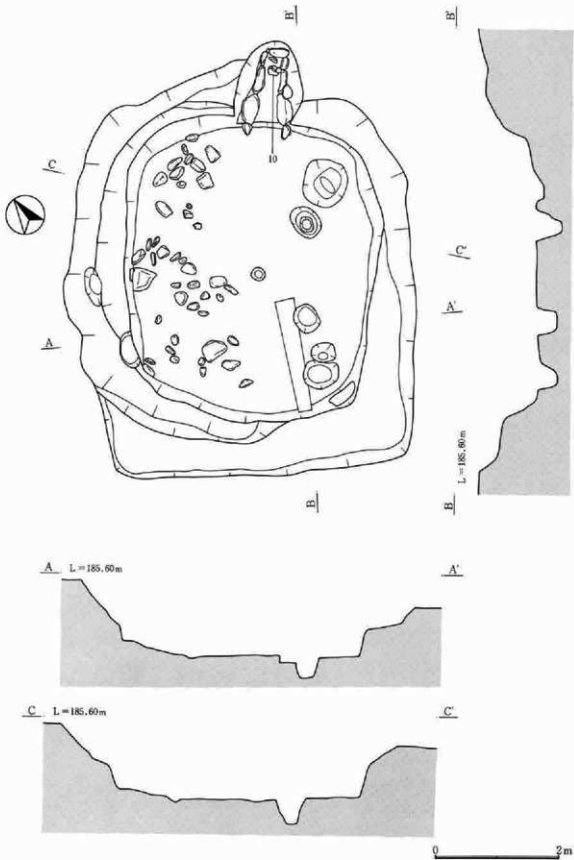


28号住居竈

- 1 暗褐色土 焼土粒、粘土粒を含む
- 2 褐色土 焼土粒、白色粘土ブロックを含む(天井部)
- 3 暗褐色土 1~3mmのFP粒を2%、焼土粒を含む
- 4 暗褐色土 1に似るが、白色粘土ブロックを多く含む
- 5 褐色土 焼土ブロック、白色粘土ブロックを含む
- 6 赤褐色土 焼土(火床面)
- 7 黒褐色土 炭化物を大量に含む
- 8 暗褐色土 2~5mmのFP粒を5%、焼土ブロック、粘土ブロックを含む
- 9 暗褐色土 焼土ブロックを含む(雑の焼土化)
- 10 黒褐色土 1~2mmのFP粒を10%、黒色土、FA小ブロックを20%
- 11 褐色土 FAブロック主体、2~3mmのFP粒を10%、黒色土ブロックを30%
- 12 黒褐色土 3~10mmのFP粒を10%、FAを30%
- 13 褐色土 FAブロック主体
- 14 褐色土 FAを5%、ローム粒を10%、焼土を若干含む

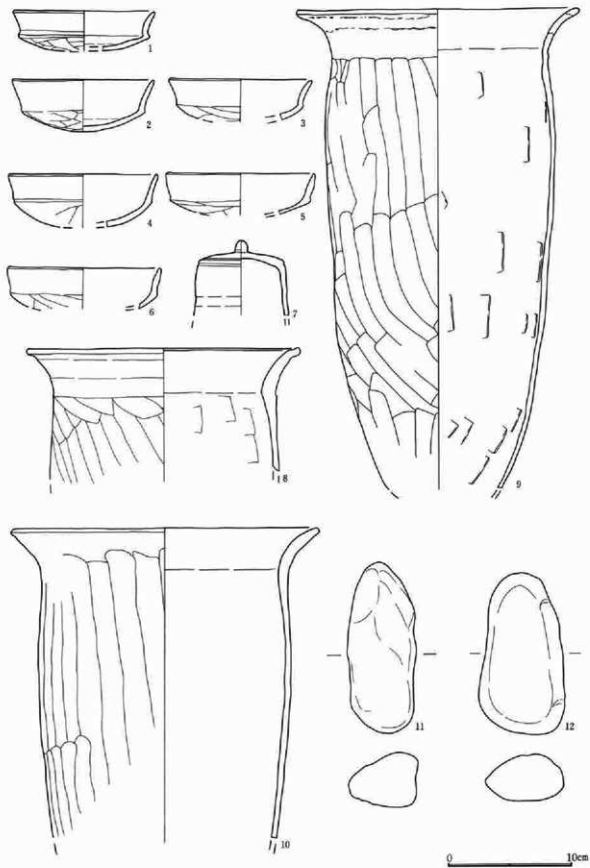


第56図 28号住居竈

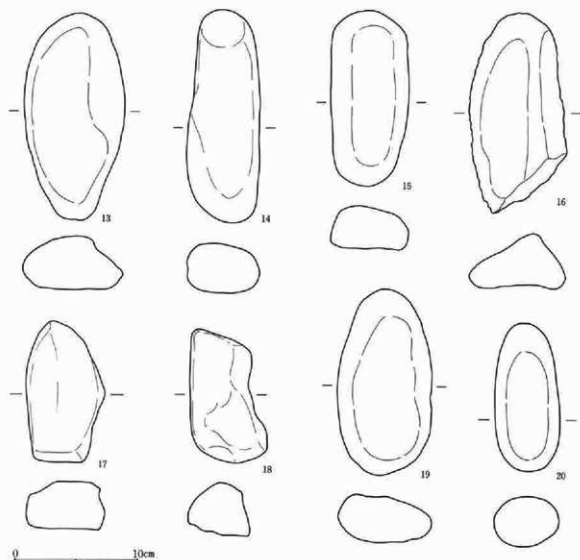


第57図 28号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第58図 28号住居出土遺物 (1)



第59図 28号住居出土遺物(2)

第-58図 8	土師器 甕	0-15cm 口縁部- 体部	口径 21.4 底径 - 器高 10.5	細砂粒 酸化灰 塗	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナゲ、外面ヘラケ ズリ					
PL-45										
第-58図 9	土師器 甕	中央部 底部欠損	口径 22.2 底径 - 器高残37.9	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナゲ、外面ヘラケ ズリ					
PL-45										
第-58図 10	土師器 甕	5cm 口縁部- 体部上半	口径 23.8 底径 - 器高残24.5	やや粗砂粒 酸化灰 浅黄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナゲ、外面ヘラケ ズリ					
PL-45										
図番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第58図11	PL-45	棒状罎	-26.0cm		粗粒安山岩	13.6	5.5	4.3	471.6	
第58図12	PL-45	棒状罎	2.0cm		粗粒安山岩	12.7	6.8	3.7	483.1	
第59図13	PL-45	棒状罎	西辺		粗粒安山岩	16.2	7.9	4.2	707.7	
第59図14	PL-45	棒状罎	4.0cm		ひん岩	16.8	5.3	3.9	659.6	
第59図15	PL-45	棒状罎	20.0cm		ひん岩	13.7	6.2	3.4	513.7	
第59図16	PL-45	棒状罎	20.0cm		角閃石安山岩	15.8	7.5	4.4	656.4	
第59図17	PL-45	棒状罎	21.0cm		粗粒安山岩	11.0	6.3	3.8	399.3	
第59図18	PL-46	棒状罎	21.0cm		変質安山岩	10.7	6.2	4.2	378.1	
第59図19	PL-46	棒状罎	埋土		粗粒安山岩	14.6	7.4	3.8	691.3	
第59図20	PL-46	棒状罎	埋土		粗粒安山岩	11.7	5.2	4.0	399.1	

第3章 検出された遺構と遺物

29号住居(第60・61図 PL12・46)

位置 BO～BP-77・78 平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.55mを測る。重複住居 30号住居より新しい。規模 東辺は3.90m、西辺は3.90m、南辺は4.10m、北辺は3.80mを測る。主軸方位 N-117°-E 埋没土 FP粒、FAを含む暗褐色土を主体とし、自然堆積であったと推定される。壁の状況 床面から約100°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は14.589㎡を測る。掘り方床面から、ローム、FP粒、黒ボク土等を混合したFAで10～20cm程度盛土し、床としている。床面に顕著な硬化面は検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 はほぼ平坦である。竈 検出されなかった。遺物 酸化炭焼成で粗雑な高台を貼り付けた須恵器碗(第60図1～4)、灰釉皿(第61図5、6)、羽釜(7、8)の他、鉄鎌等が出土している。所見 出土した遺物から見て、29号住居には10世紀後半の時期が想定できる。

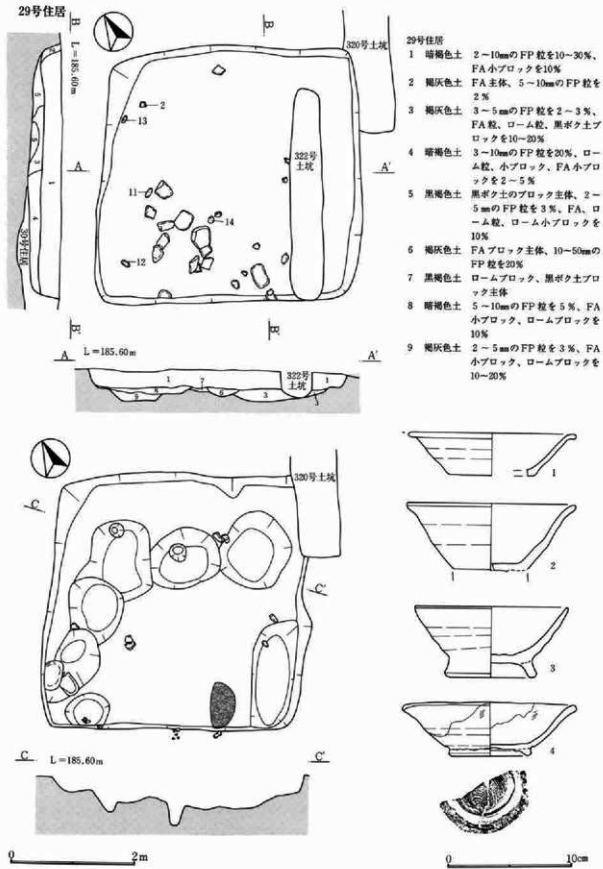
29号住居出土遺物

神頭番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-60図 PL-46	須恵器 1 碗	埋土 1/4	口径 12.8 底径 - 器高 (3.4)	やや粗砂粒 酸化炭 明赤褐	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-60図 PL-46	須恵器 2 碗	2.5cm 1/4高台欠く	口径 13.0 底径 5.7 器高 5.2	やや粗砂粒 酸化炭 黄灰	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り後高台貼付(割離)	
第-60図 PL-46	須恵器 3 碗	埋土 1/4	口径 12.0 底径 6.5 器高 5.6	細砂粒 還元炭 にぶい黄	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り後高台貼付	

観察表の続きは86ページ。

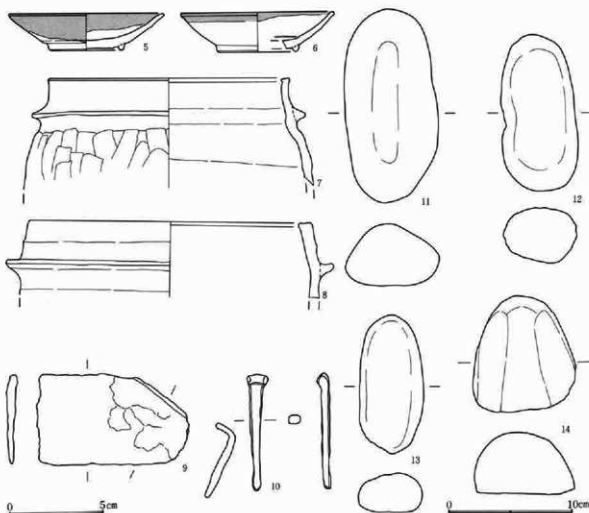
30号住居(第62・63図 PL12・46・47)

位置 BN・BO-77・78 平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.70mを測る。重複住居 29号住居より古い。規模 東辺は4.50m、西辺は4.50m、南辺は4.30m、北辺は3.95mを測る。主軸方位 N-121°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土、黒褐色土を主体に、壁に沿って細かな分層が可能であり、人為的な埋戻しが想定できる。壁沿いには、流れ込んで溜まったFP粒(3層)も見られる。壁の状況 床面から112°の角度で立ち上がる。住居東壁の一部に石が並べられている部分があり、壁の補強のための材であった可能性がある。壁そのものの痕跡は検出されていない。床面 面積は18.405㎡を測る。掘り方床面からFP粒、FAを含む暗褐色土で10～15cm前後盛土し、床としている。床は1面のみで、顕著な硬化面は検出されなかった。周溝 住居北西コーナー部分で一部確認されている。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 掘り方床面はほぼ平坦であるが、竈右袖部周辺は大きく掘り込まれている。竈位置 北辺中央 方位 N-30°-E 規模 全長は0.50m(屋内長0.15m、屋外長0.55m)、袖部幅は推定で0.55mを測る。形状その他 28号住居と同様、住居北辺に竈を持つ。残存状態が極めて悪く、全体像が把握しにくい。調査時も、顕著な袖部は確認できず、燃焼部に焼土が溜まっている状態が認められたに過ぎない。燃焼部付近には土師器の長胴壺がまとも出土しているが、袖の材として使用された可能性もある。煙道部、その他の施設は確認できなかった。遺物 B、Cタイプの土師器杯(第63図1～3)の他に、九底で内面に放射状の暗文を持つタイプ(4)も見られる。所見 土師器杯、壺からみて、30号住居には7世紀後半の時期が想定できる。



第60図 29号住居・掘り方・出土遺物(1)

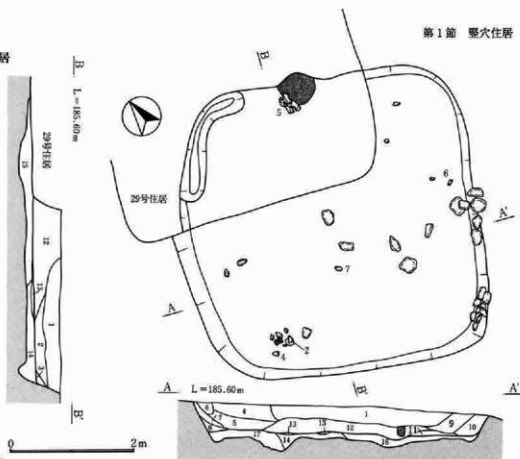
第3章 検出された遺構と遺物



第61図 29号住居出土遺物(2)

第-60図 4 PL-46	須恵器 碗	埋土 1/3	口径 13.6 底径 6.0 容高 4.3	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り、高台貼付、いぶし						
第-61図 5 PL-46	灰釉 碗	埋土 1/3	口径 12.2 底径 5.3 容高 2.9	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り後高台貼付、灰釉つけかけ						
第-61図 6 PL-46	灰釉 碗	埋土 1/4	口径 12.0 底径 (6.0) 容高 3.1	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り後高台貼付、いぶし、灰釉つけかけ、重ね焼痕						
第-61図 7 PL-46	須恵器 羽釜	埋土 口縁部1/4	口径 19.0 底径 - 唇高残 8.6	細砂粒 還元灰 にぶい黄橙	口縁部・内面・外面轆轤整形痕、ヘアケズリ、鈿貼付ココナデ						
第-61図 8 PL-46	須恵器 羽釜	埋土	口径 22.0 底径 - 容高 6.0	細砂粒 還元灰 にぶい黄橙	内面・外面轆轤整形痕、鈿貼付						
図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考		
第 61 図9	PL-46	鎌	埋土	先端部欠損	8.1	4.8	0.5				
第 61 図10	PL-46	釘	埋土	ほぼ完形	6.1	0.6	0.4				
図番号	図版番号	製品名	出土位置	石	長さ	幅	厚さ	重さ	備	考	
第 61 図11	PL-46	棒状礎	床面密着	石英閃緑岩	15.2	7.5	4.9	836.1			
第 61 図12	PL-46	棒状礎	床面密着	粗粒安山岩	12.3	5.8	4.3	531.6			
第 61 図13	PL-46	棒状礎	床面密着	粗粒安山岩	11.0	5.2	3.0	272.7			
第 61 図14	PL-46	棒状礎	床面密着	粗粒安山岩	9.2	8.3	4.8	452.6			

30号住居



30号住居

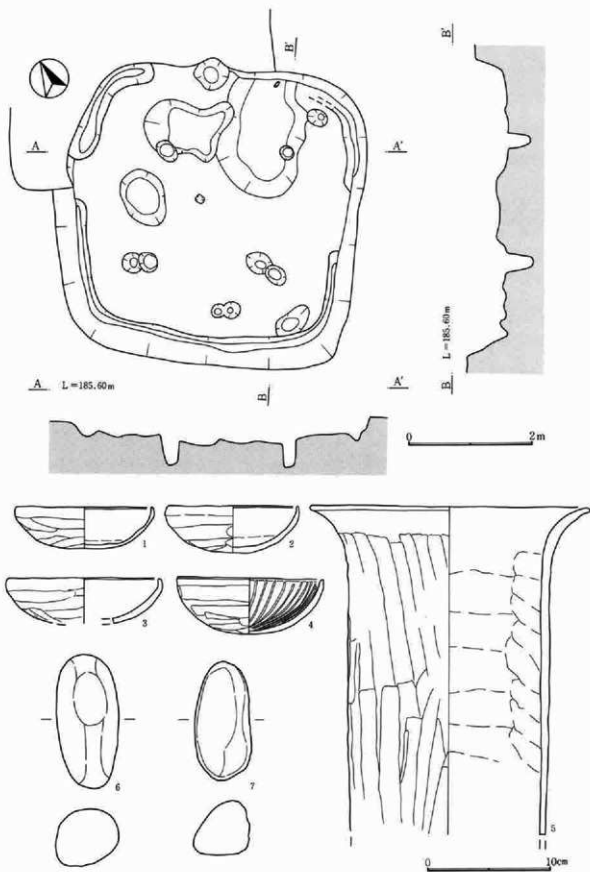
- 1 暗褐色土 3-10mmのFP粒を50%
 2 暗褐色土 3-7mmのFP粒を30%、FA小ブロックを10%
 3 軽石 FPの流れ込み
 4 黒褐色土 3-7mmのFP粒を10%
 5 黒褐色土 4に似るが、FP粒をやや多く含む
 6 褐色土 FAブロックを主体、3-5mmのFP粒を5%
 7 黒褐色土 黒ボク土主体、3-5mmのFP粒を1-2%
 8 黒褐色土 3-10mmのFP粒を50%
 9 暗褐色土 3-10mmのFP粒を10%、FAを10%
 10 暗褐色土 3-7mmのFP粒を5%、FA小ブロックを20%

- 11 暗褐色土 10に似るが炭化物を含む
 12 暗褐色土 3-10mmのFP粒を20%、ローム粒、ローム小ブロック、FA小ブロックを2-5%
 13 黄褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを含む
 14 暗褐色土 3-5mmのFP粒を5%、FA小ブロックを10%
 15 暗褐色土 3-5mmのFP粒を2%、FA小ブロックを10%、ロームブロックを10%
 16 暗褐色土 3-5mmのFP粒を3%、FA小ブロックを10%、黒色土を10%
 17 黄褐色土 3-10mmのFP粒を10%、FAを5%

第62図 30号住居

30号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考			
第-63図 PL-46	土師器 杯	雑土 1/4	口径 10.8 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ				
第-63図 PL-47	土師器 杯	床面密着 口縁部を 一部欠損	口径 10.3 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ				
第-63図 PL-47	土師器 杯	雑土 1/4	口径 12.1 底径 - 器高残 3.6	細砂粒 酸化炭 明赤堊	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ				
第-63図 PL-47	土師器 杯	1.5cm 1/4	口径 11.5 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 赤堊	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、放射状暗文のみ				
第-63図 PL-47	土師器 甕	床面密着 口縁部一 部一休部	口径 22.0 底径 - 器高残25.8	粗砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ				
採回番号 第63図6 第63図7	図版番号 PL-47 PL-47	製品名 棒状鏝 棒状鏝	出土位置 床面密着 床面密着	材質 粗粒安山岩 粗粒安山岩	長さ 10.6 9.4	幅 5.0 4.5	厚さ 4.6 4.3	重さ 382.1 236.6	備考



第63図 30号住居掘り方・出土遺物

31号住居(第64～68図 PL12・13・47～49)

位置 BM・BN-76・77 調査区の西端部で検出され、竈煙道部先端は、発掘区域外である。

平面形状 隅丸方形を呈し、北辺と西辺にテラスを持つ。 残存深度 1.25mを測る。

重複住居 単独で検出された。 規模 東辺は3.70m、西辺は3.50m、南辺は3.40m、北辺は3.95mを測る。 主軸方位 N-81°-E 埋没土 住居廃絶後、焼土や炭化物を含む黒褐色土(9、11層)や、壁から崩落したと考えられるFP粒(21層)がコーナー部分に溜まり、それと共に第1次埋没土として住居を覆った土(14、16層等)は人為的な埋め戻しの可能性も考えられるが、最終的に住居を覆った第2次埋没土(1、2層)はほぼ乱れのない水平堆積であり、自然堆積であったと考えられる。また埋土に含まれる炭化物は、住居の屋根や壁を構成した材である可能性がある。 壁の状況 床面から128°の角度で立ち上がる。北壁、西壁のテラス部分も住居の壁とはほぼ同じ角度で立ち上がる。 床面 面積は11.403m²を測る。掘り方床面から黒褐色土で15～25cm蓋土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。

周溝 竈部分を除く全ての壁際に幅15～20cm、深さ10cm前後の周溝が巡っている。

貯蔵穴 竈右袖部脇から検出された。径0.4mの円形を呈し、深さは床面より20cm前後である。貯蔵穴内からは、土師器杯が2個体出土している。

柱穴 東西間隔2.00m、南北間隔1.50mで、深さは床面から0.4～0.6mを測る。柱穴を結んで描く方形は、住居の中心よりも僅かに南東にずれている。

掘り方 掘り方床面はほぼ平坦であるが、住居南半柱穴間を大きく掘り込んでいる部分がある。

竈位置 東辺中央僅かに南寄り。 方位 N-84°-E 規模 全長は残存部分で1.35m(屋外長0.80m、屋内長0.55m)、袖部幅は0.50mを測る。 形状その他 煙道部南半分が破壊され、全体像はとらえにくい。焼土部奥壁部分から煙道部にかけて石で組んだ半石組み竈であったと推定される。右袖部には第66図13の、左袖部には第65図10の土師器甕が倒置で据えられていた。両袖部の甕は共に底部が欠損し、中に褐色土が詰められて固定されていた。袖部の間では土師器の甕が2個体並んで出土したが(11、12)、これも竈前面の補強のための材であると考えられる。したがって、31号住居の竈前面は4個体の土師器甕を「門」形に組んで作られていたことになる。右袖部には、30～50cm大の河原石が直線に並べられており、その中に土師器杯が1個体置かれていた(6)。焼土部には大量の焼土が見られた。埋土の上層(竈1層)には、火を受けて脆くなった滑石製の紡錘車が見られる。焼土部と煙道部の境には、大形の平石が蓋石として据えられており、他の石組み竈と同様に暗渠状の構造をもっていたものと推定される。煙道部南半分は破壊されて石も残っていないが、北半分には寝かされた石が2段に積まれ残存している。復元された煙道部の高さは50cm前後である。煙道部奥壁は調査区域外に存在するため、煙突の構造は不明である。

遺物 B、Cタイプの土師器杯、竈の材として使用された土師器長胴甕等が出土している。混入遺物として酸化炭素の須恵器高台付杯、羽釜が出土している。特殊な遺物としては、前述の紡錘車と鹿の角が上げられる。角は2本出土しており、枝の部分まで残す大形のもの(23)は南西コーナーから、短く切られた小形のもの(22)は住居南辺中央から出土している。両者とも刃物による加工痕が顕著に見られる。

所見 出土した遺物から見て、31号住居には7世紀末から8世紀初頭の時期が想定できる。

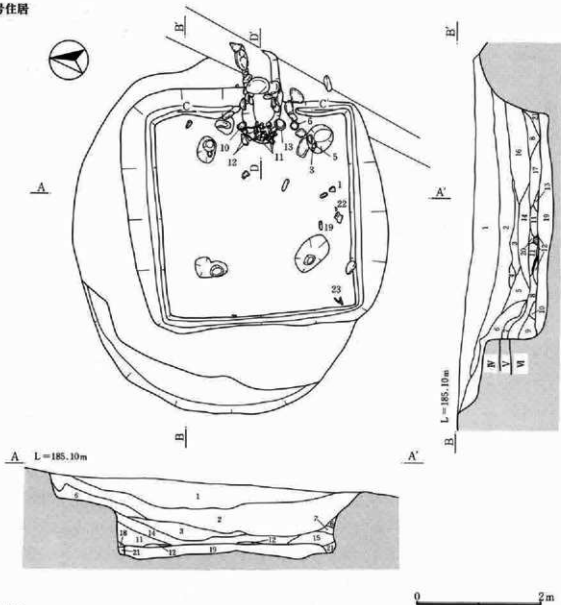
31号住居出土遺物

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-65図 1 PL-47	土師器 杯	11cm 口縁部1/4 欠損	口径 10.0 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 煙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ、口唇部スス付着	

第3章 検出された遺構と遺物

第-65図 2 PL-47	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.0 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-65図 3 PL-47	土師器 杯	-11cm ほぼ定形	口径 10.7 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ					
第-65図 4 PL-47	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 (3.0)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ					
第-65図 5 PL-47	土師器 杯	-11cm ほぼ定形	口径 11.0 底径 - 器高 4.0	細砂粒 酸化炭 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ					
第-65図 6 PL-47	土師器 杯	床面密着 ほぼ定形	口径 12.4 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ ゆがみあり					
第-65図 7 PL-47	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (4.0)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ					
第-65図 8 PL-47	土師器 台付甕	埋土 口縁部1/4	口径 11.0 底径 - 器高残 6.6	細砂粒 酸化炭 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ					
第-65図 9 PL-47	土師器 甕	埋土 口縁部1/5	口径 23.0 底径 - 器高残 6.4	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ					
第-65図 10 PL-48	土師器 甕	床面密着 底部欠損	口径 17.8 底径 - 器高残21.5	やや粗砂粒 酸化炭 にふい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ					
第-66図 11 PL-48	土師器 甕	床面密着 ほぼ定形	口径 21.8 底径 3.7 器高 39.1	やや粗砂粒 酸化炭 灰青褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ					
第-66図 12 PL-48	土師器 甕	床面密着 底部欠損	口径 22.7 底径 - 器高 (35.0)	細砂粒 酸化炭 にふい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ナデ、外面 ヘラケズリ					
第-66図 13 PL-48	土師器 甕	床面密着 底部欠損	口径 20.6 底径 - 器高残25.0	細砂粒 酸化炭 にふい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ					
第-66図 14 PL-48	須恵器 甕	埋土 1/5	口径 11.0 つまみ - 器高残 1.4	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面縦輪整形痕					
第-66図 15 PL-48	須恵器 杯	埋土 小片	口径 - 底径 - 器高 -	細砂粒 還元炭 灰	内外面ヨコナデ	圖書加説 不明				
第-66図 16 PL-48	須恵器 碗	埋土 1/2	口径 12.0 底径 5.3 器高 5.2	細砂粒 酸化炭 にふい黄褐色	内面・外面縦輪整形痕、底部回転切削り、高 台貼付					
第-66図 17 PL-49	須恵器 碗	埋土 ほぼ定形	口径 16.4 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面縦輪整形痕、底部高台貼付(斜縁)					
第-66図 18 PL-48	須恵器 羽釜	埋土 口縁部1/5	口径 16.0 底径 - 器高残 3.2	細砂粒 還元炭 にふい赤褐色	口縁部縦輪整形痕、髷貼付					
採図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考	
第 67 図21	PL-48	鉄片	埋土		5.7	1.5	0.4			
採図番号	図版番号	製品名	出土位置	石	長さ	幅	厚さ	重さ	備	考
第 67 図19	PL-49	棒状機	5.0cm	粗粒安山岩	14.0	5.6	3.7	508.4		
第 67 図20	PL-49	刺片	埋土	砂岩	7.0	8.5	1.7	123.3	2次加工	
第 67 図24	PL-49	紡錘車	15.8cm	滑石	4.1	3.4	1.6	32.6		
採図番号	図版番号	動物名	部	位	長さ	備		考		
第 67 図22	PL-49	ニシツク	落角	右角第1分岐まで	7.0	床面密着				
第 67 図23	PL-49	ニシツク	角		28.5	床から9.0cm				

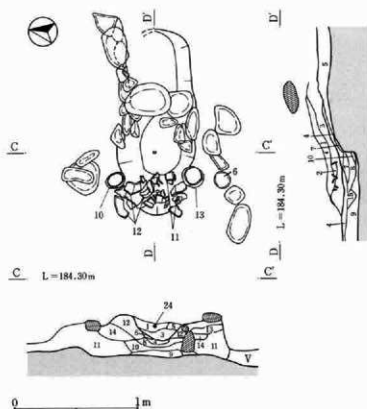
31号住居



31号住居

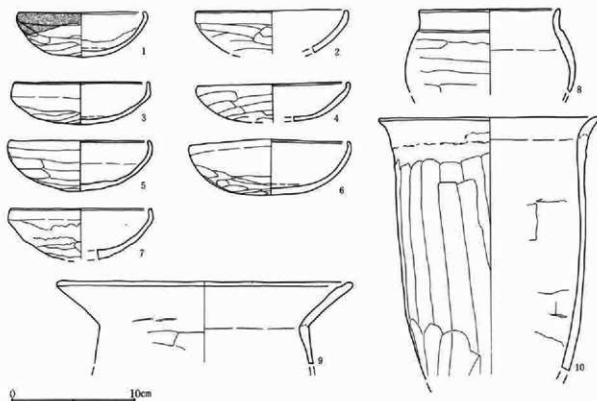
- | | | | |
|---------|--------------------------------|---------|------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 3-30mmのFP粒を20-30% | 11 黒褐色土 | 3-30mmのFP粒を50%、炭化物、炭化材を含む |
| 2 暗褐色土 | 3-20mmのFP粒を20%、FA小ブロックを10% | 12 黒褐色土 | 焼土、炭化物を含む |
| 3 黒褐色土 | 3-10mmのFP粒を50% (FP崩落による流れ込み) | 13 褐灰色土 | FAブロック主体の薄い層 |
| 4 褐灰色土 | FAブロック主体、3-10mmのFP粒を10%、炭化物を含む | 14 暗褐色土 | 3-10mmのFP粒を10-20%、FAブロックを10% |
| 5 暗褐色土 | 3-5mmのFP粒を10%、FA、黒ボク土小ブロックを5% | 15 黒褐色土 | 3-8mmのFP粒を30% |
| 6 褐灰色土 | 3-10mmのFP粒を10%、FA小ブロックを10% | 16 暗褐色土 | 3-10mmのFP粒を10%、FAを5% |
| 7 黒褐色土 | 2-5mmのFP粒を30-50% | 17 暗褐色土 | 3-10mmのFP粒を5%、FAブロックを5% |
| 8 暗褐色土 | 2-5mmのFP粒を5%、FAを10% | 18 黒褐色土 | 2-5mmのFP粒を30% |
| 9 黒褐色土 | 炭化物を含む (黒ボク土の流れ込み) | 19 黒褐色土 | |
| 10 黒褐色土 | 9に似るが焼土、炭化物を含む | 20 褐灰色土 | FA流れ込み |
| | | 21 軽石 | FP流れ込み |

第64図 31号住居

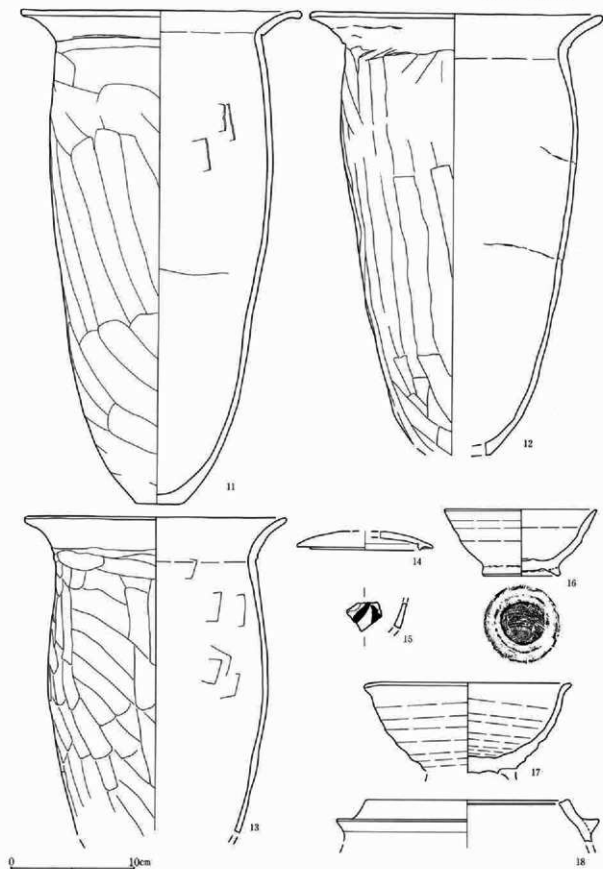


31号住居蔵

- 1 暗褐色土 焼土、褐色土ブロックを含む
- 2 褐色土 焼土を含む
- 3 黒褐色土 焼土粒、暗褐色粘土粒を含む
- 4 褐色土 灰、焼土を含む
- 5 褐色土 焼土粒を含む
- 6 褐色土 焼土を含む
- 7 赤褐色土 焼土を含む灰の層
- 8 褐色土 焼土、灰のブロックを含む
- 9 黒褐色土 焼土粒を若干含む
- 10 黒灰色土 FA主体、黒色土を含む
- 11 軽石 FP粒に黒色土ブロックを10%、炭化物を若干含む
- 12 黒灰色土 FAを10~30%、焼土を若干含む
- 13 黒灰色土 FA主体
- 14 褐色土 FA主体、焼土粒を5~10%
- 15 黒褐色土 3~5mのFP粒を1~2%、FA小ブロックを5%

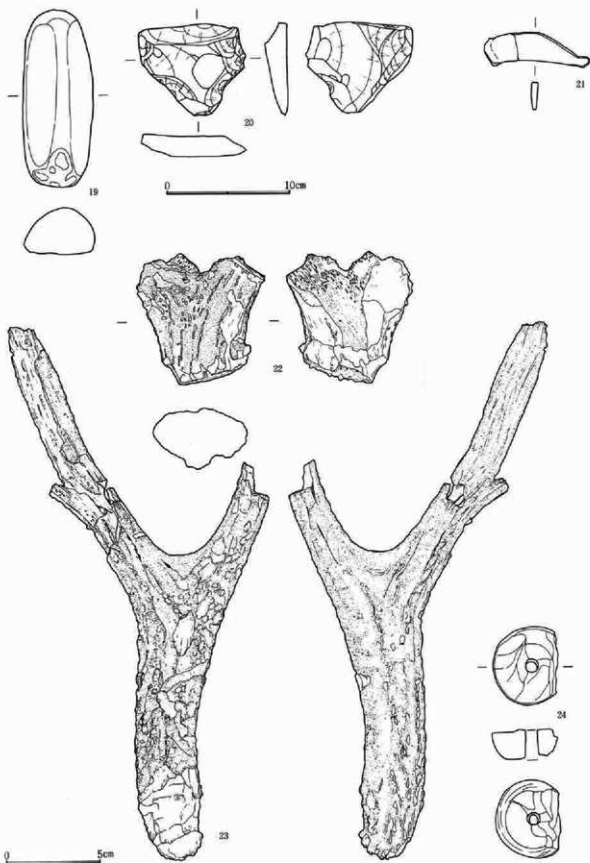


第65図 31号住居蔵・出土遺物 (1)

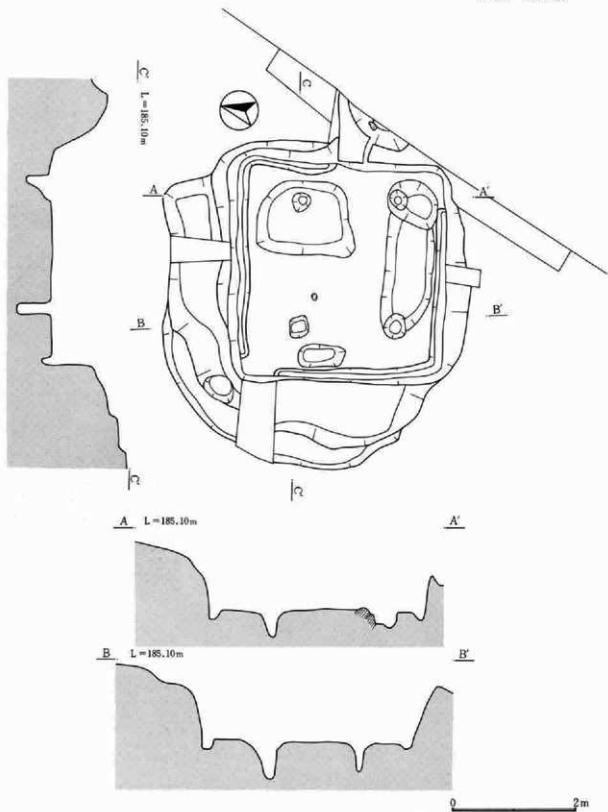


第66图 31号住居·出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

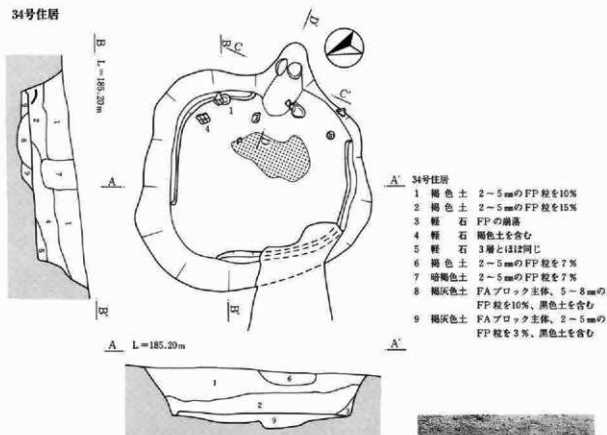


第67図 31号住居出土遺物 (3)



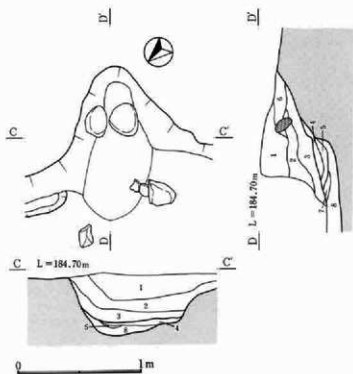
第68図 31号住居掘り方

34号住居



- 34号住居
- 1 褐色土 2-5mmのFP粒を10%
 - 2 褐色土 2-5mmのFP粒を15%
 - 3 軽石 FPの崩落
 - 4 軽石 褐色土を含む
 - 5 軽石 3層とは同じ
 - 6 褐色土 2-5mmのFP粒を7%
 - 7 暗褐色土 2-5mmのFP粒を7%
 - 8 褐灰色土 FAブロック主体、5-8mmのFP粒を10%、黒色土を含む
 - 9 褐灰色土 FAブロック主体、2-5mmのFP粒を3%、黒色土を含む

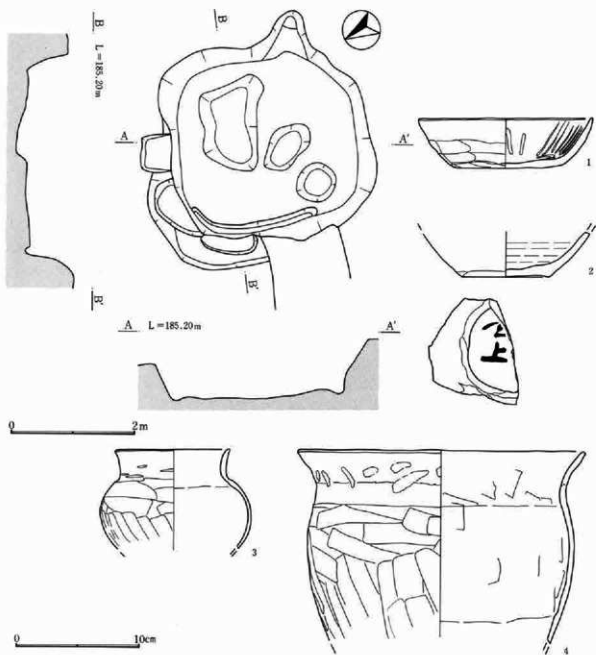
0 2m



- 34号住居
- 1 暗褐色土 3-10mmのFP粒を10%
 - 2 暗褐色土 3-10mmのFP粒を10%、炭化物、焼土粒を含む
 - 3 暗褐色土 3-7mmのFP粒を5%、褐灰色粘土ブロックを20%、焼土粒、炭化物を含む
 - 4 褐色土 焼土化したFP粒を含む
 - 5 暗褐色土 3-5mmのFP粒を3%、焼土粒、褐灰色粘土ブロックを含む
 - 6 暗褐色土 3-7mmのFP粒を10%、褐灰色粘土ブロックを10%
 - 7 暗褐色土 3-7mmのFP粒を10%、焼土粒を若干含む
 - 8 暗褐色土 2-5mmのFP粒を5%、FA粒を10%



第69図 34号住居・竈



第70図 34号住居掘り方・出土遺物

34号住居出土遺物

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-70図 1 PL-49	土師器 杯	8.5cm 完形	口径 13.8 底径 - 器高 4.0	細砂粒 酸化灰 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ、内面暗文	
第-70図 2 PL-49	須恵器 椀	埋土 1/5	口径 - 底径 5.9 器高残 3.2	細砂粒 酸化灰 橙	内面・外面轆轤整形、底部周縁糸切り無調整	墨書 「口上」
第-70図 3 PL-50	土師器 台付甕	埋土 口縁部一体 部上半	口径 8.8 底径 - 器高残 7.9	細砂粒 酸化灰 におい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-70図 4 PL-50	土師器 壺	埋土 口縁部一 体部上半	口径 22.4 底径 - 器高残15.1	細砂粒 酸化灰 赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ・下半別造	

第3章 検出された遺構と遺物

34号住居(第69・70図 PL 13・49・50)

位置 BL・BM-77・78 平面形状 北辺が広がった形に崩れた隅丸方形を呈する。

残存深度 0.90m 重複住居 単独で検出された。規模 東辺は3.05m、西辺は2.25m、南辺は2.25m、北辺は3.25mを測る。主軸方位 N-120°-E

埋没土 FP粒を含む褐色土の水平堆積であり、自然堆積であると推定される。コーナー部分には、壁から崩落したと考えられる褐色土を含むFP粒が溜まっている(3、4、5層)。壁の状況 床面から112°の角度で立ち上がる。床面面積は7.173㎡を測る。掘り方床面からPAと黒色土の混合土で10~25cm盛土し、床としている。床面中央やや竜寄りには、壁あるいは屋根に材として用いられたとも考えられるロームがまとまって検出された。周溝 住居の北東と南西のコーナー部分で幅10~20cm、深さ5~10cm前後の周溝が確認されている。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

掘り方 はほぼ平坦であるが、住居北東コーナー部分に浅い掘り込みがある。

竈位置 東辺中央 方位 N-135°-E 規模 全長1.20m(屋外長0.65m、屋内長0.55m)、袖部幅は復元で0.55mを測る。形状その他 煙道部先端部分に落下して入り込んだ40cm前後の河原石が見られるが、これは煙突部分に使用されたものと考えられる。袖部は左右ともに消失している。黒土中に褐色粘土が一部含まれているが、これが竈の材として用いられたのであろう。

遺物 内面に放射状と螺旋状の暗文をもつEタイプの土師器杯、酸化焼成で底部回転糸切り無調整の須恵器碗(黒書土器)、薄手で胴部上位に最大径をもつ土師器甕などが出土している。

所見 遺物の時期にばらつきが見られ時期の決定は困難である。

36号住居(第71図 PL 13)

位置 BH~BJ-77・78 調査区の東端部で検出され、住居の東半分は調査区外に存在する。

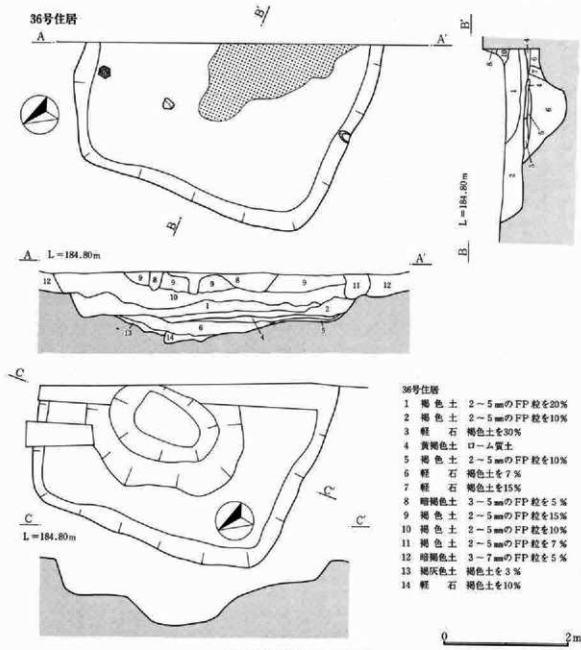
平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.95mを測る。重複住居 単独で検出された。

規模 西辺は3.95m、南辺は残存部分で3.15m、北辺は残存部分で1.85mを測る。

主軸方位 N-140°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とした自然堆積である。壁の状況 床面から125°の角度で立ち上がる。床面面積は残存部分で9.153㎡を測る。36号住居は、他の住居と異なりFP層の途中で掘り方を止め床としている。したがって、FP層の上が床となっている。床面南半の一部にはロームが貼り付くように検出された。あるいはこれが貼り床である可能性もある。掘り方 住居中央北よりに大きな楕円形の穴が掘られている。遺物 検出されなかった。所見 時期は不明である。他の住居と比較して異なる要素が多く、住居ではない可能性もある。



調査中の36号住居
床面に貼り付けたロームが
検出された所



第71図 36号住居・掘り方



調査中の36号住居
FPを床面とし、中央やや北寄りに
次の存在を示す黒い部分が見られる

第3章 検出された遺構と遺物

37号住居(第72・73図 PL.13・14・50)

位置 BJ～BL-77・78 34号住居と39号住居の間に位置する。平面形状 隅丸方形を呈する。形状、規模、主軸方位など隣接する38号住と共通点が多い。残存深度 0.80mを測る。

重複住居 重複する住居は無いが、酸化炭焼成の須恵器や灰釉輪等を出土した205号土坑より古い。

規模 東辺は3.10m、西辺は3.55m、南辺は2.70m、北辺は2.80mを測る。主軸方位 N-117°-E
埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とした水平堆積。自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から124°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。

床面 面積は7.983㎡を測る。掘り方床面から褐色土、FP粒を混合したFAで10～15cm前後盛土をし、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

掘り方 住居中央を南北に大きく掘りこめている部分があるが、その他はほぼ平坦である。

竈位置 東辺中央 方位 N-126°-E 規模 全長は1.10m(屋外長0.55m、屋内長0.55m)、袖部幅0.65mを測る。形状その他 右袖部は比較的残りが良く、袖石として使用された20～50cm大の河原石も残っている。左袖部は既に原型を留めていないが、袖部付け根付近に須恵器盤が乗せられた状態で検出された(第73図3)。煙道部は比較的急な角度で立ち上がる。煙突部分の施設は検出されなかった。

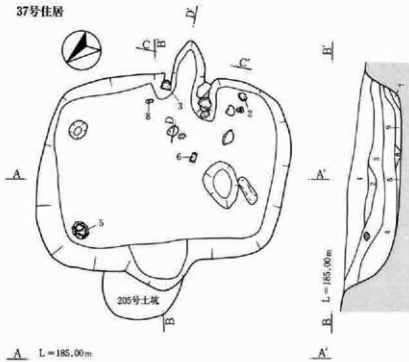
遺物 かえりを持たない須恵器蓋、底部回転ヘラ切り無調整の須恵器杯、須恵器高台付き盤の他に、土師器壺、羽口等が出土している。遺物の構成も隣接する38号住居と似ている。

所見 須恵器の蓋はかえりを持たず、杯は口縁部に外傾傾向が見られる。また高台付き盤は口径が大きく器高が低い。したがって37号住居には9世紀初頭の時期が想定できる。隣接する38号住居とはほぼ同じ時期に存在し、様々な共通点を持つことから、何らかの直接的な関係があったと推定される。

37号住居出土遺物

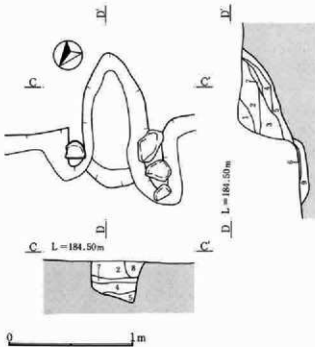
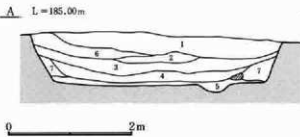
図版番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考				
第-73図 1 PL-50	須恵器 蓋	埋土 1/3	口径 13.9 つまみ 3.8 器高 3.4	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕、上面回転ヘラケズリ、つまみ貼付					
第-73図 2 PL-50	須恵器 杯	2cm 1/2	口径 13.8 底径 8.9 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 灰	口縁部、外面轆轤整形痕、底部回転ヘラ切り無調整、風化がはげしい					
第-73図 3 PL-50	須恵器 盤	2cm 1/3	口径 20.0 底径 14.8 器高 4.0	やや粗砂粒 還元灰 灰	口縁部、外面轆轤整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付					
第-73図 4 PL-50	土師器 壺	埋土 口縁部～ 体部上半	口径 18.5 底径 - 器高残 9.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-73図 5 PL-50	土師器 壺	25cm 口縁部	口径 21.3 底径 - 器高 7.0	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ					
第-73図 6 PL-50	土製品 羽口	床面密着 先端部	径 5.9 残存長 5.8		先端にガラス質付着					
図版番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 73 図 7	PL-50	棒状壺	埋土	粗粒安山岩		10.1	5.8	3.0	310.3	
第 73 図 8	PL-50	棒状壺	床面密着	粗粒安山岩		14.9	5.5	4.1	564.6	

37号住居



37号住居

- 1 褐色土 3-7mmのFP粒を10%
- 2 軽石 褐色土を50%
- 3 褐色土 2-5mmのFP粒を7%
- 4 褐色土 2-7mmのFP粒を20%
- 5 褐色土 2-3mmのFP粒を5%、褐色土を5%
- 6 褐色土 2-5mmのFP粒を10%
- 7 褐色土 2-5mmのFP粒を30%
- 8 褐色土 50-80mmのFP粒を含む
- 9 暗褐色土 焼土、炭化物を20%

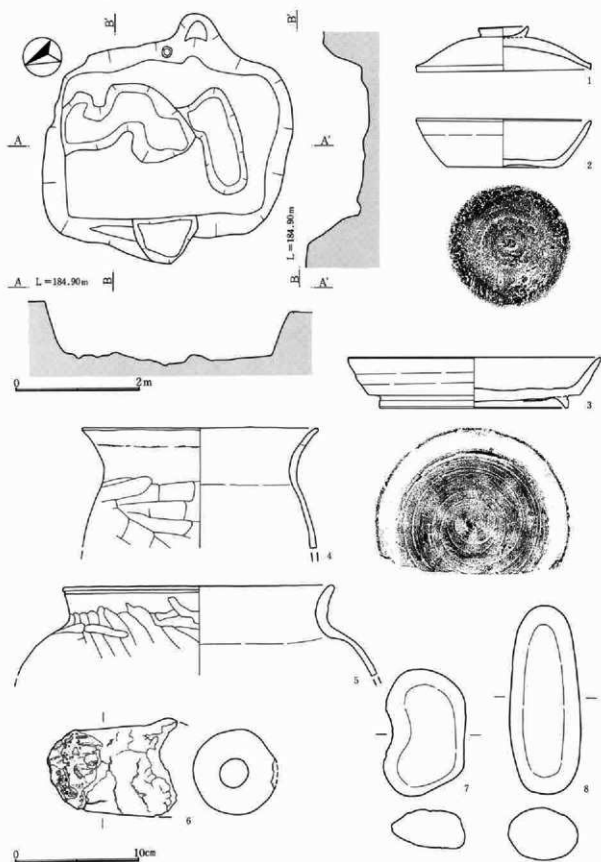


37号住居

- 1 黒褐色土 3-10mmのFP粒を30-50%
- 2 暗褐色土 3-7mmのFP粒を10%、炭化物を含む
- 3 暗褐色土 3-7mmのFP粒を10%、褐色粘土ブロックを含む
- 4 暗褐色土 3に似るが、褐色粘土が多く、焼土を含む
- 5 黒褐色土 3-5mmのFP粒を10%、焼土を含む
- 6 褐色土 1-2mmのFP粒を3%
- 7 暗褐色土 2に似るが、焼土粒を多く含む
- 8 黒褐色土 5-15mmのFP粒を10-20%
- 9 褐色土 FAブロック主体、5-10mmのFP粒を5%

第72図 37号住居・竪

第3章 検出された遺構と遺物



第73図 37号住居掘り方・出土遺物

38号住居(第74~76図 PL 14・50・51)

位置 BL・BM-78-80 30号住居の南西、34号住居の西に位置する。1区から連続する微高地の裾部分に位置し、残存状態はやや悪い。平面形状 隅丸方形を呈する。形状、規模、主軸方位など隣接する37号住居と共通点が多い。残存深度 0.45mを測る。重複住居 41号住居より新しい。規模 東辺は2.40m、西辺は残存部分で1.80m、南辺は2.90m、北辺は2.50mを測る。主軸方位 N-114°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土の水平堆積で、自然堆積と考えられる。壁の状況 床面から118°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で6.930㎡を測る。掘り方床面に一部FP粒を含むロームを貼って床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 住居の南東コーナー部分で、幅20~30cm、深さ10~20cmの周溝が一部分のみ検出されている。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 ほぼ平坦である。竈位置 東辺中央 方位 N-118°-E 規模 全長は0.75m(屋外長0.45m、屋内長0.30m)、袖部幅0.65mを測る。形状その他 袖部はほぼ完全に失われている。煙道部奥壁は、掘り方の上にFP粒を含む暗褐色土を貼り付けて形を整えている。煙道部先端に見られる河原石は住居廃絶後に落下したものであろう。

遺物 須恵器杯で、口縁部が外傾しながら立ち上がり、底部に回転ヘラケズリを持つもの(第75図1)回転ヘラ切り無調整のもの(2、3)、回転糸切り無調整のもの(4)。肩部に最大径を持ち、胴が丸味を持つ土師器壺等が出土している。須恵器杯は、37号住居出土のものとはほぼ同じ形態である。

所見 出土した遺物から見て、38号住居には9世紀初頭の時期が想定できる。隣接する37号住居とはほぼ同じ時期に存在し、様々な共通点を持つことから何らかの直接的な関係があったと推定される。

41号住居(第74~76図 PL 14・56)

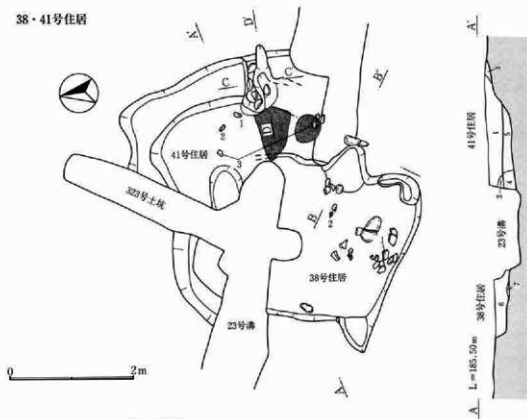
位置 BL・BM-78-80 30号住居の南西、34号住居の西に位置する。1区から連続する微高地の裾部分に位置し、残存状態はやや悪い。平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.40mを測る。重複住居 38号住居より古い。規模 東辺は残存部分で1.70m、西辺は残存部分で1.00m、北辺は3.15mを測る。主軸方位 N-90°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土の水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から162°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で3.870㎡を測る。掘り方床面から黒色土、ロームを混合したFAで15cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 ほぼ平坦である。

竈位置 東辺中央 方位 N-92°-E 規模 全長は1.00m(屋外長0.65m、屋内長0.35m)、袖部幅は復元で0.55mを測る。形状その他 右袖部は完全に失われている。左袖部は30cm前後の河原石を袖石として使用している。燃焼部ほぼ中央には支脚と考えられる石が据えられていることから、壺を1個体かけるタイプの竈であったと推定される。掘り方から暗褐色土を5~10cm前後盛土して形を整え、支脚を据えている。支脚の周囲には大量の焼土が残存していた。煙道部は短く、奥壁から約130°の角度を持って立ち上がる。煙突の施設は確認されていない。

遺物 土師器壺の底部が出土しているのみである。

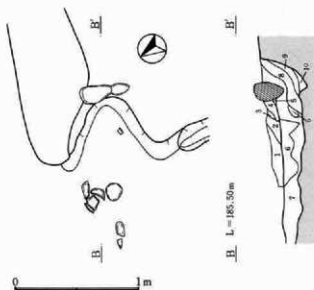
所見 時期を決定する遺物は出土していないが、38号住居より古いことから、8世紀代の住居であると推定される。

38・41号住居



38・41号住居

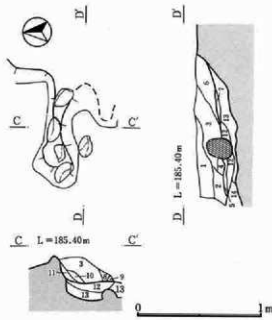
- 1 暗褐色土 3-10mmのFP粒を10-20%, FAを10% (41号住居埋土)
- 2 暗灰色土 黒色土ブロックを10% (FAの流れ込み・41号住居埋土)
- 3 軽石 FPの流れ込み (41号住居埋土)
- 4 黄褐色土 3-10mmのFP粒を10%, 暗褐色土ブロックを30% (41号住居床下)
- 5 褐色土 FAブロックを10%, 黒色土ブロックを上部に10%, ロームブロックを5%, 3-7mmのFP粒を3% (41号住居床下)
- 6 暗褐色土 4に似るが, FP粒が少なく, 褐色が強い (38号住居埋土)
- 7 黄褐色土 ローム主体, FP粒を含む (38号住居貼り床)



38号住居

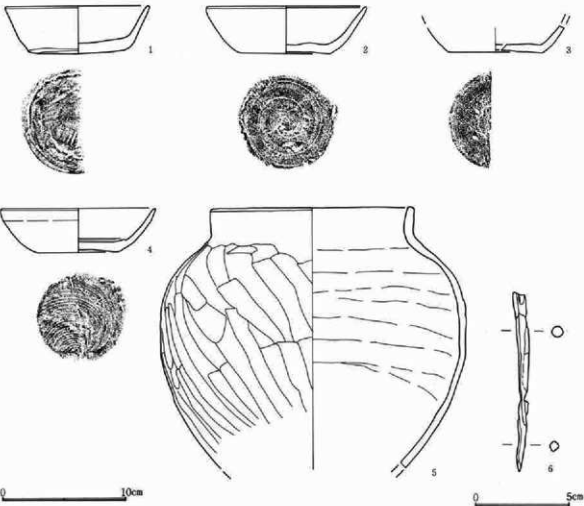
- 1 黄褐色土 ロームブロック主体, 焼土粒を含む
- 2 褐色土 焼土, ロームブロックを10%
- 3 暗褐色土 ロームブロック, 焼土ブロックを含む
- 4 暗褐色土 焼土ブロックを含む (やや粘土質)
- 5 暗褐色土 焼土粒を含む
- 6 焼土
- 7 褐色土 2-5mmのFP粒を10%, FAを含む
- 8 褐色土 7に似るが, FP粒がやや多い
- 9 暗褐色土 FA, FP粒を僅かに含む
- 10 暗褐色土 黄褐色パミスを僅かに含む

第74図 38・41号住居・38号住居



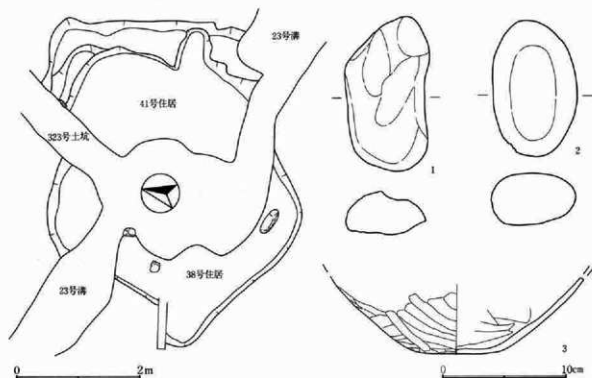
41号住居層

- 1 暗褐色土 3-5mmのFP粒を5%、焼土小ブロック、暗褐色粘土ブロックを10%
- 2 暗褐色土 3-5mmのFP粒を1%、焼土粒を5%
- 3 暗褐色土 1-3mmのFP粒を1%、焼土小ブロック、暗褐色粘土ブロックを30%
- 4 暗褐色土 1-3mmのFP粒を1%、焼土粒を3%
- 5 赤褐色土 焼土(火床面)
- 6 黒褐色土 1-3mmのFP粒を2%、焼土小ブロックを3%
- 7 黒褐色土 灰を含む
- 8 赤褐色土 焼土(火床面、物)
- 9 暗褐色土 粘土主体、焼土を含む(袖)
- 10 褐色土 2-3mmのFP粒を1%、焼土を含む
- 11 暗褐色土 焼土粒を5%、黄褐色粘土ブロックを20%
- 12 赤褐色土 焼土、2-3mmのFP粒を1%
- 13 黒色土 1-3mmのFP粒を1-3%、褐色土ブロックを3%
- 14 黒色土 1-5mmのFP粒を5-10%



第75図 41号住居層・38号住居出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



第76図 38・41号住居掘り方・41号住居出土遺物

38号住居出土遺物

探取番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考		
第-75図 1 PL-50	須恵器 杯	17cm 1/2	口径 11.3 底径 7.2 器高 3.8	細砂粒 還元炎 灰	口縁部、外面輪軸整形痕、底部手持ちヘラケズリ			
第-75図 2 PL-50	須恵器 杯	5cm 口縁部1/2 欠損	口径 12.7 底径 7.2 器高 3.7	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラキリ			
第-75図 3 PL-50	須恵器 杯	埋土 底部1/2	口径 - 底径 7.4 器高残 2.0	細砂粒 還元炎 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラ切り、外面自然軸			
第-75図 4 PL-50	須恵器 杯	埋土 1/2	口径 12.3 底径 6.6 器高 3.5	やや粗砂粒 還元炎 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り無調整			
第-75図 5 PL-51	土師器 堿	埋土 口縁部～ 底部1/3	口径 15.6 底径 - 器高残20.5	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ			
探取番号 第75図6	図版番号 PL-51	製品名 釘	出土位置 埋土	遺存状態・特徴 先端部のみ	長さ 9.5	幅 0.7	厚さ 0.6	備考

41号住居出土遺物

探取番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考			
第-76図 3 PL-56	土師器 堿	6.5cm 底部一体 部下位	口径 - 底径 6.9 器高残 6.0	細砂粒 酸化炎 赤褐	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ				
探取番号 第76図1	図版番号 PL-56	製品名 棒状礫	出土位置 3.0cm	石 粗粒安山岩	長さ 12.1	幅 6.8	厚さ 3.5	重さ 379.7	備考
第76図2	PL-56	棒状礫	5.5cm	粗粒安山岩	10.7	6.7	4.2	431.3	

39号住居(第77~83図 PL.14・15・51~53)

位置 BI~BK-78~80 平面形状 やや南北に長い隅丸方形を呈する。残存深度 0.65mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 東辺は4.05m、西辺は5.55m、南辺は残存部分で2.35m、北辺は4.25mを測る。主軸方位 N-134°-E 埋没土 FP粒を含む黒褐色土、褐色土主体の水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から124°の角度で立ち上がる。壁を構成した材あるいはその痕跡は検出できなかった。床 床面積は復元で22.329㎡を測る。掘り方床面から、FP粒を含むFAで20cm前後盛土し、更に一部にFAを貼って床としている。床は1面しか検出されなかった。

周溝 北西と南西のコーナー部分、西辺中央に散発的に見られる。貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 東西間隔1.90m、南北間隔3.45mで南北間が広く柱穴間を直線で結ぶと長方形を描く。深さは床面から0.13~0.32mである。柱穴間を結んで描かれる長方形は僅かに東に寄っている。掘り方 平坦である。床下土壌 住居北東コーナー部分から検出されている。径約0.70mの円形で、深さは0.80mである。土壌内部からは鉄鏝(第82図46)と鉄鍬(45)が出土している。

竈位置 39号住居は、前後2回竈が作られている。古いものは東辺南寄りに、新しいものは東辺ほぼ中央に作られている。方位 旧 N-139°-E 新 N-134°-E 規模 旧 全長は残存部分で0.80m、袖部は残っていない。新 全長は0.70m、袖部幅は0.60mを測る。形状その他 旧 煙道部のみが残存している。南北両辺には河原石が立てて据えられており、暗渠状の構造を持っていた可能性がある。煙突部分の構造は不明である。新 右袖部は旧竈埋土をそのまま利用しており、10~30cm大の河原石を袖石として使用している。左袖部はFP粒を混合したFAを主体に作られている。燃焼部から煙道部にかけては狭長で、燃焼部中央に30cm大の河原石が見られるが、廃絶後に落下したものである。

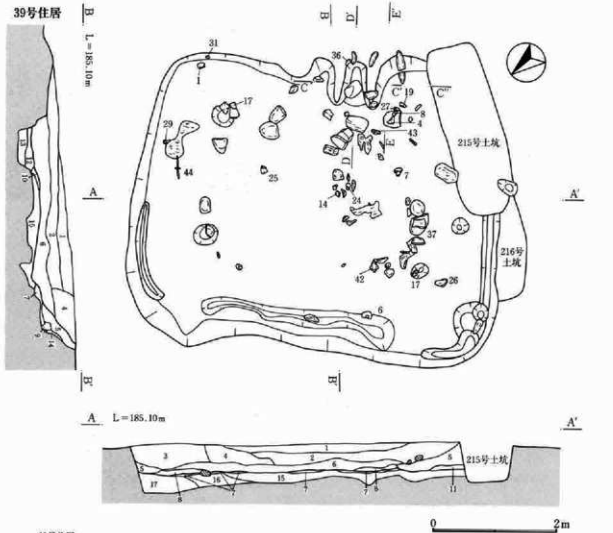
遺物 酸化炭焼成で底部回転糸切り無調整であるか、粗雑な高台を付けた須恵器碗、灰釉軸・皿類、羽釜等土器類が大量に出土している。所見 床面に大量の炭化材が見られ、焼失住居であると思われる。そのため大量の須恵器と共に灰釉、鉄器類が他の住居と比較して豊富に出土したことが特徴的である。出土した遺物から見て、39号住居には10世紀後半の時期が想定できる。

39号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-79図 1 PL-51	須恵器 碗	6.5cm 1/4	口径 11.8 底径 5.1 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 洗黄	内面・外面輪襷整形痕、底部回転糸切り後周 辺回転ヘラケズリ	
第-79図 2 PL-51	須恵器 碗	埋土 1/4	口径 12.0 底径 5.1 器高 4.0	細砂粒 還元炭 明オリープ灰	内面・外面輪襷整形痕、底部回転糸切り無調 整	
第-79図 3 PL-51	須恵器 碗	埋土 1/4	口径 12.8 底径 5.6 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 洗黄	内面・外面輪襷整形痕、底部回転糸切り無調 整、糸切り中心に向かって切っている	
第-79図 4 PL-51	須恵器 碗	5cm 1/4	口径 11.6 底径 5.0 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 にぶい澄	内面・外面輪襷整形痕、底部回転糸切り無調 整	
第-79図 5 PL-51	須恵器 碗	埋土 1/4	口径 11.4 底径 5.1 器高 4.0	細砂粒 還元炭 明黄褐	内面・外面輪襷整形痕、底部回転糸切り無調 整	
第-79図 6 PL-51	須恵器 碗	3.5cm 3/4高台欠 く	口径 14.8 底径 6.2 器高 4.4	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪襷整形痕、底部回転糸切り後高 台貼付(割離)、輪襷痕残す	外面刻書
第-79図 7 PL-51	須恵器 碗	18cm 1/3	口径 13.0 底径 5.3 器高 5.1	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪襷整形痕、底部回転糸切り後高 台貼付	

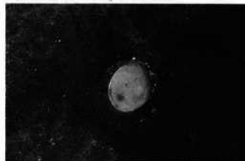
第3章 検出された遺構と遺物

第-7908 8 PL-51	須恵器 椀	6cm 口縁部の み1/4	口径 14.0 底径 - 器高 -	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆変形痕	
第-7908 9 PL-51	須恵器 椀	埋土 口縁部の み1/4	口径 13.8 底径 - 器高残 4.8	細砂粒 酸化灰気味 黄褐色	内面・外面輪轆変形痕	
第-7908 10 PL-51	須恵器 椀	埋土 口縁部の み1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 3.7	細砂粒 還元灰 明オリブ灰	内面・外面輪轆変形痕、いぶし	
第-7908 11 PL-51	須恵器 椀	埋土 口縁部の み1/4	口径 13.8 底径 - 器高残 3.0	やや粗砂粒 還元灰 黒	内面・外面輪轆変形痕、黒色処理、いぶし	
第-7908 12 PL-51	須恵器 椀	埋土 口縁部の み1/3	口径 12.0 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 還元灰 橙	内面・外面輪轆変形痕、厚手	
第-7908 13 PL-52	須恵器 椀	埋土 底部1/2	口径 - 底径 - 器高残 2.1	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付(剝離)	
第-7908 14 PL-52	須恵器 椀	5cm 底部のみ	口径 - 底径 5.1 器高残 2.0	細砂粒 還元灰 ぶい黄橙	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付(剝離)	
第-7908 15 PL-52	須恵器 椀	埋土 底部1/2	口径 - 底径 - 器高残 1.5	細砂粒 還元灰 灰黄	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付(剝離)	
第-7908 16 PL-52	須恵器 椀	埋土 底部のみ	口径 - 底径 6.3 器高残 2.2	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付(一部剝離)	
第-7908 17 PL-52	須恵器 椀	4.5-22.5cm 底部のみ	口径 - 底径 7.0 器高残 3.6	細砂粒 還元灰 ぶい黄橙	外面輪轆変形痕、高台貼付、風化進んでいる	
第-7908 18 PL-52	須恵器 椀	埋土 底部-体 部1/4	口径 - 底径 6.0 器高残 3.7	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆変形痕、高台貼付黒色処理、 いぶし	
第-7908 19 PL-52	須恵器 椀	床面密着 底部-体 部1/4	口径 - 底径 7.0 器高 4.0	細砂粒 還元灰 ぶい黄橙	内面・外面輪轆変形痕、高台貼付後底部全面 にヨコナデ	
第-8008 20 PL-52	須恵器 椀	埋土 底部のみ	口径 - 底径 6.0 器高残 3.0	細砂粒 還元灰 浅黄	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付	
第-8008 21 PL-52	須恵器 椀	埋土 底部のみ	口径 - 底径 7.6 器高残 1.4	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付	
第-8008 22 PL-52	須恵器 椀	埋土 底部のみ	口径 - 底径 5.9 器高残 2.1	やや粗砂粒 還元灰 黄灰	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付	
第-8008 23 PL-52	須恵器 椀	埋土 口縁部小 片	口径 - 底径 - 器高 -	細砂粒 還元灰 橙	内面・外面輪轆変形痕	墨書は 「口王」
第-8008 24 PL-52	須恵器 椀	床面密着 高台端部 欠損	口径 18.4 底径 - 器高残 4.4	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆変形痕、底部回転糸切り後高 台貼付、口唇部スス付着	床下土塊 遺物と接 合
第-8008 25 PL-52	須恵器 スリ鉢	13.5cm 底部1/3	口径 - 底径 12.0 器高残 4.5	粗砂粒 還元灰 灰	底部回転糸切り無調整、内面スリ跡	
第-8008 26 PL-52	灰輪 皿	35cm 1/2	口径 17.6 底径 4.9 器高 3.5	細砂粒 還元灰 灰白	内面輪轆変形痕、外面回転ヘラケズリ、高台 貼付ヨコナデ、つけがけ	
第-8008 27 PL-52	灰輪 皿	床面密着 1/2	口径 13.9 底径 6.8 器高 3.2	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆変形痕、高台内面に回転ヘラ ケズリ後高台貼付、灰輪つけがけ、口唇部ス ス付着	



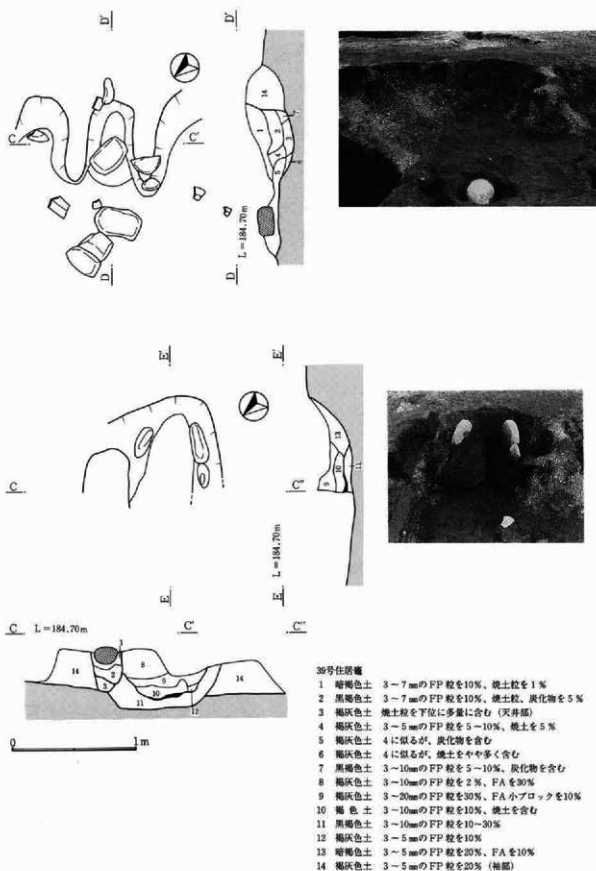
39号住居

- | | | | |
|--------|---------------------------------------|---------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 3~10mmのFP粒を20% | 9 褐色土 | 6に似る |
| 2 褐色土 | 3~20mmのFP粒を10%、FAを多く含む | 10 黒色土 | FA主体、炭化物を大量に含む |
| 3 褐色土 | 3~20mmのFP粒を30%、FAを多く含む | 11 暗褐色土 | 6に似るが、やや暗い色調を示す |
| 4 黒褐色土 | 3~15mmのFP粒を10% | 12 黒褐色土 | 3~10mmのFP粒を30%、FAブロックを10% |
| 5 褐色土 | 3~7mmのFP粒を10%、FAを多く含む | 13 黒色土 | 黒ボク土主体、FAブロックを20% |
| 6 褐色土 | 2~7mmのFP粒を10%、FA粒・小ブロックを5~20% | 14 黒褐色土 | 3~20mmのFP粒を30% |
| 7 褐色土 | 1~3mmのFP粒を5%、FAブロックを10~20%、炭化物を含む(床面) | 15 褐色土 | 3~10mmのFP粒を10%、FA小ブロックを30% |
| 8 褐色土 | FAブロック主体、炭化物を含む | 16 褐色土 | 3~10mmのFP粒を5%、FA小ブロックを30~50% |
| | | 17 褐色土 | 3~10mmのFP粒を5%、FA小ブロックを30~50%、炭化物を含む |



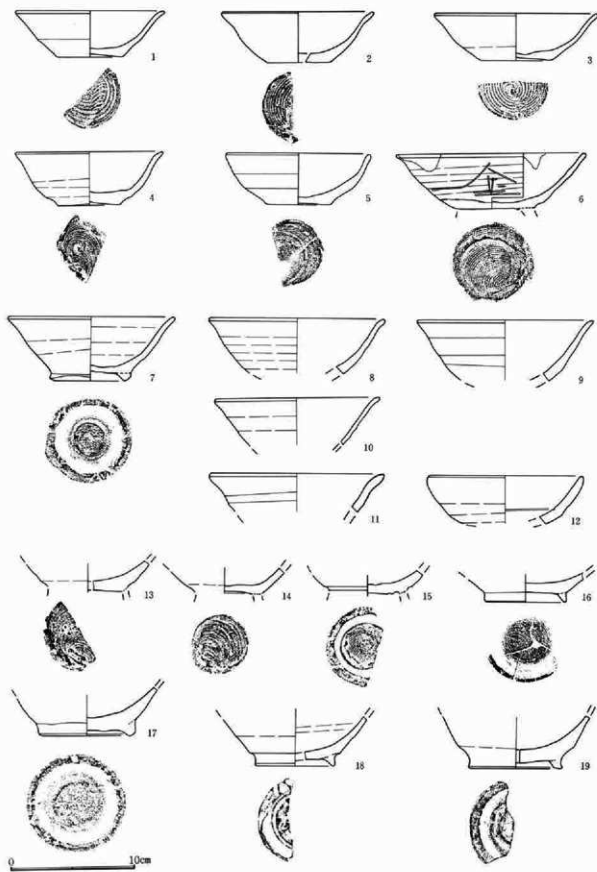
第77図 39号住居

第3章 検出された遺構と遺物



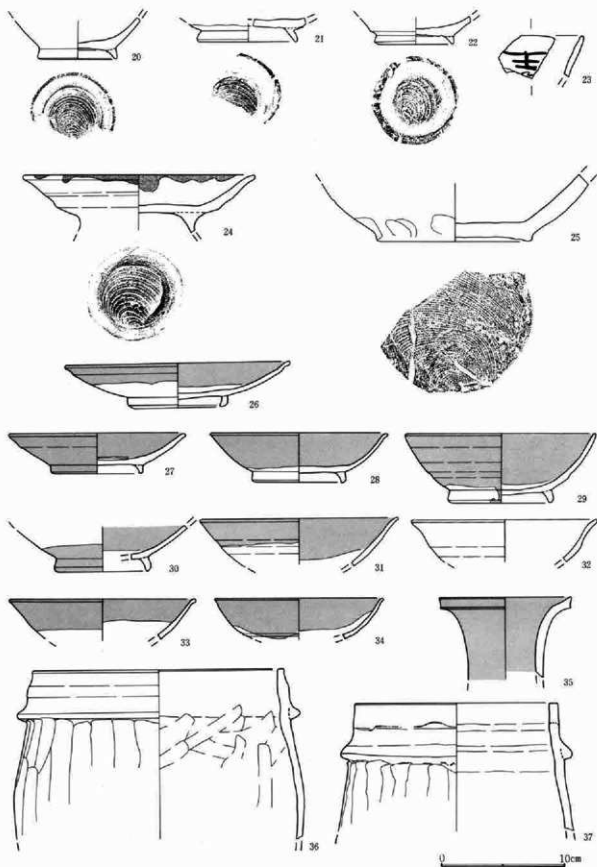
第78図 39号住居層

第1節 竪穴住居



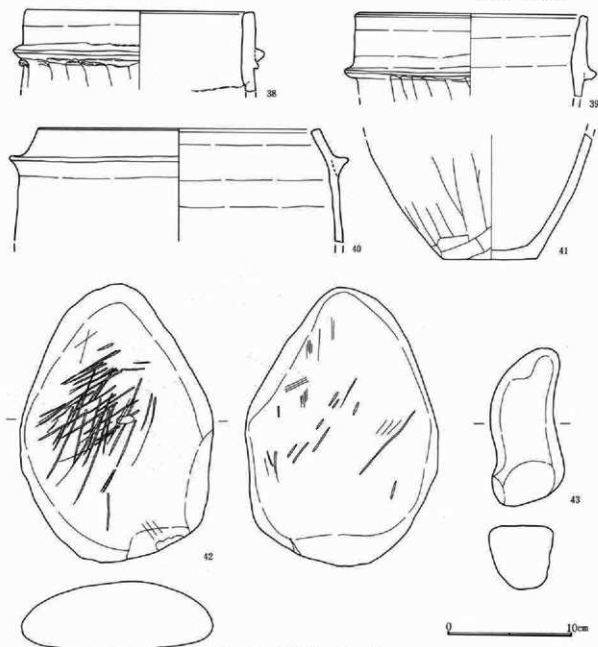
第79図 39号住居出土遺物 (1)

第3章 検出された遺構と遺物



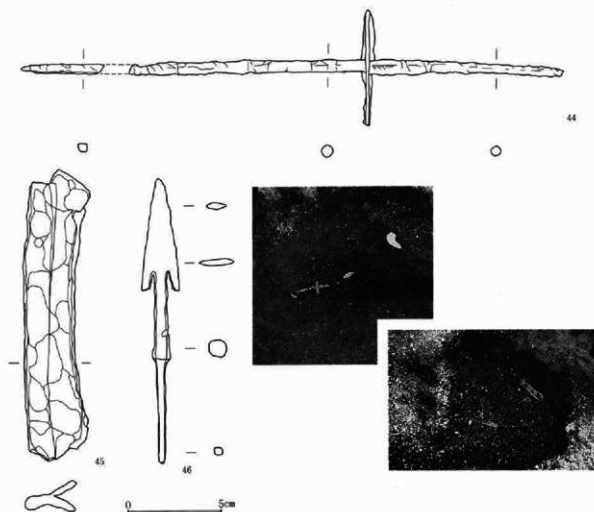
第80図 39号住居出土遺物(2)

第1節 竪穴住居



第81図 39号住居出土遺物 (3)

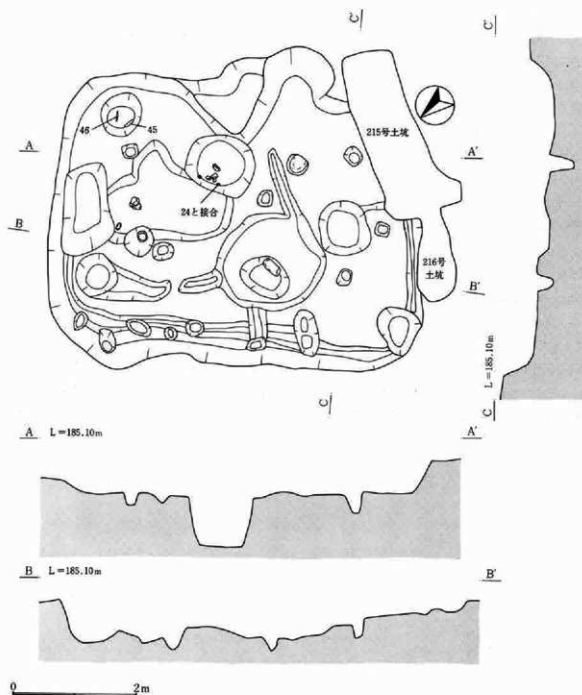
第-80図 28 PL-52	灰軸 筒	埋土 1/3	口径 13.8 底径 6.8 器高 3.8	細砂粒 還元灰 灰黄	内面・外面輪轆整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付、刷毛がけ
第-80図 29 PL-52	灰軸 筒	6.5cm 1/2	口径 15.0 底径 7.8 器高 5.5	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付、つげがけ
第-80図 30 PL-52	灰軸 筒	10cm 底径1/4	口径 - 底径 7.4 器高残 3.5	細砂粒 還元灰 灰白	内面輪轆整形痕、外面下半回転ヘラケズリ、高台貼付
第-80図 31 PL-53	灰軸 筒	東辺 口縁部1/5	口径 15.8 底径 - 器高残 3.7	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆整形痕
第-80図 32 PL-53	須恵器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 15.1 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪轆整形痕



44

第82図 39号住居出土遺物(4)

第-80回 33 PL-53	灰軸 輪	埋土 口縁部1/5	口径 4.8 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 還元灰 灰白・灰黄	内面・外面輪軸整形痕	
第-80回 34 PL-53	灰軸 輪	埋土 口縁部1/5	口径 13.4 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 還元灰 灰白・灰	内面・外面輪軸整形痕	
第-80回 35 PL-53	灰軸 長頸蓋	埋土 口縁部1/5	口径 10.5 底径 - 器高残 6.3	細砂粒 還元灰 明オリブ灰・灰	内面・外面輪軸整形痕	
第-80回 36 PL-53	須恵器 羽釜	12cm 口縁部- 体部上半	口径 19.9 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 還元灰 淡黄	口縁部、内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ、 窪貼付、ゆがみあり	
第-80回 37 PL-53	須恵器 羽釜	11cm 口縁部- 体部上半	口径 16.0 底径 - 器高残10.0	細砂粒 還元灰 灰白	口縁部、内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ、 窪貼付	
第-81回 38 PL-53	須恵器 羽釜	埋土 口縁部- 体部上半	口径 17.9 底径 - 器高残 6.2	細砂粒 還元灰 灰黄褐色	口縁部、内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ、 窪貼付	
第-81回 39 PL-53	須恵器 羽釜	埋土 口縁部- 体部上半	口径 17.6 底径 - 器高残 6.4	細砂粒 還元灰 にぶい橙	口縁部、内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ、 窪貼付	
第-81回 40 PL-53	須恵器 羽釜	埋土 口縁部- 体部1/4	口径 22.4 底径 - 器高残 8.9	やや粗砂粒 還元灰 灰	口縁部、内面輪軸整形痕、外面ヨコナデ、窪 貼付	



第83図 39号住居掘り方

第- 81 国 41 PL-53	須恵器 羽釜	埋土 底部	口径 - 底径 3.4 器高残 9.9	細砂粒 還元灰 灰	内面輪縁整形痕、外面ヘラケズリ、底部にモ ミ匠痕						
押図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考		
第 82 図44	PL-53	紡錘車	1.5cm	ほぼ完形	27.6	0.7	0.6				
第 82 図45	PL-53	釜先	土坑内	取付部分のみ	15.4	3.7	0.6				
第 82 図46	PL-53	鉄線	土坑内	ほぼ完形	15.0	2.1	0.4				
押図番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備	考
第 81 図42	PL-53	磁石	9.0cm	粗粒安山岩	22.0	15.3	5.3	2850.0			
第 81 図43	PL-53	棒状礫	1.5cm	-	12.4	5.1	5.0	558.3			

第3章 検出された遺構と遺物

40号住居(第84～88図 PL15・54～56)

位置 BG～BI-80・81 平面形状 隅丸方形と推定される。 残存深度 0.90mを測る。

重複住居 単独で検出された。 規模 東辺は残存部分で2.95m、北辺は4.75mを測る。

主軸方位 N-128°-E 埋没土 40号住居の埋没過程は大きく3段階に分けて考えることができる。まず1次埋没土としてFP粒を含む暗褐色土が住居の床面を覆った(9層、11層、12層、13層)。その後埋まり切らない窪みの上に焼成土坑1群が形成される(27層、28層)。焼成土坑1群が廃絶されると、最後に大量の鉄滓を含む褐色土によって覆い尽くされる(1層)。この鉄滓の詳細については、第5章の理科学分析に譲るが、分析を行った大澤正己氏によれば、これらは鍛錬鍛冶滓に分類され、遺跡内で精錬鍛冶から鉄器製作に至るまでの鍛冶一貫作業を行ったことが想定できるとしている。 壁の状況 床面から117°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。 床面 残存部分の面積は18.162㎡を測る。掘り方床面からPP粒、FAを混合した暗褐色土で10～20cm程度盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。 周溝 住居東辺に見られる。幅は20cm前後、深さは10cm前後である。

貯蔵穴 竈右袖部から検出されている。長軸は1.50m、短軸は0.70mの楕円形で、深さは10～15cmと浅い。土師器甕が出土している(第87図18)。 柱穴 東西間隔2.3m、南北間隔2.6mで、深さは床面から0.3～0.5mを測る。 掘り方 はほぼ平坦である。 竈位置 西辺中央 方位 N-263°-E 規模 煙道部は現有道路の下になる。屋内長は0.70m、袖部幅は0.50mを測る。 形状その他 石組み竈であったと推定される。袖部は左右ともに袖石が残存している。然焼部中央には支脚が見られ、甕を1個体かけるタイプの竈であったことが推定される。煙道部は河原石を暗渠状に組んで作られている。竈前面からは土師器甕が出土している(19)。 遺物 A、B、Cタイプを中心とした土師器杯、長胴甕の他に、馬の歯、鉄鏃、鬚、刀子等が出土している。数多く見られる羽口は、1層からの出土である。 所見 Aタイプの杯が高い比率で出土しているが、体部が浅い。40号住居には、7世紀後半の時期が想定できる。

40号住居出土遺物

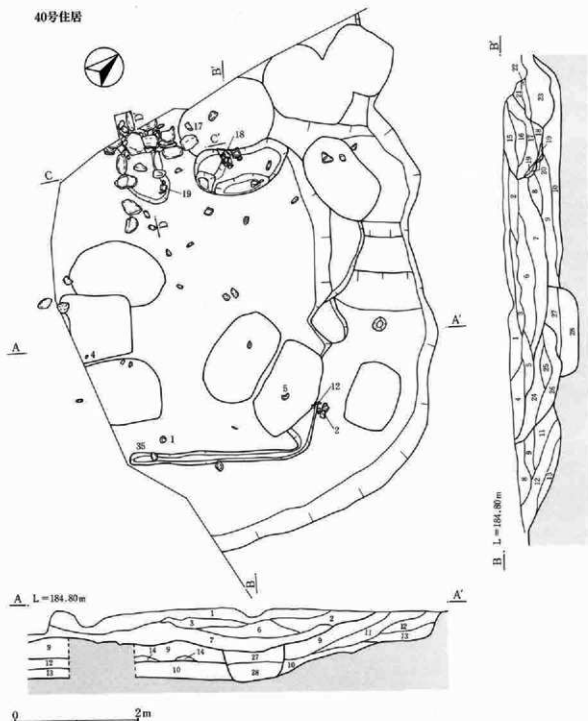
押図番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-87図 1 PL-54	土師器 杯	9cm 完形	口径 12.6 底径 - 器高 4.7	細砂粒 酸化炭 にぶい黄褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状珎文	
第-87図 2 PL-54	土師器 杯	70cm 1/3	口径 12.2 底径 - 器高 4.9	細砂粒 酸化炭 浅黄	口縁部ヨコナデ、内面ミガキ、黒色処理、外面風化していてわからない	
第-87図 3 PL-54	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-87図 4 PL-54	土師器 杯	南辺 1/4	口径 11.4 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-87図 5 PL-54	土師器 杯	9cm 1/2	口径 12.0 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 にぶい粒	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-87図 6 PL-54	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.8 底径 - 器高 (3.1)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-87図 7 PL-54	土師器 杯	埋土 口縁部1/4	口径 12.8 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-87図 8 PL-54	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	

第1節 壁穴住居

第-87回 9 PL-54	土師器 杯	埋土 1/4	口径 14.0 底径 - 器高 (3.7)	細砂粒 酸化炭 にぶい澄	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ミガキ、黒色処理
第-87回 10 PL-54	土師器 杯	埋土 口縁部1/4	口径 14.1 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ
第-87回 11 PL-54	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.4 底径 - 器高残 3.2	細砂粒 酸化炭 にぶい澄	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ
第-87回 12 PL-54	土師器 杯	35-40cm 1/2	口径 15.2 底径 - 器高 6.5	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ、大形の杯
第-87回 13 PL-54	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 3.7	細砂粒 酸化炭 にぶい澄	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ
第-87回 14 PL-54	土師器 杯	埋土 1/3	口径 15.8 底径 - 器高 -	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ
第-87回 15 PL-55	土師器 碗	埋土 1/3 底部欠く	口径 13.6 底径 - 器高残 7.2	細砂粒 酸化炭 にぶい黄澄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面無調整、巻き上げ痕を残す
第-87回 16 PL-55	土師器 杯	埋土 1/4	口径 15.9 底径 - 器高 (5.9)	細砂粒 酸化炭 にぶい濁	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状暗文、螺旋状暗文
第-87回 17 PL-55	須恵器 蓋	甕右袖脇 1/2	口径 14.7 つまみ 5.4 器高 2.0	細砂粒 還元炭 灰	口縁部、内面腫籠整形痕、外面回転ヘラケズリ、つまみ貼付
第-87回 18 PL-55	土師器 甕	甕右袖脇 底部欠損	口径 21.6 底径 - 器高残30.3	細砂粒 酸化炭 濁	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ
第-87回 19 PL-55	土師器 甕	甕中央 口縁部~ 体部1/2	口径 19.5 底径 - 器高残22.7	細砂粒 酸化炭 明濁	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ
第-88回 26 PL-55	土製品 羽口	埋土 先端部	径 7.1 残存長 8.9		先端にガラス質付着
第-88回 27 PL-55	土製品 羽口	埋土 先端部	径 5.6 残存長 5.6		先端にガラス質付着
第-88回 28 PL-56	土製品 羽口	埋土 先端部	径 5.1 残存長 5.4		先端にガラス質付着
第-88回 29 PL-56	土製品 羽口	埋土 先端部	径 5.9 残存長 7.9		先端にガラス質付着
第-88回 30 PL-56	土製品 羽口	埋土 先端部	径 7.2 残存長 5.8		先端にガラス質付着、スヤを含む
第-88回 31 PL-56	土製品 羽口	埋土 先端部	径 6.0 残存長 4.0		先端にガラス質付着
第-88回 32 PL-56	土製品 羽口	埋土 先端部	径 5.6 残存長 5.0		先端にガラス質付着
第-88回 33 PL-56	土製品 羽口	埋土 先端部	径 6.0 残存長 3.4		先端にガラス質付着
第-88回 34 PL-56	土製品 羽口	埋土 先端部	径 4.2 残存長 3.0		先端にガラス質付着

第3章 検出された遺構と遺物

40号住居



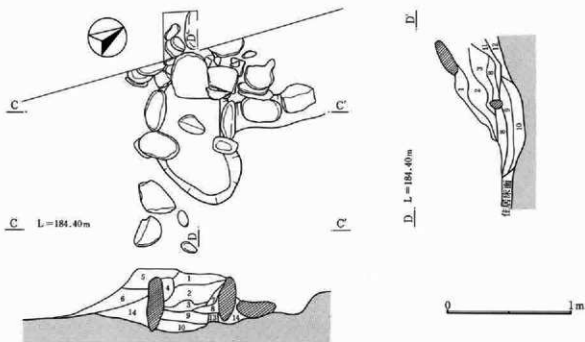
40号住居

- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|--|
| 1 褐色土 | 3~20mmのFP粒を20%、焼土粒を2%、鉄滓を多く含む | 9 暗褐色土 | 3~50mmのFP粒を40%、焼土を3% |
| 2 暗褐色土 | 2~7mmのFP粒を10%、炭化物を5~10% | 10 暗褐色土 | 3~20mmのFP粒を5%、FA小ブロックを10%、焼土粒、炭化物を2~3% |
| 3 暗褐色土 | 2に似るが、炭化物を多く含む | 11 暗褐色土 | 3~20mmのFP粒を5% |
| 4 暗褐色土 | 2に似るが、炭化物をやや多く含む | 12 暗褐色土 | 3~10mmのFP粒を5%、FA小ブロックを10% |
| 5 暗褐色土 | 2に似るが、炭化物を極めて多く含む | 13 暗褐色土 | 3~40mmのFP粒を3%、FAブロックを30% |
| 6 暗褐色土 | 3~15mmのFP粒を10~20%、焼土粒を1~2% | 14 暗褐色土 | 2~5mmのFP粒を5%、炭化物を30% |
| 7 暗褐色土 | 3~30mmのFP粒を10~30%、炭化物を5% | 15 黒褐色土 | 3~20mmのFP粒を50~80% |
| 8 暗褐色土 | 7に似るが、FP粒を多く含む | 16 暗褐色土 | 3~15mmのFP粒を20%、炭化物を5% |

第84図 40号住居

第1節 竪穴住居

- 17 暗褐色土 3-15mmのFP粒を20%、炭化物を10-20%
 18 暗褐色土 2-5mmのFP粒を10%
 19 黒色土 炭化物主体
 20 灰褐色土 シルト質
 21 黒褐色土 3-10mmのFP粒を50-80%
 22 暗褐色土 FP粒を5%、FA小ブロックを10%
 23 黒褐色土 21に似る
 24 暗褐色土 3-10mmのFP粒を10%、炭化物30%
 25 暗褐色土 24に似るが、炭化物がやや少ない
 26 暗褐色土 3-10mmのFP粒を3%、FAを5%、炭化物を5%
 27 暗褐色土 3-50mmのFP粒を多く含む、機土を含む
 28 暗褐色土 3-20mmのFP粒を50-80%

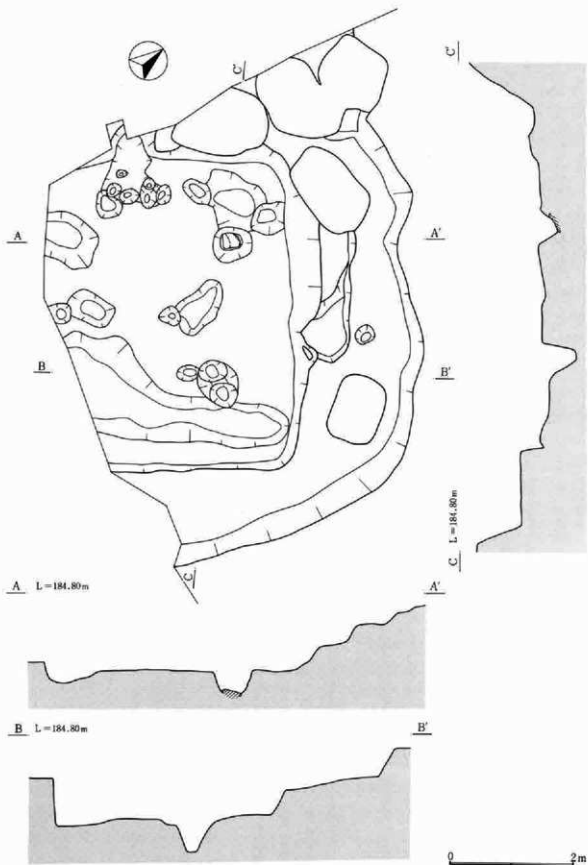


40号住居層

- 1 暗褐色土 3-5mmのFP粒を2%、やや灰色味を帯びる
 2 暗褐色土 焼土粒を5-10%、FP粒を5%
 3 暗褐色土 焼土粒を10%、FP粒は含まない
 4 暗褐色土 炭化物を1-2%
 5 褐色土 3-5mmのFP粒を5%
 6 褐色土 3-5mmのFP粒を5%、黒色土小ブロック、FA小ブロックを3%、炭化物を1%
 7 褐色土 焼土を30%
 8 黒褐色土 灰ブロックを20-30%
 9 灰褐色土 灰、機土を含む
 10 赤褐色土 ロームの焼土化
 11 暗褐色土 焼土粒を2-3%
 12 暗褐色土 焼土粒を5%
 13 暗褐色土 灰、機土、炭化物を20%
 14 暗褐色土 ロームブロックを10%、粘質土

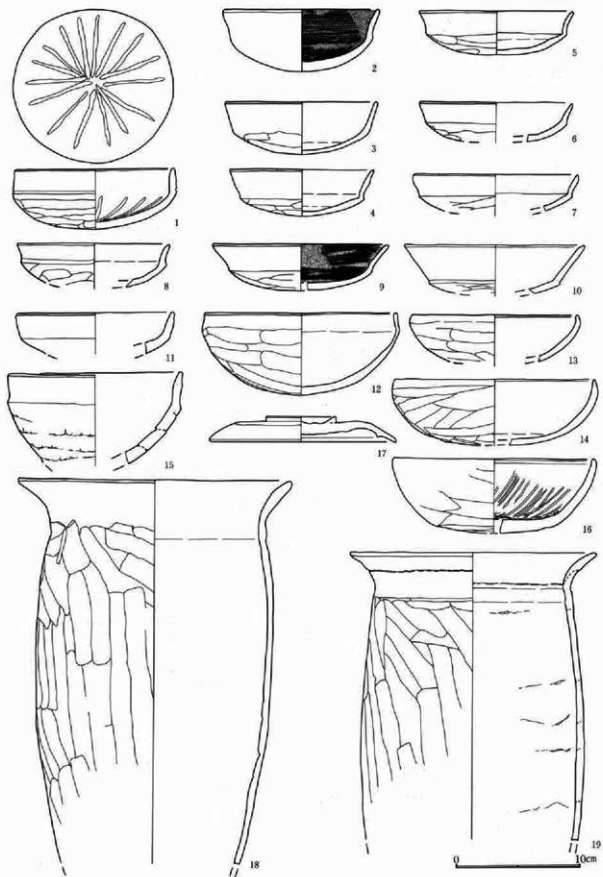
第85図 40号住居層

採目番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備考		
第88 図21	PL-55	鉄鏃	埋土	刃部のみ、片刃の鏃	7.1	0.7	0.4			
第88 図22	PL-55	鏃	埋土	ほぼ完形	6.5	2.9	1.5			
第88 図23	PL-55	鉄塊	埋土	器種不明	5.4	6.5	2.9			
第88 図24	PL-55	刀子	埋土	柄部のみ	6.1	0.9	0.7			
第88 図25	PL-55	刀子	埋土	柄部のみ	8.3	1.2	0.4			
採目番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第88 図35	PL-56	棒状鏃	35.0cm	楕円安山岩		14.7	6.6	3.8	499.9	
第88 図36	PL-56	石核	埋土	黒曜石		2.5	3.4	1.5	15.6	
第88 図37	PL-56	剥片	埋土	-		4.8	5.8	1.0	31.0	
採目番号	図版番号	動物名	部	位	長さ	備考				
第88 図20	PL-55	ウマ	左上顎臼歯		7.5					



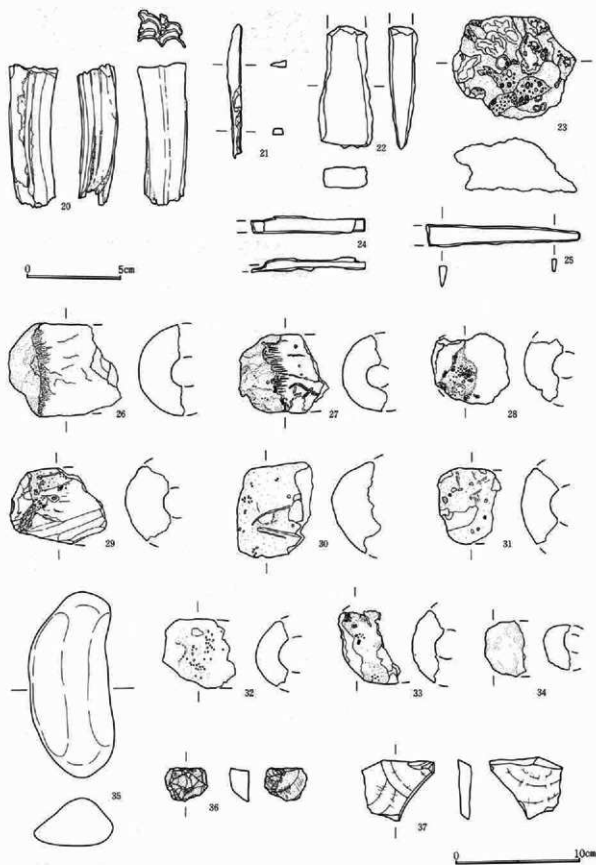
第86図 40号住居掘り方

第1節 竪穴住居



第87図 40号住居出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第88図 40号住居出土遺物 (2)

42号住居(第89図 PL.56・57)

位置 BE・BF-82 40号住居の南に位置し、南東の43号住居と主軸をほぼ同じくして並んでいる。

平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.45mを測る。 重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は残存部分で2.40m、北辺は残存部分で2.05mを測る。 主軸方位 N-152°-E

埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁際には住居廃絶後最初に崩落したFP粒が溜まっている(4層)。 壁の状況 床面から137°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出されなかった。 床面 面積は残存部分で2.520m²を測る。掘り方床面から褐色土を混合したFAで5~10cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。

周溝 住居北辺、東辺で検出されている。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 掘り方 全体に細かな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。

竈位置 東辺中央 方位 N-160°-E 規模 全長は0.70m(屋外長0.30m、屋内長0.40m)、袖部幅は0.40mを測る。 形状その他 両袖に袖石を使用し、煙道部は短い。燃焼部で須恵器杯が1個体出土している。 遺物 酸化炎焼成で、底部回転糸切り無調整の須恵器碗(第89図1、2)と、還元炎焼成の須恵器碗(3、4)が見られ、他に「コ」の字に近い形の口縁部を持つ土師器甕が出土している。

所見 出土した遺物から見て、42号住居には9世紀前半の時期が想定できる。



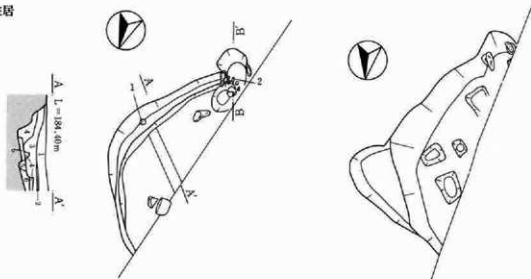
42号住居 検出状況
(北から)

42号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法	量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-89図 1 PL-56	須恵器 碗	13.7cm 1/4	口径 底径 器高	12.6 5.6 3.8	細砂粒 還元炎 にぶい焼	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り	
第-89図 2 PL-56	須恵器 碗	床面密着 1/5	口径 底径 器高	12.8 5.0 4.4	細砂粒 還元炎 灰青	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り	
第-89図 3 PL-56	須恵器 碗	埋土 底部1/4	口径 底径 器高残	- - 2.2	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面轆轤整形痕、高台貼付(剥離)	
第-89図 4 PL-56	須恵器 碗	埋土 口縁部1/5	口径 底径 器高残	12.0 - 3.5	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面轆轤整形痕	
第-89図 5 PL-56	須恵器 碗	埋土 口縁部小 片	口径 底径 器高	- - -	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面轆轤整形痕	器 判読不能
第-89図 6 PL-57	土師器 甕	埋土 口縁部~ 体部上手	口径 底径 器高残	18.4 - 8.0	細砂粒 酸化炎 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ	

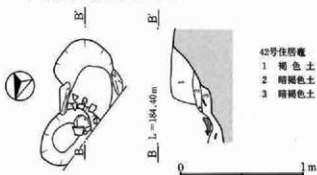
第3章 検出された遺構と遺物

42号住居



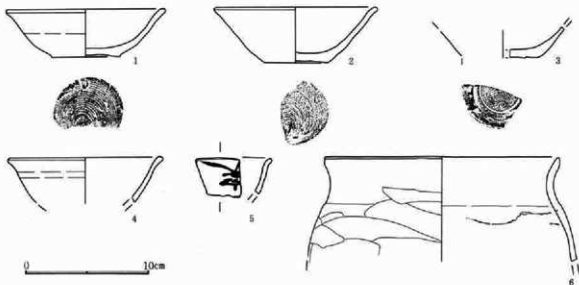
42号住居

- 1 暗褐色土 3-5mmのFP粒を20%
- 2 炭化物
- 3 褐灰色土 焼土ブロックを10%、2-5mmのFP粒を10%
- 4 礫石 褐色土を10%
- 5 褐色土 3-5mmのFP粒を20%
- 6 褐灰色土 褐色土を10% (床下)



42号住居竈

- 1 褐色土 1-3mmのFP粒を30%、焼土、炭化物を僅かに含む
- 2 暗褐色土 FAブロックを30%、やや灰色を帯びる
- 3 暗褐色土 1-3mmのFP粒を5%、FAブロックを10%、焼土を含む



第89図 42号住居・掘り方・竈・出土遺物

43号住居(第90～92図 PL17・57・58)

位置 BC・BD-81・82 北西に隣接する43号住居と主軸をほぼ同じくして並んでいる。

平面形状 南北に長い隅丸方形を呈する。 残存深度 0.80mを測る。 重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は2.50m、南辺は4.50m、北辺は残存部分で2.20mを測る。 主軸方位 N-130°-E

埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。 壁の状況 床面から約130°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出されなかった。 床面積は残存部分で8.289㎡を測る。掘り方床面からFP粒を混合したFAを貼って床としている(7層)。

周溝 住居北東コーナー部分で幅15～20cm、深さ3～5cmの周溝が検出されている。

貯蔵穴 竪右袖部脇で検出されている。径0.80mの円形で、深さは床面から14～17cmである。貯蔵穴内からは、酸化炭焼成の須恵器杯が2個体出土している(第91図1、8)。 柱穴 検出されなかった。

掘り方 住居東半中央部と西半に大きく掘り込まれている部分がある。東半中央部の掘り込まれている部分にはFP粒が詰まっていた。このFP粒の上にも床が貼ってあったことから、住居廃絶後に流れ込んだものではなく、使用時に既に存在していたものと思われる。

竪位置 南辺中央 方位 N-140°-E 規模 全長は0.90m(屋外長0.75m、屋内長0.15m)、袖部幅0.40mを測る。 形状その他 袖部はFA、FP粒を僅かに混合したものを材として作られており、両袖部とも30～40cm大の河原石を袖石として使用している。右袖部は比較的残存状態が良好で、袖石と共に燃焼部側壁を保護するためのやや大形の平石などが検出されている。煙道部は短く、住居の南辺と煙道部の先端はほぼ一致する。燃焼部内から羽釜が1個体出土している(第91図10)。

遺物 酸化炭焼成で底部回転承切り無調整か粗雑な高台が付く須恵器碗と、羽釜を中心とする遺物構成であるが、土器器面にやや古い様相を残している(第91図15～17)。住居中央や東よりから検出された骨は人骨の可能性もあるとされたが、遺存状態が極めて悪く、取り上げられなかった。鉄鍬は骨の付近で検出された。 所見 出土した遺物から見て、43号住居には10世紀前半の時期が想定できる。

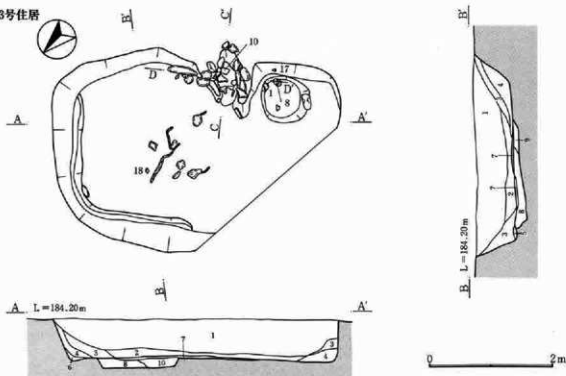
43号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-91図 1 PL-57	須恵器 碗	14.9cm 1/3	口径 13.0 底径 5.1 器高 4.2	細砂粒 還元炭 黒	内面・外面輪縁整形痕、底部回転承切り無調整、内面いぶし	
第-91図 2 PL-57	須恵器 碗	埋土 1/4底部欠 く	口径 16.4 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 還元炭 青褐色	内面・外面輪縁整形痕	
第-91図 3 PL-57	須恵器 碗	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 還元炭 黒	内面・外面輪縁整形痕、いぶし	
第-91図 4 PL-57	須恵器 碗	埋土 底部1/4	口径 - 底径 - 器高 5.4	細砂粒 還元炭 明オリーブ灰	底部回転承切り後周辺ヘラケズリ	
第-91図 5 PL-57	須恵器 碗	埋土 底部1/4	口径 - 底径 6.0 器高残 1.5	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転承切り、いぶし	
第-91図 6 PL-57	須恵器 碗	埋土 底部1/2	口径 - 底径 5.0 器高残 2.2	細砂粒 還元炭 灰黄	内面・外面輪縁整形痕、底部手持ちヘラケズリ、いぶし	
第-91図 7 PL-57	須恵器 碗	埋土 1/4	口径 15.0 底径 7.0 器高 6.1	やや粗砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転承切り後高台貼付	

観察表の続きは128ページ

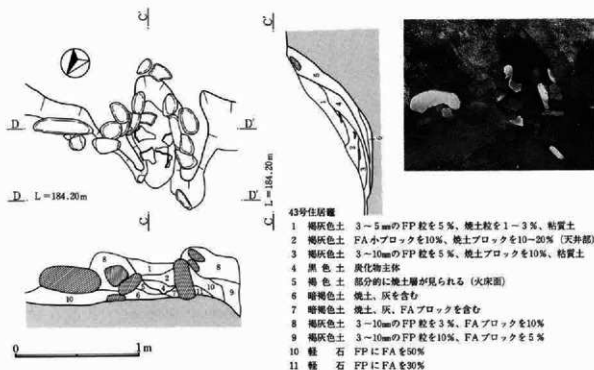
第3章 検出された遺構と遺物

43号住居



43号住居

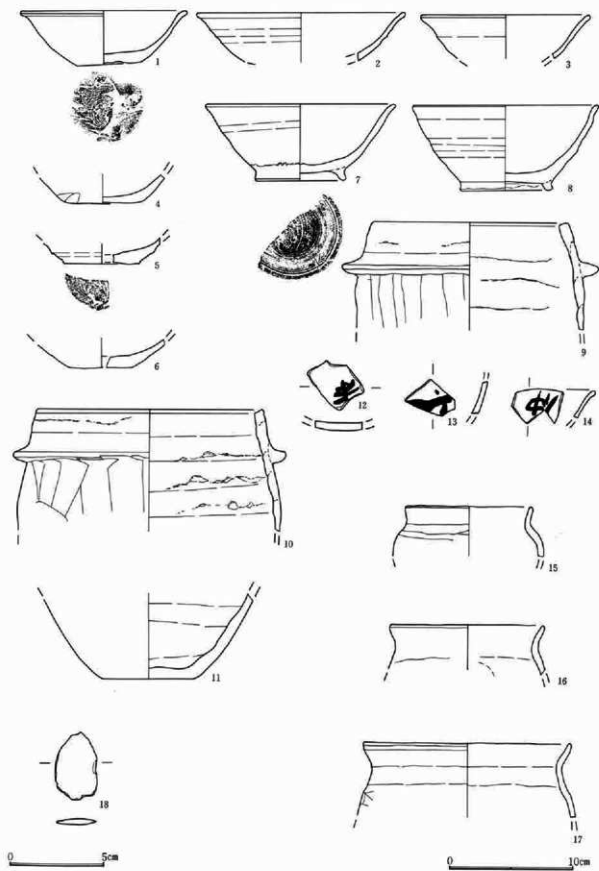
- | | | | |
|--------|--------------------------|---------|--------------------------|
| 1 褐褐色土 | 3~8mmのFP粒を10~20%、FAを2% | 6 黒褐色土 | 3~10mmのFP粒を10% |
| 2 黒褐色土 | 2~5mmのFP粒を5%、FAブロックを10% | 7 褐灰色土 | FP粒、FAブロックを僅かに含む(貼り床部分) |
| 3 黒褐色土 | 5~20mmのFP粒を20% | 8 軽石 | FP粒が覆まっていた |
| 4 黒褐色土 | 5~20mmのFP粒を20%、FAブロックを5% | 9 黒褐色土 | 3~5mmのFP粒を5%、FAブロックを20% |
| 5 褐灰色土 | FAブロック | 10 黒褐色土 | 3~5mmのFP粒を20%、FAブロックを10% |



43号住居壁

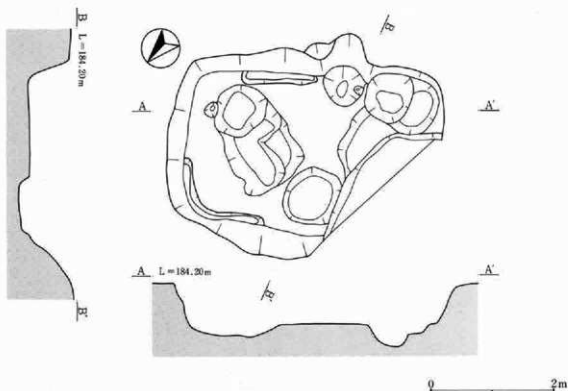
- | | |
|--------|--------------------------------|
| 1 褐灰色土 | 3~5mmのFP粒を5%、焼土粒を1~3%、粘質土 |
| 2 褐灰色土 | FA小ブロックを10%、焼土ブロックを10~20%(天井部) |
| 3 褐灰色土 | 3~10mmのFP粒を5%、焼土ブロックを10%、粘質土 |
| 4 黒色土 | 炭化物主体 |
| 5 褐色土 | 部分的に焼土層が見られる(火床面) |
| 6 暗褐色土 | 焼土、灰を含む |
| 7 暗褐色土 | 焼土、灰、FAブロックを含む |
| 8 褐灰色土 | 3~10mmのFP粒を3%、FAブロックを10% |
| 9 褐灰色土 | 3~10mmのFP粒を10%、FAブロックを5% |
| 10 軽石 | FPにFAを50% |
| 11 軽石 | FPにFAを30% |

第90図 43号住居・壁



第91图 43号住居出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



第92図 43号住居掘り方

第-91図 8 PL-57	須恵器 碗	22.5cm 口縁部3/4 欠損	口径 14.5 底径 6.7 器高 6.7	細砂粒 還元炭	内面・外面輪軸整形痕、高台貼付				
第-91図 9 PL-57	須恵器 羽釜	口縁部1/4	口径 15.5 底径 - 器高残 8.4	粗砂粒 酸化炭 にぶい黄粒	口縁部、内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ、 脚踏付				
第-91図 10 PL-57	須恵器 羽釜	26.9cm 口縁部へ 体部上半	口径 17.9 底径 - 器高残 9.6	粗砂粒 酸化炭 にぶい黄粒	口縁部、内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ、 脚踏付				
第-91図 11 PL-57	須恵器 羽釜	埋土 底部1/2	口径 - 底径 7.0 器高残 6.7	細砂粒 還元炭 にぶい黄粒	内面・外面輪軸整形痕				
第-91図 12 PL-57	土師器 杯	埋土 小片	口径 - 底径 - 器高 -	細砂粒 酸化炭 澄	外面ヘラケズリ	遺書 判読不能			
第-91図 13 PL-57	須恵器 碗	埋土 小片	口径 - 底径 - 器高 -	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕	遺書 判読不能			
第-91図 14 PL-57	須恵器 碗	埋土 口縁部小 片	口径 - 底径 - 器高 -	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕	遺書 「仲」か			
第-91図 15 PL-58	土師器 台付甕	埋土 口縁部	口径 10.0 底径 - 器高残 3.9	細砂粒 酸化炭 黒黒	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ				
第-91図 16 PL-58	土師器 台付甕	埋土 口縁部	口径 12.0 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、 外面ヘラケ ズリ				
第-91図 17 PL-58	土師器 甕	46.5cm 口縁部1/5	口径 16.4 底径 - 器高残 5.8	細砂粒 酸化炭	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ				
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考
第91図16	PL-58	鉄鏝	9.2cm	刃部のみ	3.5	2.2	0.25		

45号住居(第93・94図 PL17・18・58)

位置 CM・CN-72・73 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.70mを測る。

重複住居 46号住居より新しい。 規模 東辺は5.00m、西辺は復元で4.00m、南辺は復元で4.60m、北辺は4.20mを測る。 主軸方位 N-85°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とし、ほぼ水平堆積である。自然堆積であると考えられる。 壁の状況 床面から約110°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。 床面 面積は残存部分で18.126㎡を測る。掘り方床面から、FAを含む黒褐色土で10cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。

周溝 住居北辺で幅20cm前後、深さ10cm前後の周溝が検出されている。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 東西間隔2.25m、南北間隔2.20mで、柱穴間を直線で結ぶとほぼ正方形を描く。柱穴間を結んだ正方形は、住居の中心より僅かに南にずれている。深さは床面から0.13~0.57mを測る。

掘り方 掘り方床面はほぼ平坦であるが、住居壁際を周溝状に掘りくぼめている。

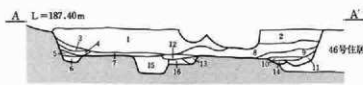
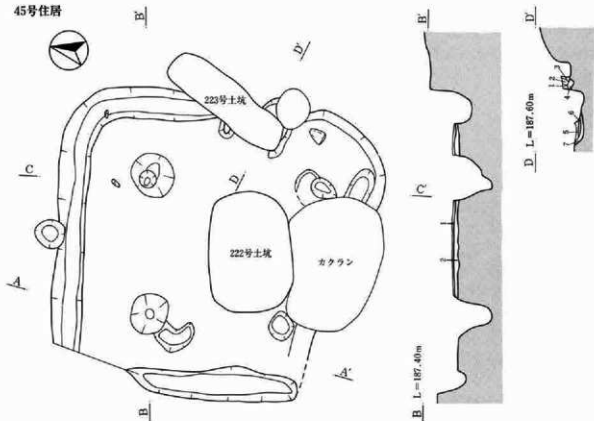
竈位置 東辺中央や南寄り 方位 N-115°-E 規模 覆土で大部分を破壊されており、詳細は不明である。残存長は0.95m、袖口幅は0.80mを測る。 形状その他 詳細は不明であるが、石組み竈ではなく、煙道部の短いタイプであると考えられる。 遺物 比較的浅いB、Dタイプの土師器杯、放射状、螺旋状縮文をもつEタイプの土師器杯、直線的に外傾し、底部回転ヘラ切り無調整の須恵器杯等が出土している。 所見 出土した遺物から見て、45号住居には8世紀後半の時期が想定できる。

45号住居出土遺物

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 埋没状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-94図 1 PL-58	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.8 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-94図 2 PL-58	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-94図 3 PL-58	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 2.7	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-94図 4 PL-58	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.9 底径 - 器高 (3.3)	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-94図 5 PL-58	土師器 杯	埋土 1/4	口径 14.1 底径 - 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、放射状縮文・螺旋状縮文	
第-94図 6 PL-58	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高 (5.5)	細砂粒 酸化炭 にぶい黄褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、放射状縮文、外面マキアゲ痕	
第-94図 7 PL-58	須恵器 杯	埋土 1/5	口径 12.7 底径 8.7 器高 3.1	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラ切り	
第-94図 8 PL-58	須恵器 杯	埋土 1/5	口径 12.0 底径 8.3 器高 3.0	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズリ	
第-94図 9 PL-58	須恵器 杯	埋土 底部のみ	口径 - 底径 8.5 器高残 2.2	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラ切り無 調整	
第-94図 10 PL-58	土師器 壺	埋土 口縁部	口径 14.0 底径 - 器高残 5.4	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ、口縁部(新痕)	
棟号 第-94 0011	図版番号 PL-58	動物名 -	部 位	長さ 9.5	備 考	

第3章 検出された遺構と遺物

45号住居



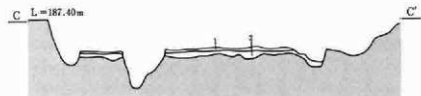
45号住居

- 1 暗褐色土 3-5mmのFP粒を多く含む
- 2 暗褐色土 11に似る
- 3 軽石 4-5mmのFP粒主体 (FPの崩落)
- 4 黒色土 しまりがない
- 5 軽石 3とはおなじ (FPの崩落)
- 6 暗褐色土 6-7mmのFP粒を多く含む
- 7 黒褐色土 6に似るがやや黒色味が強い
- 8 暗褐色土 黒色土ブロックを含む

45号住居

- 1 暗褐色土 焼土ブロックを含む
- 2 褐色土 焼土ブロック、FAブロックを含む
- 3 褐色土 ロームブロックを含む
- 4 赤褐色土 焼土主体、暗褐色土ブロックを含む
- 5 赤褐色土 焼土主体
- 6 黄褐色土 灰を大量に含む
- 7 褐色土 上面に焼土ブロックを含む

- 9 暗褐色土 3-5mmのFP粒を多く含む
- 10 黒褐色土 FAブロックを含む
- 11 褐色土 4-5mmのFP粒を多く含む
- 12 暗褐色土 2-3mmのFP粒、黒色土ブロックを含む
- 13 褐色土 3-7mmのFP粒を多く含む
- 14 暗褐色土 2-10mmのFP粒を多く含む
- 15 褐色土 柱穴周辺
- 16 褐色土 15に似る

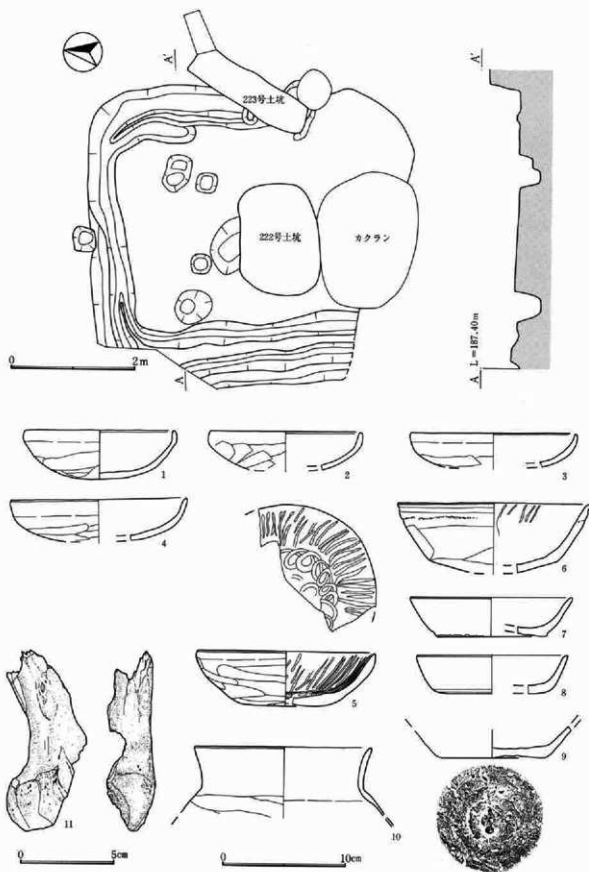


45号住居 C-C'

- 1 暗褐色土 FAブロック、FP粒を含み、上面が礫化 (床面)
- 2 黒褐色土 FAブロックを多く含み、FP粒を僅かに含む



第93図 45号住居



第94図 45号住居掘り方・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

46号住居(第95図 PL.18・59)

位置 CL・CM-73・74 2区から3区にかけての住居の集地点の北端部に位置する。ここより北では住居の数は極端に少なくなる。また、近現代の覆乱が多く、住居の残りは極めて悪い。

平面形状 南北に長い隅丸長方形を呈する。 残存深度 0.65mを測る。

重複住居 45号住居より古い。 規模 東辺は7.00m、西辺は6.40m、南辺は3.30m、北辺は3.30mを測る。南辺、北辺と比較して東辺、西辺がほぼ倍の長さである。白井二位屋遺跡からは、小形で長方形の住居は何軒か検出されているが、これほど大形で長方形の例は他に見られない。 主軸方位 N-87°-E
埋没土 FP粒を含む黒褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。住居の隅には、最初に崩落したと考えられるFP粒が壁際に堆積している(3層、8層)。

壁の状況 床面から101°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。

床面 面積は23.787㎡を測る。掘り方床面から、一部にFAを含む黒褐色土を貼って床としている。床は1面しか検出されなかった。

周溝 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。

掘り方 ほぼ平坦であるが、住居全体に数箇所掘り進めている部分がある。

竈 検出されなかった。 遺物 直線的に外傾して立ち上がり、底部に回転ヘラケズリを持つ須恵器杯が出土している。また図化できなかったが、鉄滓が数点出土していることも注目される。

所見 出土した遺物、重複する45号住居との関係等を考慮すると、46号住居には8世紀前半の時期が想定できる。

46号住居出土遺物

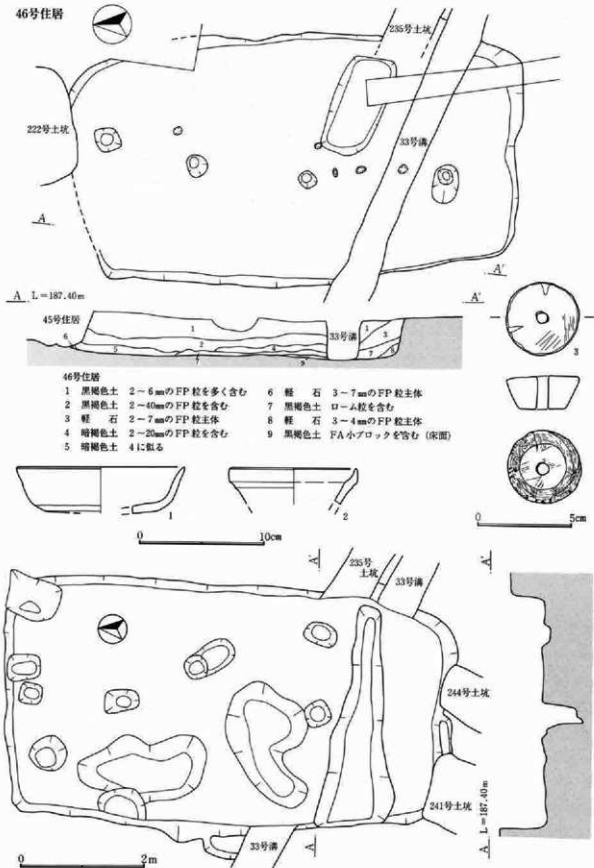
検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考				
第-95図 1 PL-59	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 13.4 底径 8.0 器高 3.6	細砂粒 還元炎 灰	内面・外面縦縞整形痕、底部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ					
第-95図 2 PL-59	須恵器 壺	埋土 口縁部1/4	口径 10.0 底径 - 器高残 2.9	粗砂粒 還元炎 灰	内面・外面縦縞整形痕					
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第95図3	PL-59	紡錘車	埋土	滑石		3.9	3.9	1.8	40.1	



住居全景(西から)



住居全景(東から)



第95図 46号住居・掘り方・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

47号住居(第96国 PL18・59・60)

位置 CG～CI-73・74 最も住居が集中して検出された地点で、44号、48号、49号、50号、51号、53号、54号住居等と近接し、これらの住居の中では、44号住居と並んで最も新しい住居である。

平面形状 隅丸方形と推定される。残存深度 0.35mを測る。重複住居 48・49号住居より新しい。

規模 西辺、南辺の一部が残存しているのみで測定不能である。主軸方位 N-105°-E

埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から約110°の角度で立ち上がる。床面 掘り方床面から一部にローム、焼土、FAを含む暗褐色土を貼って床としている(3層、平面スクリーントーン貼り付け部分)。床は1面しか検出されなかった。

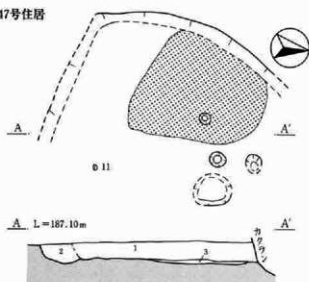
周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

掘り方 はほぼ平坦である。竈 検出されなかった。遺物 A、C、Dタイプの土師器杯、直線的に外傾し、底部に回転ヘラケズリを施す須恵器杯、酸化炭成で、底部回転糸切り無調整の須恵器杯等が出土している。所見 出土した遺物の時期に幅があり住居の時期を特定することができない。

47号住居出土遺物

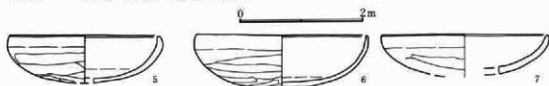
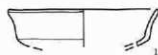
検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-96国 1 PL-59	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.0 底径 - 器高残 2.9	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-96国 2 PL-59	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (3.2)	細砂粒 酸化炭 明焼	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-96国 3 PL-59	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 11.4 底径 - 器高 (2.5)	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-96国 4 PL-59	土師器 杯	埋土 1/2	口径 11.3 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ	
第-96国 5 PL-59	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.8 底径 - 器高 (3.7)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-96国 6 PL-59	土師器 杯	埋土 1/2	口径 13.6 底径 - 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-96国 7 PL-59	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 酸化炭 にぶい澄	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-96国 8 PL-59	土師器 盤	埋土 1/2	口径 18.4 底径 - 器高 4.1	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-96国 9 PL-59	須恵器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 12.0 底径 7.5 器高 3.4	細砂粒 酸化炭気味 灰黄褐色	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラ切り後丁寧な手持ちヘラケズリ	
第-96国 10 PL-59	須恵器 杯	埋土 完形	口径 12.6 底径 6.3 器高 -	細砂粒 酸化炭 にぶい黄褐色・黒	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り無調整、いぶし	底部に刻印「x」
第-96国 11 PL-59	須恵器 碗	2.5cm 1/4	口径 12.0 底径 (5.4) 器高 3.7	やや粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-96国 12 PL-59	須恵器 碗	埋土 口縁部1/5	口径 13.0 底径 - 器高残 2.5	やや粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、いぶし	
第-96国 13 PL-60	須恵器 高杯	埋土 胴部のみ	口径 - 底径 - 器高残 7.6	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸整形痕	

47号住居



47号住居

- 1 暗褐色土 2-3mmのFP粒を含む
- 2 黒褐色土 2-10mmのFP粒を含む
- 3 暗褐色土 ローム、焼土、FAが細かい互層となる(床面)



第96図 47号住居・出土遺物

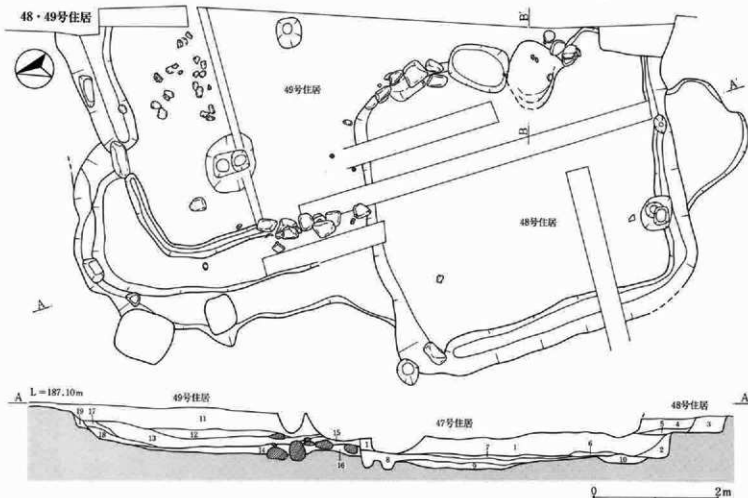
第3章 検出された遺構と遺物

48号住居(第97・98図 PL.18・60・61)

位置 CG-CJ-73・74 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.65m 重複住居 47号住居より古く、49号住居より新しい。 規模 東辺は4.80m、西辺は4.80m、南辺は4.60m、北辺は4.25mを測る。 主軸方位 N-93°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土、暗褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。 壁の状況 床面から108°の角度で立ち上がる。東壁コーナー付近に石を積んで壁を補強した跡が見られる。これは30~50cm大の河原石を立てて据えており、根固めの為に石の隙間は拳大の石を充填している。壁のこの部分のみを石で補強しているのは、49号住居の埋土の部分と壁として利用しているために、崩れ易かったのではないかと推定される。 床面 面積は17.028㎡を測る。掘り方床面からローム、FP粒を含む褐色土で20cm前後盛土し、床としたものと、更に暗褐色土を貼って床とした2面が検出されている。 周溝 住居西辺、南辺で幅20~40cm、深さ30cm前後の周溝が確認されている。 貯蔵穴 検出されなかった。 溝 穴 南北間隔2.85mを測り、深さは床面から0.6mである。 掘り方 はほぼ平坦である。 竈 位置 東辺中央やや南寄り 方位 N-100°-E 規模 全長は推定で1.10m(屋外長0.70m、屋内長0.40m)を測る。 形状その他 右袖部に河原石を使用しているが、残存状態が悪く、詳細は不明である。 遺物 C、Dタイプの土師器杯は体部が浅く比較的新しい要素を持つが、須恵器杯は土師器よりやや古い様相を示す。 所見 遺物は新旧2時期に分けられるが、新しい一群から見ると、48号住居には8世紀後半の時期が想定できる。

48号住居出土遺物

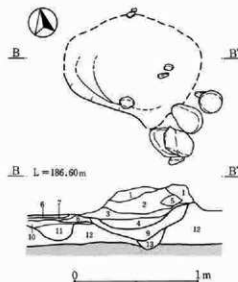
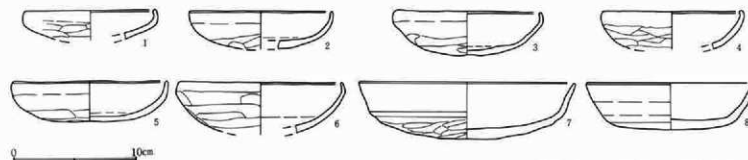
検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-97図 PL-60	土師器 1杯	埋土 口縁部1/5	口径 10.4 底径 - 器高残 2.3	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 2杯	埋土 1/4	口径 11.4 底径 - 器高 (2.9)	細砂粒 酸化灰 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 3杯	埋土 1/4	口径 11.6 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化灰 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 4杯	埋土 口縁部1/5	口径 11.0 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 5杯	埋土 1/3	口径 12.4 底径 - 器高 3.2	細砂粒 酸化灰 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 6杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 3.9	細砂粒 酸化灰 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-97図 PL-60	須恵器 7杯	埋土 1/4	口径 17.0 底径 - 器高 4.5	細砂粒 還元灰 灰	口縁部、内面轆轤変形痕、底部手持ちヘラケズリ	
第-97図 PL-60	須恵器 8杯	埋土 1/4	口径 13.4 底径 (9.0) 器高 3.7	やや粗砂粒 還元灰 灰	内面・外面轆轤変形痕、体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 台付甕	埋土 口縁部1/4	口径 12.4 底径 - 器高残 3.5	細砂粒 酸化灰 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 壺	埋土 口縁部1/4	口径 21.4 底径 - 器高残 4.0	細砂粒 酸化灰 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ(2段)、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-97図 PL-60	土師器 壺	埋土 口縁部1/5	口径 21.8 底径 - 器高残 4.0	細砂粒 酸化灰 明褐色	口縁部ヨコナデ	



48・49号住居

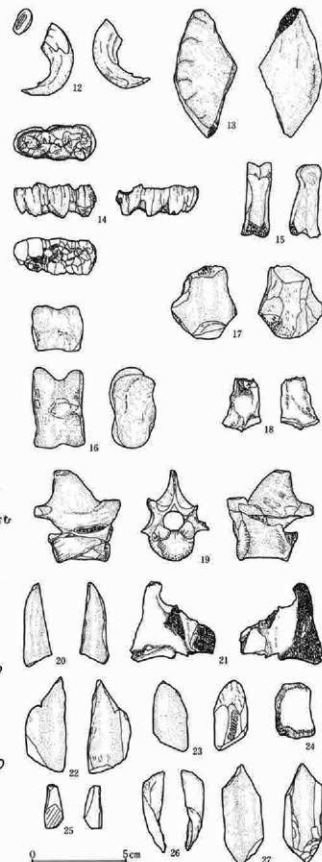
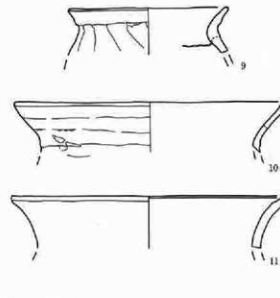
- 1 凝褐色土 4~10mのFP粒を含む(48号住居埋土)
- 2 暗褐色土 4~8mのFP粒、ローム粒を含む(48号住居埋土)
- 3 軽石 3~9mのFP粒主体(48号住居埋土)
- 4 暗褐色土 2~8mのFP粒を含む(48号住居埋土)
- 5 暗褐色土 FAを含む(48号住居埋土)
- 6 褐色土 ロームブロックを多く含む(48号住居埋土)
- 7 暗褐色土 ローム、焼土が互層に入る(48号住居床下)
- 8 褐色土 ローム、FP粒を僅かに含む(48号住居床下)
- 9 褐色土 暗褐色土ブロックを含む(48号住居床下)
- 10 褐色土 FAブロック、FP粒を僅かに含む(48号住居床下)

- 11 褐色土 2~5mのFP粒を含む(49号住居埋土)
- 12 暗褐色土 11に似るが、ややFP粒が多い(49号住居埋土)
- 13 暗褐色土 11に似るがややFP粒が少なく、炭化物を含む(49号住居埋土)
- 14 黒褐色土 30mのFP粒を含み、炭化物を含む(49号住居床下)
- 15 暗褐色土 FP粒、炭化物、焼土ブロックを含む(49号住居埋土)
- 16 暗褐色土 FP粒僅かに含む(49号住居床下)
- 17 軽石 3~9mのFP粒主体(49号住居埋土)
- 18 褐色土 2~3mのFP粒を含み、FAをやや多く含む(49号住居埋土)
- 19 細灰土 3~4mのFP粒を僅かに含む、FAの崩壊土(49号住居埋土)



48号住居遺

- 1 褐色土 FAブロック、焼土ブロックを僅かに含む
- 2 黄褐色土 褐色土ブロック、焼土ブロックを含む
- 3 灰褐色土 灰主体、炭化物、焼土を含む
- 4 暗褐色土 黄褐色土ブロック、炭化物、焼土粒を含む
- 5 黒褐色土 炭化物、焼土粒を含む
- 6 黄褐色土 焼土ブロックを含む
- 7 黄褐色土 焼土ブロックを僅かに含む
- 8 灰褐色土 焼土ブロック、焼土粒を僅かに含む
- 9 黄褐色土 焼土ブロックをやや多く含む、灰のブロックを含む
- 10 褐色土 焼土ブロックを僅かに含む
- 11 赤褐色土 FAブロック、ロームブロック、炭化物、焼土を含む
- 12 暗褐色土 FAブロック、焼土ブロックを僅かに含む
- 13 褐色土 FAブロック、ロームブロック、黒色土ブロックを含む(49号住居埋土)



第97図 48・49号住居・48号住居遺・48号住居出土遺物

採回番号	図版番号	動物名	部位	長さ	備考
第97図12	PL-60	イノシシ	右上顎第1切歯	3.7	
第97図13	PL-60	イノシシ	下顎	6.8	
第97図14	PL-60	イノシシ	右下顎第3後臼歯	4.4	
第97図15	PL-60	—	基節骨	3.9	
第97図16	PL-60	ニホンジカ	右歯骨	4.3	
第97図17	PL-61	ニホンジカ	膝蓋骨	3.8	
第97図18	PL-61	—	—	2.8	
第97図19	PL-61	—	—	4.8	
第97図20	—	—	—	4.3	
第97図21	PL-61	—	—	4.2	
第97図22	—	—	—	4.9	
第97図23	—	—	—	3.7	
第97図24	—	—	セキツイ動物	2.9	
第97図25	—	—	—	2.3	
第97図26	—	—	—	4.3	
第97図27	—	—	—	5.2	

49号住居(第97~104図 PL18・19・61~68)

位置 CG ~ CJ - 73・74 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.70mを測る。

重複住居 47号、48号住居より古い。 規模 西辺は残存部分で3.60m、北辺は残存部分で3.80mを測る。 主軸方位 N-90°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体とした水平堆積であるが、比較的細かく分層が可能で、人為的な埋めの可能性もある。 壁の状況 床面から108°の角度で立ち上がる。住居西辺の一部に石を積んで壁を補強した部分がある。 床面 面積は残存部分で15.750m²を測る。掘り方床面から、FP粒を含む黒褐色土、暗褐色土で10cm前後盛土して床としている。 周溝 西辺、北辺、南辺で、幅30cm前後、深さ10cm前後の周溝が確認されている。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 南北間隔は3.60mで、深さは40~45cmである。掘り方 細かい凹凸が多く、特に柱穴周辺に大きく掘り込まれている部分がある。 竈 検出されなかった。 遺物 土師器杯はC、Dタイプを主体とし、土師器盤は体部外面に弱い稜を持つ。杯、盤共に内面に「×」字の刻印を持つものがある。須恵器杯は体部が深く、底部に手持ち、あるいは回転ヘラケズリを施す。蓋は径が大きく、かえりを持つものと持たないものが併存する。 所見 住居構造に共通性があることから、48号、49号住居は連続して営まれた可能性がある。出土した遺物から見て49号住居には8世紀前半の時期が想定できる。

49号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第99図1 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.8 底径 — 器高 (3.2)	細砂粒 酸化灰 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に幅の広い無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第99図2 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.3 底径 — 器高残 3.3	細砂粒 酸化灰 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第99図3 PL-61	土師器 杯	埋土 1/2	口径 13.4 底径 — 器高 (4.2)	細砂粒 酸化灰 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第99図4 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.8 底径 — 器高 (3.2)	細砂粒 酸化灰 赤褐色 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第99図5 PL-61	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.0 底径 — 器高 (4.9)	細砂粒 酸化灰 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 ヘラケズリ、口縁部粘土を曲げたときのひび 割れ	
第99図6 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 9.9 底径 — 器高残 3.7	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	刻印「×」

第3章 検出された遺構と遺物

第-99回 7 PL-61	土師器 杯	埋土 1/2	口径 11.4 底径 — 器高 3.2	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 8 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.6 底径 — 器高 (2.9)	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ヨコナダ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 9 PL-61	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 11.8 底径 — 器高 3.4	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面ヨコナダ・ヘラナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 10 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.4 底径 — 器高残 3.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ヨコナダ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 11 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 — 器高 (3.4)	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面ヨコナダ・ヘラナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 12 PL-61	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.8 底径 — 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ヨコナダ・ヘラナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 13 PL-62	土師器 杯	埋土 3/4	口径 12.8 底径 — 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面不明、外面上部に無調 整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 14 PL-62	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.1 底径 — 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 15 PL-62	土師器 杯	埋土 3/4	口径 13.2 底径 — 器高 —	細砂粒 酸化炭 にぶい黄橙	口縁部ヨコナダ、内面ナダ・ヨコナダ、外面 上部にやや幅広い無調整帯を持ち下部をヘラ ケズリ	
第-99回 16 PL-62	土師器 杯	埋土 1/4	口径 14.0 底径 — 器高 3.0	細砂粒 酸化炭 にぶい黄	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 17 PL-62	土師器 杯	埋土 1/3	口径 14.0 底径 — 器高 (4.0)	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に幅広い無調整帯を持ち下部をヘ ラケズリ	
第-99回 18 PL-62	土師器 杯	埋土 1/4	口径 14.2 底径 — 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	刻印「X」
第-99回 19 PL-62	土師器 杯	埋土 1/3	口径 15.0 底径 — 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面ナダ・ヨコナダ、外面 ヘラケズリ	
第-99回 20 PL-62	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 15.8 底径 — 器高 4.7	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に一部無調整帯を持ち下部をヘラケ ズリ	刻印「X」
第-99回 21 PL-62	土師器 杯	埋土 1/2	口径 16.8 底径 — 器高 5.6	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面ヘラケズリ	
第-99回 22 PL-62	土師器 杯	埋土 3/4	口径 10.8 底径 — 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-99回 23 PL-62	土師器 杯	埋土 1/3	口径 10.9 底径 — 器高 3.2	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐	口縁部ヨコナダ、内面ナダ・ヨコナダ、外面 上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	刻印「X」
第-99回 24 PL-62	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.1 底径 — 器高 2.9	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100回 25 PL-62	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.2 底径 — 器高 4.0	細砂粒 酸化炭 黒褐	口縁部ヨコナダ、内面ヘラナダ・ヨコナダ、 外面ヘラケズリ	
第-100回 26 PL-63	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 11.2 底径 — 器高 3.1	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナダ、内面不明、外面上部に幅広い 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	

第1節 堅穴住居

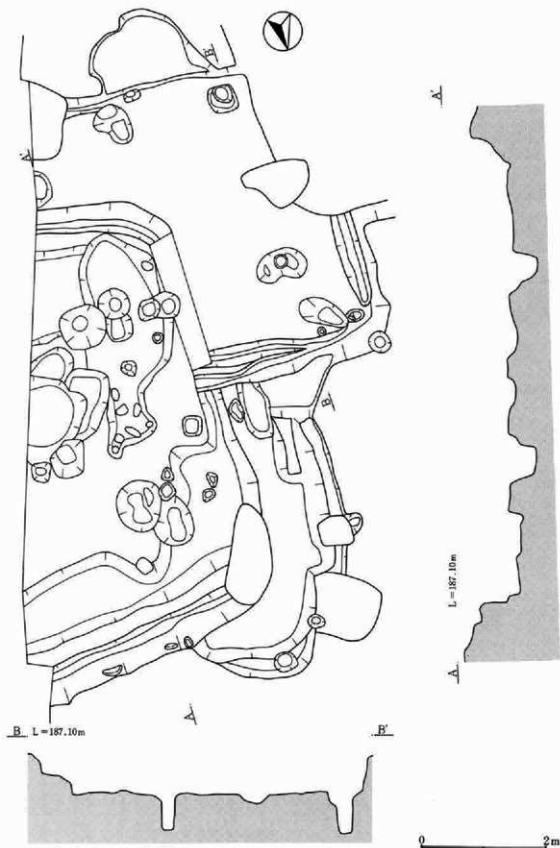
第-100図 27 PL-63	土師器 杯	埴土 1/4	口径 11.5 底径 - 器高 (3.2)	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100図 28 PL-63	土師器 杯	埴土 口縁部1/4 欠損	口径 11.8 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 にふい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-100図 29 PL-63	土師器 杯	埴土 3/4	口径 11.8 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に一部無調整帯を持ち下部をヘラケ ズリ	
第-100図 30 PL-63	土師器 杯	埴土 1/2	口径 11.9 底径 - 器高 3.4	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に一部無調整帯を持ち下部をヘラケ ズリ	
第-100図 31 PL-63	土師器 杯	埴土 1/3	口径 12.8 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 にふい橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100図 32 PL-63	土師器 杯	埴土 1/3	口径 12.8 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に幅の広い無調整帯を持ち下部をヘ ラケズリ	
第-100図 33 PL-63	土師器 杯	埴土 1/4	口径 12.8 底径 - 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 にふい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100図 34 PL-63	土師器 杯	埴土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高 (3.7)	細砂粒 酸化炭 にふい橙	口縁部ヨコナデ、内面不明、外面ヘラケズリ	
第-100図 35 PL-63	土師器 杯	埴土 ほぼ完成	口径 13.0 底径 - 器高 4.6	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	刻印「X」
第-100図 36 PL-63	土師器 杯	埴土 3/4	口径 13.0 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100図 37 PL-63	土師器 杯	埴土 3/4	口径 15.8 底径 - 器高 4.7	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100図 38 PL-63	土師器 杯	埴土 1/3	口径 13.6 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100図 39 PL-64	土師器 杯	埴土 1/3底面欠 く	口径 14.6 底径 - 器高 (4.2)	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-100図 40 PL-64	土師器 杯	埴土	口径 13.8 底径 - 器高 3.2	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-100図 41 PL-64	土師器 杯	埴土 1/4	口径 14.8 底径 - 器高 (3.0)	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-100図 42 PL-64	土師器 盤	埴土 1/4	口径 21.9 底径 - 器高 4.5	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ 底部に縄文痕	刻印「X」
第-100図 43 PL-64	土師器 盤	埴土 1/3	口径 19.8 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	刻印「X」
第-101図 44 PL-64	須恵器 杯	埴土 1/3	口径 12.0 底径 5.0 器高 3.8	細砂粒 還元炭 暗灰	内面・外面輻輪整形痕・下半回転ヘラケズ リ、底部手持ちヘラケズリ	
第-101図 45 PL-64	須恵器 杯	埴土 1/3	口径 12.0 底径 (7.1) 器高 3.8	細砂粒 還元炭 灰黄	内面・外面輻輪整形痕・下半回転ヘラケズ リ、底部回転ヘラ切り	
第-101図 46 PL-64	須恵器 杯	埴土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 (4.4)	細砂粒 酸化炭 明オリブ灰	内面・外面輻輪整形痕、外面下半手持ちヘ ラケズリ	

第3章 検出された遺構と遺物

第-101図 47 PL-64	須恵器 杯	埋土 口縁部1/4	口径 12.6 底径 一 器高残 3.0	細砂粒 還元炭 黄灰	内面・外面轆轤整形痕	
第-101図 48 PL-65	須恵器 杯	埋土 1/3	口径 13.6 底径 (7.8) 器高 3.5	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕、底部回転余切り無調整、いぶし	
第-101図 49	須恵器 杯	埋土 底部のみ	口径 一 底径 7.0 器高残 2.2	細砂粒・黑色粒子 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕、高台貼付底部回転余切り	
第-101図 50 PL-65	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 20.0 底径 一 器高残 4.4	細砂粒 酸化炭灰味 灰白	内面・外面轆轤整形痕、いぶし	
第-101図 51 PL-65	須恵器 杯	埋土 1/2	口径 17.6 底径 12.4 器高 4.5	やや粗砂粒 酸化炭 にぶい黄橙	内面・外面轆轤整形痕、底部手持ちヘラケズリ	
第-101図 52 PL-65	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 9.4 つまみ一 器高残 1.7	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕、かえり貼付ココナデ	
第-101図 53 PL-65	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 10.0 つまみ一 器高 2.0	細砂粒 還元炭 灰	内面轆轤整形痕、外面手持ちヘラケズリ、外面つまみ貼付	
第-101図 54 PL-65	須恵器 杯	埋土 口縁部の み1/4	口径 11.7 器高残 2.2	細砂粒 還元炭 灰	口縁部・内面轆轤整形痕、外面回転ヘラケズリ	
第-101図 55 PL-65	須恵器 蓋	埋土 口縁部1/5	口径 14.0 つまみ一 器高残 1.9	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕	
第-101図 56 PL-65	須恵器 蓋	埋土 1/3	口径 20.5 つまみ 4.3 器高 3.1	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕、つまみ貼付ココナデ	
第-101図 57 PL-65	須恵器 蓋	埋土 口縁部1/4	口径 20.1 つまみ一 器高残 3.1	細砂粒 還元炭 灰	口縁部・内面轆轤整形痕、外面回転ヘラケズリ、かえり貼付ココナデ	
第-101図 58 PL-65	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 19.7 つまみ一 器高残 3.2	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕、自然軸	
第-101図 59 PL-65	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 18.0 つまみ一 器高残 2.2	細砂粒 還元炭 褐灰	内面・外面轆轤整形痕、自然軸	
第-101図 60 PL-65	須恵器 蓋	埋土 口縁部1/4	口径 18.0 つまみ一 器高 3.2	細砂粒 還元炭 灰	口縁部、内面・外面回転ヘラケズリ、かえり貼付	
第-101図 61 PL-65	須恵器 蓋	埋土 ほぼ完形	口径 19.8 つまみ 3.0 器高 4.3	細砂粒 還元炭 黄灰	内面・外面轆轤整形痕、上手手持ちヘラケズリ、つまみ貼付	
第-101図 62 PL-66	須恵器 甕	埋土 口縁部1/4	口径 15.2 底径 一 器高残 4.8	やや粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕	
第-101図 63 PL-66	土師器 高杯	埋土 頸部1/4	口径 一 底径 一 器高残 6.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	内面ヘラコナデ・ココナデ、外面ヘラケズリ	
第-101図 64 PL-66	須恵器 甕	埋土 口縁部1/3	口径 22.6 底径 一 器高残 5.0	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕	
第-101図 65 PL-66	須恵器 高杯	埋土 脚1/4	口径 一 底径 12.0 器高残 3.5	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面轆轤整形痕、3方向円形スカシ	
第-101図 66 PL-66	須恵器 甕	埋土 口縁部 破片	口径 22.0 底径 一 器高残 6.2	細砂粒 還元炭 灰白	口縁部轆轤整形痕、自然軸	

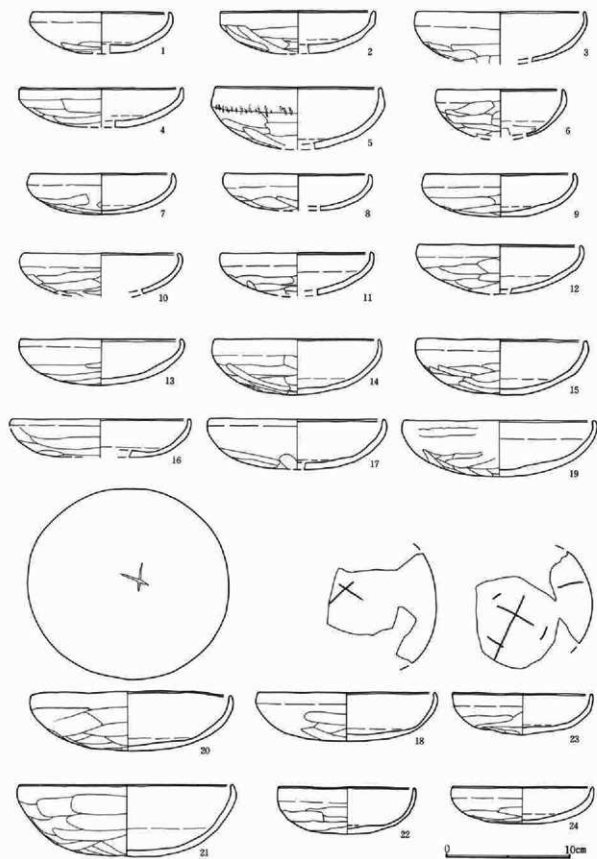
第1節 堅穴住居

第-102回 57 PL-66	土師器 甕	埴土 口縁部1/2 体部上半	口径 23.6 底径 - 器高残 15.8	細砂粒 酸化灰 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 68 PL-66	土師器 甕	埴土 口縁部1/5	口径 23.0 底径 - 器高残 9.1	やや粗砂粒 酸化灰 にふい貴僧	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 69 PL-66	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 25.0 底径 - 器高残 4.9	細砂粒 酸化灰 僧	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 70 PL-66	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 21.0 底径 - 器高残 8.7	細砂粒 酸化灰 にふい僧	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 71 PL-66	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 24.0 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 酸化灰 にふい僧	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ					
第-102回 72 PL-66	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 22.0 底径 - 器高残 7.4	細砂粒 酸化灰 僧	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 73 PL-67	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 23.0 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 酸化灰 僧	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 74 PL-67	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 22.0 底径 - 器高残 6.0	細砂粒 酸化灰 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 75 PL-67	土師器 甕	埴土 底部一体 部下半	口径 - 底径 5.4 器高残 6.6	細砂粒 酸化灰 黒褐	内面ユビナデ、外面ヘラケズリ					
第-102回 76 PL-67	土師器 台付甕	埴土 口縁部1/4	口径 14.4 底径 - 器高残 5.7	細砂粒 酸化灰 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-103回 77 PL-67	須恵器 甕	埴土 口縁部1/5	口径 15.6 底径 - 器高残 6.1	細砂粒 還元灰 灰	口縁部・内面轆轤整形痕					
第-103回 78 PL-67	須恵器 甕	埴土 底部1/2	口径 - 底径 - 器高残 9.0	やや粗砂粒 還元灰 灰	頸部別注接合後強い轆轤整形痕、裾にタタキ目					
第-103回 79 PL-67	須恵器 甕	埴土 体部上半 1/5	口径 25.0 底径 - 器高残 12.8	細砂粒 還元灰 明青灰	口縁部、内面轆轤整形痕・タタキ目、自然輪					
第-103回 80 PL-67	須恵器 甕	埴土 口縁部1/5	口径 38.0 底径 - 器高残 7.7	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面轆轤整形痕、沈線、波状文					
第-103回 81 PL-67	須恵器 長頸甕	埴土 口縁部一 頸部	口径 5.1 底径 - 器高残 9.5	細砂粒 還元灰 灰	頸部とそれ以下は別造、頸部は頸部をしばらくり 込むように接合					
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考	
第 103回84	PL-67	鉄鍔	埴土	完形	6.8	3.9	0.8			
第 103回85	PL-67	鉄片	埴土	器種不明	10.3	2.2	0.2			
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石	長さ	幅	厚さ	重量	備	考
第 103回82	PL-67	紡錘車	埴土	滑石	4.4	4.2	1.1	51.7		
第 103回83	PL-67	紡錘車	埴土	滑石	4.2	4.1	2.0	53.3		
第 104回86	PL-68	棒状鏝	埴土	粗粒安山岩	11.5	7.5	2.2	264.6		
第 104回87	PL-68	棒状鏝	埴土	粗粒安山岩	12.3	6.6	3.5	462.2		
第 104回88	PL-68	棒状鏝	埴土	粗粒安山岩	12.2	5.4	3.1	412.2		
第 104回89	PL-68	棒状鏝	埴土	石英閃緑岩	12.0	6.9	4.5	437.9		
第 104回90	PL-68	棒状鏝	埴土	粗粒安山岩	15.7	12.7	4.7	1711.9		
検出番号	図版番号	器物名	部	位	長さ	備	考			
第 104回91		ニホンジ		角座骨鏝	7.0					
第 104回92		ウマ?		四脚骨	5.8					
第 104回93	PL-68	ニホンジ		石ケイ骨遺位骨鏝	2.8				(未成獣)	



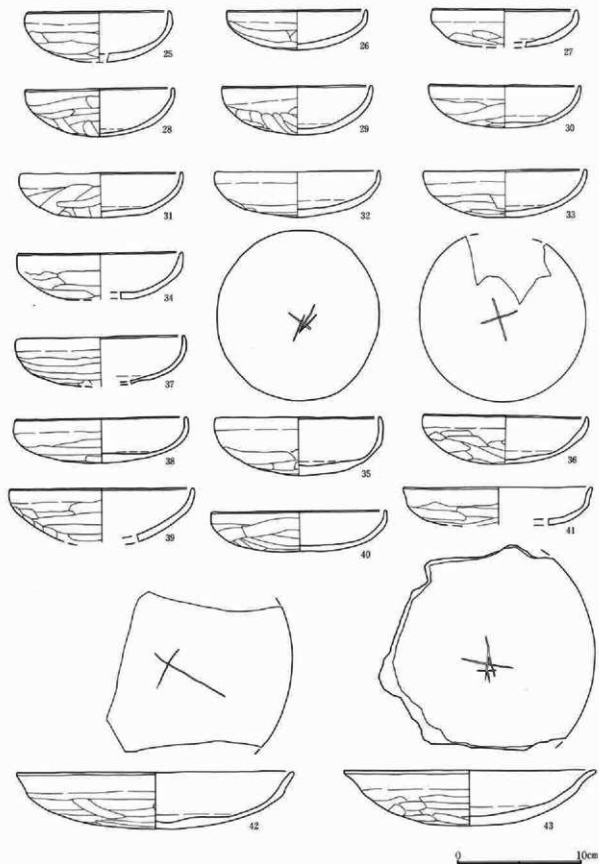
第98図 48・49号住居掘り方

第1節 竪穴住居



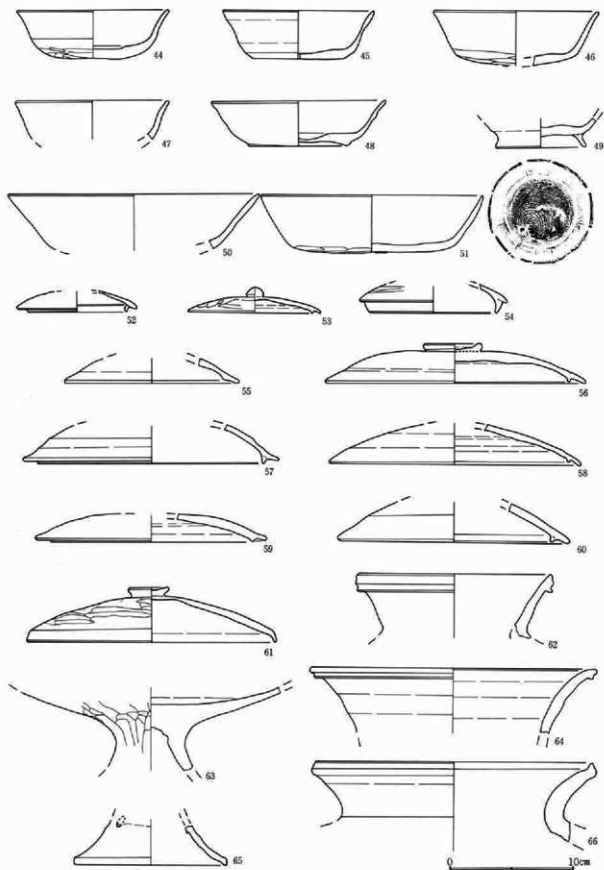
第99図 49号住居出土物(1)

第3章 検出された遺構と遺物

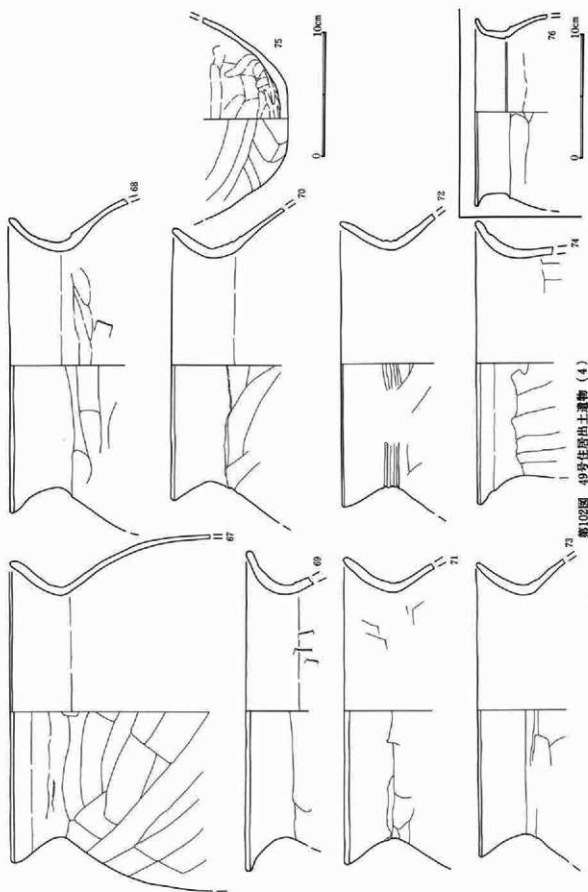


第100図 49号住居出土遺物 (2)

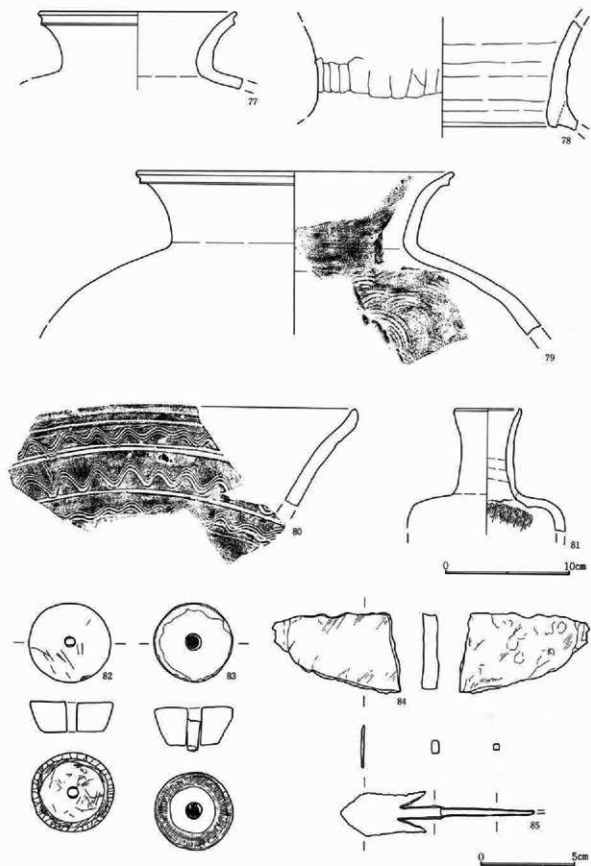
第1節 竈穴住居



第101图 49号住居出土遺物 (3)

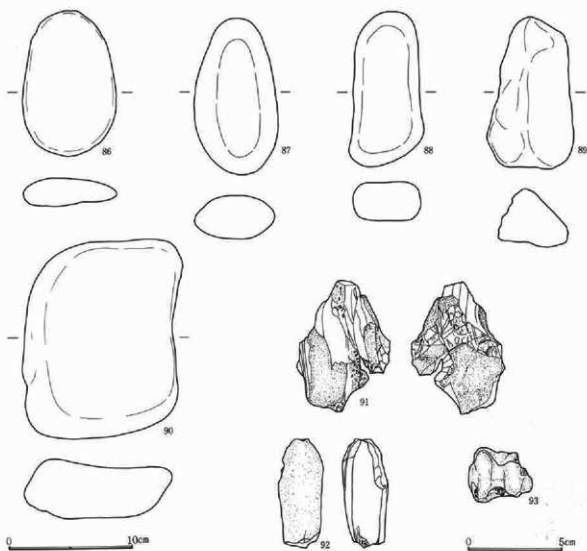


第102図 49号住居出土遺物(4)



第103圖 49号住居出土物 (5)

第3章 検出された遺構と遺物



第104図 49号住居出土遺物 (6)



49号住居 (北から)



49号住居 (南から)

44号住居(第105図 PL17)

位置 CG・CH-74・75 平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.55mを測る。
 重複住居 47号、48号、50号、51号住居より新しい。規模 東辺は3.95m、西辺は5.00m、南辺は4.10m、北辺は4.15mを測る。主軸方位 N-137°-E 埋没土 FP粒、炭化物を含む黒褐色土で一気に埋められている。壁の状況 床面から105°の角度で立ち上がる。床面積は17.397m²を測る。掘り方床面にFP粒、ロームを含む褐色土、黒褐色土を一部貼って床としている。周溝 検出されなかった。掘り方 ほぼ平坦である。竈位置 東辺中央 方位 N-130°-E 規模 全長は1.20m(屋外長0.60m、屋内長0.60m)、袖部幅0.50mを測る。形状その他 一部石を使用している。残存状態が悪く、細かい構造は不明である。遺物 円化し得るもので確実に44号住居出土と認められる遺物は検出されていない。竈内から土師器製の小片が出土している。

50号住居(第106・107図 PL19・68・69)

位置 CH・CI-75・76 平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.65mを呈する。
 重複住居 44号住居より古く、51号住居より新しい。規模 東辺は4.60m、南辺は4.20mを測る。主軸方位 N-82°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とした水平堆積。壁の状況 床面より130°の角度で立ち上がる。北辺に石を3段に積んだ施設が見られるが、住居に伴うかどうかは不明である。床面積は15.687m²を測る。周溝 すべての辺から検出された。柱穴 東西間隔1.90m、南北間隔3.00mで、深さは床面から0.55~0.83mを測る。掘り方 ほぼ平坦である。竈位置 東辺中央 方位 N-90°-E 形状その他 掘燃焼部に焼土を残すのみである。遺物 Aタイプを主体とする土師器杯、かえりを持つ須恵器蓋等が出土している。所見 7世紀末から8世紀前半か。

50号住居出土遺物

標識番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-106図 1 PL-68	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.6 底径 - 器高残 2.7	細砂粒 酸化炭 におい傷	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-106図 2 PL-68	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (4.6)	細砂粒 酸化炭 におい傷	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-106図 3 PL-68	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.4 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-106図 4 PL-68	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.8 底径 - 器高 (3.1)	細砂粒 酸化炭 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-106図 5 PL-68	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.9 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-106図 6 PL-68	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 (3.6)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-106図 7 PL-68	土師器 杯	埋土 1/2	口径 15.5 底径 - 器高 (4.9)	細砂粒 酸化炭 灰青褐色	内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状暗文、線装状暗文	
第-106図 8 PL-68	土師器 杯	埋土 1/4	口径 15.6 底径 - 器高残 2.9	細砂粒 酸化炭 粒	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-107図 9 PL-68	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 10.3 底径 6.7 器高 3.3	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズリ、内面自然釉	

第3章 検出された遺構と遺物

第-107図 10 PL-68	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 8.0 器高 3.5	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り無調整				
第-107図 11 PL-69	須恵器 杯	埋土 3/4	口径 11.1 底径 6.8 器高 3.2	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り無調整				
第-107図 12 PL-69	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 18.4 つまみ 5.0 器高 5.2	細砂粒 還元炭 灰	外面口縁部・内面輪軸整形痕、外面上半回転ヘラケズリ、つまみ貼付				
第-107図 13 PL-69	土師器 壺	埋土 口縁部1/4	口径 18.0 底径 - 器高残 5.2	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ				
第-107図 14 PL-69	須恵器 蓋	埋土 胴部のみ	口径 - 底径 - 器高残35.6	細砂粒 還元炭 灰	内外面タタキ、体部上半カキ目				
埴田番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考
第 107図16	PL-69	壺	埋土	胴身部のみ	6.2	2.5	0.8		
第 107図17	PL-69	鎌	埋土	刃先	4.2	2.5	0.3		
第 107図18	PL-69	刀子	埋土	新先端のみ	4.5	1.0	0.5		
埴田番号	図版番号	動物名	部	位	長さ			備	考
第 107図15	PL-69	イノシシ		右下顎第3後臼歯				3.1	

51号住居(第107～114図 PL 19・69～76)

位置 CF～CH-74～76 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.70mを測る。 重複住居44号、48号、50号住居より古い。 規模 東辺は7.50m、南辺は7.70mを測る。

主軸方位 N-90°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土、黄褐色土を主体とする。 壁の状況 床面から115°の角度で立ち上がる。 床面 面積は残存部分で43.64㎡を測る。掘り方床面から、FP粒、黒色土を含む褐色土で15～20cm前後盛土し、床としている。 周溝 すべての辺から検出された。

掘り方 はほぼ平坦である。 竈 検出されなかった。 遺物 A、Bタイプの土師器杯、底部にヘラケズリを施した須恵器杯、かえりを持つ須恵器蓋などが主体となる遺物で、一部に新しい要素を持つものもあるが、重複住居による混入遺物と考えられる。また、口縁部に「大長」の刻書を持つ土師器壺が出土していることも注目される。 所見 出土した遺物から見て、51号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

51号住居出土遺物

埴田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-109図 1 PL-69	土師器 杯	埋土 1/2	口径 11.2 底径 - 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 黒	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状増文のみ(ミガキ)、いぶし、内面内黒	
第-109図 2 PL-69	土師器 杯	埋土 1/2	口径 11.0 底径 - 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-109図 3 PL-69	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.4 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-109図 4 PL-69	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.8 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-109図 5 PL-69	土師器 杯	4cm 3/4	口径 10.6 底径 - 器高 -	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-109図 6 PL-69	土師器 杯	埋土 1/2	口径 11.3 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-109図 7 PL-70	土師器 杯	埋土 口縁部1/4	口径 11.6 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	

第1節 堅穴住居

第-109図 8 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.8 底径 - 器高 (3.1)	細砂粒 酸化炭 灰 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-109図 9 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.8 底径 - 器高 (3.2)	細砂粒 酸化炭 にふい塵	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 10 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (3.0)	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 11 PL-70	土師器 杯	7 cm 3/4	口径 11.0 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 にふい塵	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 12 PL-70	土師器 杯	埋土 口縁部1/4 体部1/2	口径 11.0 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 13 PL-70	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.2 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 にふい塵	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 14 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高残 2.7	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-109図 15 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.6 底径 - 器高 (3.1)	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 16 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-109図 17 PL-70	土師器 杯	埋土 1/3	口径 12.0 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 18 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.3 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-109図 19 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 3.8	やや粗砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 20 PL-70	土師器 杯	埋土 1/3	口径 12.0 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 にふい塵	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に幅の広い無調整帯を持ち下部をヘ ラケズリ
第-109図 21 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.4 底径 - 器高残 2.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-109図 22 PL-70	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.4 底径 - 器高 2.9	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-109図 23 PL-71	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.7 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-109図 24 PL-71	土師器 杯	4 cm 1/4	口径 10.0 底径 - 器高 -	細砂粒 酸化炭 にふい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 ヘラケズリ
第-109図 25 PL-71	土師器 杯	埋土 1/2	口径 10.0 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-109図 26 PL-71	土師器 杯	埋土 4/5	口径 10.1 底径 - 器高 3.1	細砂粒 酸化炭 にふい塵	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-109図 27 PL-71	土師器 杯	埋土 完形	口径 10.3 底径 - 器高 3.0	細砂粒 酸化炭 堊	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に広い無調整帯を持ち下部をヘラケ ズリ

第3章 検出された遺構と遺物

第-109図 28 PL-71	土師器 杯	埴土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 素 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面一部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-109図 29 PL-71	土師器 杯	埴土 完形	口径 12.6 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に広い無調整帯を持ち下部をヘラケ ズリ
第-109図 30 PL-71	土師器 杯	埴土 1/2	口径 14.0 底径 - 器高 4.0	細砂粒 酸化炭 素 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-109図 31 PL-71	土師器 杯	埴土 1/4	口径 16.0 底径 - 器高 (4.8)	細砂粒 酸化炭 素 赤褐色	口縁部ヘラナデ・ヨコナデ、内面ナデ・ヨコ ナデ、外面ヘラケズリ
第-109図 32 PL-71	土師器 杯	埴土 1/4	口径 16.0 底径 - 器高 (5.2)	細砂粒 酸化炭 素 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-110図 33 PL-71	土師器 杯	埴土 1/4 底部欠く	口径 16.1 底径 - 器高 5.0	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-110図 34 PL-71	土師器 杯	埴土 1/4 底部欠く	口径 16.0 底径 - 器高 -	細砂粒 酸化炭 素 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-110図 35 PL-71	土師器 杯	埴土 1/4	口径 16.2 底径 - 器高残 4.7	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ
第-110図 36 PL-72	土師器 杯	埴土 1/4	口径 17.0 底径 - 器高残 4.8	細砂粒 酸化炭 素 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、口縁部付迄までヘラケズリ入る
第-110図 37 PL-72	土師器 杯	埴土 1/4	口径 18.4 底径 - 器高 (6.3)	細砂粒 酸化炭 素 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-110図 38 PL-72	土師器 杯	埴土 1/2	口径 10.5 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-110図 39 PL-72	土師器 杯	埴土 1/4	口径 10.8 底径 - 器高 3.0	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-110図 40 PL-72	土師器 杯	埴土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (3.7)	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-110図 41 PL-72	土師器 杯	埴土 1/2	口径 11.4 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ 内面底部にマキアゲ痕
第-110図 42 PL-72	土師器 杯	埴土 1/4	口径 11.4 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-110図 43 PL-72	土師器 杯	埴土 1/2	口径 11.4 底径 - 器高 3.4	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-110図 44 PL-72	土師器 杯	埴土 1/2	口径 11.5 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 素 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-110図 45 PL-72	土師器 杯	埴土 1/4	口径 11.8 底径 - 器高 (4.0)	細砂粒 酸化炭 素 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-110図 46 PL-72	土師器 杯	埴土 口縁部1/4	口径 12.0 底径 - 器高 (3.2)	細砂粒 酸化炭 素	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-110図 47 PL-72	土師器 杯	埴土 1/4	口径 13.2 底径 - 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 素 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、放射状端文、螺旋状端文

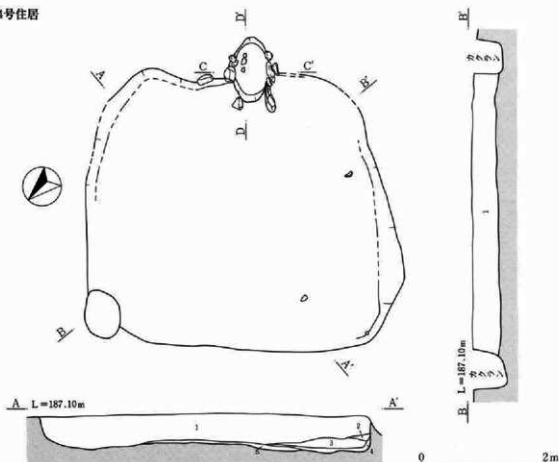
第1節 型穴住居

第-110図 48 PL-72	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.5 底径 - 器高 (4.4)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 ヘラケズリ、内面黒化し、暗文確認できず	
第-110図 49 PL-73	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.6 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、内面放射状暗文、螺旋状暗文	
第-110図 50 PL-73	土師器 杯	埋土 1/4底部欠く	口径 13.8 底径 - 器高 (3.5)	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、内面放射状暗文のみ	
第-110図 51 PL-73	土師器 杯	埋土 1/4	口径 (15.0) 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、放射状暗文は確認出来たが螺旋状暗文 は確認出来なかった	
第-110図 52 PL-73	土師器 杯	埋土 1/4底部欠く	口径 14.9 底径 - 器高残 5.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部強いヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘ ラケズリ	
第-110図 53 PL-73	土師器 杯	埋土 1/2	口径 19.5 底径 - 器高 (3.7)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-111図 54 PL-73	須恵器 杯	埋土 1/3	口径 12.8 底径 9.6 器高 3.3	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズ リ	底部刷印 「X」
第-111図 55 PL-73	須恵器 杯	埋土 口唇部を 一部欠く	口径 12.1 底径 8.6 器高 3.0	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズ リ	
第-111図 56 PL-73	須恵器 杯	-6.5cm	口径 12.0 底径 7.6 器高 3.7	細砂粒 還元炭 緑灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転余切り無調 整	
第-111図 57 PL-73	須恵器 杯	埋土 1/3	口径 12.9 底径 7.7 器高 3.8	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転余切り無調 整	
第-111図 58 PL-73	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 13.6 つまみ 4.8 器高 2.3	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、上面回転ヘラケズ リ、つまみ貼付	
第-111図 59 PL-73	須恵器 蓋	埋土 1/2	口径 16.2 つまみ 6.6 器高 3.2	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、外面に自然釉	
第-111図 60 PL-74	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 17.0 つまみ - 器高残 2.6	やや粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、上面回転ヘラケズ リ	
第-111図 61 PL-74	須恵器 蓋	埋土 天井部1/2 口縁部1/3	口径 12.0 つまみ 3.3 器高 4.6	粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、つまみ貼付	
第-111図 62 PL-74	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 12.0 つまみ - 器高残 3.9	細砂粒 還元炭 明オリーブ灰	口縁部・内面輪軸整形痕、外面回転ヘラケズ リ	
第-111図 63 PL-74	須恵器 蓋	埋土 1/2	口径 7.0 つまみ - 器高残 6.3	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、上面回転ヘラケズ リ	
第-111図 64 PL-74	須恵器 高杯	埋土 脚のみ1/4	口径 17.0 底径 - 器高残 5.5	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸整形痕、杯部との接合部で割 離	
第-111図 65 PL-74	須恵器 壺	埋土 1/5	口径 4.0 底径 - 器高 (4.3)	やや粗砂粒 還元炭 黒褐色	内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ	
第-111図 66 PL-74	土師器 壺	埋土 口縁部1/4	口径 10.6 底径 - 器高残 7.8	粗砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズ リ	
第-111図 67 PL-74	土師器 台付壺	埋土 1/5	口径 - 底径 - 器高残11.0	やや粗砂粒 酸化炭 黒褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ	

第3章 検出された遺構と遺物

第-111回 68 PL-74	須恵器 甕	埴土 口縁部1/5	口径 22.0 底径 - 器高残 7.6	細砂粒・黒色粒子 還元炎 灰	内面・外面輪縁整形痕、内面タタキ	
第-111回 69 PL-74	須恵器 甕	埴土 口縁部1/5	口径 31.0 底径 - 器高残 4.5	細砂粒 還元炎 黄灰	内面・外面輪縁整形痕、液状文	
第-112回 70 PL-74	土師器 甕	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 27.2 底径 - 器高 11.8	やや粗砂粒 酸化炎 にぶい塩	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ	
第-112回 71 PL-75	土師器 甕	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 23.1 底径 - 器高残12.1	やや粗砂粒 酸化炎 にぶい黄煙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-112回 72 PL-75	土師器 甕	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 20.0 底径 - 器高残12.2	粗砂粒 酸化炎 にぶい黄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-112回 73 PL-75	土師器 甕	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 21.8 底径 - 器高残 6.1	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ、口縁部にヘラ痕	
第-112回 74 PL-75	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 22.0 底径 - 器高残 6.5	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-112回 75 PL-75	土師器 甕	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 21.0 底径 - 器高残 8.1	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-112回 76 PL-75	土師器 甕	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 24.0 底径 - 器高残 5.0	細砂粒 酸化炎 にぶい塩	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	附書 「大長」
発掘番号	図版番号	動物名	部 位	長さ	備 考	
第 113回77	PL-75	ニホンジ	鳶角 右角第一枝	19.2	床面密着	
第 113回78	PL-75	ニホンジ	角幹部	8.2		
第 113回79	PL-75	ニホンジ	角幹部	7.1	床面密着	
第 113回80	PL-75	ニホンジ	右大腿骨	8.7	床面から2.5cm	
第 113回81	PL-75	ニホンジ	角幹部	7.6		
第 113回82	PL-75	ニホンジ	角歯	6.5		
第 113回83		ニホンジ	中手骨	13.6		
第 113回84	PL-75	ニホンジ	中手骨	7.8	床面から4.0cm	
第 113回85	PL-76	ニホンジ	中足骨	10.0		
第 114回86	PL-76	-	左下顎骨	6.5	床面密着	
第 114回87	PL-76	イノシシ	左下顎第2後臼歯	4.0	床面から7.5cm	
第 114回88	PL-76	-	骨	6.1		
第 114回89	PL-76	ニホンジ	骨	4.8		
第 114回90	PL-76	ニホンジ	骨	5.9		
第 114回91	PL-76	-	骨	4.1		
第 114回92	PL-76	-	骨	6.1	床面密着	
第 114回93	PL-76	イノシシ	基節骨	3.5		
第 114回94	PL-76	-	骨	5.4		
第 114回95	PL-76	-	骨	3.9		
第 114回96	PL-76	-	骨	4.1		
第 114回97	PL-76	-	骨	5.3		
第 114回98	PL-76	ニホンジ	基節骨	4.3		
第 114回99	PL-76	-	左第四中心足根骨	3.6		
第 114回100	PL-76	-	骨	2.6	床面から4.0cm	
第 114回101		ニホンジ	脛骨	6.4		
第 114回102		-	骨	5.3		
第 114回103		-	骨	3.2		
第 114回104		-	骨	3.8		
第 114回105		ニホンジ	四肢骨	4.2		
第 114回106		-	四肢骨片	4.2		
第 114回107	PL-76	-	骨	3.0		
第 114回108	PL-76	-	骨	4.3	加工痕あり	

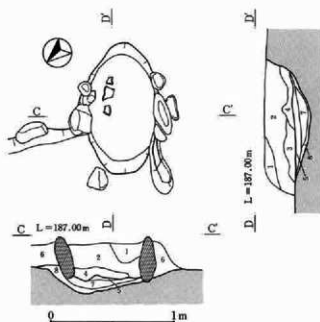
44号住居



44号住居

- 1 黒褐色土 2-10mmのFP粒、炭化物を含む
- 2 暗褐色土 ロームブロック、炭化物を含む
- 3 黒褐色土 ローム粒含み、炭化物を多く含む

- 4 褐色土 FP粒を含み、上面に炭化物、焼土が乗る(床面)
- 5 黒褐色土 FP粒、ロームを含む(床面)



44号住居

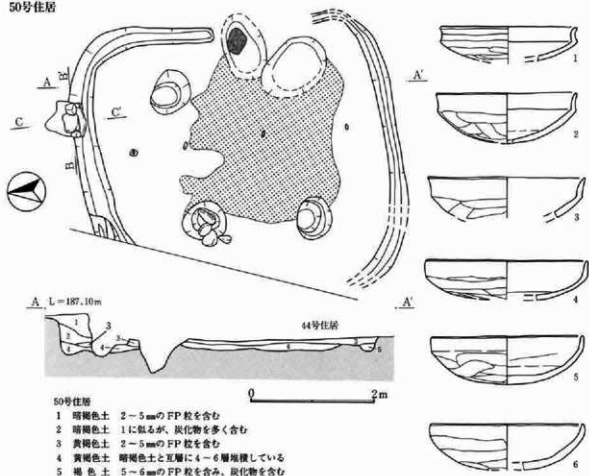
- 1 暗褐色土 FP粒、FA小ブロックを含む
- 2 赤褐色土 2-3mmのFP粒、FA小ブロック、焼土ブロックを種かに含む
- 3 赤褐色土 ロームブロック、焼土を多く含む
- 4 灰白色土 灰層、上部に焼土が乗る
- 5 赤褐色土 焼土主体である
- 6 暗褐色土 3-5mmのFP粒を含む
- 7 赤褐色土 2-3mmのFP粒、焼土を多く含む
- 8 暗褐色土 2-7mmのFP粒を多く含む



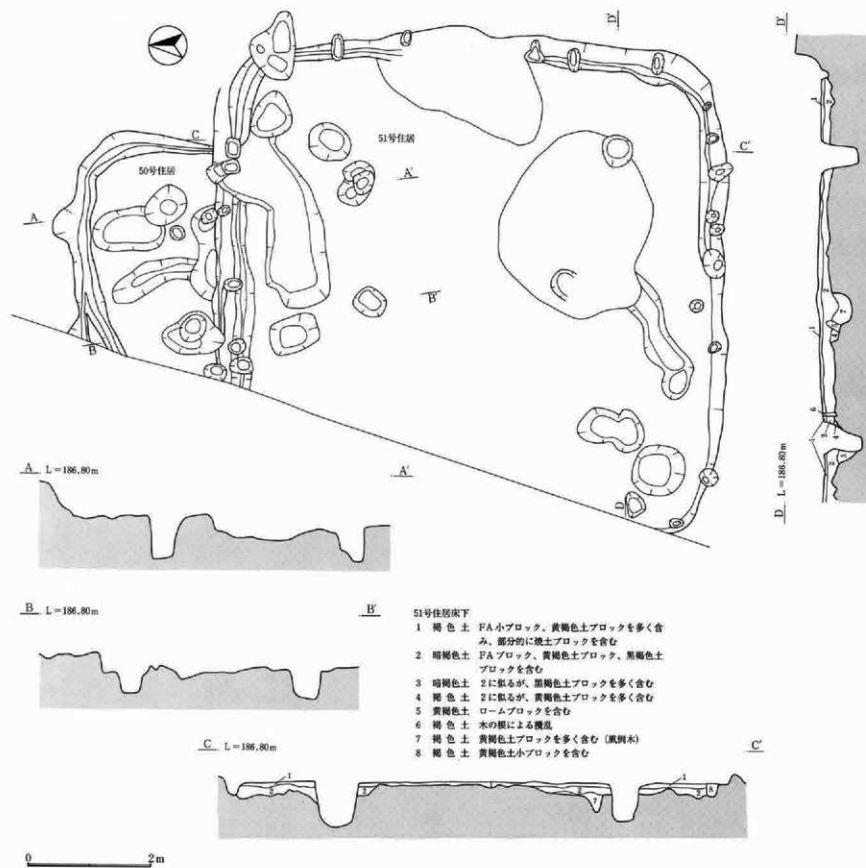
第105図 44号住居・竈

第3章 検出された遺構と遺物

50号住居

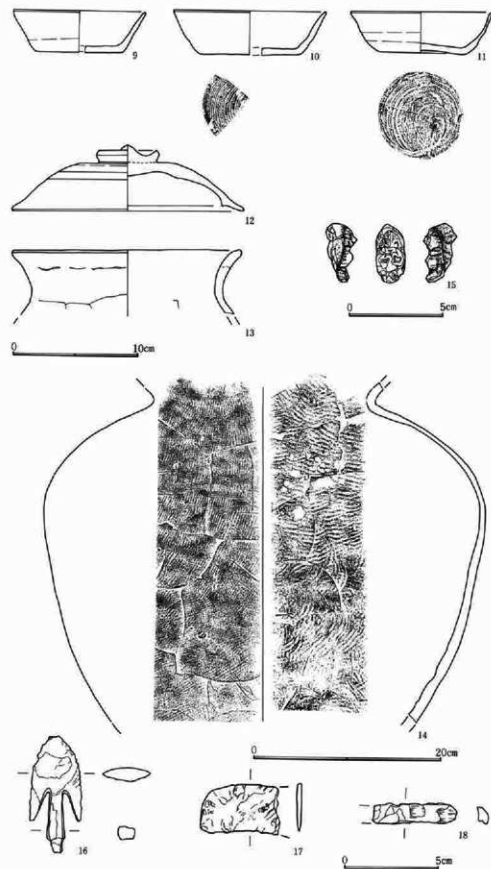


第106図 50号住居・石組・出土遺物 (1)

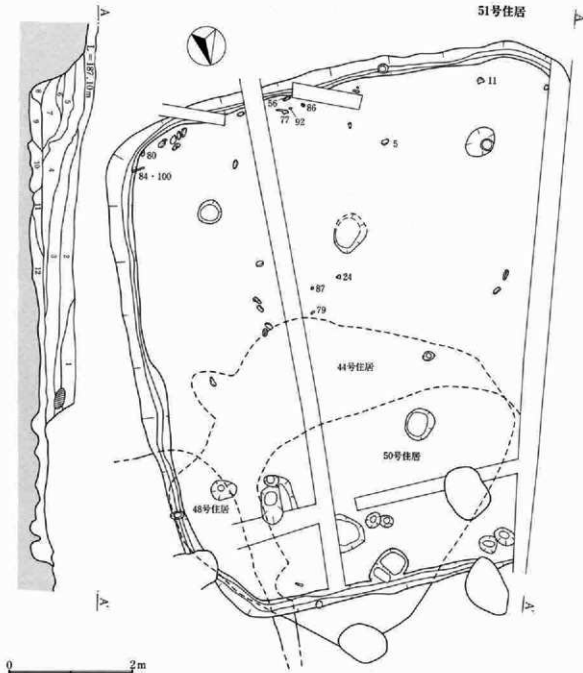


51号住居床下

- 1 褐色土 FA小ブロック、黄褐色土ブロックを多く含む、部分的に焼土ブロックを含む
- 2 暗褐色土 FAブロック、黄褐色土ブロック、黒褐色土ブロックを含む
- 3 暗褐色土 2に似るが、黒褐色土ブロックを多く含む
- 4 褐色土 2に似るが、黄褐色土ブロックを多く含む
- 5 黄褐色土 ロームブロックを含む
- 6 褐色土 木の根による腐乱
- 7 褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む(風倒木)
- 8 褐色土 黄褐色土小ブロックを含む



第107図 50・51号住居掘り方・50号住居出土遺物②

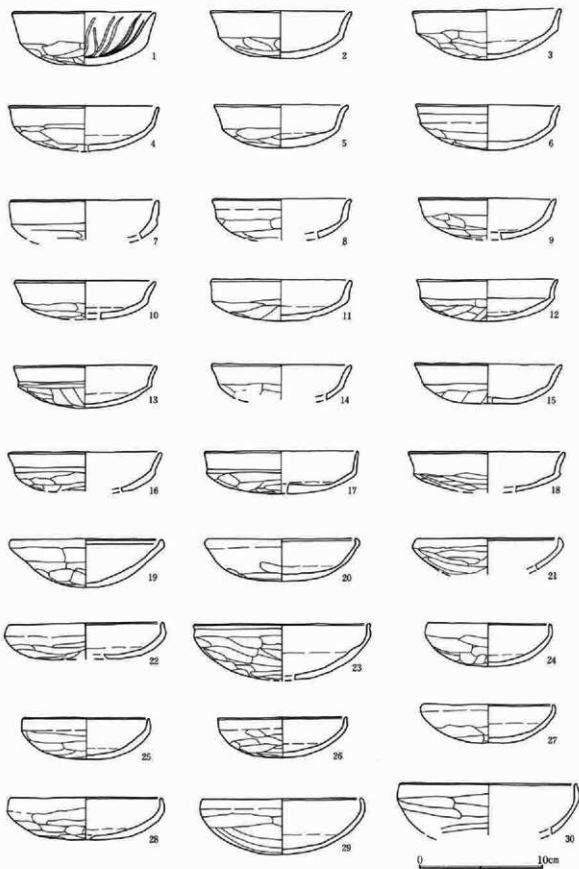


51号住居

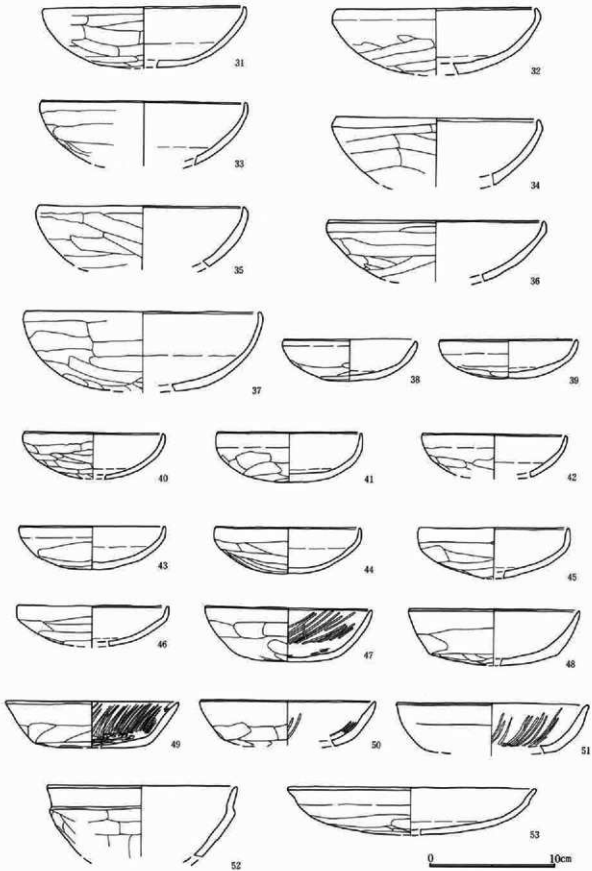
- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 2-30mmのFP粒を多く含む | 8 褐色土 | 2-3mmのFP粒を僅かに含む |
| 2 褐色土 | 2-20mmのFP粒を多く含む | 9 暗褐色土 | ロームブロックを僅かに含む |
| 3 黄褐色土 | 2-20mmのFP粒をやや多く含む | 10 褐色土 | FP粒を僅かに含み、黒褐色土ブロック、FA小ブロックを含む |
| 4 黄褐色土 | 2-20mmのFP粒、ロームブロックを僅かに含む | 11 褐色土 | FP粒を僅かに含み、焼土ブロックをやや多く含む |
| 5 黄褐色土 | FAブロック主体、2-3mmのFP粒を僅かに含む | 12 褐色土 | FP粒、黒色土ブロック、FAを僅かに含む |
| 6 黄褐色土 | 2-3mmのFP粒を僅かに含む | | |
| 7 黄褐色土 | FAブロック主体 | | |

第108図 51号住居

第3章 検出された遺構と遺物

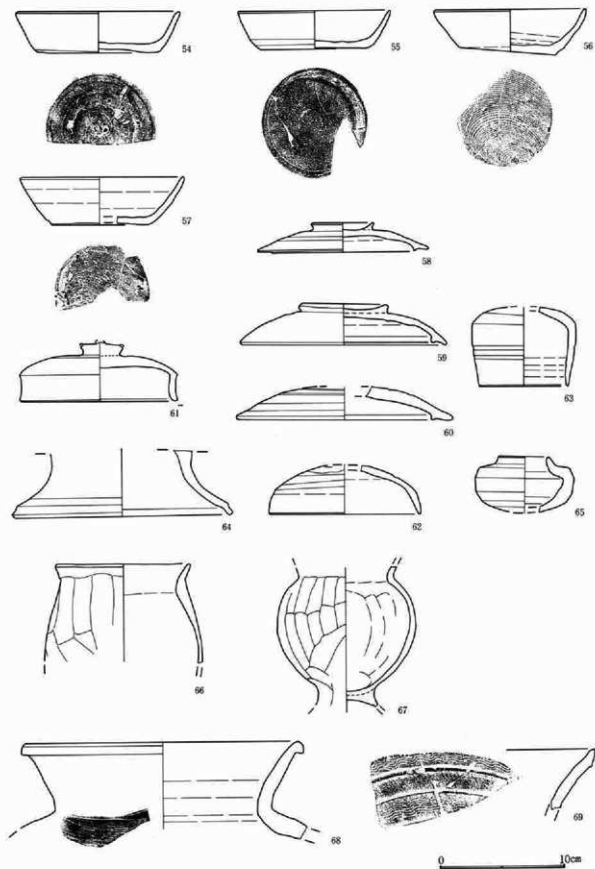


第109図 51号住居出土遺物 (1)

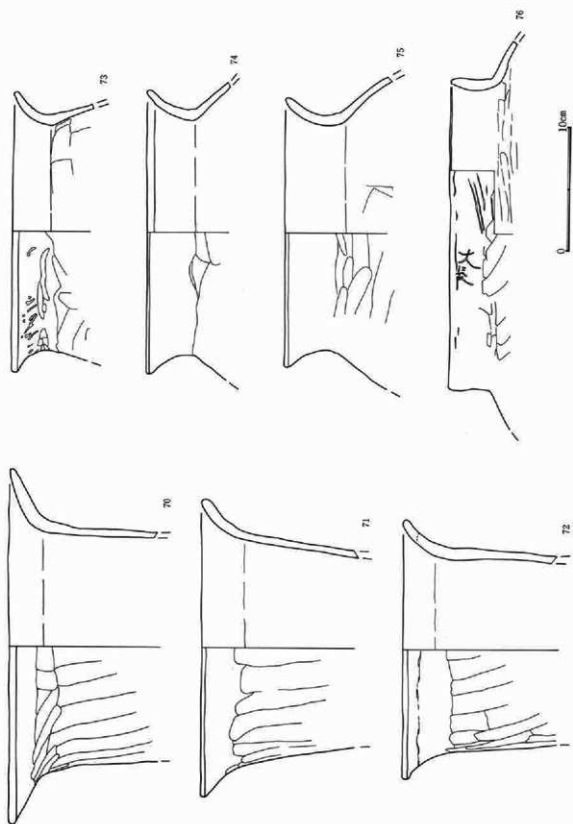


第110图 51号住居出土遺物 (2)

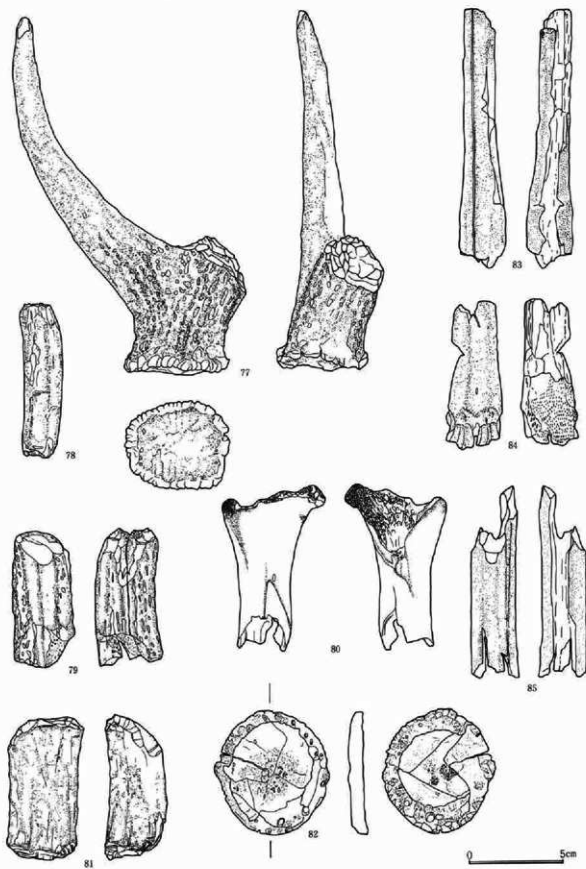
第3章 検出された遺構と遺物



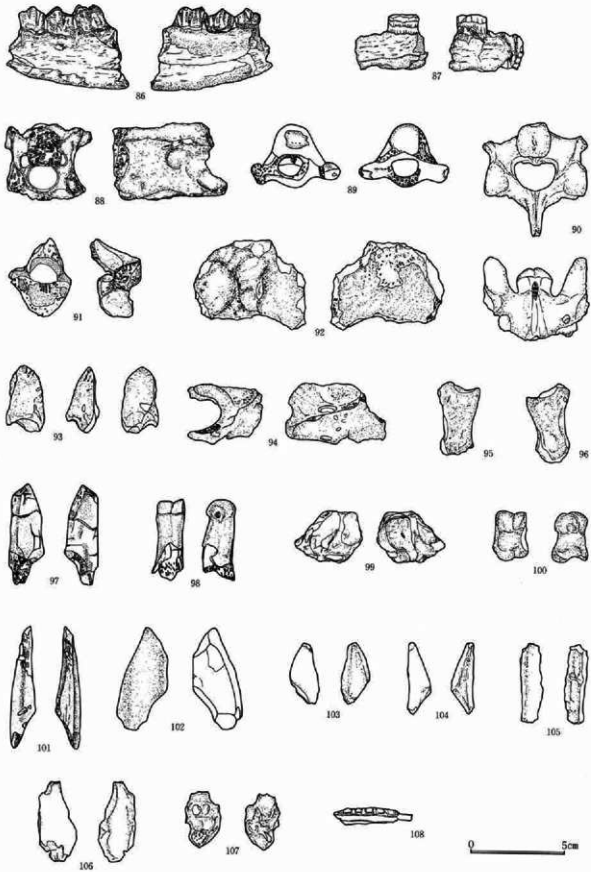
第111図 51号住居出土遺物 (3)



第112圖 51号住居出土遺物 (4)



第113図 51号住居出土遺物 (5)



第114図 51号住居出土遺物 (6)

第3章 検出された遺構と遺物

52号住居(第115~119図 PL19・20・76~78)

位置 CD~CF-74~76 西辺、南辺は中世層で報告した1号石積によって削られている。

平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.65mを測る。重複住居 51号、55号住居より新しく、53号、56号住居より古い。規模 東辺は4.25mを測る。主軸方位 N-110°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とする土で一気に埋め戻されている。人為的なものであるか、自然堆積であるかは不明である。壁の状況 床面から110°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で11.718㎡を測る。掘り方床面からFP粒、FAを混合したロームで15~20cm盛土し、更に褐色土を貼って床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 東西間隔1.70m、南北間隔2.40m、深さは床面から0.14~0.27mを測る。掘り方 住居中央部に幾つもの掘り込みが見られる。竈位置 東辺中央やや南寄り 方位 N-87°-E 規模 全長0.75m(屋外長0.45m、屋内長0.30m)、袖部幅0.55mを測る。形状その他 袖部はFP粒を含むロームで作られており、袖石は使用されていない。燃焼部はやや掘りくぼめられており、奥壁は緩やかに立ち上がる。煙道部は短く、住居東辺から僅かに突出する程度である。遺物 A、C、D、タイプの土師器杯の他、放射状、螺旋状の暗文をもつEタイプが見られる。須恵器杯は直線的に、あるいはやや外反しながら外傾し、底部に手持ち、または回転ヘラケズリを施す。第118図8はやや古い様相を残す。また、イノシシ、ウマ等の骨が出土している。所見 出土した遺物から、52号住居には8世紀前半の時期が想定できる。

52号住居出土遺物

図版番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-118図 1 PL-76	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.8 底径 - 器高 3.1	細砂粒 酸化灰 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-118図 2 PL-76	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 2.6	細砂粒 酸化灰 褐色	口縁部ヨコナデ、外面上部は無調整帯を持ち 下部をヘラケズリ	
第-118図 3 PL-76	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高残 4.7	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ナデ、外面 ヘラケズリ	
第-118図 4 PL-77	土師器 杯	埋土 1/2(口縁 部1/4)	口径 11.8 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-118図 5 PL-77	土師器 杯	埋土 1/5	口径 11.8 底径 - 器高 (2.8)	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-118図 6 PL-77	土師器 杯	埋土 3/4	口径 15.9 底径 - 器高 5.1	細砂粒 酸化灰 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ、内面放射状暗文、螺旋状暗 文	
第-118図 7 PL-77	土師器 杯	埋土 1/4	口径 16.0 底径 - 器高残 2.5	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-118図 8 PL-77	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 6.0 器高 3.5	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面縦線整形痕・下縁回転ヘラケズ リ、底部手持ちヘラケズリ	
第-118図 9 PL-77	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 12.2 底径 (8.5) 器高 (3.0)	細砂粒 還元灰 オリーブ灰	内面・外面縦線整形痕・下縁回転ヘラケズ リ、底部回転ヘラケズリ	
第-118図 10 PL-77	須恵器 杯	埋土 底部1/5	口径 - 底径 8.4 器高残 2.4	細砂粒 酸化灰 黄灰	内面・外面縦線整形痕、底部回転ヘラケズリ	

第-118図 11 PL-77	須恵器 壺	埋土 1/4	口径 16.2 底径 (11.0) 器高 3.9	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、高台貼付	
第-118図 12 PL-77	土師器 台付壺	埋土 口縁部1/5	口径 11.0 底径 - 器高残 3.6	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ	
第-118図 13 PL-77	土師器 壺	埋土 縁部一 脚部1/6	口径 - 底径 - 器高残 9.0	細砂粒 酸化炭 燈	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-118図 14 PL-77	土師器 壺	埋土 口縁部1/5	口径 21.0 底径 - 器高残 6.5	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-118図 15 PL-77	土師器 壺	埋土 口縁部1/4	口径 23.8 底径 - 器高残 5.4	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-118図 16 PL-77	土師器 壺	埋土 底部一休 部下半1/3	口径 - 底径 5.2 器高残20.5	やや粗砂粒 酸化炭 燻	内面ナデ、外面ヘラケズリ	

55号住居(第115～117図 PL20・78)

位置 CD～CF-74～76 平面形状 丸みの強い隅丸方形を呈する。 残存深度 0.70mを測る。

重複住居 51号住居より新しく、52号、53号、56号住居より古い。 主軸方位 N-87°-E

埋没土 FP粒を含む暗褐色土で一氣に埋め戻されている。人為的なものであるか、自然堆積であるかは不明である。 壁の状況 床面から105°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。 床 面積は残存部分で9.990㎡を測る。掘り方床面から、FP粒を含む褐色土、暗褐色土で30cm前後盛土し、更にFAを含む黒褐色土を貼って床としている。床の上には顕著な硬化面が見られる。床は1面しか検出されなかった。 周溝 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 東西間隔1.20m、南北間隔2.25mで、深さは床面から0.40～0.50mを測る。 掘り方 住居中央に掘り込みが見られる。 竪位置 東辺中央 方位 N-92°-E 規模 煙道部は53号住居に壊されており残存状態もあまり良くない。全長は残存部分で0.54mで、袖部幅は0.65mを測る。

形状その他 FAを混合したロームで袖部を作っている。燃焼部は僅かに掘りほめられており、煙道部には緩やかな傾斜で連続していったものと推定される。 遺物 出土した遺物は少なく、時期もまばらで、他の住居からの混入の可能性が高い。またニホンジカ、ウマ等の獣骨が出土しているが、これも数多く出土している他の住居からの混入の可能性が高い。 所見 住居の時期は特定できなかった。

55号住居出土遺物

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-116図 1 PL-78	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 10.4 底径 - 器高 2.9	細砂粒 酸化炭 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-116図 2 PL-78	土師器 杯	埋土 1/2	口径 14.1 底径 - 器高 3.2	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-116図 3 PL-78	須恵器 杯	埋土 完形	口径 13.2 底径 7.4 器高 2.9	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部周辺面転ヘラケズリ、底部回転糸切り、自然軸	
棟号	図版番号	動物名	部位	長さ	備考	
第 116図 4		ニホンジカ	四肢骨	3.2	イノシシ?	
第 116図 5		ウマ	肋骨	17.8	ウシ?	
第 116図 6		--	肋骨	20.6		
第 116図 7	PL-78	--	--	24.6		

第3章 検出された構構と遺物

56号住居(第115~117・120・121図 PL21・78~81)

位置 CD—CF—74—76 住居の南半は中世編で報告した1号石積によって完全に消失している。また白井二丁目屋遺跡で住居が最も集中した地点の南端部に位置し、これより南でも、数多くの住居は検出されているものの、住居同士の重複がやや少なくなるようである。平面形状 隅丸方形を呈する。

残存深度 1区南端部から連続する微高地北端部からやや低地に向かう境に位置するため残存状態は悪く、検出面から0.55mを測る。重複住居 51号、52号、55号住居より新しく、53号住居より古い。

主軸方位 N—97°—E 埋没土 FP粒を含む褐色土、暗褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から108°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で11.844㎡を測る。掘り方床面から、15~20cm前後FP粒を含む褐色土で盛土し、更に一部に暗褐色土を貼って(7層)床としている。床の上には部分的であるが顕著な硬化面が見られる。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 東西間隔3.30mで、深さは床面から0.38~0.85mを測る。掘り方 細かな凹凸が多く見られる。竈位置 東辺中央 方位 N—114°—E 規模 全長は1.25m(屋外長0.90m、屋内長0.35m)、袖部幅は復元で0.65mを測る。形状その他 かなり残存状態は悪いが、半石組み竈であったと考えられる。右袖部は完全に失われている。左袖部は30~40cm大の河原石を据えて袖石としている。燃焼部は僅かに掘りくぼめられている。奥壁は25~30cm大の河原石を積んで、燃焼部からはかなりの急角度で立ち上がる。煙道部は石を使用した痕跡が無く、掘り方も短い。遺物 土師器はC、Dタイプの杯、外面に弱い稜をもつ盤が見られ、須恵器は直線的に外傾し、底部に回転ヘラケズリを施す杯、口径が大きく高台をもつ杯、かえりを持つ蓋等が出土している。所見 56号住居は8世紀前半代を中心とする遺物が出土しており、重複関係にある52号住居とそれほど時期差は無いと考えられる。

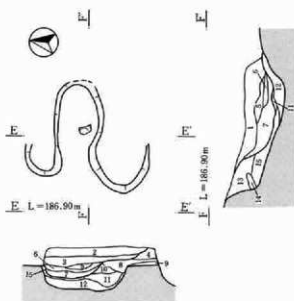
56号住居出土土遺物

探頭番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/構成/色調	製作技法/特徴	備考
第-120図 1 PL-78	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.4 底径 — 器高 3.4	細砂粒 酸化炭 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、口唇部スス付着	
第-120図 2 PL-78	土師器 杯	埋土 1/4	口径 6.2 底径 — 器高 (3.3)	細砂粒 酸化炭 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-120図 3 PL-78	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 — 器高 (3.0)	細砂粒 酸化炭 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-120図 4 PL-78	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.8 底径 — 器高残 3.3	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-120図 5 PL-79	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 — 器高残 2.5	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-120図 6 PL-79	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.2 底径 — 器高 (4.3)	細砂粒 酸化炭 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-120図 7 PL-79	土師器 盤	埋土 3/4	口径 18.0 底径 — 器高 4.1	細砂粒 酸化炭 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-120図 8 PL-79	土師器 盤	埋土 1/4	口径 19.0 底径 — 器高 (4.1)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-120図 9 PL-79	土師器 盤	埋土 1/4	口径 19.0 底径 — 器高 (3.4)	細砂粒 酸化炭 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	

第1節 竪穴住居

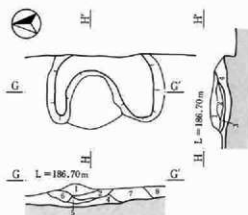
第-120図 10 PL-79	須恵器 杯	埴土 1/4	口径 12.0 底径 (9.0) 器高 (3.7)	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面轆轤整形痕・下縁回転ヘラケズリ、底部手持ヘラケズリ					
第-120図 11 PL-79	須恵器 杯	埴土 1/5	口径 17.0 底径 10.3 器高 4.2	細砂粒・黒色粒子 還元灰 灰	内面・外面轆轤整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付ヨコナデ					
第-120図 12 PL-79	須恵器 杯	埴土 1/5	口径 18.8 底径 13.3 器高 4.7	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面轆轤整形痕、高台貼付ヨコナデ					
第-120図 13 PL-79	須恵器 蓋	埴土 1/4	口径 18.0 底径 - 器高残 2.2	細砂粒 還元灰 灰	口縁部轆轤整形痕、外面回転ヘラケズリ					
第-120図 14 PL-79	須恵器 蓋	埴土 つまみ部 1/4	口径 - つまみ 7.1 器高残 2.3	細砂粒 還元灰 灰	内面轆轤整形痕、外面回転ヘラケズリ、つまみ貼付					
第-120図 15 PL-79	須恵器 高杯	埴土 脚1/5	口径 - 底径 12.0 器高残 3.3	やや粗砂粒 酸化灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕、脚貼付					
第-120図 16 PL-79	須恵器 蓋	埴土 口縁部1/4	口径 11.4 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 酸化灰 灰	内面・外面轆轤整形痕、内面自然釉					
第-120図 17 PL-80	土師器 台付羹	埴土 口縁部～ 胴部	口径 10.0 底径 - 器高残13.2	細砂粒 酸化灰 暗赤灰	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 18 PL-79	土師器 台付羹	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 12.0 底径 - 器高残 5.0	細砂粒 酸化灰 黒褐	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 19 PL-80	土師器 台付羹	埴土 口縁部	口径 13.4 底径 - 器高残 4.2	細砂粒 酸化灰 にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 20 PL-80	土師器 台付羹	埴土 口縁部	口径 12.6 底径 - 器高残 4.1	細砂粒 酸化灰 暗褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 21 PL-80	土師器 台付羹	埴土 口縁部1/4	口径 10.0 底径 - 器高残 7.7	細砂粒 酸化灰 赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヘラミガキ、外面ヘラケズリ					
第-120図 22 PL-80	土師器 鉢	埴土 1/4	口径 18.0 底径 - 器高残 6.6	細砂粒 酸化灰 浅黄	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 23 PL-80	土師器 羹	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 24.4 底径 - 器高残13.4	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 24 PL-80	土師器 羹	埴土	口径 27.6 底径 - 器高残 8.9	粗砂粒 酸化灰 にぶい黄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 25 PL-80	土師器 羹	埴土 口縁部～ 体部上半	口径 22.9 底径 - 器高残11.5	やや粗砂粒 酸化灰 にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 26 PL-80	土師器 羹	埴土 口縁部	口径 22.0 底径 - 器高残 5.2	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-120図 27 PL-80	土師器 羹	埴土 底部	口径 - 底径 (5.4) 器高残 5.0	細砂粒 酸化灰 赤褐	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
採回番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 121図28	PL-81	支脚	埴土	-		20.2	8.4	8.4	1990.0	
第 121図29	PL-81	石芥	埴土	粗粒安山岩		11.2	4.6	10.8	113.9	
採回番号	図版番号	器物名	部	位	長さ	備考				
第 121図30	PL-81	ニホンジヤ	角座骨付左角		8.8	細かな加工あり				
第 121図31	PL-81	ニホンジヤ	左角		6.5					

第3章 検出された遺構と遺物



52号住居

- 1 褐色土 FP粒、FAブロック、黄褐色土ブロックを僅かに含む
- 2 黄褐色土 焼土粒を僅かに含む
- 3 黄褐色土 焼土粒を多く含む
- 4 暗褐色土 FP粒を僅かに含む、黒褐色土ブロックを含む
- 5 黄褐色土 暗褐色土ブロック、焼土ブロックを含む、底面に炭化物が見られる
- 6 黄褐色土 焼土ブロック、灰を多く含む
- 7 赤褐色土 焼土(火床面)
- 8 黄褐色土 しまりのないローム質土
- 9 黄褐色土 FP粒、黄褐色土ブロックを含む、焼土粒を含む
- 10 黄褐色土 焼土ブロック、黄褐色土ブロック、炭化物を含む
- 11 黄褐色土 黄褐色土ブロック、焼土ブロックを含む
- 12 暗褐色土 FP粒をやや多く含む
- 13 褐色土 FP粒、焼土を僅かに含む
- 14 暗褐色土 木の根
- 15 黄褐色土 FA、焼土を僅かに含む

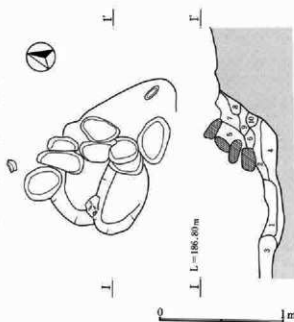


55号住居

- 1 褐灰色土 FA主体(天井部の崩落)
- 2 赤褐色土 灰を多く含む、炭化物を僅かに含む
- 3 赤褐色土 焼土主体、灰を含む
- 4 黒色土 他の土の混入が少ない
- 5 褐灰色土 他の土の混入が少ないFA
- 6 赤褐色土 焼土粒を多く含む、暗褐色土ブロックを含む
- 7 黄褐色土 FAブロックを多く含む(右の袖部)
- 8 黄褐色土 7に似るがやや黒色味が強い(右袖の崩落土)

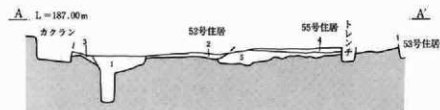
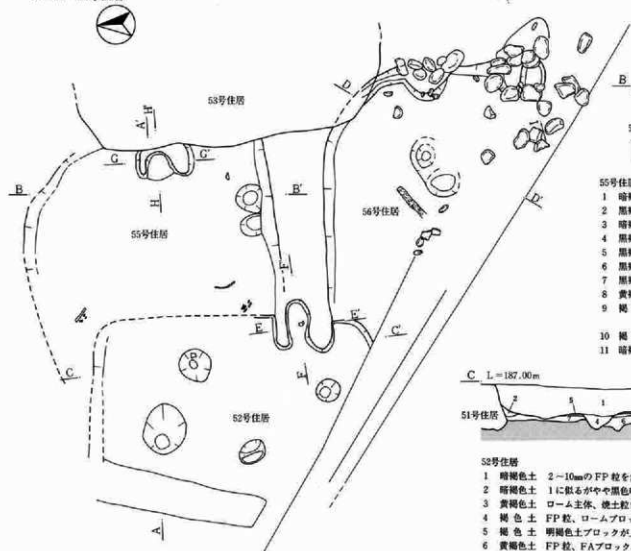
56号住居

- 1 赤褐色土 灰小ブロックを含む
- 2 黒褐色土 4~5mmのFP粒を含む、褐色土小ブロックを含む
- 3 暗褐色土 FP粒を僅かに含む、焼土ブロック、炭化物、黄褐色土ブロックを含む(床面)
- 4 褐色土 暗褐色土ブロックを僅かに含む
- 5 褐灰色土 FAブロック主体、2~4mmのFP粒を1%、焼土粒を3%
- 6 黒褐色土 FA小ブロックを5%
- 7 褐灰色土 FAブロック主体、2~3mmのFP粒を1%、黒色土ブロックを10%、焼土粒を僅かに含む
- 8 褐灰色土 FAの流れ込み
- 9 褐灰色土 FAブロック主体、1~2mmのFP粒を1%、黒色土ブロックを5%、焼土粒を僅かに含む
- 10 黄色土 ローム粒主体、黒色土粒、FA粒、FA小ブロックを10~20%



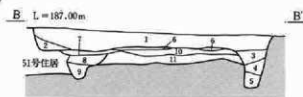
第115図 52・55・56号住居

52・55・56号住居



52・55号住居

- 1 褐色土 (52号住居柱穴)
- 2 褐色土 FP粒を僅かに含み、FAブロック、黄褐色土ブロックを含む (52号住居)
- 3 黄褐色土 褐色土ブロックを含み、上面に焼土が埋積している (52号住居)
- 4 黄褐色土 FAブロック、黄褐色土ブロックを含み、上面が硬化している (55号住居)
- 5 暗褐色土 FAブロック、黄褐色土ブロック、焼土粒を僅かに含む



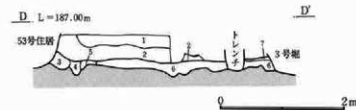
55号住居

- 1 暗褐色土 3-10mmのFP粒を含む
- 2 黒褐色土 焼土ブロックを含む
- 3 暗褐色土 4-10mmのFP粒を多く含む (柱穴)
- 4 黒褐色土 4-5mmのFP粒を僅かに含む (柱穴)
- 5 黒褐色土 FAブロックをやや多く含む (柱穴)
- 6 黒褐色土 FA、焼土粒を含む (上面硬化)
- 7 黒褐色土 4-5mmのFP粒、FAブロックを含む
- 8 黄褐色土 FP粒、FA小ブロックを含む (柱穴)
- 9 褐色土 FP粒を僅かに含み、FA小ブロック、ロームブロックを含む (柱穴)
- 10 褐色土 FP粒を僅かに含み、ロームブロックを含む
- 11 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土ブロックを僅かに含む



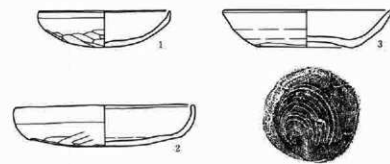
52号住居

- 1 暗褐色土 2-10mmのFP粒を含む
- 2 暗褐色土 1に似るがやや黒味が強い
- 3 黄褐色土 ローム主体、焼土粒を僅かに含む (敷層落土)
- 4 褐色土 FP粒、ロームブロックを含む
- 5 褐色土 明褐色土ブロックが上面に乗る (床面)
- 6 黄褐色土 FP粒、FAブロック、黒褐色土ブロックを含む
- 7 黄褐色土 6とはほぼ同じ

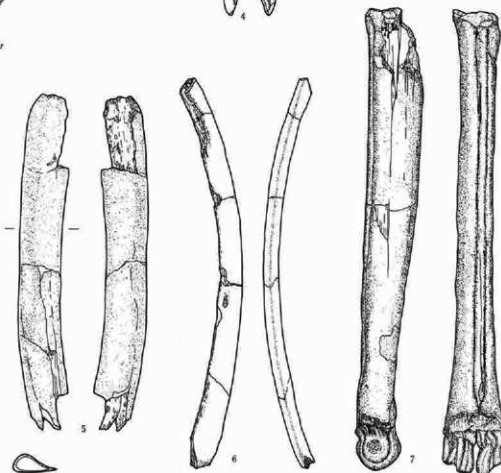


56号住居

- 1 暗褐色土 2-3mmのFP粒をやや多く含む
- 2 褐色土 2-3mmのFP粒を非常に多く含む
- 3 暗褐色土 FP粒を僅かに含み、黄褐色土ブロックをやや多く含む
- 4 暗褐色土 3に似るが、黄褐色土ブロックを殆ど含まない
- 5 褐色土 3に似るが、黄褐色土ブロックをやや多く含む
- 6 黒褐色土 FP粒、褐色土ブロックを含み、焼土粒を僅かに含む
- 7 暗褐色土 灰化層、焼土粒を多く含む (上面硬化)

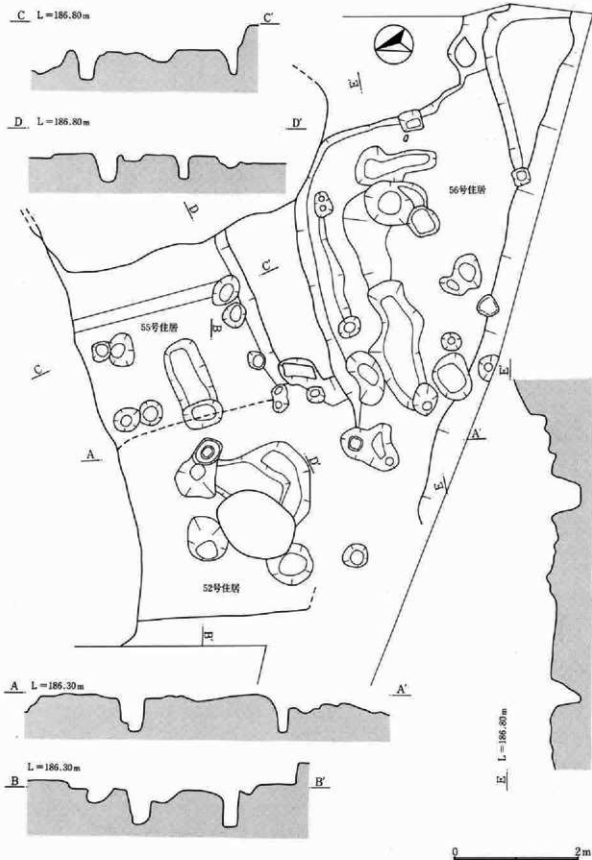


0 10cm



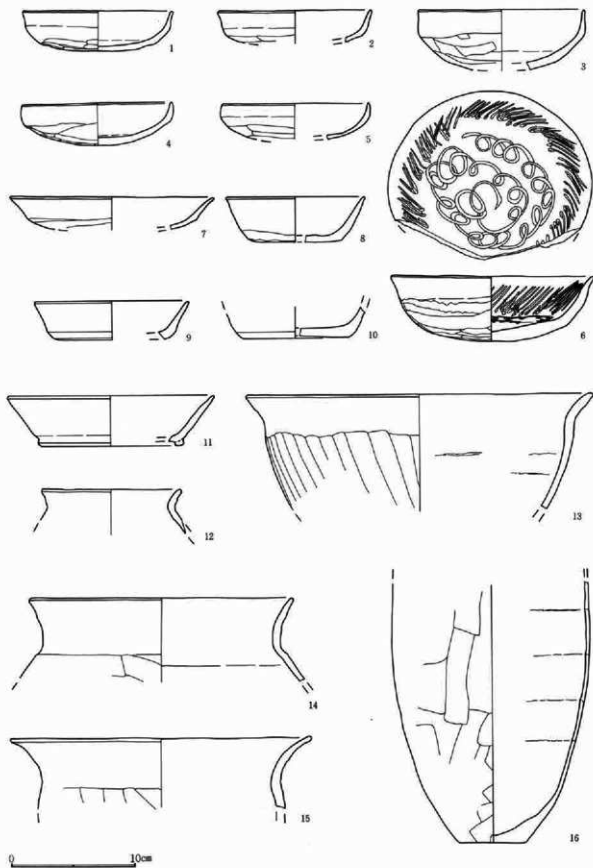
0 5cm

第116図 52・55・56号住居・55号住居出土遺物



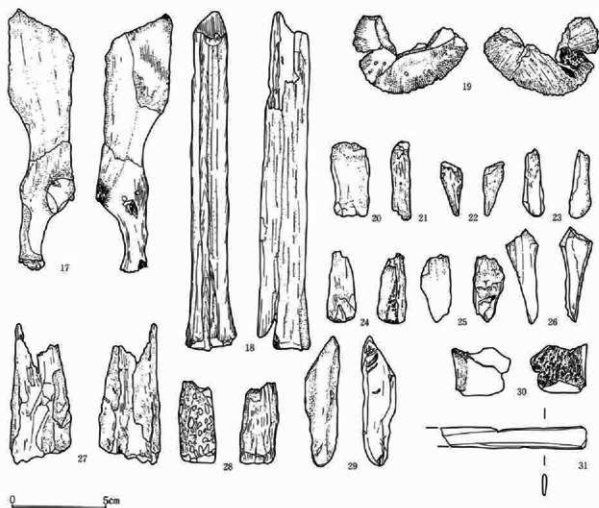
第117図 52・55・56号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第118図 52号住居出土遺物 (1)

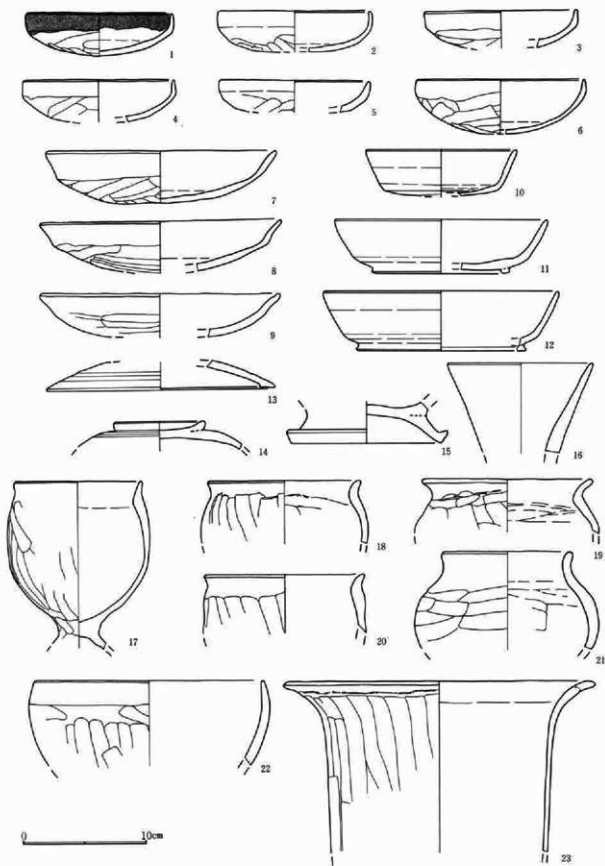
第1節 竪穴住居



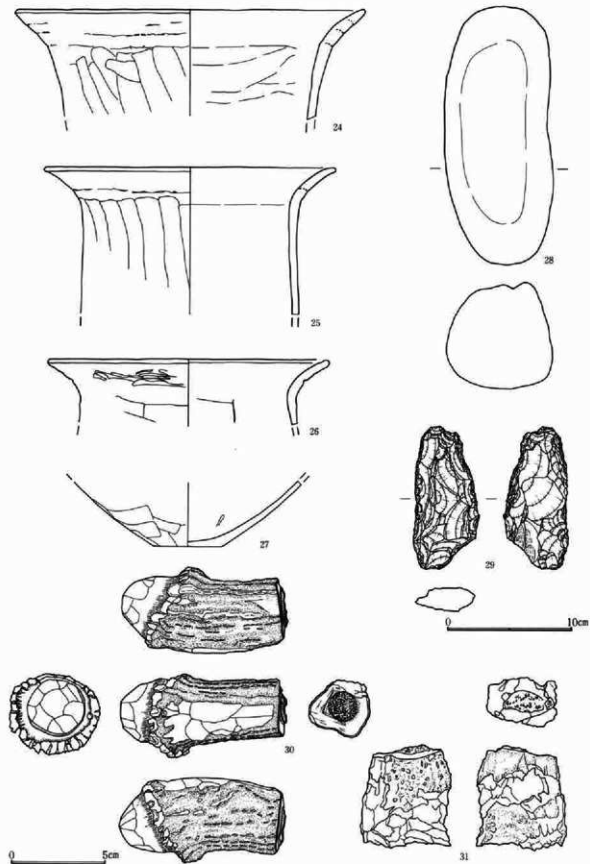
第119図 52号住居出土遺物 (2)

標 本 番 号	図 版 番 号	動物名	部 位	長 さ	備 考
第 119図17	PL-78	(イヌ科)	大右骨脛	13.7	
第 119図18	PL-78	ニホンゾウ	左中足骨	17.9	
第 119図19	PL-78	ウマ	前肢基節骨	6.1	
第 119図20		イノシシ	基節骨	4.0	
第 119図21		イノシシ	右第2中手骨	4.2	
第 119図22	PL-78	イノシシ	右上顎第2切歯	2.9	
第 119図23		—	—	3.6	
第 119図24		ニホンゾウ	—	3.8	
第 119図25		—	—	3.5	
第 119図26		—	—	5.0	
第 119図27		イノシシ	左尺骨	7.5	
第 119図28		ニホンゾウ	—	4.4	
第 119図29		—	—	6.9	
第 119図30	PL-78	—	—	3.1	
第 119図31	PL-78	—	—	7.7	加工痕あり

第3章 検出された遺構と遺物



第120図 56号住居出土遺物 (1)



第121图 56号住居出土遺物 (2)

第3章 検出された遺構と遺物

53号住居(第122~124図 PL 20・81・82)

位置 CE・CF-74・75 住居西半は南北に伸びる現有道路の下である。平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 1.10mを測る。重複住居 55号住居より新しく、54号住居より古い。規模 西辺は4.60mを測る。主軸方位 N-90°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土で一気に埋め戻されている。人為的なものであるか自然堆積であるかは不明である。壁の状況 床面から101°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で11.313㎡を測る。掘り方床面から、FP粒、褐色土を含むロームで10cm前後盛土し、更にローム、褐色土、黒色土等の混合土を貼って床としている。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 住居全面にわたって何箇所も円形に掘り込まれた部分がある。竈 検出されなかった。遺物 A、B、Cタイプの土師器杯、「コ」の字状の口縁を持つ土師器壺、底部に回転ヘラケズリを施す須恵器椀と回転糸切り無調整の須恵器椀等、遺物の時期にばらつきが見られる。所見 住居の時期は特定しにくい、8世紀代が想定され、新しい様相を持つ土師器は、混入遺物であると考えられる。

53号住居出土遺物

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-123図 3 PL-81	土師器 杯	埋土 1/2	口径 11.8 底径 - 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-123図 4 PL-81	土師器 杯	埋土 3/4	口径 - 底径 - 器高 3.1	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に細い無調整帯を持ち下部をヘラケ ズリ	
第-123図 5 PL-81	土師器 杯	9 cm 埋土 1/2	口径 10.7 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に幅広い無調整帯を持ち下部をヘ ラケズリ	
第-123図 6 PL-81	土師器 杯	埋土 1/5	口径 11.0 底径 - 器高 (2.7) にぶい褐色	細砂粒 酸化炭 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-123図 7 PL-81	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.9 底径 - 器高 3.5 にぶい赤褐色	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-123図 8 PL-81	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.8 底径 - 器高 3.0 にぶい褐色	細砂粒 酸化炭 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-123図 9 PL-81	土師器 杯	埋土 1/4 底部欠く	口径 14.0 底径 - 器高残 3.6 明赤褐色	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-123図 10 PL-81	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (2.9) にぶい褐色	細砂粒 酸化炭 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-123図 11 PL-81	須恵器 杯	27cm 1/3	口径 13.0 底径 7.4 器高 3.3	細砂粒 還元炭 オリーブ灰	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り無調 整	
第-123図 12 PL-81	須恵器 椀	埋土 1/5	口径 11.5 底径 7.1 器高 3.7	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り、い ぶし	
第-123図 13 PL-82	須恵器 椀	埋土 口縁部1/5	口径 11.6 底径 - 器高残 3.1	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕	
第-123図 14 PL-82	須恵器 椀	埋土 口縁部1/5	口径 13.0 底径 - 器高残 4.0	細砂粒 還元炭 暗灰	内面・外面轆轤整形痕、いぶし	
第-123図 15 PL-82	須恵器 椀	埋土 口縁部1/5	口径 13.6 底径 - 器高残 4.1	やや粗砂粒 還元炭 灰	内面・外面轆轤整形痕、いぶし	

第1節 竪穴住居

第-1230図 16 PL-82	須恵器 椀	埴土 口縁部1/5	口径 15.6 底径 一 器高残 4.0	細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪縁整形痕、いぼし					
第-1230図 17	須恵器 椀	埴土 底部1/2	口径 一 底径 6.8 器高残 1.6	細砂粒・黒色粒子 還元灰 暗緑灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転ヘラケズリ					
第-1230図 18	須恵器 椀	埴土 底部1/5	口径 一 底径 9.0 器高残 2.4	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り					
第-1230図 19 PL-82	須恵器 蓋	埴土 1/4つまみ 欠損	口径 14.0 つまみ一 器高残 2.5	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪縁整形痕、上面回転ヘラケズリ					
第-1230図 20 PL-82	須恵器 蓋	埴土 つまみ部 1/5	口径 一 つまみ 6.0 器高残 2.2	細砂粒・黒色粒子 還元灰 灰	内面輪縁整形痕、外面回転ヘラケズリ、つまみ貼付					
第-1230図 21 PL-82	土師器 壺	埴土 口縁部1/4	口径 23.2 底径 一 器高残 6.4	細砂粒 酸化灰 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
第-1230図 22 PL-82	土師器 壺	埴土 口縁部一 体部上手	口径 20.0 底径 一 器高残12.1	細砂粒 酸化灰 にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ					
埴田番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 1228図 2	PL-81	棒状體	2.0cm	石英閃緑岩		15.0	6.0	5.5	749.6	
埴田番号	図版番号	動物名	部	位	長さ	備考				
第 1228図 1	PL-81	一	骨		14.6					

54号住居(第122・124図 PL.20・82・83)

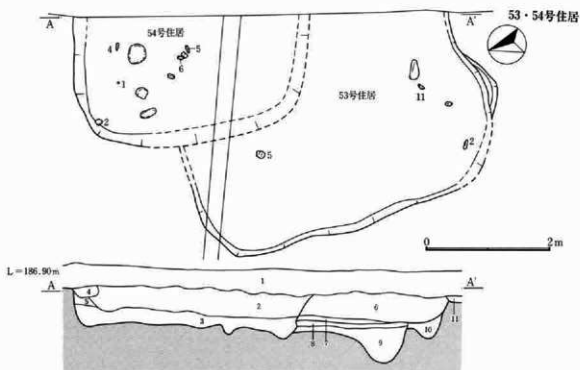
位置 CE・CF-74・75 住居西半は南北に伸びる現有道路の下である。平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 1.10mを測る。重複住居 53号、55号住居より新しい。規模 北辺は残存部分で1.90mを測る。主軸方位 N-103°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土、黄褐色土を主体とする水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から108°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 掘り方床面をそのまま床として使用している。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 東西間隔1.60m、南北間隔1.35mで、深さは床面から0.20-0.50mを測る。掘り方 平坦である。竈 検出されなかった。遺物 特徴すべき遺物としては床面より「和同開珎」が出土している。共存する土器が少ないのが残念であるが、体部にごく弱い稜を持つ土師器盤が出土している。また表裏に楕円を持つ粗粒安山岩製の大形の砥石が出土している。所見 「和同開珎」の初鑄造年を和銅元年(708年)とすれば、住居の年代はそれ以降になる。また土師器の盤は口径と比較して深い体部を持ちやや古い様相を残している。したがって、遺物から見た住居の時期は、8世紀の前半代が想定できるが、「和同開珎」がどの程度伝世したものか不明であるので、住居の重複等を考慮に入れると、後半まで下る可能性もある。

54号住居出土遺物

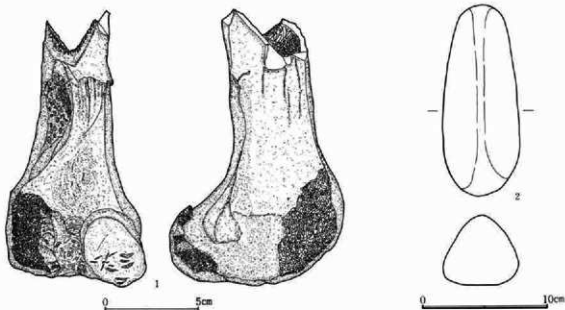
埴田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考				
第-124図 2 PL-82	土師器 盤	27cm 1/4	口径 17.5 底径 一 器高 (3.5)	細砂粒 酸化灰 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
埴田番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 124図 3	PL-83	砥石	埋土	粗粒安山岩		23.3	16.2	6.9	2600.0	掘り跡あり
第 124図 4	PL-83	棒状體	床面密着	粗粒安山岩		12.7	4.7	3.1	265.3	
第 124図 5	PL-83	棒状體	床面密着	消粘礫灰岩		11.0	4.2	3.1	237.3	
第 124図 6	PL-82	棒状體	1.5cm	角閃石安山岩		9.7	5.2	2.9	240.4	
埴田番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	径	厚	備考			
第 124図 1	PL-82	鉄	20.0cm	「和同開珎」	2.4	0.75	初鑄造年708年			

第3章 検出された遺構と遺物



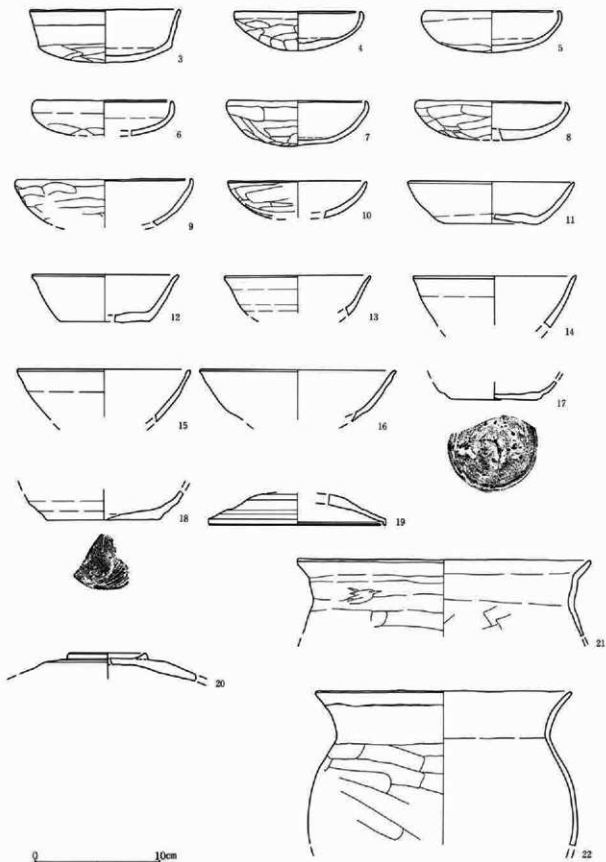
53・54号住居

- | | | | |
|--------|---|---------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 表土 | 7 黄褐色土 | 2-3mmのFP粒を僅かに含み、焼土ブロックを含む (53号住居埋土) |
| 2 褐色土 | 2-10mmのFP粒をやや多く含む (54号住居埋土) | 8 褐色土 | 黄褐色土、褐色土、黒色土、炭化物の薄い層の集まり (53号住居床面) |
| 3 黄褐色土 | 2-20mmのFP粒、FA小ブロック、ロームブロックを含む (54号住居埋土) | 9 黄褐色土 | 2-8mmのFP粒を含み、褐色土ブロックを含む (53号住居床下) |
| 4 黒褐色土 | 2-6mmのFP粒を僅かに含む (54号住居埋土) | 10 黄褐色土 | 9に似るが、FP粒を多く含む (53号住居床下) |
| 5 軽石 | 3-10mmのFP粒中心 (54号住居FP流れ込み) | 11 褐色土 | 5-20mmのFP粒を含む (53号住居埋土) |
| 6 暗褐色土 | 2に似るが、黒色味が強い (53号住居埋土) | | |



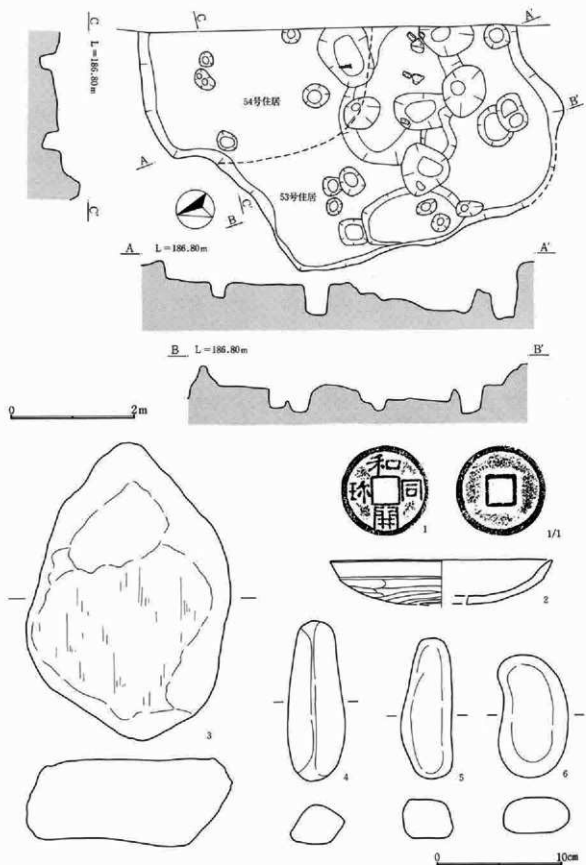
第122図 53・54号住居・53号住居出土遺物 (1)

第1節 竪穴住居



第123図 53号住居出土遺物 (2)

第3章 検出された遺構と遺物



第124図 53・54号住居掘り方・54号住居出土遺物

57号住居(第125・126図 PL 21・83)

位置 CD-76・77 最も住居が集中している地点の西端部に位置し、51号、52号、53号、55号、56号住居等と近接する。住居の西辺、南辺は調査区外であり、中央部は中世編で報告した1号石積によって壊される。平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.75mを測る。重複住居 52号、58号住居より古い。規模 完全に残っている辺は無いが、復元を行ってみると1辺8m以上になると推定される。主軸方位 N-68°-E 埋没土 FP粒を多く含む暗褐色土の水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から131°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 掘り方床面から、FP粒、FA、ロームを含む褐色土で20cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 住居を全周して、幅20~30cm、深さ5~10cmの周溝が巡っている。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 南北間隔3.85mで、深さは床面から30~35cm前後で、1回以上の立て直しが想定できる。掘り方 はほぼ平坦である。竈 検出されなかった。遺物 Aタイプの土師器杯が出土している。杯は体部が深く古い様相を残している。また、使用目的は不明であるが、FPの塊を俵状に丁寧に削り出したものが出土している。所見 出土した遺物から見て、57号住居には7世紀代の時期が想定でき、検出された住居の中では最も古いと考えられる。

57号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考				
第-126図 PL-83 1	土師器 杯	床面直上 口縁部1/4 欠損	口径 10.2 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炎 にぶい澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ					
第-126図 PL-83 2	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 11.6 底径 - 器高 3.2	細砂粒 酸化炎 明赤箱	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ					
第-126図 3	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.6 底径 - 器高 (3.4)	細砂粒 酸化炎 明焼	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケ ズリ					
採回番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 126図 4	PL-83	俵状石	埋土	標名山噴出軽石		7.1	3.7	3.1	47.3	

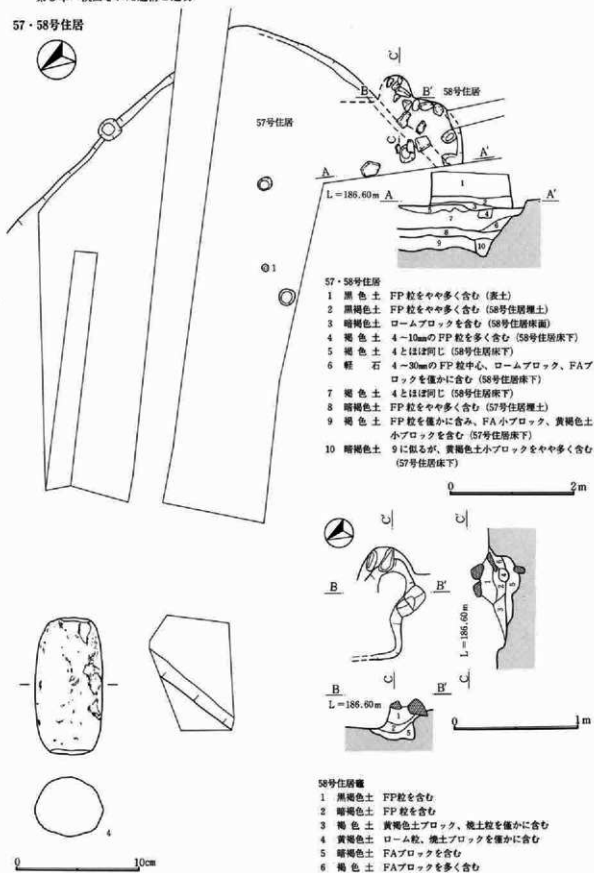
58号住居(第125・126図 PL 21)

位置 CD-76・77 最も住居が集中して検出された地点の南端部に位置し、1区から連続する微高地の端に存在するため、住居の残存状態は悪い。この住居より南東は住居の空白地帯とも言うべき空間が広がるが、ここは元々住居の無い部分であったとも考えられるが、この空白地帯より南の住居の検出状況を考えて、微高地上に存在した住居が既に削平されて検出できないと考えたほうがより自然である。

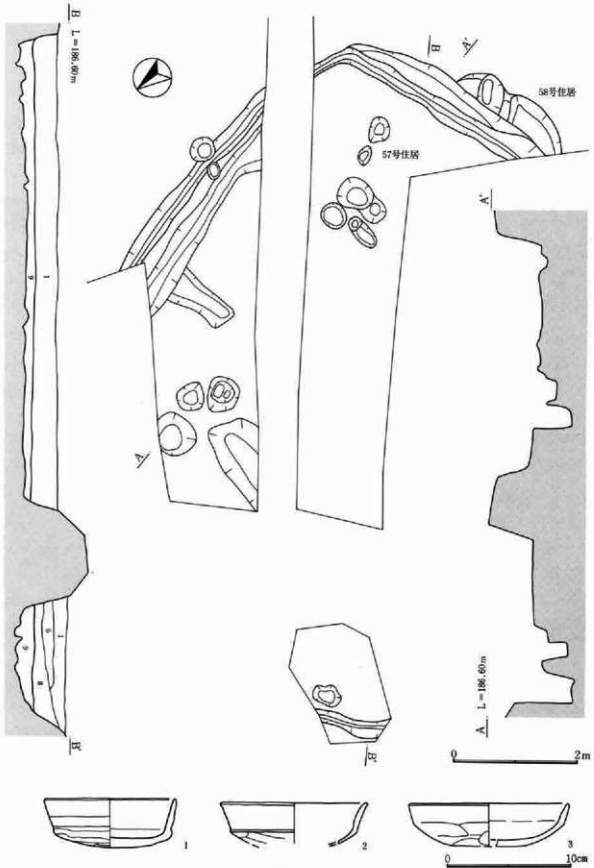
平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.40mを測る。重複住居 57号住居より新しい。

主軸方位 N-112°-E 埋没土 FP粒を多く含む黒褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から131°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 掘り方床面から、FP粒を含む褐色土で30cm前後盛土し、一部に暗褐色土を貼って床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 はほぼ平坦である。竈 位置 東辺中央 方位 N-110°-E 規模 全長は0.80m(屋外長0.20m、屋内長0.60m)を測る。形状その他 袖部の形態ははっきりしない。竈周辺から南東コーナー部分にかけて多数の河原石が見られることから、半石組み竈であった可能性がある。燃焼部は僅かに掘りくぼめられており、奥壁はやや急な角度を持って立ち上がる。遺物 検出されなかった。所見 遺物が皆無であり、住居の時期は特定できない。

57・58号住居



第125図 57・58号住居・58号住居竈・57号住居出土遺物(1)



第126図 57・58号住居掘り方・57号住居出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

61号住居(第127～129図 PL 22・84・85)

位置 DB・DC-69・70 調査区北端で検出され、住居の東半は現有道路の下で検出できなかった。
 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.70mを測る。 重複住居 65号、66号住居より古い。
 規模 西辺は3.95mを測る。 主軸方位 N-120°-E 埋没土 FP粒を含む褐色土の水平堆積で、自然堆積であると考えられる。 壁の状況 床面から121°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。 床面 面積は残存部分で8.757㎡を測る。掘り方床面から、褐色土で10cm前後盛土し、床としている。 周溝 北辺、西辺と南辺の一部で幅10～20cm、深さ5～10cm前後の周溝が巡っている。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱 穴 東西間隔1.70m、南北間隔2.60mで、深さは床面から0.42～0.51mを測る。 掘り方 ほぼ平坦である。 竈 検出されなかった。
 遺物 須恵器杯は酸化炭焼成で、底部は回転糸切り無調整で、須恵器碗は粗雑な高台が付く。土器器臺は口縁部がやや崩れてはいるものの「コ」の字型を示す。灰釉碗はやや後出的である。 所見 出土した遺物から61号住居には9世紀末から10世紀初頭の時期が想定できる。

65号住居(第127・129図 PL 22・83)

位置 DC・DD-68・69 平面形状 隅丸方形を呈すると推定される。 残存深度 0.20mを測る。
 重複住居 61号、66号住居より新しい。 規模 西辺は残存部分で1.70m、南辺は残存部分で0.65mを測る。 主軸方位 N-105°-E 壁の状況 床面から105°の角度で立ち上がる。 床面 面積は残存部分で1.161㎡を測る。 周溝 住居の西辺で、幅10cm前後、深さ7～10cmの周溝が検出されている。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱 穴 検出されなかった。 掘り方 ほぼ平坦である。 竈 検出されなかった。 遺物 酸化炭焼成で底径が小さく、回転糸切り無調整の須恵器碗と、羽釜、灰釉皿等が出土している。 所見 出土した遺物から見て、65号住居には10世紀後半の時期が想定できる。

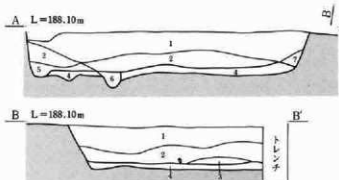
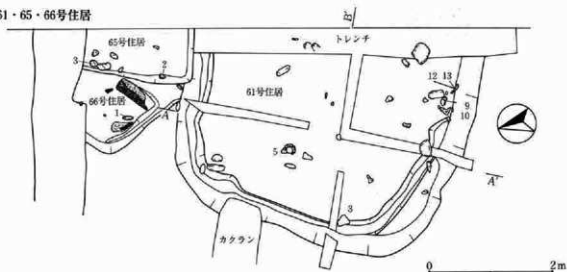
65号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-127図 1 PL-83	須恵器 碗	埋土 1/2	口径 10.0 底径 5.2 器高 3.6	やや粗砂粒 酸化炭 にぶい黄橙	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-127図 2 PL-83	灰釉 皿	44cm 1/2	口径 12.5 底径 6.7 器高 2.3	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転糸切り高台貼付、つけがけ	
第-127図 3 PL-83	須恵器 羽釜	52cm 口縁部～ 体部上半	口径 26.7 底径 - 器高残11.7	粗砂粒 酸化炭 にぶい黄橙	口縁部・内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ跡貼付	
検出番号	図版番号	動物名	部位	長さ	備考	
第 127図 4	PL-83	ニホンジ	左距骨	4.0		
第 127図 5	PL-83	ニホンジ	右距骨	3.0		
第 127図 6	PL-83	ニホンジ		4.4		

66号住居(第127・129図 PL 22・85)

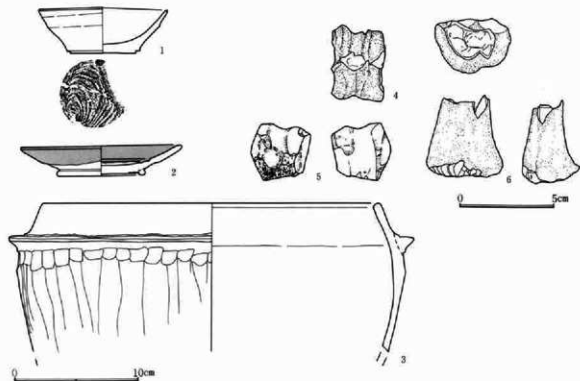
位置 DC・DD-68・69 平面形状 隅丸方形を呈すると推定される。 残存深度 0.28mを測る。
 重複住居 61号住居より新しく、65号住居より古い。 主軸方位 N-152°-E 壁の状況 床面から126°の角度で立ち上がる。 床面 面積は残存部分で1.296㎡を測る。 周溝 検出されなかった。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱 穴 検出されなかった。 掘り方 ほぼ平坦である。 竈 検出されなかった。 遺物 灰釉碗が1個体出土している。 所見 65号住居とはほぼ同じ時期が想定でき、10世紀後半の住居と考えられる。

61・65・66号住居



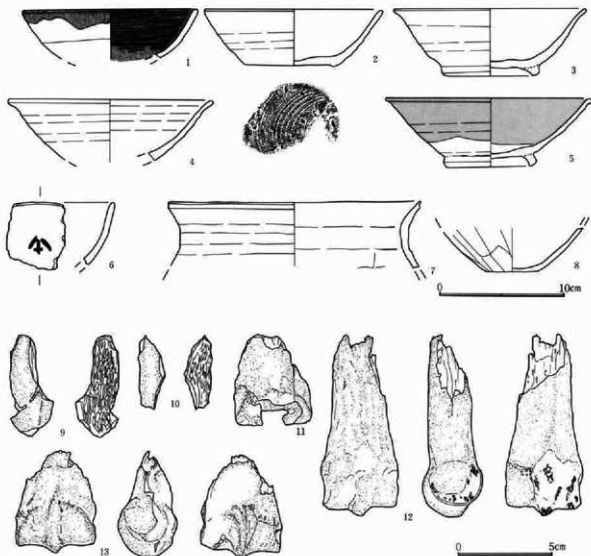
61号住居

- 1 褐色土 3-5mmのFP粒を10%、10-20mmのFP粒を5%
- 2 褐色土 3-5mmのFP粒を15%、1より6ややFP粒が多い
- 3 褐色土 3-5mmのFP粒を5%、黒色土を含む
- 4 褐色土 3に似るが、黒色土がやや少ない
- 5 暗褐色土 3-5mmのFP粒を3%、大形のFP粒を含む
- 6 褐色土 3-5mmのFP粒を3%
- 7 軽石 1-5mmのFP粒中心、壁からのFPの脱落



第127図 61・65・66号住居・65号住居出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

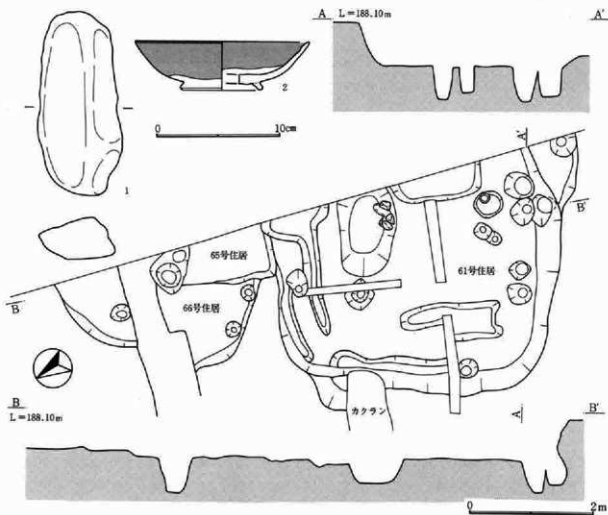


第128図 61号住居出土遺物

61号住居出土遺物

神田番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-128図 1 PL-84	黒色土器 碗	埋土 1/4	口径 13.6 底径 - 器高残 3.9	細砂粒 酸化灰 灰黄褐色	内面・外面轆轤整形痕、内面ミガキ、黒色処理	
第-128図 2 PL-84	須恵器 杯	埋土 底部1/2欠 く	口径 14.0 底径 7.2 器高 4.4	細砂粒 酸化灰 明褐色	内面・外面轆轤整形痕、底部割転糸切り無調整	
第-128図 3 PL-84	須恵器 碗	8cm 1/4	口径 15.0 底径 6.8 器高 5.3	細砂粒 酸化灰 にぶい黄褐色	内面・外面轆轤整形痕、高台貼付	
第-128図 4 PL-84	須恵器 碗	埋土 1/3底部欠 く	口径 16.0 底径 - 器高残 4.8	細砂粒 酸化灰 灰黄	内面・外面轆轤整形痕	
第-128図 5 PL-84	灰釉 碗	床面密着 ほぼ完形	口径 16.2 底径 6.5 器高 5.4	細砂粒 酸化灰 にぶい黄褐色・灰白	口縁部・内面・外面轆轤整形痕、高台貼付 つけがけ	
第-128図 6 PL-84	須恵器 杯	埋土 口縁部小 片	口径 - 底径 - 器高 -	細砂粒 酸化灰 灰黄	内面・外面轆轤整形痕、内面ミガキ、黒色処理	黒書 「本」小

第1節 竪穴住居



第129図 61・65・66号住居掘り方・66号住居出土遺物

第-128図 7 PL-84	土師器 壺	埋土 口縁部1/5	口径 20.0 底径 - 器高残 3.2	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ	
第-128図 8 PL-84	土師器 壺	埋土 破片	口径 - 底径 4.0 器高残 3.3	細砂粒 酸化炭 灰褐	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
採回番号	図版番号	動物名	部	長さ	備 考	
第 128図9		ウマ?	四脚骨	5.3	床面から7.0cm	
第 128図10		ウマ?	四脚骨	3.9		
第 128図11	PL-85	ウマ	中手または中足骨	4.9		
第 128図12	PL-85	ウマ	中手骨	9.6	床面から18.0cm	
第 128図13	PL-85	ウマ	中足骨	5.5	床面から18.0cm	

66号住居出土遺物

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考			
第-129図 2 PL-85	灰軸 椀	埋土 1/5	口径 13.8 底径 6.0 器高 3.8	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面縦壺形痕、高台貼付				
採回番号	図版番号	製品名	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第 129図1	PL-85	棒状礫	9.5cm		粗粒安山岩	14.4	6.1	3.3	436.0

第3章 検出された遺構と遺物

62号住居(第130～132図 PL.22・83・84)

位置 CY～DB-68～70 3区北端部に位置し、61号住居と63号住居に挟まれる形で存在する。また、南北に伸びる現有道路を挟んで東側には、4号住居が存在する。住居東半は道路の下である。

平面形状 やや東西方向に長い隅丸方形を呈し、検出されている南北、西辺には、床面から約90cm立ち上がった所に幅35～90cmのテラスが存在する。テラスは住居の周囲を一周するものと推定され、11号住居、28号住居との共通点が指摘される。残存深度 1.05mを測る。重複住居 単独で検出された。

規模 西辺は6.50m、南辺は残存部分で5.55m、北辺は残存部分で7.10mを測る。

主軸方位 N-97°-E 埋没土 住居廃絶後、最初にテラス部分から住居の縁を覆うようにFP粒を含む褐色土が堆積し(4層、7層)、次に汚れたFP粒が50～60cm堆積している(2層、3層)。最後に残った窪みをFP粒を含む褐色土が覆い尽くしている(1層)。堆積は、最初の埋土である褐色土がテラス部分から斜めに堆積しており、人為的な埋め戻しが想定できる。また、軽石の堆積は水平であるが、軽石のみであることは不自然であり、11号住居同様に埋土を選んで埋め戻した可能性がある。最後に住居を覆った褐色土は自然堆積か人為的なものか判断できない。壁の状況 床面から132°の角度で立ち上がる。住居南辺中央部に炭化した木材と炭化物が検出されており、屋根あるいは壁を構成した材の痕跡であると考えられる。

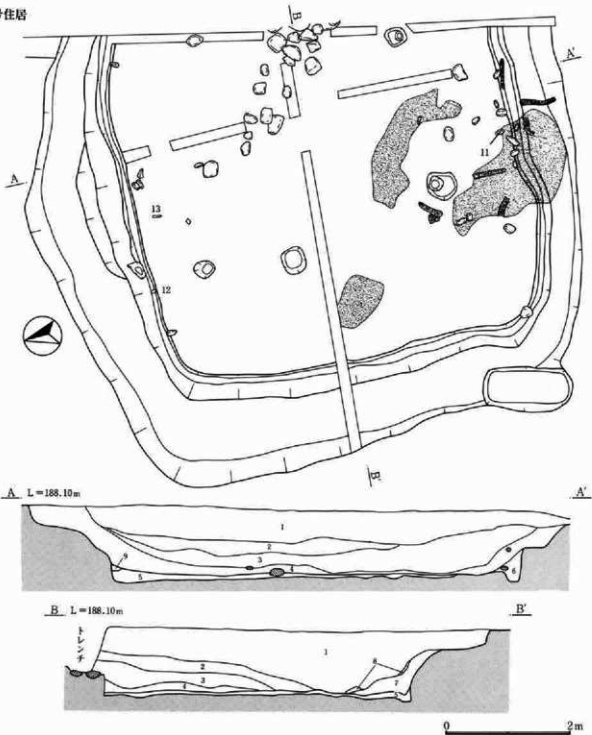
床面 面積は残存部分で29.80 m^2 を測る。掘り方床面からローム、FA、黒色土の混合土で5cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 検出されている南・北・西の各辺で、幅15～30cm、深さ15cmの周溝が見られる。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 東西間隔3.75m、南北間隔3.50mで、深さは床面から0.14～0.40mである。掘り方 はほぼ平坦である。竈位置 東辺中央竈で使用されたと考えられる石材が東辺中央部に散乱しているのみで、本体は現有道路の下である。20～30cm大の河原石が多数見られることから、石組み竈であった可能性が高い。遺物 Aタイプの土師器杯が出土している。須釜器杯(第132図8、9)、羽釜(10)は土師器杯と時期差が大きく混入遺物であると考えられる。また鉄鏝が1点出土している。所見 出土した遺物から見て、62号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

62号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-132図 1 PL-83	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.6	細砂粒 酸化炭 灰	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-132図 2 PL-83	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.8 底径 - 器高 3.1	細砂粒 酸化炭 灰	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	底部に植物圧痕
第-132図 3 PL-83	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 灰	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-132図 4 PL-83	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 3.4	細砂粒 酸化炭 灰	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-132図 5 PL-84	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.8 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 酸化炭 灰	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-132図 6 PL-84	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 (3.5)	細砂粒 酸化炭 明赤焼	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-132図 7 PL-84	土師器 葉	埋土 口縁部1/5	口径 19.4 底径 - 器高残 7.6	細砂粒 酸化炭 にぶい赤黒	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面風化	

観察表の続きは195ページ

62号住居

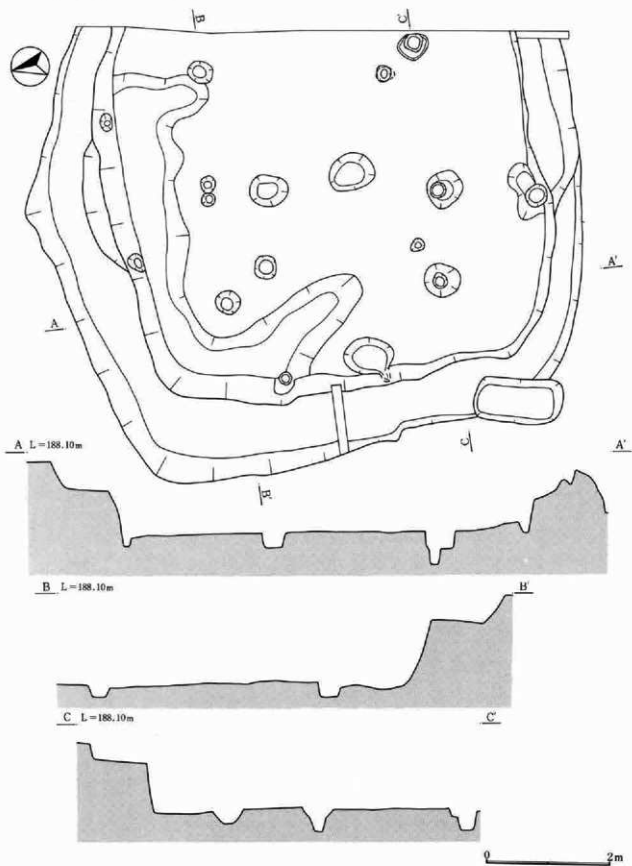


62号住居

- | | |
|---|---|
| <p>1 褐色土 3-30mmのFP粒を20%</p> <p>2 軽石 2-10mmのFP粒中心、褐色土で汚れているFPの流れ込み</p> <p>3 軽石 3-50mmのFP粒中心、褐色土による汚れが見られるが、南にいくほど汚れが少ない</p> <p>4 褐色土 3-7mmのFP粒を20%</p> | <p>5 褐色土 ローム小ブロック、FA小ブロック、黒色土ブロックをマarmor状に含む(床面)</p> <p>6 褐灰色土 炭化物、褐色土を含む</p> <p>7 褐色土 1とは同じ</p> <p>8 黒色土 炭化した木材か</p> <p>9 褐灰色土 FAの陥落</p> |
|---|---|

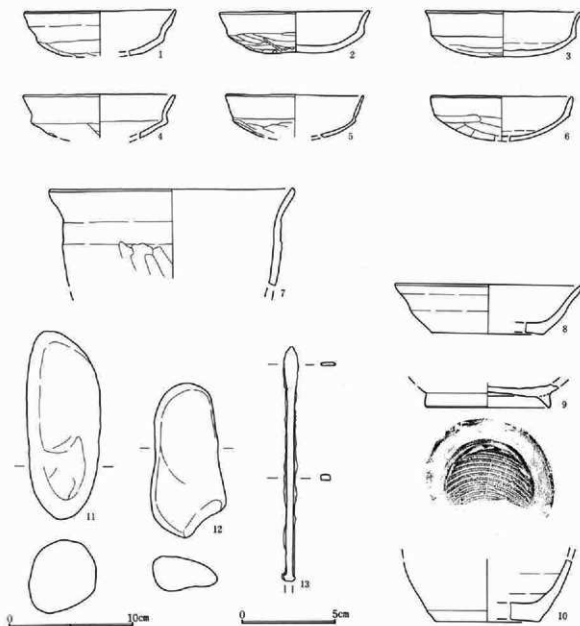
第130図 62号住居

第3章 検出された遺構と遺物



第131図 62号住居掘り方

第1節 竪穴住居



第132図 62号住居出土遺物

第-132図 8 PL-84	須恵器 杯	埋土 1/4	口径 14.6 底径 8.9 器高 3.8	細砂粒 還元灰 黄灰	内面・外面輪縁整形痕、底部手持ちヘラケズリ				
第-132図 9	須恵器 杯	埋土 底部1/2	口径 - 底径 10.0 器高残 1.9	細砂粒・黒色粒子 還元灰 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り、高台貼付	底部刷印 「×」			
第-132図 10 PL-84	須恵器 長頸壺	埋土 底部1/5	口径 - 底径 8.2 器高残 4.8	やや細砂粒 還元灰 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転糸切り				
種図番号	図版番号	製品名	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第 132図11	PL-84	棒状壺	床面密着	粗粒安山岩	14.7	5.9	5.8		
第 132図12	PL-84	棒状壺	-14.0cm	粗粒安山岩	12.1	6.1	2.7		
種図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備 考	
第 132図13	PL-84	鉄鏝	- 7.5cm	鏝身部のみ	12.4	0.8	0.2		

第3章 検出された遺構と遺物

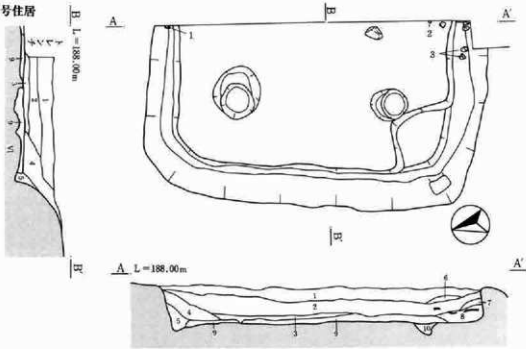
63号住居(第133・134図 PL.22・85)

位置 CX・CY-69 62号住居と6号住居の間に存在する。平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.70mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 西辺は5.10m、南辺は残存部分で2.90m、北辺は残存部分で2.50mを測る。主軸方位 N-108°-E 埋没土 FP粒を含む暗褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積と考えられる。壁の状況 床面から107°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で11.592㎡を測る。掘り方床面から、FP粒、黒色土を混合したFAで15~20cm前後盛土し、床としている。顕著な硬化面は認められず、床は1面しか検出されなかった。周溝 検出された住居の南・北・西の各辺で幅20~40cm、深さ10cm前後の周溝が見られる。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 南北間隔2.5mで、深さは床面から0.45~0.65mである。掘り方 住居南半と柱穴周辺をやや深く掘り下げている。竈 検出されなかったが、南・北・西辺からその痕跡が認められないことから、東辺にあったと推定される。遺物 土師器杯は出土していない。須恵器輪は酸化気味の還元炭焼成で底部回転切削り無調整か、横に張り出した高台が付く。土師器の裏は口縁部が「コ」の字状を呈し、薄手に作られている。台付甕も同様の作りである。灰輪軸(第134図6)はやや時代が下るもので、混入遺物と思われる。所見 出土した遺物から見、63号住居には9世紀後半の時期が想定できる。

63号住居出土遺物

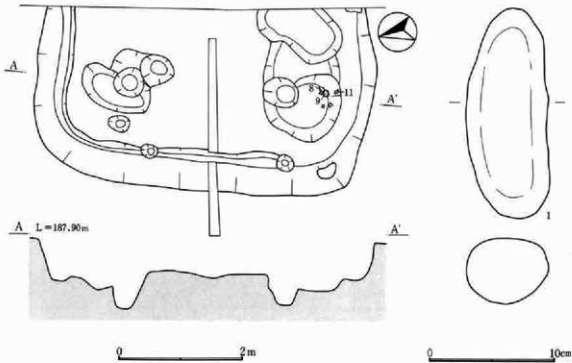
押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考			
第-134図 2	須恵器 輪	9cm 底部1/2	口径 - 底径 5.6 器高残 2.9	やや粗砂粒 還元炭 オリーブ黒	内面・外面輪軸整形痕、底部回転切削り、いぶし				
第-134図 3 PL-85	須恵器 輪	12~23cm ほぼ定形	口径 14.8 底径 6.4 器高 6.6	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、底部回転切削り後高台貼付、いぶし				
第-134図 4	須恵器 輪	埋土 底部のみ	口径 - 底径 6.8 器高残 2.1	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪軸整形痕、高台貼付、底部回転切削り				
第-134図 5	須恵器 輪	埋土 底部のみ	口径 - 底径 6.7 器高残 1.5	細砂粒 還元炭 灰白	表裏回転切削り、内面粘土貼付、高台貼付				
第-134図 6 PL-85	灰輪 軸	埋土 底部1/2	口径 - 底径 6.0 器高残 1.6	細砂粒 還元炭 灰白	内面・外面輪軸整形痕、高台貼付、底部回転ヘラケズリ				
第-134図 7 PL-85	土師器 台付甕	埋土 脚1/5	口径 - 底径 10.0 器高残 3.2	細砂粒 酸化炭 赤褐色	内面・外面ヨコナデ				
第-134図 8	土師器 台付甕	11.5cm 口縁部1/5	口径 11.6 底径 - 器高残10.0	細砂粒 酸化炭 赤褐色 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	土坑底面 から			
第-134図 9 PL-85	土師器 台付甕	12.5cm 小片	口径 - 底径 - 器高残 7.6	細砂粒 酸化炭 赤褐色	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ、底部接合ユビナデ・ユビオサエ	土坑底面 から			
第-134図 10 PL-85	土師器 甕	埋土 底部一体部 下半	口径 - 底径 4.2 器高残19.8	細砂粒 酸化炭 赤褐色 にぶい赤褐色	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ				
第-134図 11	土師器 甕	15cm 口縁部1/5	口径 18.7 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 酸化炭 赤褐色	口縁部ヨコナデ	土坑底面 から			
第-134図 12	土師器 甕	埋土 口縁部1/5	口径 20.0 底径 - 器高残 6.1	細砂粒 酸化炭 赤褐色 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ				
押図番号 第 133図1	図版番号 PL-85	製品名 椀状甕	出土位置 15.0cm	石 滑結晶灰岩	長さ 16.4	幅 6.4	厚さ 5.1	重さ 811.8	備考

63号住居

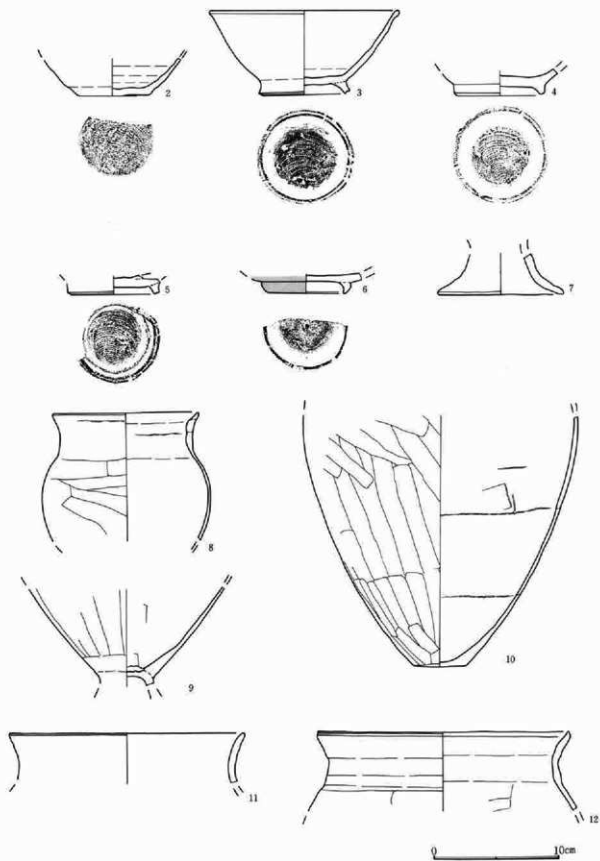


63号住居

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 3-10mmのFP粒を10-15%、FA粒を僅かに含む | 6 褐色土 | 3に似る |
| 2 暗褐色土 | 3-10mmのFP粒を20%、FA粒を5% | 7 褐色土 | 炭化物を1% |
| 3 褐色土 | 2-5mmのFP粒を5%、FA粒を10-20% | 8 褐色土 | FAブロック主体、2-5mmのFP粒を5% |
| 4 褐色土 | 2-10mmのFP粒を5%、FA粒、ブロックを20% | 9 褐色土 | FAに黒色土ブロックを10-20%、2-3mmのFP粒を1% |
| 5 褐色土 | 2-5mmのFP粒を2%、FA粒、ブロックを20-30% | 10 褐色土 | FAに黒色土小ブロックを含む |



第133図 63号住居・掘り方・出土遺物(1)



第134図 63号住居出土遺物 (2)

67号住居(第135・136図 PL.23・85・86)

位置 CK・CL-67・68 3区の道路西側の51号住居付近から北西方向に向かって帯状に続く住居の集中地帯は、道路東側においてはこの67号住居を南限として更に北西方向に伸びているものと推定される。道路の東側においては、西側ほど極端な重複関係は見られないが、調査区他の地域と比較すると、住居密度は高い。67号住居の南は、中世編で報告した1号池によって大きく削られており、見た目は住居の空白地帯となっているが、実態は不明である。しかし、67号住居の北、71号、72号住居の北側に広がる空白地帯は、FPが面としてとらえられており、もともと住居のなかった部分であると考えられる。このように67号住居は3区の住居集中地帯の北端部に位置し、68号、69号、70号住居と近接する。平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.60mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 東辺は3.75m、西辺は4.00m、南辺は4.10m、北辺は3.80mを測る。主軸方位 N-120°-E 埋没土 FP粒を含む黒褐色土、褐色土を主体とした水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から115°の角度で立ち上がる。壁を構成した材あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は14.796㎡を測る。掘り方床面からFA、ロームブロックを含む暗褐色土で10~15cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 竪部分を除く住居の立ち上がり部分から、幅20~30cm、深さ10cm前後の周溝が検出されている。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 東西間隔2.00m、南北間隔1.95mで、深さは0.45~0.48mを測る。柱穴間を結んで描く方形は、住居の中心より僅かに南東へずれている。

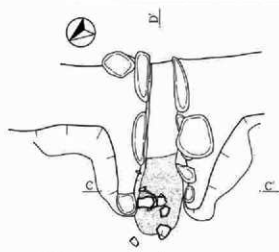
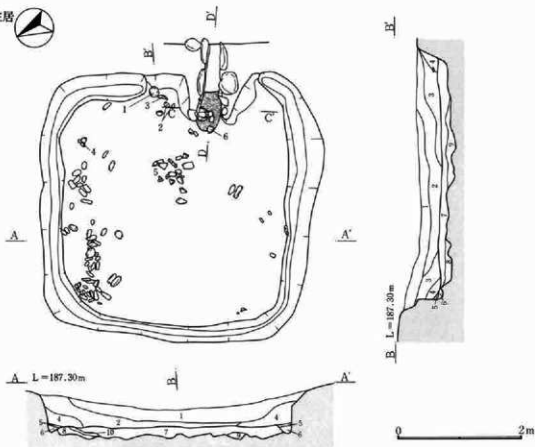
掘り方 平坦である。竪位置 東辺中央やや南寄り 方位 N-122°-E 規模 煙道部先端は調査区外である。全長は1.25m(屋外長0.55m、屋内長0.70m)、袖部幅0.60mを測る。形状その他 袖部は住居の東辺から大きく内側に入り込んでおり、煙道の一部にもなっている。袖部の材はFP粒を混合した暗褐色土で、補強のため袖手を据えている。燃焼部は小さな窪みを持ち、奥壁は僅かに立ち上がって緩やかな煙道部へと続く。煙道部両脇には補強のため長めの河原石が横向きに据えられている。長さ60cm大の平石が竪の右袖部に置かれていることから、煙道部は暗渠状の構造を持っていた可能性が高い。しかし、燃焼部奥壁までは暗渠状の構造は見られず、煙道部のみの半石組み竪であったと思われる。遺物 Aタイプの土師器杯と長胴の土師器壺が出土している。所見 出土した遺物から見て、67号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

67号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-136図 1 PL-85	土師器 杯	11.9cm ほぼ定形	口径 12.6 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 酸	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-136図 2 PL-85	土師器 杯	2.3~4.5cm ほぼ定形	口径 12.3 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化炭 酸	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-136図 3 PL-86	土師器 杯	7cm 1/3	口径 16.0 底径 - 器高 7.1	細砂粒 酸化炭 酸	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 ヘラケズリ	
第-136図 4 PL-86	土師器 杯	3.1cm	口径 15.0 底径 - 器高残 4.9	細砂粒 酸化炭 酸	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-136図 5 PL-86	土師器 壺	2.9~3.2cm 口縁部~ 体部上半	口径 23.2 底径 - 器高残10.0	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-136図 6 PL-86	土師器 壺	4.5cm 底部~体部 上半	口径 - 底径 4.6 器高残 9.9	やや粗砂粒 酸化炭 にぶい黄褐	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	底部本重 痕

第3章 検出された遺構と遺物

67号住居

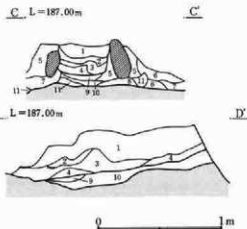


67号住居

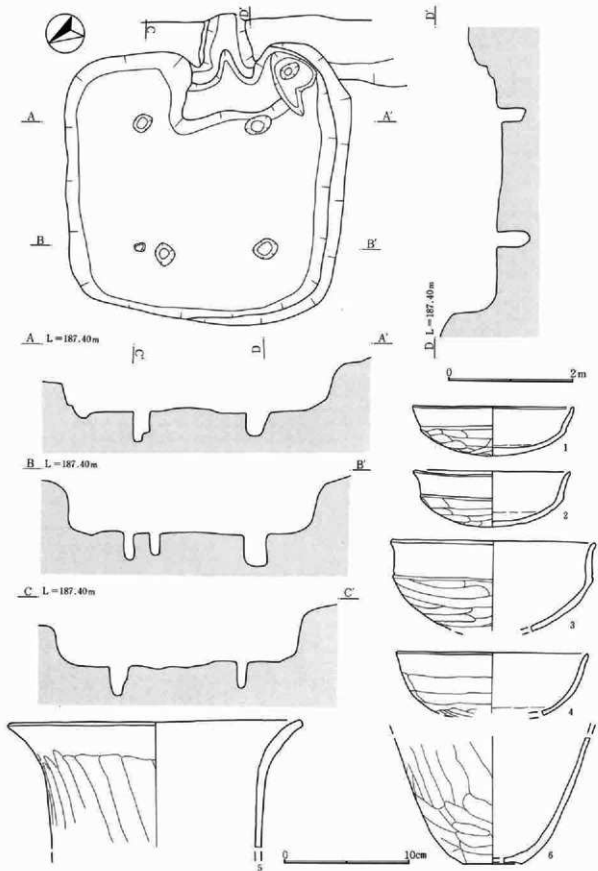
- 1 黒褐色土 FP粒を僅かに含む
- 2 褐色土 FP粒を極めて多く含む
- 3 暗褐色土 FP粒、炭化物を僅かに含む
- 4 暗褐色土 FP粒を多く含む
- 5 暗褐色土 FA、黒色土を含む(床面)
- 6 暗褐色土 FP粒を多く含む
- 7 暗褐色土 FP粒を僅かに含む、FA、ロームブロックを含む
- 8 暗褐色土 FP粒を多く含む
- 9 黄褐色土 ローム主体、黒色土ブロック、FAブロックを僅かに含む
- 10 褐灰色土 FA主体、FP粒を僅かに含む

67号住居竪

- 1 暗褐色土 5mmのFP粒を含む
- 2 灰褐色土 灰主体、僅かに炭化物を含む
- 3 褐色土 灰、焼土を僅かに含む
- 4 暗褐色土 FP粒を多く含む、焼土粒を僅かに含む
- 5 暗褐色土 FP粒を多く含む、FA小ブロックを僅かに含む
- 6 褐色土 FAブロックを多く含む
- 7 黒色土 FP粒を含む
- 8 黒褐色土 FA、ローム粒を含む
- 9 赤褐色土 焼土層(火床面)
- 10 褐色土 僅かにFP粒、焼土を含む
- 11 褐灰色土 FAブロック



第135図 67号住居・竪



第136図 67号住居掘り方・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

68号住居(第137~139図 PL 23・24・86・87)

位置 CL-CN-66・67 3区の東端に存在し、住居の東半は調査区外である。平面形状 隅九方形を呈する。住居北辺には幅0.6mの、西辺には幅1.0~1.5mの、北辺には幅0.9~1.5mのテラスが作られている。テラス部分は床と同様にほぼ平坦な面を作っている。テラスを含めた平面形状は、コーナーがやや丸みを持つ。残存深度 1.20mを測る。重複住居 住居本体に重複は無いが、テラス部分南西コーナーを67号住居に壊されている。規模 西辺は外周が6.90m、内周が5.25m、南辺は外周が残存部分で4.80m、内周が残存部分で2.90m、北辺は外周が残存部分で3.25m、内周が残存部分で3.00mを測る。

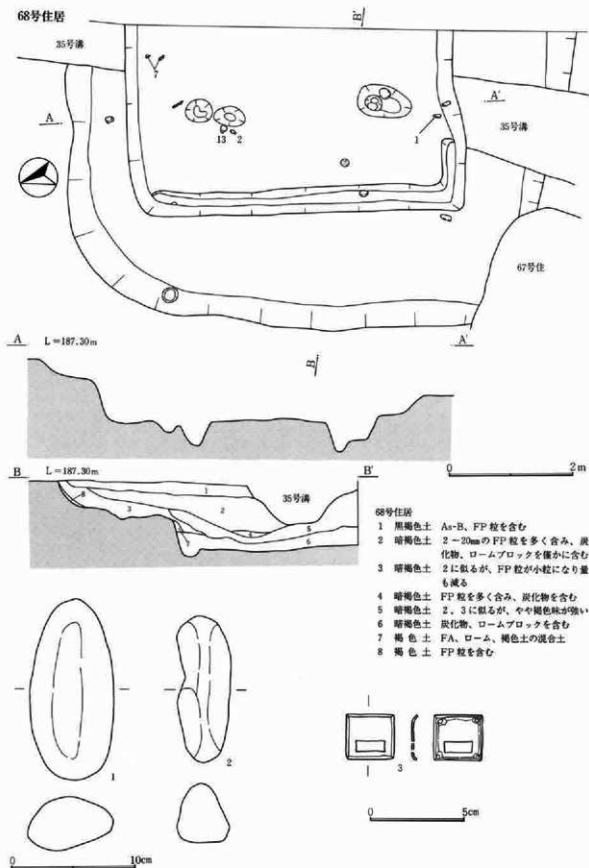
主軸方位 N-100°-E 埋没土 FP粒、ロームを含む暗褐色土を主体とし、テラス部分から斜めに堆積している。堆積状況を見ると、南北両方向から埋め戻したようにみられ、人為的な埋戻しの可能性も考えられる。壁の状況 床面から130°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で13.680㎡を測る。掘り方床面から炭化物、ロームブロックを含む暗褐色土で20cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 住居西辺と、南西コーナー部分で、幅20~25cm、深さ10cm前後の周溝が検出されている。貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 南北間隔は3.00mで深さは0.38~0.48mを測る。掘り方 住居の中心部分を大きく掘り込んでいる。竈 検出されなかった。遺物 土師器杯はBタイプ(第139図4)、Cタイプ(5~7)、Dタイプ(8~11)、Eタイプ(12)が出土している。また盤(13)は弱い稜を持ち、やや深めである。須恵器杯は2個体出土しているが、やや後出のであり、混入遺物と考えられる。須恵器蓋は天井部を欠いているが、深めでかえりを持つ。所見 重複関係にある67号住居の遺物と比較するとやや新しい感じも受けるが、それほど大きな時期差はないであろう。したがって68号住居にも67号住居とほぼ同じ時期が想定でき、67号住居よりやや古いと判断される。

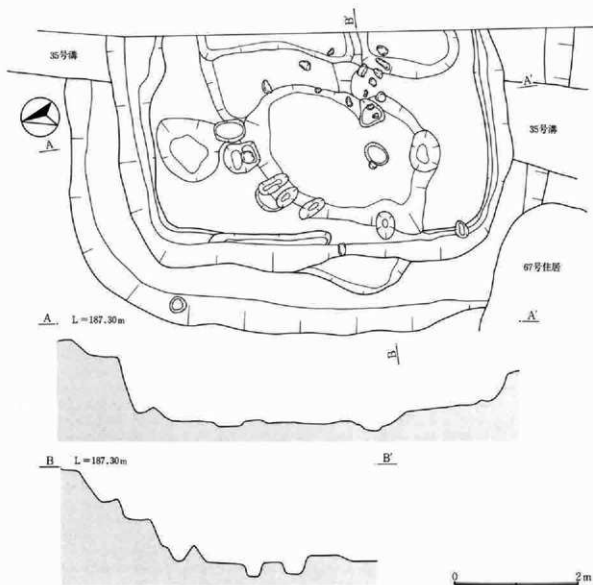
68号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-139図 4 PL-86	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.0 底径 - 器高 2.8	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-139図 5 PL-86	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.2 底径 - 器高 3.1	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-139図 6 PL-86	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 にぶい褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-139図 7 PL-86	土師器 杯	27~31.4cm 1/3	口径 13.3 底径 - 器高 4.6	細砂粒 酸化炭 帯	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-139図 8 PL-86	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.8 底径 - 器高 (2.8)	細砂粒 酸化炭 明褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-139図 9 PL-86	土師器 杯	埋土 1/3	口径 12.6 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-139図 10 PL-86	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 14.0 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 酸化炭 赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面風化の ため技法不明	
第-139図 11 PL-87	土師器 杯	埋土 1/4	口径 15.0 底径 - 器高 (3.9)	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 上部は無調整帯をもち下部をヘラケズリ	
第-139図 12 PL-87	土師器 杯	埋土 1/4 底部欠く	口径 13.4 底径 - 器高 (3.4)	細砂粒 酸化炭 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ、放射状附文	

観察表の続きは205ページ



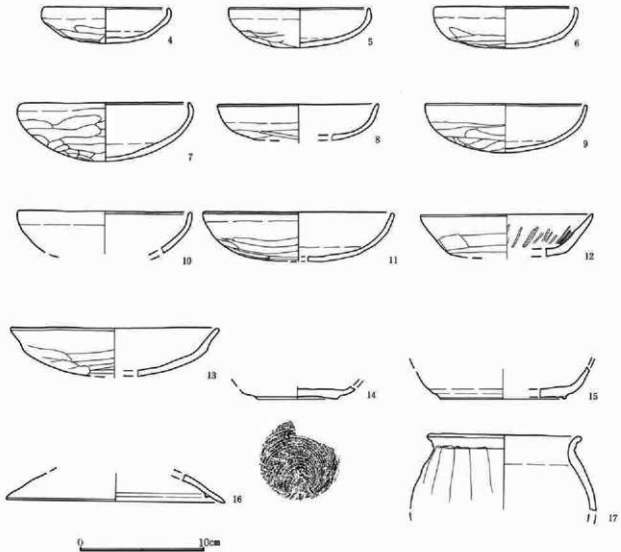
第137図 68号住居・出土遺物



第138図 68号住居掘り方



第1節 竪穴住居



第139図 68号住居出土遺物

第-139図 13 PL-87	土師器 杯	床面着着 1/4	口径 16.4 底径 - 器高 (3.8)	細砂粒 酸化炎 明赤焼	口縁部ヨコナデ、内面不明、外面ヘラケズリ						
第-139図 14	須恵器 杯	埋土 底部1/2	口径 - 底径 6.4 器高残 1.0	やや粗砂粒 還元炎 灰	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り						
第-139図 15 PL-87	須恵器 杯	埋土 底部1/5	口径 - 底径 10.0 器高残 2.5	細砂粒 酸化炎 灰	内面・外面轆轤整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付						
第-139図 16 PL-87	須恵器 蓋	埋土 口縁部1/4	口径 17.4 底径 - 器高残 2.3	細砂粒 還元炎 灰	内面・外面轆轤整形痕、かえり貼付						
第-139図 17 PL-87	土師器 台付葉	埋土 口縁部1/4	口径 12.0 底径 - 器高残 5.9	やや粗砂粒 酸化炎 黒焼	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ						
採図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴		長さ	幅	厚さ	備 考		
第 137図 3	PL-86	煎製磁片	埋土	定形		2.4	2.6	0.2			
採図番号	図版番号	製品名	出土位置	石 材		長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	
第 137図 1	PL-86	棒状礫	1.4cm	粗粒安山岩		14.2	6.6	4.1	536.4		
第 137図 2	PL-86	棒状礫	1.6cm	粗粒安山岩		11.5	4.3	4.6	355.2		

第3章 検出された遺構と遺物

69号住居(第140～143図 PL.24・87・88)

位置 CM・CN-67-69 平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.60m 重複住居 70号、71号住居より古い。規模 東辺は残存部分で4.15m、南辺は残存部分で4.35m、北辺は残存部分で3.30mを測る。主軸方位 N-100°-E 埋没土 FP粒を僅かに含む暗褐色土を主体とし、最下層には炭化物が大量に見られることから、焼失住居であると考えられる。壁の状況 床面から120°の角度で立ち上がる。住居北西端部に炭化材が見られる。床面 面積は復元で25.749m²を測る。掘り方床面から暗褐色土、FAの混合土で10～20cm盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 住居南辺から幅25～40cm、深さ10cm前後の周溝が検出されている。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 東西間隔2.20m、南北間隔3.00mで、深さは床面から0.35～0.55mである。掘り方 住居北側をやや深く掘り下げている。竈位置 東辺中央 方位 N-100°-E 規模 全長は0.80m(屋外長0.40m、屋内長0.40m)、袖部幅0.65mを測る。形状その他 袖部は殆ど残っていない。燃焼部は緩やかに立ち上がりそのまま煙道部に通じる。遺物 C、Dタイプの土師器杯、かえりを持たない須恵器蓋が出土している。所見 出土した遺物から、69号住居には8世紀前半の時期が想定できる。

69号住居出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-142図 1 PL-87	土師器 杯	1.2～2.3cm 口縁部一部 欠損	口径 10.8 底径 - 器高 3.4	細砂粒 酸化炭 色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-142図 2 PL-87	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 - 器高 2.3	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-142図 3 PL-87	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.4 底径 - 器高 (3.1)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部は無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-142図 4 PL-87	土師器 杯	埋土 1/5	口径 12.0 底径 - 器高残 3.3	細砂粒 酸化炭 昏	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-142図 5 PL-87	土師器 杯	埋土 1/5	口径 12.6 底径 - 器高 (3.0)	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	

70号住居(第144・145図 PL.24・25・88・89)

位置 CM・CN-69-70 平面形状 隅丸方形を呈する。残存深度 0.50mを測る。重複住居 69号住居より新しい。規模 東辺は4.55m、西辺は3.80m、南辺は3.90m、北辺は3.70mを測る。主軸方位 N-98°-E 埋没土 FP粒を含む黒褐色土の水平堆積で、自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から125°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は16.137m²を測る。掘り方床面から暗褐色土、FAで20～30cm前後盛土し、床としている。周溝 住居北辺、西辺と東辺の一部で、幅30cm、深さ10cm前後の周溝が検出された。柱穴 検出されなかった。掘り方 住居全体に何箇所も掘り込みが見られる。竈位置 東辺中央 方位 N-101°-E 規模 全長は1.10m(屋外長0.65m、屋内長0.45m)、袖部幅は復元で0.60mを測る。形状その他 袖部は殆ど残存していない。燃焼部両脇は石で補強されている。燃焼部から緩やかに立ち上がりそのまま煙道部となっている。煙道部は短い。遺物 暗文を持つEタイプの土師器杯、やや外反しながら立ち上がり、底部回転ヘラケズリを施す須恵器杯、盤の他に、土師器壺、台付壺が見られる。所見 出土した遺物が僅かなので時期を特定できないが、70号住居は8世紀代の住居であると考えられる。

70号住居出土遺物

神宮番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製 作 技 法 / 特 徴	備 考
第-145図 1 PL-88	土師器 杯	埋土 口唇部～ 底部	口径 14.9 底径 — 器高 4.7	細砂粒 酸化炎 灰褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ、放射状周文	
第-145図 2 PL-88	須恵器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 13.2 底径 8.6 器高 3.6	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズリ	
第-145図 3 PL-89	須恵器 盤	埋土 1/5	口径 20.9 底径 17.0 器高 (3.0)	細砂粒 酸化炎 黄橙	内面・外面輪軸整形痕、底部回転ヘラケズリ	
第-145図 4 PL-88	土師器 合付甕	埋土 口縁部1/4	口径 11.5 底径 — 器高残 6.0	粗砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-145図 5 PL-89	土師器 甕	17～19cm 口縁部	口径 18.4 底径 — 器高残 5.0	細砂粒 酸化炎 にぶい濁	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ	
第-145図 6 PL-89	土師器 甕	6cm 口縁部1/4	口径 24.0 底径 — 器高残 5.4	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヨコヘラケズリ	

71号住居(第146～148図 PL 25・89・90)

位 置 CN・CO-67・68 平面形状 隅丸方形を呈する。 残存深度 0.75mを測る。

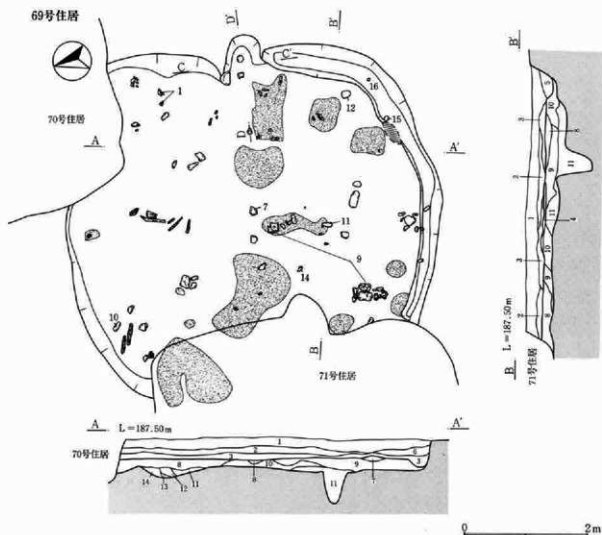
重複住居 69号、72号住居より新しい。 規 模 東辺は4.06m、西辺は4.35m、南辺は4.25m、北辺は4.10mを測る。 主軸方位 N-93°-E 埋没土 明褐色土の水平堆積 壁の状況 床面から110°の角度で立ち上がる。 床 面 面積は14.742㎡を測る。掘り方床面からロームを含む褐色土で盛土し、床としている。 周 溝 確認されている。 掘り方 ほぼ平坦である。 竈 位 置 東辺中央 方 位 N-91°-E 規 模 全長0.80mを測る。 形状その他 楕円形の掘り込みを熱焼部とする。 遺 物 C、Dタイプの土師器杯、稜が殆ど見られない盤が見られる。 所 見 8世紀代か。

71号住居出土遺物

神宮番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製 作 技 法 / 特 徴	備 考
第-147図 3 PL-89	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.0 底径 — 器高 (2.9)	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-147図 4 PL-89	土師器 杯	21.5cm ほぼ完形	口径 12.6 底径 — 器高 3.7	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-147図 5 PL-89	土師器 杯	26cm 1/4	口径 12.7 底径 — 器高残 2.8	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-147図 6 PL-89	土師器 盤	埋土 1/4	口径 17.9 底径 — 器高 (3.4)	細砂粒 酸化炎 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-147図 7 PL-89	土師器 甕	4.9cm ほぼ完形	口径 22.8 底径 5.2 器高 31.3	細砂粒 酸化炎 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	

神宮番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第 146図1	PL-89	砥石	22.5cm			13.2	6.2	3.7	341.9	
第 146図2	PL-89	石筴	埋土			5.3	7.7	1.2	42.7	
神宮番号	図版番号	動物名	部	位	長さ	備 考				
第 148図8	—	—	大腸骨頭		4.8	床面から5.0cm				
第 148図9	PL-90	ニキツバ	左距骨		3.9					
第 148図10	PL-90	—	—		4.2	床面から5.0cm				
第 148図11	PL-90	—	—		4.5	床面から5.0cm				
第 148図12	—	—	四肢骨片		4.5	床面から5.0cm 焼骨				
第 148図13	—	—	四肢骨片		2.8	床面から5.0cm 焼骨				

第3章 検出された遺構と遺物



69号住居

- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | FP粒を僅かに含み、炭化物を含む | 8 暗褐色土 | FP粒、FAブロックを含む |
| 2 暗褐色土 | FP粒を僅かに含み、FA、炭化物を含む | 9 暗褐色土 | 8に似るが、FAの混入が少ない |
| 3 黒色土 | FP粒、FAを僅かに含み、炭化物を多く含む | 10 褐灰色土 | FAに黒色土が混じる |
| 4 褐灰色土 | FAを僅かに含む(床面) | 11 軽石 | FP粒中心 |
| 5 暗褐色土 | FP粒を多く含む | 12 暗褐色土 | FP粒を僅かに含み、FA、黒色土を含む |
| 6 暗褐色土 | FP粒を多く含む(壁の崩落) | 13 暗褐色土 | FP粒、黒色土、ロームを僅かに含む |
| 7 黄褐色土 | FP粒を多く含み、FAを僅かに含む | 14 黄褐色土 | ロームに黒色土が混じる |

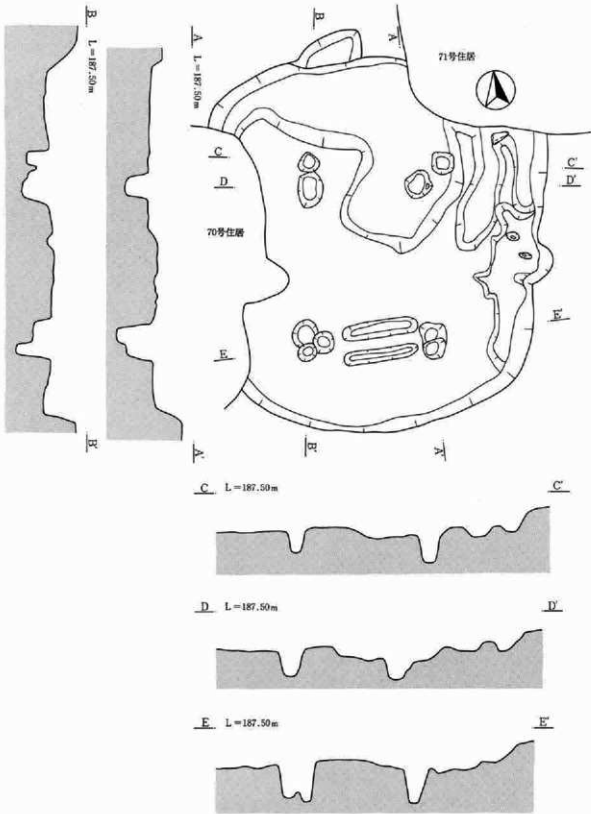
第140図 69号住居



69号住居 (北から)

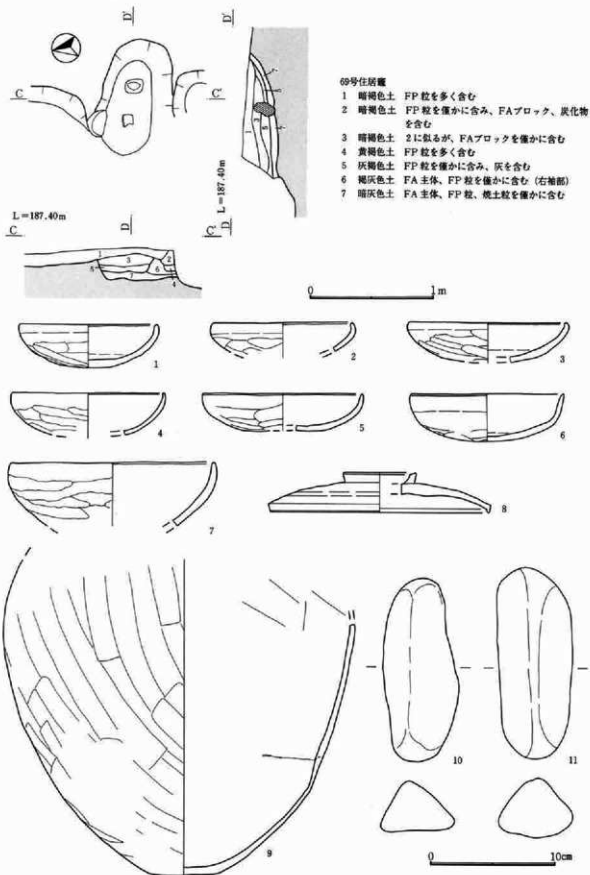


69号住居電

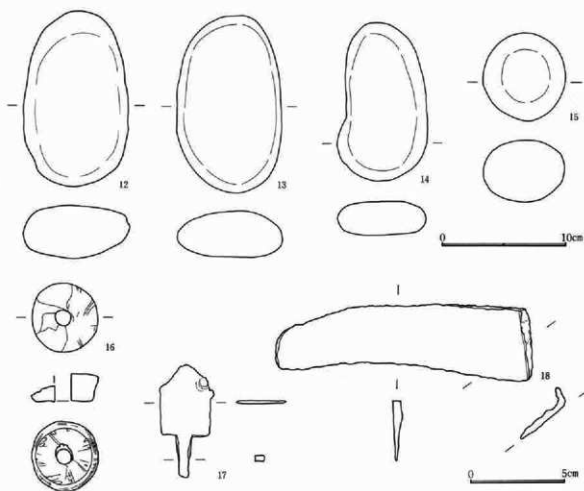


第141図 69号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第142図 69号住居遺構・出土遺物 (1)

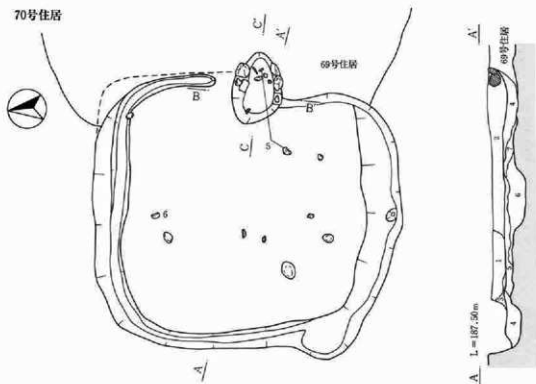


第143図 69号住居出土遺物 (2)

第-142図 6 PL-87	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.9 底径 - 器高 3.7	細砂粒 酸化夾 においで	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ						
第-142図 7 PL-87	土師器 杯	11.8cm 口縁部1/4	口径 16.0 底径 - 器高残 5.0	細砂粒 酸化夾 殻	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ						
第-142図 8 PL-88	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 17.2 底径 5.7 器高 3.1	細砂粒 酸化夾 灰	内面・外面輪縁整形痕、つまみ貼付						
第-142図 9 PL-88	土師器 甕	0~15cm 底部~体部 下半	口径 - 底径 5.8 器高残24.4	やや粗砂粒 酸化夾 殻	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
採掘番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備	考
第 142図10	PL-88	棒状體	床面密着	粗粒安山岩		14.4	6.1	4.0	378.7		
第 142図11	PL-88	棒状體	3.5cm	粗粒安山岩		15.0	5.9	4.7	630.0		
第 143図12	PL-88	棒状體	床面密着	粗粒安山岩		13.8	8.4	4.2	794.8		
第 143図13	PL-88	棒状體	埋土	粗粒安山岩		13.9	7.8	3.6	644.7		
第 143図14	PL-88	棒状體	2.0cm	粗粒安山岩		12.4	7.1	2.6	440.4		
第 143図15	PL-88	円盤	21.5cm	粗粒安山岩		6.8	6.4	4.9	298.1		
第 143図16	PL-88	紡錘車	18.0cm	滑石		3.5	3.7	1.5	27.0		
採掘番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴		長さ	幅	厚さ		備	考
第 143図17	PL-88	鏃	埋土	完形		6.0	2.7	0.2			
第 143図18	PL-88	鏃	埋土	完形		13.7	3.1	0.5			

第3章 検出された遺構と遺物

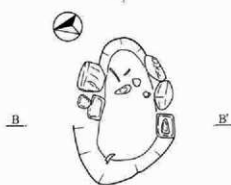
70号住居



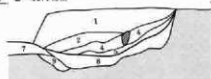
70号住居

- 1 黒色土 FP粒、炭化物を僅かに含む
- 2 黒褐色土 FP粒を僅かに含む
- 3 暗褐色土 FAブロック、ローム、黒色土を僅かに含む
- 4 暗褐色土 FP粒、FAを含む
- 5 褐灰色土 FA主体、FP粒を僅かに含む
- 6 褐灰色土 FA主体
- 7 明褐色土 FAブロック、黒色土ブロックを含む

71号住居



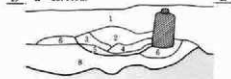
C L=187.40m



70号住居

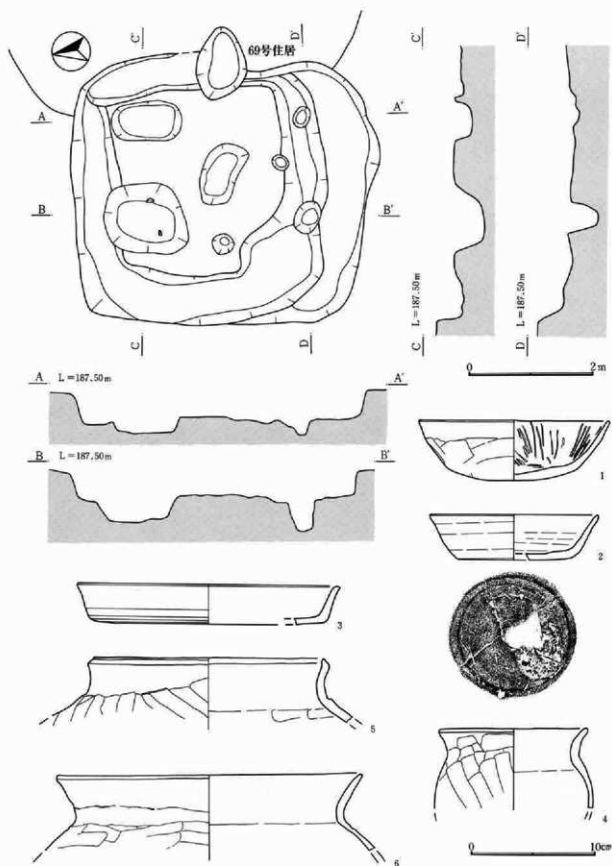
- 1 黒褐色土 大粒のFP粒を多く含む
- 2 暗褐色土 FP粒を僅かに含む、焼土、炭化物を含む
- 3 黒色土 FP粒、焼土、炭化物を僅かに含む
- 4 赤褐色土 焼土主体、FP粒、炭化物を僅かに含む
- 5 灰褐色土 FP粒、灰を僅かに含む
- 6 暗褐色土 FP粒、焼土を僅かに含む
- 7 褐灰色土 FP粒、FAを含む
- 8 暗褐色土 FP粒、炭化物を僅かに含む
- 9 暗褐色土 FAブロックを多く含む

B L=187.40m



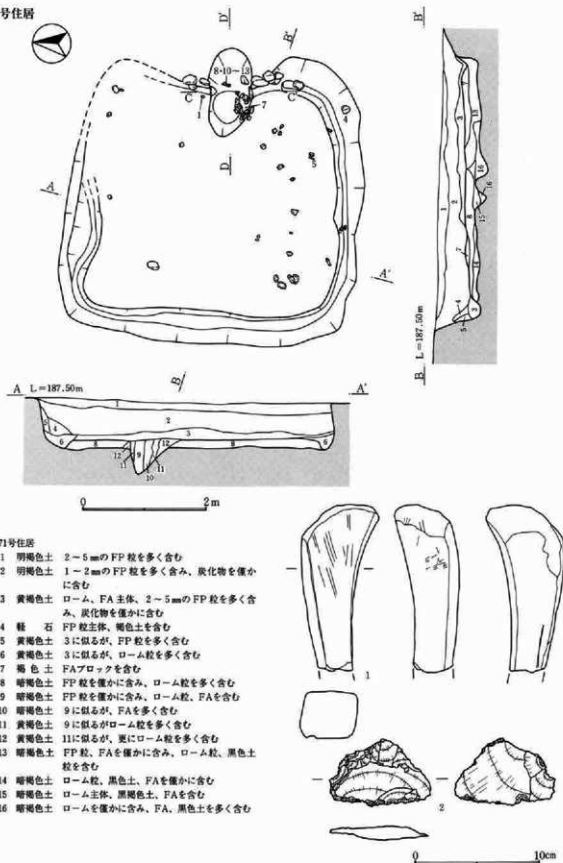
0 1m

第144図 70号住居・竈

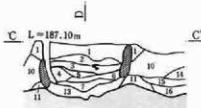
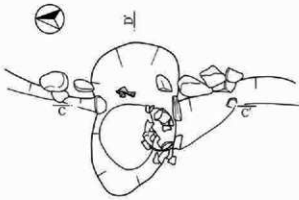


第145図 70号住居掘り方・出土遺物

71号住居



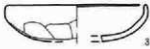
第146図 71号住居・出土遺物 (1)



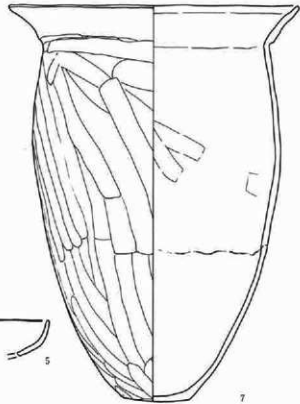
0 1m

71号住居層

- 1 黄褐色土 ローム主体
- 2 暗褐色土 FAを多く含み、炭化物を僅かに含む
- 3 褐色土 5mmのFP粒を含み、焼土を多く含む
- 4 赤褐色土 焼土、灰の混合土で、FP粒を僅かに含む
- 5 赤褐色土 やや粒子の粗い焼土
- 6 黄灰色土 灰主体、焼土を含む
- 7 赤褐色土 焼土
- 8 黄褐色土 ローム主体
- 9 暗褐色土 FP粒を含み、ローム粒、炭化物、焼土灰を含む
- 10 黄灰色土 FA主体、FP粒、ロームを僅かに含む
- 11 暗褐色土 黒色土主体、FAを僅かに含む
- 12 黄灰色土 FA主体、黒色土、炭化物を僅かに含む
- 13 暗褐色土 黒色土主体、焼土、炭化物を僅かに含む
- 14 黄褐色土 1に似る
- 15 暗褐色土 黒色土主体、FP粒、FAを僅かに含む
- 16 暗褐色土 FP粒を多く含み、黒色土を含む



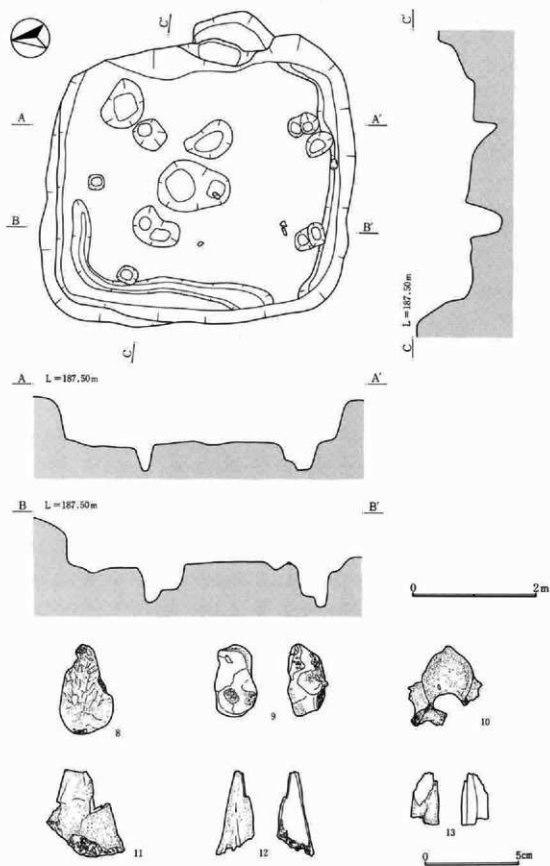
6



0 10cm

第147図 71号住居層・出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第148図 71号住居掘り方・出土遺物 (3)

72号住居(第149~154図 PL25・26・90~94)

位置 CN~CP-65~67 3区現有道路西側の住居集中地点から道を挟んで東に位置する。ここでは道の西側で見られたような激しい住居の重複は見られないが、他の地区と比較すると住居密度は高い。特に69号住居から70号、71号、72号、73号住居までの5軒は、ほぼ北東から南西に向けてコーナー部分を接するように帯状に並んでいる。またここより北には、住居の空白地帯が見られることから、住居集中地点の北端と考えることができる。遺跡全体を大まかに見ると、南北に長い調査区の中でBUラインから北、72号住居があるCOラインまでの約80~100mの間に、最も住居が集中して存在するようである。これより南も北も住居の分布はやや散的となる。したがって、この付近に集落の中心があったと考えられる。そのような位置関係の中で、特に大形で、大量に遺物を出土した51号住居と72号住居は注目すべき存在と言えよう。

平面形状 隅丸方形を呈し、周囲に幅0.6~1.1mのテラスを持つ。テラスの上には、68号住居で見られたような平坦なものではなく、やや住居内側に向けて傾いている。 残存深度 1.30mを測る。

重複住居 71号住居より古い。 規模 東辺は5.70m、西辺は5.75m、南辺は5.30m、北辺は5.50mを測る。 主軸方位 N-110°-E 埋没土 住居廃絶後、まぜ壁からFP層が崩落し、住居のコーナー部分を埋め(12、13層)、次いでFP粒を含む褐色土、黒褐色土が自然堆積していったものと考えられる(1、2、3層)。 壁の状況 床面から125°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。 床面 面積は27.162m²を測る。掘り方床面からローム、FA、暗褐色土を混合した土で15~20cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。 周溝 溝部分を除くすべての辺から幅30cm前後、深さ20cm前後の周溝が検出されている。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 東西間隔は2.20m、南北間隔は2.25mで、深さは0.35~0.50mを測る。柱穴間を結んで描く方形は、住居のほぼ中心に位置し、柱穴の外側で壁までが約1.5m、柱穴の内側が約2.0mで比率は4:3である。 掘り方 テラス部分を含め、住居全体が大きく掘り込まれている。 竈位置 東辺中央 方位 N-112°-E

規模 全長は2.65m(屋外長2.05m、屋内長0.60m)、袖幅は残存部分で0.60m、復元で約1.00mを測る。 形状その他 暗渠状の構造で、長い煙道部を持つ竈である。袖部の残存状態は良くないが、炭化物や焼土の広がりを見ると現状より幾分広がった形であったと推定される。燃焼部は僅かに掘りくぼめられており、大量の焼土が見られた。燃焼部奥壁からは、比較的なだらかで約2.3mの長さを持つ煙道部へ続く。煙道部は長さに対し、幅が約0.5mしかなく、かなり細長い印象を与える。暗渠状の構造は、2箇所確認されたが、実際は煙道部全体を覆っていたものと推定される。煙道部先端がやや太くなっているのは、材として用いていた石を抜き取ったためであると考えられる。 遺物 B、C、Dタイプの土師器杯、外面に弱い稜を持つ土師器盤、杯部内面、外面にキキ目を持つ須恵器高杯、かえりを持つ須恵器蓋等が大量に出土している。 所見 出土した遺物から見て、72号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

72号住居出土遺物

検出番号 図面番号	種類 部 種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備 考
第-152図 1 PL-90	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 11.2 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に狭い無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-152図 2 PL-90	土師器 杯	1.2cm ほぼ完形	口径 10.1 底径 - 器高 3.9	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	未完成品 か
第-152図 3 PL-90	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.0 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	

第3章 検出された遺構と遺物

第-152図 4 PL-90	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に 幅の広い無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 5 PL-90	土師器 杯	埋土 3/4	口径 12.8 底径 - 器高 4.8	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 6 PL-90	土師器 杯	48cm 1/4	口径 10.0 底径 - 器高 3.2	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 7 PL-90	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.6 底径 - 器高 3.0	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ 内面風化進んでいる
第-152図 8 PL-90	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.0 底径 - 器高 2.8	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-152図 9 PL-90	土師器 杯	床面密着 1/3	口径 10.2 底径 - 器高 3.3	細砂粒 酸化炭 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-152図 10 PL-90	土師器 杯	埋土 1/4	口径 11.4 底径 - 器高残 2.6	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 11 PL-90	土師器 杯	埋土 3/4	口径 10.2 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 12 PL-90	土師器 杯	埋土 完形	口径 10.8 底径 - 器高 3.0	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-152図 13 PL-90	土師器 杯	埋土 1/3	口径 11.4 底径 - 器高 2.8	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-152図 14 PL-91	土師器 杯	54cm ほぼ完形	口径 13.0 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 ヘラケズリ
第-152図 15 PL-91	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.6 底径 - 器高残 3.9	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 16 PL-91	土師器 杯	埋土 1/4	口径 12.0 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 ヘラケズリ
第-152図 17 PL-91	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 10.4 底径 - 器高 3.1	やや粗砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 18 PL-91	土師器 杯	50cm 1/3	口径 12.0 底径 - 器高 3.5	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-152図 19 PL-91	土師器 杯	埋土 口縁部一部 欠損	口径 14.0 底径 - 器高 4.5	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ
第-152図 20 PL-91	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.4 底径 - 器高 4.3	細砂粒 酸化炭 明褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 21 PL-91	土師器 杯	埋土 1/3	口径 13.0 底径 - 器高 3.8	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 22 PL-91	土師器 杯	埋土 1/2	口径 12.0 底径 - 器高 4.8	細砂粒 酸化炭 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面一部に 無調整帯を持ち下部をヘラケズリ
第-152図 23 PL-91	土師器 杯	埋土 1/4	口径 15.0 底径 - 器高 6.4	細砂粒 酸化炭 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ

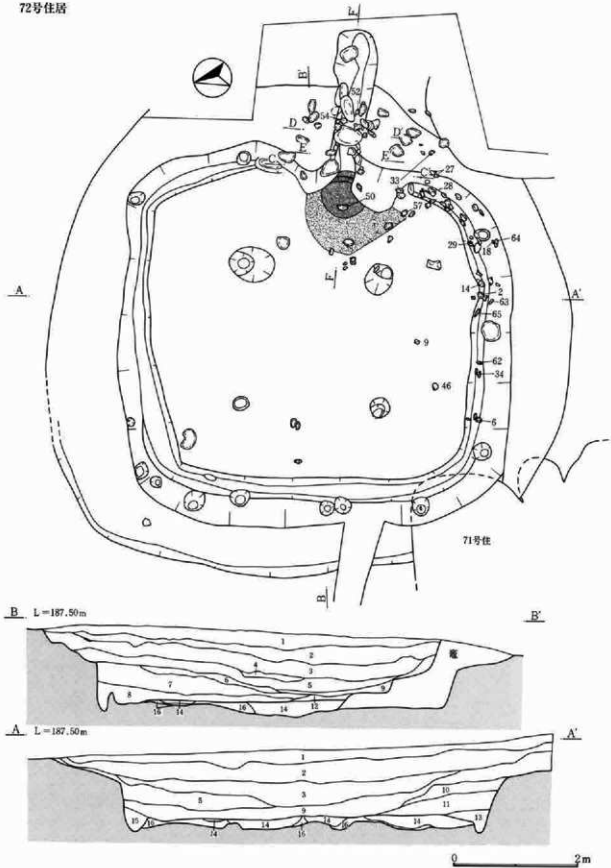
第1節 堅穴住居

第-152区 24 PL-91	土師器 杯	埴土 1/4	口径 11.0 底径 — 器高 (2.7)	細砂粒 酸化炭 堇	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に幅の広い無調整帯を持ち下部をヘ ラケズリ	
第-152区 25 PL-91	土師器 杯	埴土 1/3	口径 11.1 底径 — 器高 3.0	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-152区 26 PL-91	土師器 杯	埴土 1/4	口径 13.0 底径 — 器高残 3.7	細砂粒 酸化炭 堇	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-152区 27 PL-91	土師器 杯	0~1.5cm 完形	口径 12.2 底径 — 器高 3.9	細砂粒 酸化炭 にぶい堇	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	刷印「X」
第-152区 28 PL-92	土師器 杯	23cm 1/4	口径 14.6 底径 — 器高 4.6	細砂粒 酸化炭 にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-152区 29 PL-92	土師器 杯	床面密着 ほぼ完形	口径 14.6 底径 — 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 にぶい堇	口縁部ヨコナデ、内面風化進んで不明である 外面ヘラケズリ	
第-152区 30 PL-92	土師器 杯	埴土 ほぼ完形	口径 16.7 底径 — 器高 5.5	細砂粒 酸化炭 明堇	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-152区 31 PL-92	土師器 杯	埴土 1/2	口径 17.4 底径 — 器高 3.6	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-153区 32 PL-92	土師器 杯	埴土 1/4	口径 18.6 底径 — 器高 4.2	細砂粒 酸化炭 にぶい堇	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-153区 33 PL-92	土師器 盤	10~41cm 1/2	口径 19.2 底径 — 器高 3.7	細砂粒 酸化炭 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ	
第-153区 34 PL-92	土師器 盤	31cm 1/3 底部欠く	口径 19.5 底径 — 器高残 4.1	細砂粒 酸化炭 堇	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケ ズリ	
第-153区 35 PL-92	土師器 盤	埴土 口唇部一 部欠く	口径 23.3 底径 — 器高 4.8	細砂粒 酸化炭 堇	口縁部強いヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナ デ、外面ヘラケズリ	
第-153区 36 PL-92	須恵器 杯	埴土 1/4	口径 10.9 底径 6.8 器高 (4.2)	細砂粒 酸化炭 灰	内面・外面輪縁整形痕、底部回転又は手持ち ヘラケズリ	
第-153区 37 PL-92	須恵器 杯	埴土 1/4	口径 11.9 底径 — 器高残 4.0	細砂粒 酸化炭 灰白	内面・外面輪縁整形痕、外面下半回転ヘラケ ズリ	
第-153区 38 PL-92	須恵器 蓋	埴土 完形	口径 11.6 つまみ— 器高 3.1	細砂粒 還元炭 灰白	口縁部・内面輪縁整形痕、外面回転ヘラケズ リ後つまみ貼付	
第-153区 39 PL-92	須恵器 蓋	埴土 口縁部一 体部1/4	口径 11.8 つまみ— 器高 1.7	細砂粒 還元炭 灰	口縁部・内面輪縁整形痕、外面回転ヘラケズ リ、かえり貼付	
第-153区 40 PL-93	須恵器 蓋	埴土 1/4	口径 12.1 つまみ— 器高残 1.5	細砂粒 還元炭 灰	口縁部・内面輪縁整形痕、かえり貼付 外面自然軸付着のため技法不明	
第-153区 41 PL-93	須恵器 蓋	埴土 1/2	口径 11.9 つまみ— 器高残 2.3	細砂粒 還元炭 灰	口縁部・内面輪縁整形痕、外面回転ヘラケズ リ、つまみ貼付	
第-153区 42 PL-93	須恵器 蓋	埴土 1/4	口径 17.8 つまみ— 器高残 2.0	細砂粒 還元炭 灰	口縁部・内面輪縁整形痕、外面回転ヘラケズ リ、かえり貼付	
第-153区 43 PL-93	須恵器 長頸壺	埴土 脚1/4	口径 — 底径 12.6 器高残 3.4	細砂粒 還元炭 灰	内面・外面輪縁整形痕	

第3章 検出された遺構と遺物

第-153回 44 PL-93	土師器 台付甕	埴土 底部1/4	口径 - 底径 10.2 器高残 2.2	細砂粒 酸化炭 素 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 45 PL-93	土師器 台付甕	埴土 底部1/4	口径 - 底径 10.8 器高残 1.9	やや粗砂粒 酸化炭 素 灰青褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 46 PL-93	土師器 甕	2cm 底部	口径 - 底径 4.4 器高残 3.2	細砂粒 酸化炭 素 にぶい黄褐色	内面ヘラナデ、外面底部ヘラケズリ						
第-153回 47	土師器 台付甕	埴土 口縁部	口径 10.0 底径 - 器高残 5.3	粗砂粒 酸化炭 素 黒褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ						
第-153回 48 PL-93	土師器 甕	埴土 口縁部一体 部上半	口径 21.8 底径 - 器高残15.5	細砂粒 酸化炭 素 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 49	土師器 甕	埴土 口縁部一体 部1/4	口径 22.0 底径 - 器高残 4.0	細砂粒 酸化炭 素 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 50 PL-93	土師器 甕	44.5cm 口縁部1/4	口径 22.0 底径 - 器高残 6.3	細砂粒 酸化炭 素 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 51 PL-93	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 22.4 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 酸化炭 素 褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 52 PL-93	土師器 甕	23cm 口縁部1/4	口径 21.2 底径 - 器高残10.2	細砂粒 酸化炭 素 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 53 PL-93	土師器 甕	埴土 口縁部一体 部上半	口径 22.0 底径 - 器高残 7.0	細砂粒 酸化炭 素 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 54 PL-93	土師器 甕	16cm 口縁部一体 部上半	口径 20.0 底径 - 器高残10.8	やや粗砂粒 酸化炭 素 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-153回 55 PL-93	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 22.0 底径 - 器高残 5.3	細砂粒 酸化炭 素 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ						
第-154回 56 PL-93	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 22.0 底径 - 器高残 5.0	細砂粒 酸化炭 素 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ						
第-154回 57 PL-93	土師器 甕	3.5cm 口縁部1/4	口径 21.0 底径 - 器高残 7.5	粗砂粒 酸化炭 素 にぶい黄褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ						
第-154回 58 PL-93	土師器 甕	埴土 口縁部1/4	口径 18.0 底径 - 器高 8.7	やや粗砂粒 酸化炭 素 橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ						
第-154回 59 PL-94	須恵器 高杯	埴土 杯部のみ 1/4	口径 22.9 底径 - 器高残 3.9	細砂粒 還元炭 素 灰	内面・外面輪縁整形痕、杯部底部同輪ヘラケズリ						
第-154回 60 PL-94	須恵器 高杯	埴土 杯部のみ 1/4	口径 23.8 底径 - 器高残 3.8	細砂粒 還元炭 素 灰	口縁部輪縁整形痕、内面カキ目、杯部底部同輪ヘラケズリ						
第-154回 61 PL-94	須恵器 高杯	埴土 杯部のみ 1/4	口径 20.5 底径 - 器高残 2.1	細砂粒 還元炭 素 灰白	内面・外面輪縁整形痕、杯部底部カキ目						
検出番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備	考
第 154回62	PL-94	棒状罐	44.5cm	粗粒安山岩		8.8	4.3	3.2	207.5		
第 154回63	PL-94	棒状罐	48.5cm	粗粒安山岩		8.8	4.4	3.7	186.7		
第 154回64	PL-94	棒状罐	57.5cm	粗粒安山岩		12.4	8.2	4.3	492.9		
第 154回65	PL-94	棒状罐	24.0cm	粗粒安山岩		13.6	5.6	3.5	303.3		
検出番号	図版番号	動物名	部	位	長さ	備			考		
第 154回66		-			4.3						

72号住居

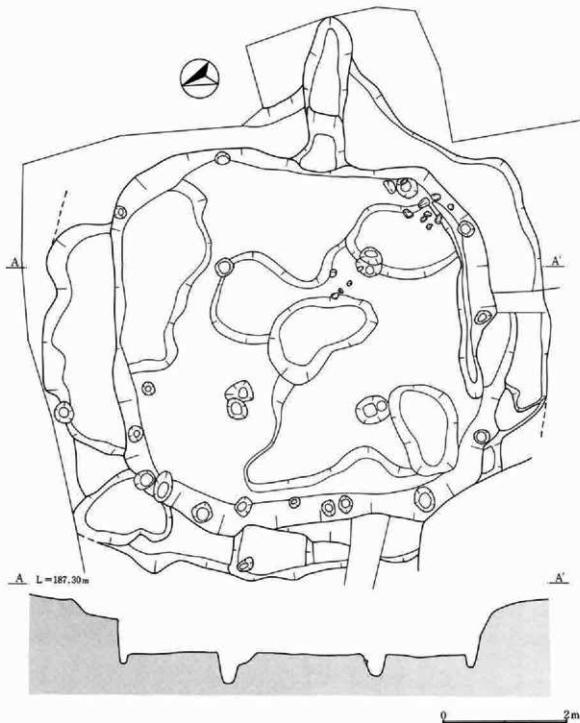


第149图 72号住居

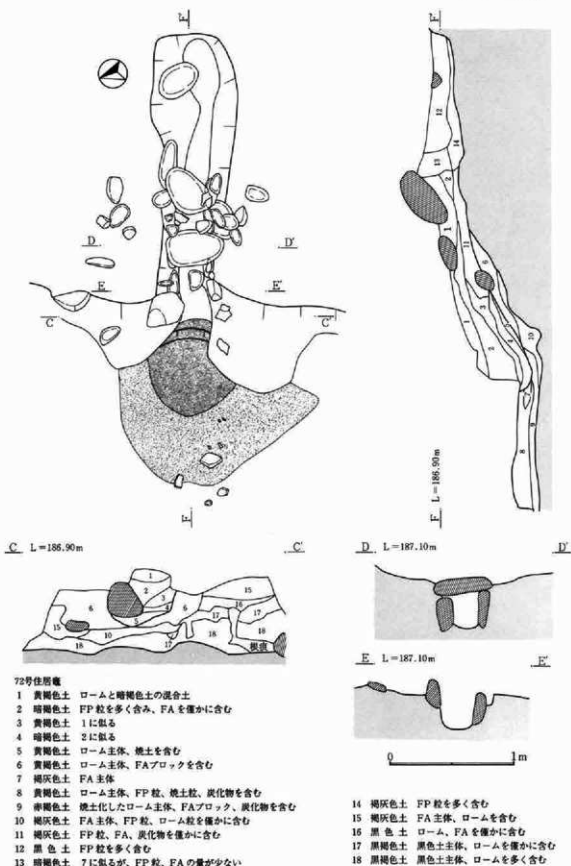
第3章 検出された遺構と遺物

72号住居

- | | | | |
|--------|-------------------------|---------|-------------------------|
| 1 黒褐色土 | FP粒、As-Bを含む | 9 褐色土 | 5mmのFP粒を多く含む、ロームブロックを含む |
| 2 褐色土 | 2~10mmのFP粒を多く含む、炭化物を含む | 10 褐灰色土 | FAブロック主体 |
| 3 褐色土 | 2に似るが、FP粒を多く含む | 11 褐色土 | FP粒を多く含む |
| 4 暗褐色土 | FP粒を僅かに含む、炭化物を含む | 12 軽石 | 2~3mmのFP粒主体 |
| 5 褐色土 | 5mmのFP粒を多く含む、炭化物を含む | 13 軽石 | 3~5mmのFP粒主体 |
| 6 軽石 | FP粒主体 | 14 黄褐色土 | ロームとFAを交互に重ねている |
| 7 暗褐色土 | FP粒を多く含む、炭化物を含む | 15 暗褐色土 | FP粒を僅かに含む、ローム粒、FAを含む |
| 8 暗褐色土 | 7に似るが、FP粒の大きさが小さく、量も少ない | 16 黄褐色土 | ローム主体、FAブロックを僅かに含む |

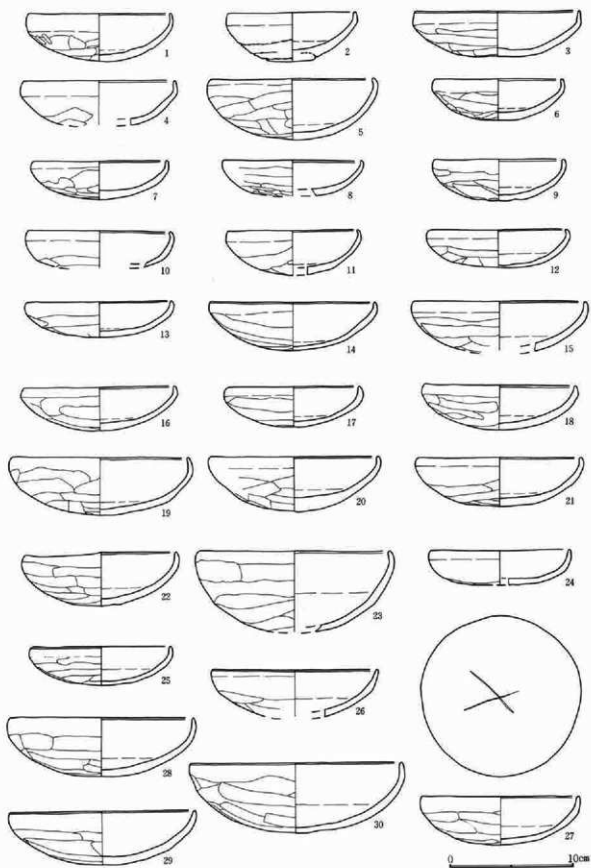


第150図 72号住居掘り方

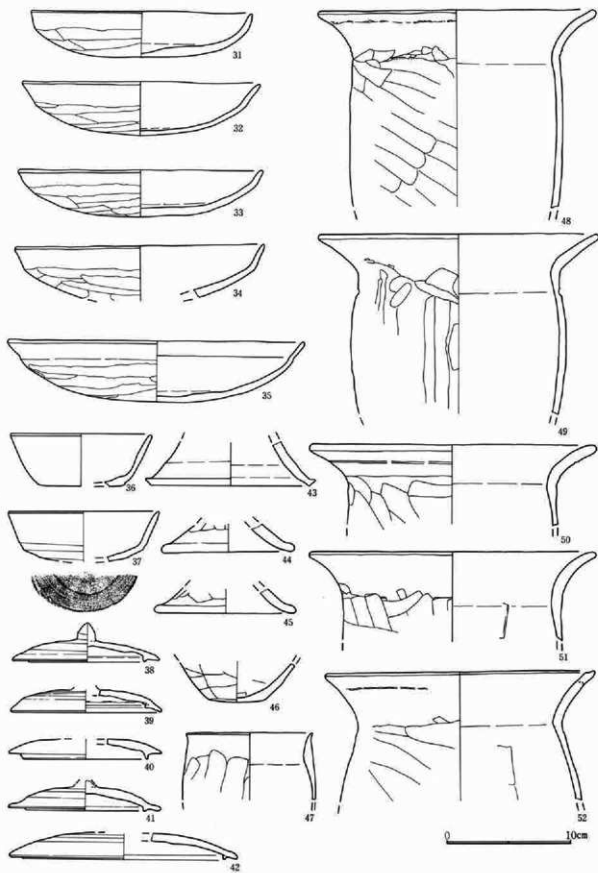


第151図 72号住居

第3章 検出された遺構と遺物

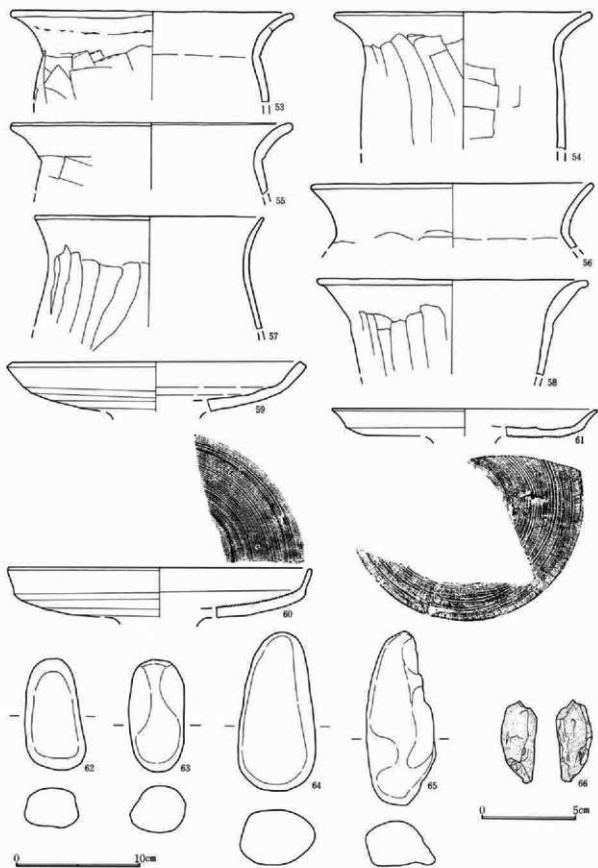


第152図 72号住居出土遺物 (1)



第153图 72号住居出土遺物 (2)

第3章 検出された遺構と遺物



第154図 72号住居出土遺物 (3)

73号住居(第155・156図 PL27・94)

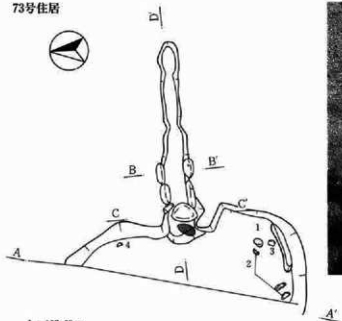
位置 CN・CO-68・69 3区現有道路東側の調査区の西端に位置し、大部分は道路の下になっている。69号、70号、71号住居と近接する。平面形状 隅丸方形を呈すると推定される。煙道部が極端に長い特殊な構造を持つ。残存深度 1.00mを測る。重複住居 単独で検出された。規模 東辺は残存部分で3.70m、南辺は残存部分で1.35mを測る。主軸方位 N-92°-E 埋没土 住居廃絶後、壁からFPが崩落して、住居の隅に溜まり(4層)、その後FP粒を多く含む褐色土、黒色土を主体とした水平堆積が見られる(1層、2層、3層)。自然堆積であると考えられる。壁の状況 床面から127°の角度で立ち上がる。壁を構成した材、あるいはその痕跡は検出できなかった。床面 面積は残存部分で2.844㎡を測る。掘り方床面からFA、黒色土の混合土で20-50cm盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。周溝 住居南東コーナー部分で一部検出されているが、確実のものとは言えない。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 住居南半を大きく掘り込んでいる。竈位置 東辺中央 方位 N-92°-E 規模 全長は3.20m(屋外長2.75m、屋内長0.45m)、袖部幅0.65mを測る。殆ど大部分は、煙道部が占めている。形状その他 袖部は殆ど残存していない。燃焼部は床面より僅かに掘りこぼめられており、焼土が残存していた。燃焼部奥壁からはほぼ垂直に立ち上がり、煙道部へ続く。煙道部の燃焼部との接点付近には、30-40cm大のやや細長い石が2対側壁の長軸に合わせて据えられており、それにかげられたと考えられる40cm大の平石が、燃焼部に落下している。したがって、この部分が暗渠状の構造を持っていたことは間違いないが、約3mもの長さの煙道部すべてが暗渠状の構造を持った様子はなく、煙道部側壁に石を抜いた跡も見られないことから、恐らくこの煙道部の付け根部分のみが石組みであったものと推定される。狭長な煙道部は深さが10cm前後で、ほぼ水平に伸びている。なぜこのような特殊な構造を持ったのかは現段階では不明である。遺物 C、Dタイプの土師器杯が出土している。所見 出土した遺物から見て、73号住居には8世紀前半の時期が想定できる。

73号住居出土遺物

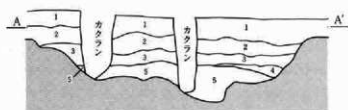
検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-155図 1 PL-94	土師器 杯	床面寄着 口縁部1/4 欠損	口径 11.6 底径 - 器高 3.7	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-155図 2 PL-94	土師器 杯	11-15cm 1/2	口径 14.2 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化炎 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-155図 3 PL-94	土師器 杯	床面寄着 ほぼ完形	口径 10.4 底径 - 器高 3.2	細砂粒 酸化炎 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-155図 4 PL-94	土師器 杯	22cm 1/3	口径 11.0 底径 - 器高 3.4	細砂粒 酸化炎 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面 上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-155図 5 PL-94	土師器 杯	埋土 1/4	口径 13.6 底径 - 器高 3.2	細砂粒 酸化炎 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-155図 6 PL-94	土師器 罌	埋土 口縁部	口径 16.4 底径 - 器高残 4.3	やや粗砂粒 酸化炎 にぶい褐色	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-155図 7 PL-94	須恵系 羽釜	埋土 底部1/4	口径 - 底径 4.5 器高残 5.4	粗砂粒 還元炎 橙	内面輪軸整形痕、外面ヘラケズリ	

第3章 検出された遺構と遺物

73号住居

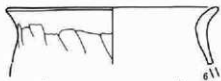
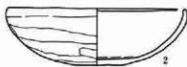
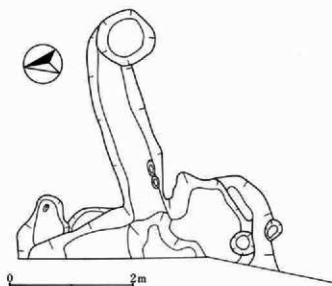


L = 187.60 m



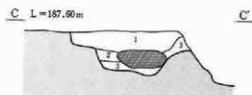
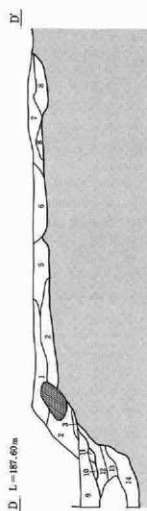
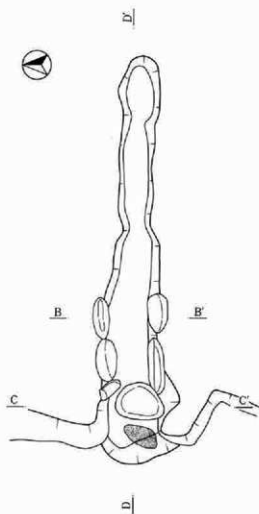
73号住居

- 1 黒褐色土 FP 粒を多く含む
- 2 暗褐色土 FP 粒を僅かに含み、FA、炭化物を含む
- 3 暗褐色土 FP 粒を僅かに含み、FAブロックを含む
- 4 軽石 FP 粒主体（壁の崩落）
- 5 黒褐色土 FP 粒を僅かに含み、黒色土、FAブロックを含む



0 10cm

第155図 73号住居・掘り方・出土遺物



0 1m

73号住居層

- 1 褐色土 5~10mmのFP粒を含み、ローム、炭化物を僅かに含む
- 2 褐色土 1に似るが、ロームを多く含み、黒色土、FAを含む
- 3 暗灰色土 FA主体、黒色土を含む
- 4 暗灰色土 砂質のFA主体、黒色土を僅かに含む
- 5 褐色土 2に似るが、ローム、黒色土を含まない
- 6 褐色土 1に似るが、やや砂質
- 7 褐色土 5~10mmのFP粒を含む
- 8 明褐色土 1~5mmのFP粒を多く含む
- 9 褐灰色土 FA主体、FP粒、ローム粒を含む
- 10 赤褐色土 焼土、炭化物を多く含み、灰を僅かに含む
- 11 暗灰色土 灰を主体、焼土、骨片を含む
- 12 赤褐色土 FAの焼土化
- 13 褐灰色土 FA主体
- 14 黒褐色土 黒色土主体、ロームブロック、FAブロック、FP粒を僅かに含む

第156図 73号住居層

第3章 検出された遺構と遺物

74号住居(第157～161図 PL 27・28・95・96)

位置 AT～AV-88・89 1区の南端部に位置し、吾妻川が形成する河岸段丘の段丘崖に近接する。集落の南端部となる。住居の大部分は現有道路の下であった。 **平面形状** 74号住居は2つの大きな特徴を持つ。まず6号住居に見られたような住居外側の掘り込みを持つ点が注目される。外側の掘り込みは、テラスを持つ住居とは異なり、平坦な面を持たず、住居内部に向かって傾斜している。上面は中世編で報告したローム採掘坑に似た形態を持ち、複数の土坑をつなぎ合わせたようになっている。また南半はテラスを持っている。テラスは幅0.9～1.2mで、竈の痕跡が見られることから、古い住居の床の一部を更に掘り下げて新しい住居の床とし、周囲に残した古い住居の床をテラスとしている。 **残存深度** 1.60mを測る。

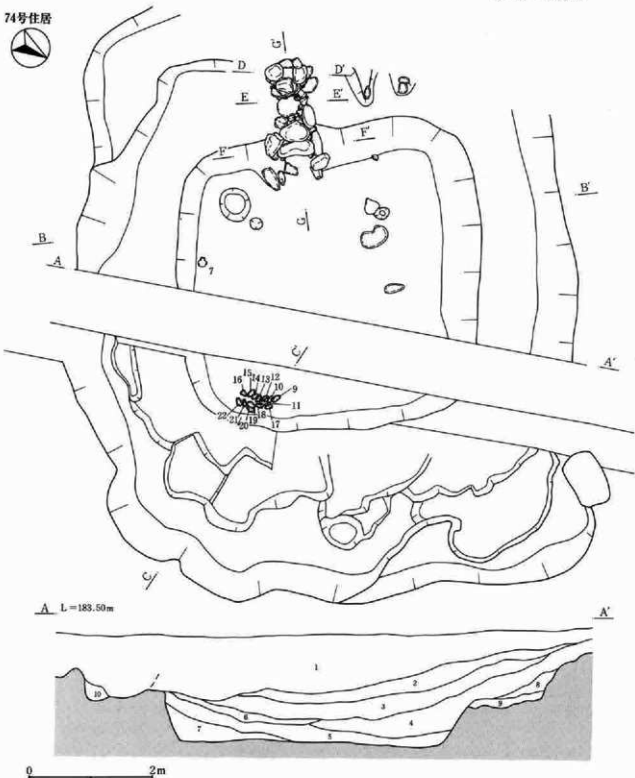
重複住居 単独で検出された。 **規模** 東辺は4.20m、西辺は4.50m、南辺は4.50m、北辺は4.20mを測る。 **主軸方位** N-57°-E **埋没土** 74号住居は古い住居の一部をテラスとして利用している。この古い住居は当初75号住居として重複関係と考えていたが、土層断面の観察から1軒とした。すなわち埋没過程を見ると、住居廃絶後最初にFP粒を含む黒褐色土が住居の隅に溜まる(テラス部分では8層、住居床面では7層)。次にFP粒を含む黒褐色土、黒色土がテラスを含む住居全体を覆っている(4、3、2層)。従って、テラス部分と住居床面は同時に埋没していったことになり、1軒の住居としてとらえることになった。

壁の状況 床面から131°の角度で立ち上がる。 **床面** 掘り方床面からFP粒を含む黒褐色土で10cm前後盛土し、床としている。 **周溝** 検出されなかった。 **貯蔵穴** 竈左袖部で直径0.5mの円形の貯蔵穴が確認されている。 **柱穴** 東西間隔2.00mで深さは床面より0.20～0.25mである。 **竈位置** 南辺中央 **方位** N-231°-E **規模** 全長は2.00m(屋外長1.20m、屋内長0.80m)、袖幅は0.70mを測る。形状その他 袖部の残りは良くないが、煙道部から外側を石で組んだ典型的な石組み竈である。燃焼部からならぬ煙道部へ続く。煙道部は暗渠状の構造を持ち、蓋となる平石はテラスの面の高さとはほぼ一致する。煙道部は、古い住居の壁を利用して一気に立ち上がり、石を「口」の字状に組んで煙突としている。 **遺物** Aタイプの土師器杯、外面に弱い稜を持つ土師器盤、須恵器杯、壺等が出土している。 **所見** 出土した遺物から見て、74号住居には7世紀後半の時期が想定できる。

74号住居出土遺物

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-158図 1 PL-95	土師器 壺	埋土 ほぼ完形	口径 21.6 底径 3.8 器高 37.0	やや粗砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-158図 2 PL-95	土師器 壺	埋土 底部欠損	口径 21.2 底径 - 器高残36.2	やや粗砂粒 酸化灰 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第-160図 3 PL-95	土師器 杯	埋土 1/2	口径 11.4 底径 - 器高 4.0	細砂粒 酸化灰 澄	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ、ゆがみが大きい	
第-160図 4 PL-95	土師器 杯	埋土 1/2	口径 12.0 底径 - 器高 4.4	細砂粒 酸化灰 澄	口縁部ヨコナデ、内面ナデ・ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-160図 5 PL-95	土師器 杯	埋土 1/4	口径 19.6 底径 - 器高 (3.4)	細砂粒 酸化灰 明赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-160図 6 PL-95	須恵器 杯	埋土 1/3	口径 18.0 底径 - 器高 (3.9)	細砂粒 酸化灰 ぶい期	内面・外面轆轤整形痕、底部手持ちヘラケズリ、風化はげしい	
第-160図 7 PL-95	須恵器 壺	1.5cm 完形	口径 4.8 底径 5.0 器高 14.4	細砂粒 酸化灰 暗青灰	口縁部、外面轆轤整形痕・下端に回転ヘラケズリ、底部ナデ	底部 植物性炭

74号住居



74号住居

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色土 FP粒を多く含む(周耕作土) | 6 黒褐色土 FAを含む(旧住居床面からの流れ込み) |
| 2 黒褐色土 1に似るが、FP粒が多く含まれる | 7 黒褐色土 FP粒、FA、黒ゴケ土を含む |
| 3 黒色土 FP粒を僅かに含む | 8 黒褐色土 4に似るが、FP粒が少ない |
| 4 黒褐色土 FP粒を僅かに含む | 9 黒褐色土 FA小ブロックを含む(旧住居床面) |
| 5 黒褐色土 FP粒、FAを僅かに含む | 10 軽石 FP粒再堆積層、後述の擾乱の可能性がある |

第157図 74号住居

第3章 検出された遺構と遺物

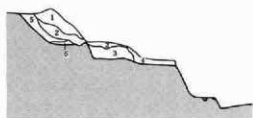
B L=184.00m

B'



C L=183.80m

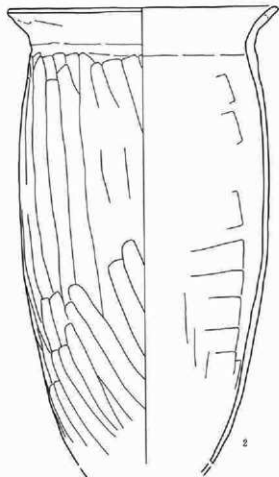
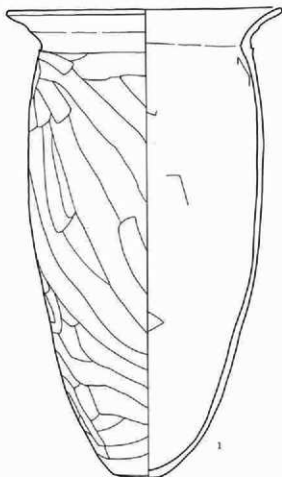
C'



74号住居北側掘り込み部分

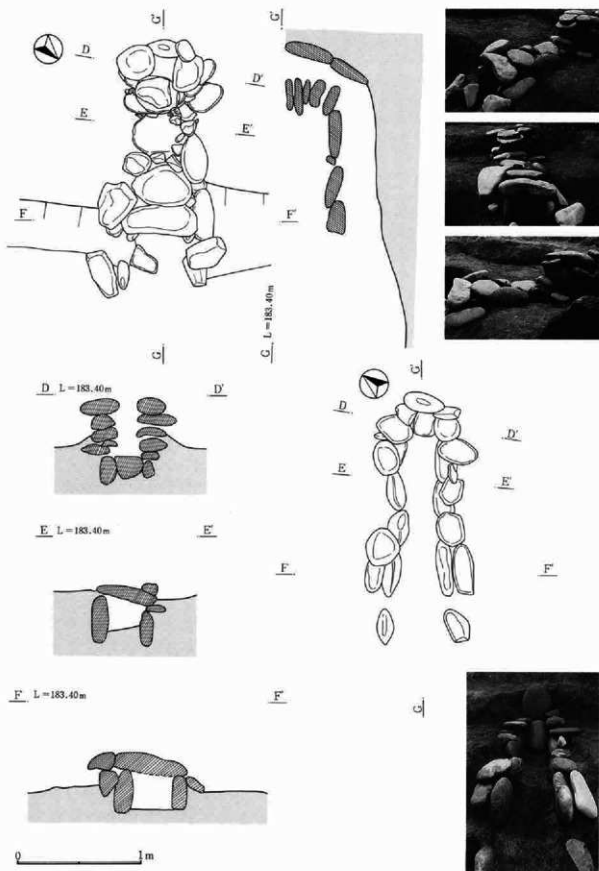
- 1 黒褐色土 2~60mmのFP粒を多く含む
- 2 黒褐色土 2~50mmのFP粒を多く含む、FAブロックをやや多く含む
- 3 褐色土 黒色土ブロックを僅かに含む
- 4 褐色土 FP粒を僅かに含む、黒褐色土ブロックを含む
- 5 軽石 FPの崩落
- 6 暗褐色土 FP粒を含む

0 2m



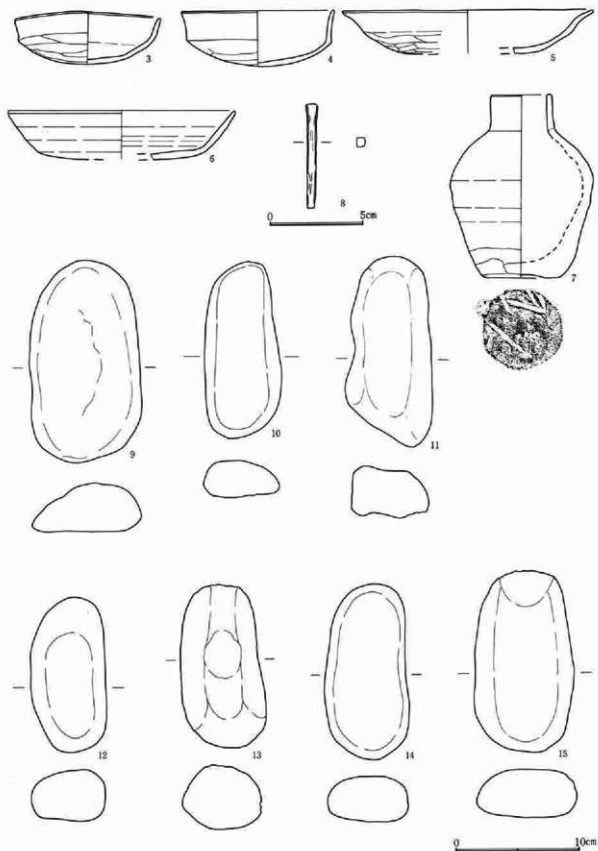
0 10cm

第158図 74号住居・出土遺物(1)

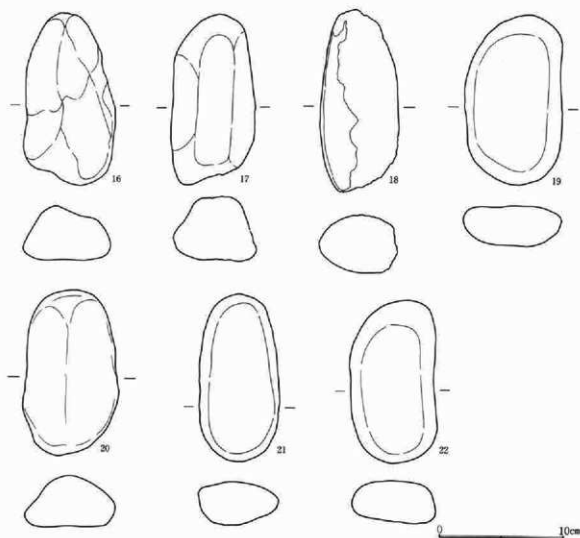


第159図 74号住居竈

第3章 検出された遺構と遺物



第160図 74号住居出土遺物(2)



第161図 74号住居出土遺物(3)

採回番号	図版番号	製品名	出土位置	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
第160図9	PL-96	棒状鏢	2.5cm	石英閃緑岩	16.0	8.8	3.8	865.9	
第160図10	PL-96	棒状鏢	2.2cm	炭質安山岩	14.0	6.2	2.8	409.1	
第160図11	PL-96	棒状鏢	2.4cm	粗粒安山岩	14.8	7.0	4.0	636.0	
第160図12	PL-96	棒状鏢	2.0cm	浴格凝灰岩	12.1	5.9	4.1	492.2	
第160図13	PL-96	棒状鏢	- 2.0cm	粗粒安山岩	12.8	6.1	5.1	563.1	
第160図14	PL-96	棒状鏢	- 2.0cm	粗粒安山岩	13.7	6.9	3.7	619.7	
第160図15	PL-96	棒状鏢	- 1.3cm	粗粒安山岩	14.2	7.8	3.8	694.9	
第161図16	PL-96	棒状鏢	床面密着	粗粒安山岩	13.6	7.5	4.3	632.7	
第161図17	PL-96	棒状鏢	2.0cm	粗粒安山岩	13.3	6.5	5.1	649.5	
第161図18	PL-96	棒状鏢	3.5cm	石英閃緑岩	14.3	6.4	4.6	803.7	
第161図19	PL-96	棒状鏢	- 2.5cm	粗粒安山岩	13.2	7.6	3.2	549.0	
第161図20	PL-96	棒状鏢	床面密着	粗粒安山岩	13.0	7.7	4.0	583.0	
第161図21	PL-96	棒状鏢	- 1.5cm	粗粒安山岩	13.0	6.4	3.5	457.1	
第161図22	PL-96	棒状鏢	床面密着	粗粒安山岩	12.8	6.6	3.4	466.4	
採回番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備 考	
第160図8	PL-95	釘	礎上	頭部を欠く	5.5	0.5	0.5		

第3章 検出された遺構と遺物

76号住居(第162・163図 PL28・96・97)

位置 CR・CS-70・71 3区の住居集中地点の北に位置し、住居の分布がやや散在的になっている。

平面形状 隅九方形を呈する。 残存深度 0.60mを測る。 重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は2.40m、西辺は2.45m、南辺は2.45m、北辺は2.65mを測る。 主軸方位 N-98°-E
埋没土 FP粒、礫を含む暗褐色土の水平堆積で、自然堆積と考えられる。

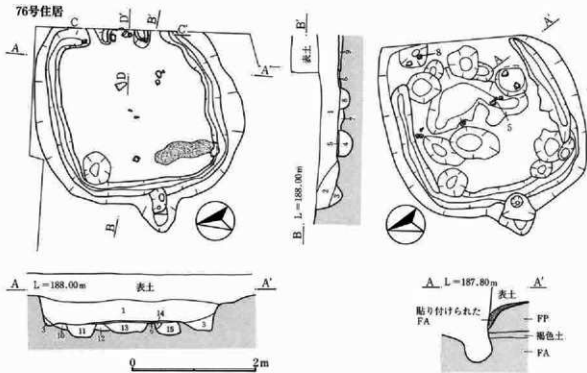
壁の状況 床面から105°の角度で立ち上がる。竈右袖部脇の壁では、FAを壁のFP部分に貼り付けて、壁の崩落を防いでいる(断面図参照)。その他有機物による壁の材は検出されなかった。

床面 面積は6.255㎡を測る。掘り方床面から暗褐色土で25cm前後盛土し、床としている。床は1面しか検出されなかった。 周溝 幅25cm前後、深さ20cm前後の周溝が確認されている。 貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。 掘り方 住居全面を何箇所も掘りくぼめた部分がある。

竈位置 東辺中央 方位 N-103°-E 規模 袖部幅は0.60mを測る。 形状その他 袖部の先端しか検出されていない。袖部はFP粒を含むFAを材としている。右袖部に河原石が乗っており、袖石として利用されていたものと考えられる。 遺物 灰軸碗の他に、羽釜が多数出土している。また、紐を通す穴があげられた砥石、固化しなかったが鉄滓が多く出土していることも注目される。 所見 出土した遺物から見て、76号住居には10世紀後半の時期が想定できる。

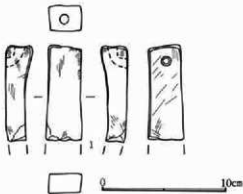
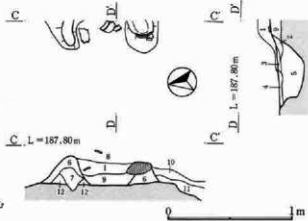
76号住居出土遺物

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考				
第-163図 2 PL-96	須恵器 碗	埋土 口縁部3/4 欠損	口径 12.8 底径 7.1 器高 5.0	やや粗砂粒 還元炎 灰黄・灰白	内面・外面轆轤整形痕、高台貼付					
第-163図 3 PL-96	灰軸 碗	埋土 1/3	口径 12.8 底径 6.2 器高 4.4	細砂粒 酸化炎 淡黄・灰白	内面・外面轆轤整形痕、高台貼付 軸は薄くつげがけ					
第-163図 4 PL-96	灰軸 碗	埋土 1/4	口径 14.9 底径 6.4 器高 4.3	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り 高台貼付、軸は薄くつげがけ					
第-163図 5 PL-97	須恵器 羽釜	-2-11.3cm 口縁部一体 部1/3	口径 16.5 底径 - 器高残16.7	細砂粒 還元炎 黄灰	口縁部・内面・外面轆轤整形痕 下半ヘラケズリ、鈔貼付					
第-163図 6 PL-97	須恵器 羽釜	埋土 口縁部1/4	口径 21.1 底径 - 器高残 8.9	細砂粒 酸化炎 にぶい黄橙	口縁部・内面・外面轆轤整形痕 鈔貼付					
第-163図 7 PL-97	須恵器 羽釜	埋土 口縁部一体 部1/4	口径 18.2 底径 - 器高残 8.7	細砂粒 酸化炎 灰黄	口縁部・内面・外面轆轤整形痕、弱いヘラケ ズリ、鈔貼付					
第-163図 8 PL-97	須恵器 羽釜	1.5cm 1/4	口径 18.1 底径 - 器高残 6.0	細砂粒 酸化炎 灰オリーブ	口縁部・内面轆轤整形痕、鈔貼付					
第-163図 9 PL-97	須恵器 羽釜	埋土 口縁部1/5	口径 19.8 底径 - 器高残 7.5	細砂粒 酸化炎 にぶい黄橙	内面・外面轆轤整形痕、鈔貼付					
第-163図 10 PL-97	須恵器 羽釜	埋土 底部1/5	口径 - 底径 6.0 器高残11.7	細砂粒 還元炎 にぶい黄	内面轆轤整形痕、外面ヘラケズリ、マキアゲ 痕、鈔貼付ヨコナデ					
第-163図 11 PL-97	須恵器 羽釜	埋土 底部1/2	口径 - 底径 6.2 器高残 6.3	やや粗砂粒 還元炎 にぶい黄褐	内面・外面轆轤整形痕、マキアゲ痕					
押図番号	図版番号	製品名	出土位置	石	材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第-162図1	PL-96	砥石	埋土			7.4	2.8	2.0	64.6	



76号住居

- 1 暗褐色土 2-5mmのFP粒を30%、礫を含む
- 2 暗褐色土 2-5mmのFP粒を10%
- 3 軽石 褐色土を30%
- 4 暗褐色土 2-5mmのFP粒を30%
- 5 褐色土 2-3mmのFP粒を含む(床面)
- 6 黒色土 炭化物を多く含む
- 7 暗褐色土 FA小ブロック、炭化物を含む
- 8 暗褐色土 FA小ブロック、炭化物、焼土小ブロックを含む
- 9 暗褐色土 FAを含む
- 10 褐色土 3-5mmのFP粒を3%
- 11 暗褐色土 3-6mmのFP粒を10%
- 12 褐色土 2-3mmのFP粒を3%、FAを含む
- 13 暗褐色土 FP粒、FA小ブロック、焼土を含む
- 14 褐色土 FA小ブロック主体
- 15 暗褐色土 FA小ブロックを含む、焼土、炭化物を僅かに含む

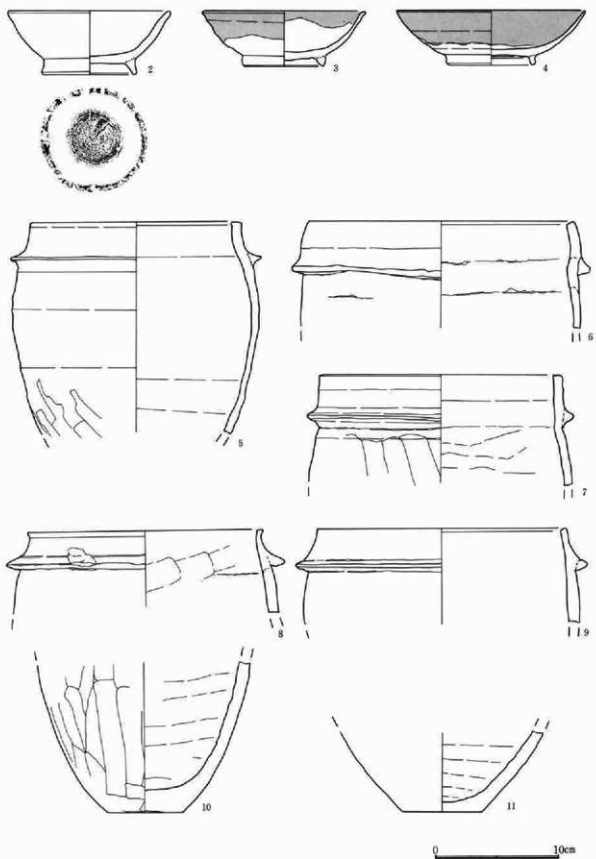


76号住居竪

- 1 褐色土 炭化物、焼土を含む
- 2 褐色土 FAを含む
- 3 赤褐色土 焼土
- 4 暗褐色土 黒色の灰を多く含む(上面が使用面)
- 5 暗褐色土 炭化物、焼土、FA小ブロックを含む(床下)
- 6 褐色土 FP粒を僅かに含む
- 7 軽石 FAを僅かに含む
- 8 暗褐色土 (住居埋土の1層)
- 9 褐色土 2-3mmのFP粒を3%、炭化物を僅かに含む
- 10 軽石 FAを僅かに含む
- 11 褐色土 3-5mmのFP粒を30%
- 12 褐色土 3-5mmのFP粒を5%

第162図 76号住居、竪・掘り方・出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第163図 76号住居出土遺物(2)

第2節 土坑その他

白井二丁目屋遺跡で検出された竪穴住居跡以外の遺構として、土坑、焼成土坑、掘立柱建物が上げられる。土坑のうち殆どのものは、既に「白井遺跡群—中世編—」において報告済みであるが、竪穴住居跡に破壊されている土坑、奈良・平安時代の遺物のみを大量に出土した土坑については、今回の報告対象となっている。土坑の中では、多くの土器と共に、大形の鉄斧を出土した182号土坑が注目される。また、性格不明の遺構として焼成土坑が上げられる。これは、40号住居が廃絶した後の窪み部分に集中して検出されたものが最初であり、内部に何か高温で焼かれた痕跡が見られる楕円形の土坑であること、炭以外に遺物が検出されないこと、壁はほぼ垂直であることなどが共通点としてあげられる。40号住居廃絶後の窪みには、更に鉄滓が大量に廃棄されていたことから当初は製鉄関連の遺構であると考えられたが、鉄滓の含まれる層とは重複関係にあることが明らかになり、再検討が求められている。

掘立柱建物は、1棟も検出されていない。僅かに、礫の跡と考えられる掘立柱列が3区において検出されている。

182号土坑(第164図 PL29・98)

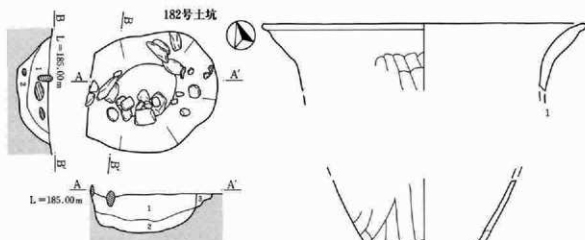
位置 BP-82 24号住居の南に位置する。 平面形状 東西方向にやや膨らみを持つ楕円形。
残存深度 比較的良好に残存し、最深度で0.6m 重複遺構 単独で検出された。 規模 長軸2.2m、短軸1.88mを測る。 埋没土 FP粒やロームを含む暗褐色土でほぼ水平に堆積しているが、礫大から人頭大の礫が多数見られることから、人為的に埋められたものと考えられる。 遺物 土師器の杯、甕類の他に、須恵器の高杯、蓋が見られ、土器以外の遺物として鉄斧が出土している。 所見 土器の様相からみて7世紀後半の遺構であると考えられる。土器が殆ど碎片である事から、ごみ捨て場と推定されるが、完形の鉄斧が出土しているのは不自然である。

182号土坑出土遺物

採掘番号 区画番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	粘土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第164図 1 PL-97	土師器 甕	埋土 口縁部 一部	口径 26.0 底径 — 器高残 5.2	やや粗砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第164図 2 PL-97	土師器 甕	埋土 底部1/5	口径 — 底径 5.4 器高残 7.9	細砂粒 酸化炎 にぶい赤褐	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	
第164図 3 PL-97	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.9 底径 — 器高残 3.0	細砂粒 酸化炎 明赤褐	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第164図 4 PL-97	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.2 底径 — 器高残 2.3	細砂粒 酸化炎 明赤褐	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第164図 5 PL-97	土師器 杯	埋土 1/5	口径 13.6 底径 — 器高残 3.6	細砂粒 酸化炎 橙	内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面に放射状暗文、螺旋状暗文	
第164図 6 PL-97	須恵器 蓋	埋土 1/2	口径 12.0 つまみ— 器高 (2.8)	細砂粒 還元炎 灰	内面・外面輪縁整形痕	
第164図 7 PL-97	須恵器 蓋	埋土 1/8	口径 12.4 つまみ 1.4 器高 2.8	細砂粒 還元炎 灰白	内面・外面輪縁整形痕、つまみ貼付	

第3章 検出された遺構と遺物

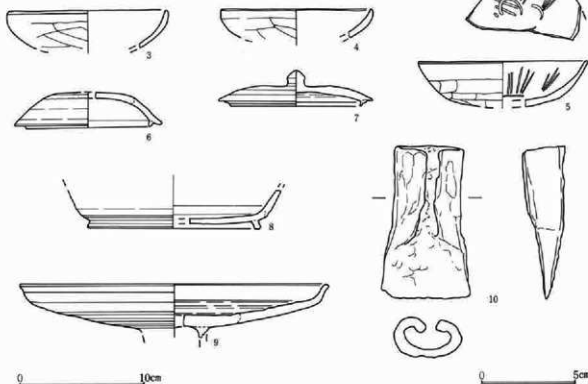
第 164回 8 PL-98	須恵器 盤	埋土 体部-高台 1/5	口径 - 底径 13.8 器高残 3.0	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面輪帯形痕、底部回転ヘラケズ リ、高台貼付				
第 164回 9 PL-97	須恵器 高杯	埋土 杯部1/4	口径 24.6 底径 - 器高残 4.2	細砂粒 還元灰 灰白	口縁部・内面輪帯形痕、外面回転ヘラケズ リ				
挿図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考
第 164回10	PL-97	鉄斧	埋土	完形	11.0	7.0	3.4		



182号土坑

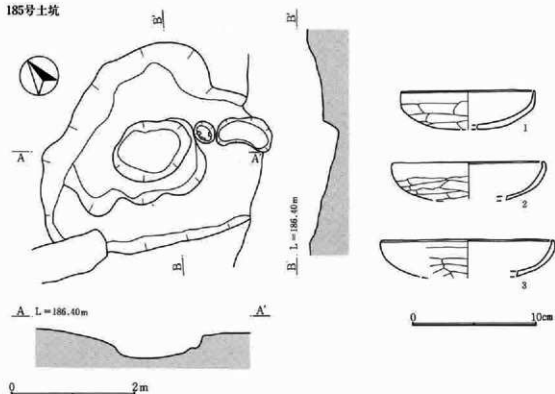
- 1 暗褐色土 2-5mmのFP粒を20%
 2 暗褐色土 2-5mmのFP粒を20%、ローム粒を10-20%
 3 暗褐色土 3-7mmのFP粒を5%、ローム小アブロックを20%

0 2m



第164回 182号土坑・出土遺物

185号土坑



第165図 185号土坑・出土遺物

185号土坑(第165図 PL.29・98)

位置 BW - BX - 78 15号住居と18号住居の間 平面形状 不定形 残存深度 0.43m
 重複遺構 単独で検出された。規模 長軸3.62m、短軸3.12mを測る。埋没土 FP粒や焼土を含む褐色土が中心となる。遺物 土師器杯が数点出土したのみである。所見 8世紀初頭の遺構と推定されるが、性格は不明である。鉄滓が出土していることから、製鉄関連の遺構とも考えられる。

185号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-165図 1 PL-98	土師器 杯	埋土 1/4	口径 10.7 底径 - 器高 (3.0)	細砂粒 酸化炎 橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-165図 2 PL-98	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 12.2 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化炎 にぶい赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-165図 3 PL-98	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 14.0 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化炎 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	

191号土坑(第166図 PL.29・98)

位置 BX - 77 - 78 15号住居と16号住居の間に位置する。平面形状 円形 残存深度 0.54m
 重複遺構 15号住居より古い、16号住居との新旧関係は不明である。規模 径2.4mを測る。
 埋没土 FP粒を含む褐色土を中心に遺構の北側から埋められている。遺物 須恵器の壺、内外面に

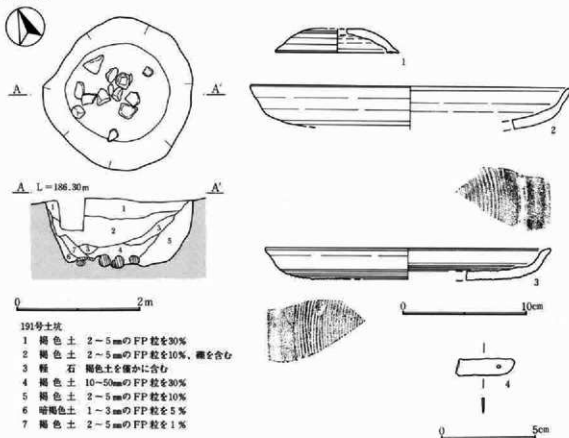
第3章 検出された遺構と遺物

カキ目を持つ高杯等が出土している。所見遺物その他からみて7世紀後半の遺構であると考えられる。形態からは井戸のようにも思えるが、掘り込みは湧水点まで達していない。

191号土坑出土遺物

棟図番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状況	法 量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考		
第-166図 1 PL-98	須恵器 蓋	埋土 口縁部1/6	口径 10.2 底径 - 器高残 1.8	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕			
第-166図 2 PL-98	須恵器 高杯	埋土 口縁部1/6	口径 25.8 底径 - 器高残 3.2	細砂粒・黒色粒子 還元灰 灰	口縁部・内面轆轤整形痕、外面回転ヘラケズリ			
第-166図 3 PL-98	須恵器 高杯	埋土 口縁部1/6	口径 22.8 底径 - 器高残 2.5	細砂粒 還元灰 灰白	口縁部轆轤整形痕、内面カキ目、外面カキ目			
棟図番号	図版番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備 考
第 166図 4	PL-98	刀子	埋土	柄部のみ	4.7	1.3	0.2	

191号土坑



191号土坑

- 1 褐色土 2-5mmのFP粒を30%
- 2 褐色土 2-5mmのFP粒を10%、礫を含む
- 3 軽石 褐色土を僅かに含む
- 4 褐色土 10-50mmのFP粒を30%
- 5 褐色土 2-5mmのFP粒を10%
- 6 暗褐色土 1-3mmのFP粒を5%
- 7 褐色土 2-5mmのFP粒を1%

第166図 191号土坑・出土遺物

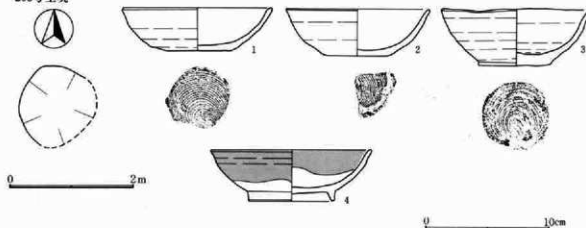
205号土坑(第167図 PL 98)

位置 BK-78 37号住居の西側に位置する。平面形状 円形 残存深度 殆ど削平されており、最深部で0.1m 重複遺構 37号住居より新しい。規模 径1.3mを測る。埋没土 FP粒を含む褐色土主体 遺物 酸化炎焼成で粗雑な作りの須恵器碗と灰釉碗の破片が出土している。所見 37号住居よりも新しいことから9世紀の末から10世紀初頭にかけての遺構であると考えられる。

205号土坑出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-167図 1 PL-98	須恵器 碗	埋土 口縁部1/4 欠損	口径 12.0 底径 5.3 器高 3.4	細砂粒 酸化灰 浅黄橙	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-167図 2 PL-98	須恵器 碗	埋土 1/2	口径 11.5 底径 5.6 器高 3.7	細砂粒 酸化灰 灰黄	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-167図 3 PL-98	須恵器 碗	埋土 完形	口径 11.8 底径 5.7 器高 4.5	細砂粒 酸化灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕、底部回転糸切り無調整	
第-167図 4 PL-98	灰軸 碗	埋土 1/6	口径 13.0 底径 7.0 器高 4.0	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面轆轤整形痕、底部回転ヘラケズリ、高台貼付	

205号土坑



第167図 205号土坑・出土遺物

290号土坑(第168図 PL.29・98)

位置 CJ-69・70 67号住居の南 平面形状 細長い溝状 残存深度 0.94m 重複遺構 単独で検出された。規模 長軸6.0m、短軸1.28mを測る。埋没土 FP粒、FAブロックを含む褐色土中心で、遺構北側から埋められた痕跡が見られる。遺物 土師器の杯が多数出土しているが、小片のみである。所見 土師器杯の様相と小形でかえりを持つ須恵器蓋が存在することから、7世紀末から8世紀初頭にかけての遺構であると考えられる。

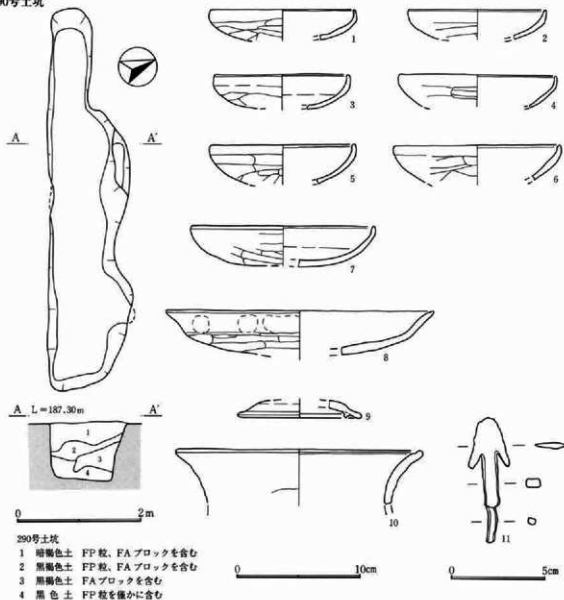
290号土坑出土遺物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法/特徴	備考
第-168図 1 PL-98	土師器 杯	埋土 口縁部1/6	口径 11.6 底径 - 器高残 2.4	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-168図 2 PL-98	土師器 杯	埋土 小片	口径 11.0 底径 - 器高残 2.3	細砂粒 酸化灰 橙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-168図 3 PL-98	土師器 杯	埋土 口縁部1/4	口径 11.0 底径 - 器高残 2.7	細砂粒 酸化灰 明赤褐	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、外面上部に無調整帯を持ち下部をヘラケズリ	
第-168図 4 PL-98	土師器 杯	埋土 口縁部1/6	口径 12.6 底径 - 器高残 2.5	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	
第-168図 5 PL-98	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 11.6 底径 - 器高残 3.0	細砂粒 酸化灰 にぶい橙	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	

第3章 検出された遺構と遺物

第-168回 6 PL-98	土師器 杯	埋土 口縁部1/5	口径 13.4 底径 - 器高残 3.6	細砂粒 酸化炭 にふい煙	口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ					
第-168回 7	土師器 杯	埋土 1/6	口径 14.8 底径 - 器高 (3.2)	細砂粒 酸化炭 にふい煙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ					
第-168回 8 PL-98	土師器 盤	埋土 1/5	口径 21.4 底径 - 器高残 3.6	やや粗砂粒 酸化炭 にふい煙	口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ、 外面ヘラケズリ					
第-168回 9	須恵器 蓋	埋土 小片	口径 10.0 つまみ - 器高残 1.5	細砂粒 還元炭 緑灰	内面・外面輪軸整形痕					
第-168回 10 PL-98	土師器 甕	埋土 口縁部1/6	口径 19.7 底径 - 器高残 4.3	細砂粒 酸化炭 明赤銅	口縁部ヨコナデ					
棟 号 第 168回11	区画番号	製品名	出土位置	遺存状態・特徴	長さ	幅	厚さ	備	考	
		鉄鍔	埋土		6.7	2.2	0.5			

290号土坑



第168回 290号土坑・出土遺物

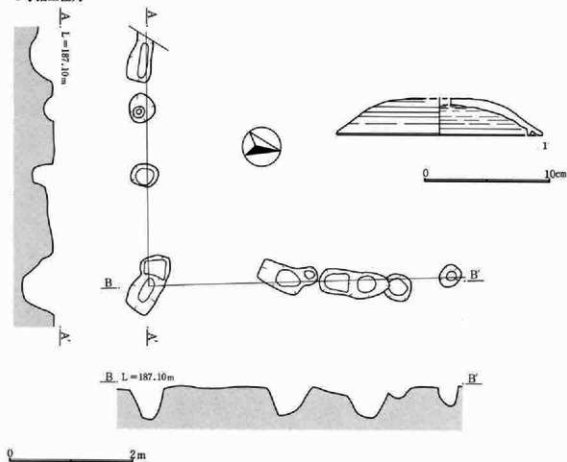
1号掘立柱列(第169図 PL 98)

位置 CJ・CK-74 46号住居と50号住居の間に位置する。平面形状 L字状に曲がる柱穴列
 残存深度 最大深度で0.6m前後 重複遺構 単独で検出された。規模 長辺が5m、短辺が4m
 のL字を描く。埋没土 FP粒を多く含む暗褐色土を中心。周辺は人家であったため攪乱が激しく不明
 な部分が多い。遺物 須恵器の蓋が1片出土している。つまみ部分は欠損しているが、しっかりした
 かえりを持つ蓋である。所見 蓋から見れば7世紀の後半の遺構であるが、紛れ込みの可能性もある
 ので断言はできない。柱穴が方形に並ばないことから建物の跡ではないと考えられる。あるいは櫓の遺構
 であると考えられる。

1号掘立柱列出土遺物

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状況	法量	胎土/焼成/色調	製作技法 / 特徴	備考
第-169図 1 PL-98	須恵器 蓋	埋土 1/5	口径 16.5 つまみ 器高残 3.0	細砂粒 還元灰 灰白	内面・外面縞線彫形痕、ヨコナデによるかえり作りだし	

1号掘立柱列



第169図 1号掘立柱列・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

焼成土坑1群(第170図)

位置 BG・BH-80・81 40号住居廃絶後の埋まり切らない窪みの上に作られている。1～16号焼成土坑まで確認されたが、立ち上がりや殆ど持たないものも多く、図化し得たのは11基に過ぎない。

平面形状 隅丸方形、隅丸長方形、楕円形を呈する。本来的には隅丸方形、あるいは隅丸長方形であったものが、高温に耐え切れずに壁が崩落し、丸みを帯びたものと推定される。掘り方は殆ど垂直である。

残存深度 1号焼成土坑 0.4m、2号焼成土坑 0.15m、4号焼成土坑 0.2m、10号焼成土坑 0.4m、11号焼成土坑 0.6m、12号焼成土坑 0.35m、13号焼成土坑 0.15m、14号焼成土坑 0.2m、15号焼成土坑 0.15m、16号焼成土坑 0.15mを測る。 重複遺構 40号住居廃絶後に一時期に集中して作られたと推定され、その分布も窪み部分に集中していることから、焼成土坑同士の重複も一部に見られる。ただし、その

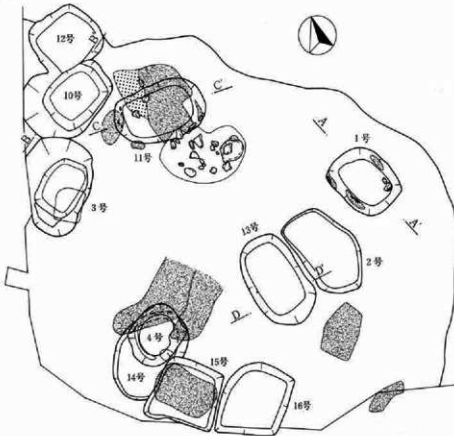
際も壁に接しているものは少なく、焼成土坑同士が重複する場合は上下に重なり合う場合が多い。埋土が壁になると、高温に耐えられなくなるためであろうか。 規模 1号焼成土坑 長軸1.1m、短軸0.85m、2号焼成土坑 長軸1.5m、短軸0.9m、3号焼成土坑 長軸1.55m、短軸1.15m、4号焼成土坑 長軸1.0m、短軸0.8m、10号焼成土坑 長軸1.5m、短軸1.0m、11号焼成土坑 長軸1.5m、短軸0.9m、12号焼成土坑 長軸1.0m、短軸0.9m、13号焼成土坑 長軸1.5m、短軸0.9m、14号焼成土坑 長軸1.55m、短軸1.0m、15号焼成土坑 辺の長さが1.0mの隅丸方形、16号焼成土坑 長軸1.2m、短軸1.05mを測る。 埋没土 焼成土坑は廃絶後直ぐに埋め戻したと推定される。埋土は埋め戻しに使われたFP粒を含む褐色土を主体に、壁であるFAが焼土化して崩落したものの、燃料の燃え残りや推定される炭化物を大量に含んだ黒色土あるいは黒褐色土の層が見られる。1号焼成土坑では土坑の最下部に炭化物主体の層が見られ(2層)、何かを燃やした後、そのまま土をかぶせた様子が見られる。13号焼成土坑では、1号焼成土坑と同様に、最下層に炭の層が見られる(2層)。また図化し得なかったが、2号、4号焼成土坑の埋土には、壁となっていたFAが還元焼成され青灰色に堅く焼け固まったものが剥離して、そのまま崩落したブロックが見られた。壁の焼け方を見ると、一部は還元焼成であるが、殆どは赤く焼土化している。不完全ではあるが酸素を遮断したのではないと考えられる。 遺物 検出できなかった。 所見 遺物が出土していないので、正確な時期を決定することは困難であるが、40号住居が殆ど埋まらないうちに作り始められていること、As-Bを含む黒色土が覆っていることから、奈良・平安時代の遺構であると推定される。また遺構の性格は、一時期に幾つもの遺構が集中して作られていること、高温で何かを焼いているが焼かれたものの痕跡が見られないこと、不完全ではあるが、酸素を遮断しようとした意識が見られること、連続して操業した様子はなく、使用後は直ちに埋め戻した形跡があることなどから、炭を焼くための遺構である可能性が考えられる。

焼成土坑2群(第171図 PL29)

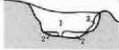
位置 AT・AU-90・91 白井二位屋遺跡発掘区の南端部に位置し、白井遺跡群が存在する段丘の険しい段丘崖に接する場所でもある。 平面形状 全体像が判別できる1号焼成土坑は楕円形を呈する。

残存深度 1号焼成土坑 0.65m、2号焼成土坑 0.65m、3号焼成土坑 0.65mを測る。 重複遺構 単独で検出された。 規模 1号焼成土坑 長軸1.3m、短軸1.1mを測る。2号、3号焼成土坑は大部分が道路下のため計測不能である。 埋没土 FP粒を含む褐色土を主体に水平堆積しているが、土層はかなり細かく分けられ、人為的な埋め戻しが想定できる。1号焼成土坑では、FAに黒色土を混合したものを最下面に貼り付け、床を補強した様子が見られる(8層)。 遺物 検出できなかった。 所見 時期、性格共に不明であるが、焼成土坑1群との共通点が多いので、同様の遺構であったと推定される。

焼成土坑1群



A L=184.20m



1群1号焼成土坑

- 1 褐色土 3-5mmのFP粒を10%炭化物を15%含む
- 2 炭化物 焼土粒を含む
- 3 褐色土 炭化物を10%

B L=184.50m



1群10号焼成土坑

- 1 黒褐色土 3-5mmのFP粒を1-2%, FAブロックを10%焼土粒、炭を僅かに含む
- 2 褐灰色土 3-5mmのFP粒を5%, FAブロックを5%
- 3 黄褐色土 3-5mmのFP粒を1%, ローム粒を10%
- 4 黄褐色土 ローム流れ込み
- 5 黒褐色土 焼土粒、炭化物を5%, ローム粒を5%

C L=184.30m



1群11号焼成土坑

- 1 暗褐色土 2-7mmのFP粒を30%, 焼土粒を僅かに含む
- 2 褐灰色土 FP粒を5%, FAブロックを20%
- 3 褐灰色土 1-2mmのFP粒を3%, FAブロックを20%焼土粒、炭化物を1-2%

D L=184.10m



1群13号焼成土坑

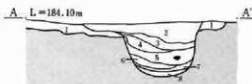
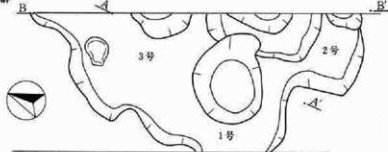
- 1 暗褐色土 5-15mmのFP粒を5%, 炭化物を僅かに含む
- 2 黒色土 炭の層

0 2m

第170図 焼成土坑1群

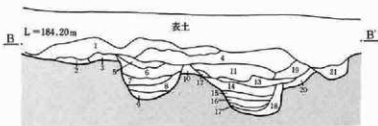
第3章 検出された遺構と遺物

焼成土坑2群



2群1号焼成土坑

- 1 褐色土 FP粒を5%、FAブロックを含む(1号焼成土坑に切られる土坑)
- 2 褐色土 FP粒を30-40%、FA小ブロックを含む(1号焼成土坑埋土)
- 3 軽石 褐色土を含む(1号焼成土坑埋土)
- 4 褐色土 FA主体、FP粒を僅かに含み、褐色土を含む(1号焼成土坑埋土)
- 5 暗褐色土 褐色土に大量の炭化物と焼土粒、焼土ブロック、FP粒を含む(1号焼成土坑埋土、燃やされた灰の残り)
- 6 褐色土 5に似るが、FAを多く含む(1号焼成土坑埋土)
- 7 暗褐色土 炭化物、焼土粒を含む(1号焼成土坑埋土)
- 8 褐色土 FA主体、黒色土を故意に混合している(1号焼成土坑床面)



0 2m

2群2号・3号焼成土坑

- 1 暗褐色土 3-10mmのFP粒を40%
- 2 暗褐色土 3-5mmのFP粒を3%
- 3 褐色土 FA主体、2-3mmのFP粒、黒色土を僅かに含む
- 4 褐色土 2-7mmのFP粒を5%、FAを20%
- 5 褐色土 3-5mmのFP粒を3%(3号焼成土坑埋土)
- 6 褐色土 3-5mmのFP粒を40%(3号焼成土坑埋土)
- 7 褐色土 3-5mmのFP粒を5%(3号焼成土坑埋土)
- 8 褐色土 FA主体、2-3mmのFP粒を1%、黒色土を20%(3号焼成土坑埋土)
- 9 黒色土 炭化物、焼土を大量に含む(3号焼成土坑埋土)
- 10 褐色土 FA主体、黒色土を20%
- 11 軽石 2-10mmのFP粒主体、褐色土を5%
- 12 褐色土 FAを含む
- 13 褐色土 12に似る、FP粒を僅かに含む
- 14 褐色土 2-3mmのFP粒を1%、黒色土を10%(2号焼成土坑埋土)
- 15 暗褐色土 FA、黒色土をブロック状に含む(2号焼成土坑埋土)
- 16 暗褐色土 FA、FP粒、炭化物、焼土を僅かに含む(2号焼成土坑埋土)
- 17 黒色土 炭化物及び焼土(2号焼成土坑埋土)
- 18 暗褐色土 FA、炭化物を3-5mmの小ブロック状に含む(2号焼成土坑埋土)
- 19 褐色土 3-7mmのFP粒を5%
- 20 褐色土 FAブロックを含む
- 21 褐色土 3-5mmのFP粒、FAを含む

第171図 焼成土坑2群

第4章 調査のまとめと理科学分析

第1節 白井二位屋遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

白井二位屋遺跡は、子持村白井に所在する遺跡で、69軒の住居跡やおびただしい数の土坑が検出されている。このうち、奈良・平安時代の62号住居と66号住居からは、炭化物(大半が炭化材)が良好な状態で、しかも住居建築部材の一部と推定される比較的大きな形状で出土している。

ここでは、これら炭化材の樹種の同定を行い、周辺種生との比較・検討を若干行う。

2. 方法・記載および結果

試料は、62号住居および66号住居から出土した炭化材34点である。これらの炭化材は、実体顕微鏡下で主に横断面(木口)を中心に組織的特徴に基づいて分類する。この段階において、同定可能なものについてはその代表的試料について、また電子顕微鏡を用いて観察しないと同定出来ない試料はすべての試料について、それぞれカミソリ刃などを用いて横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柀目と同義)の3断面を作成する(図1)。これら試料は、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡(日本電子製JSM T-100型)で観察・同定した。表1にその結果を示す。なお、樹種の同定は、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載と同定の根拠を示す。

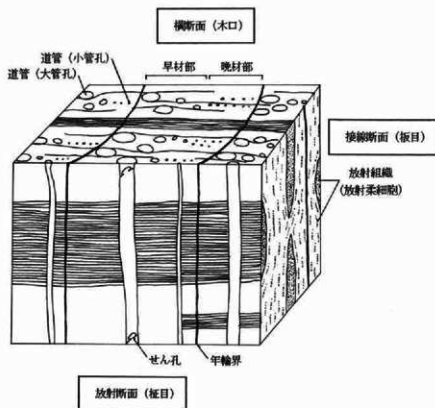


図1. 材組織とその名称(クヌギ模式)

第4章 調査のまとめと理科学分析

表1. 住居跡出土炭化材の樹種

試料No	樹種	備考
1	クスギ節	
2	◇	
3	◇	
4	◇	
5	◇	写真
6	ネムノキ、タケ亜科 (ササ類)	写真
7	クスギ節	> φ 6 mm
8	◇	
9	◇	
10	◇	
11	◇	
12	ネムノキ	
13	クスギ節、タケ亜科 (ササ類)	
14	◇	
15	タケ亜科 (ササ類)	写真
16	クスギ節	
17	◇	
18	◇	
19	◇	
20	◇	
21	◇	
22	◇	
23	クスギ節、タケ亜科 (ササ類)	ササ類 φ 4 mm
24	クスギ節	板状
25	◇	
26	◇	
27	◇	
28	◇	
29	◇	
30	◇	
31	◇	
32	◇	
33	◇	
34	◇	

コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版1a~1b.

年輪のはじめに大管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる(放射断面)。放射組織は単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、いずれの試料もブナ科のコナラ属クスギ節の材と同定される。クスギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクスギ(*Q. acutissima*)と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)があるが、識別するには至っていない。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 図版2a~2c.

年輪のはじめに丸い大型の管孔が3列並び、そこから径を減じた管孔が単独または数個複合して散在する環孔材である。また、木部柔組織は周囲状および連合異状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性で1~4細胞幅、3~19細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マメ科のネムノキの材と同定される。ネムノキは、樹高10mに達する落葉広葉樹で、暖帯から熱帯にかけて分布する陽樹である。

タケ亜科(ササ類) *Bambusoideae* イネ科 図版3a~3c.

左右の後生木部、外側の後生木部・原生節部および内側の原生木部の周囲を維管束鞘が取り巻く維管束が、多数散在する(横断面)。

以上の形質から、イネ科のタケ亜科の稈と同定される。タケ亜科には、稈の大きさからタケ類とササ類に分けられるが、組織では識別できない。試料は、いずれも稈の直径も ϕ 4mm前後と小さいことからササ類と思われる。

3. 考察

34点の炭化材の樹種は、タケ亜科が5点、ネムノキが2点である以外は、大半がコナラ属クスギ節の材であることが判明した。なお、タケ亜科は4点が他の炭化材に伴うものである。

当時の遺跡周辺の植生(木本類)は、コナラ亜属を代表として、クリ属、アカガシ亜属、スギ属などが多く見られる(徳永、1982)。このうちコナラ亜属は、本遺跡の炭化材で見いだされたクスギ節とコナラ節から構成されている。このことから、遺跡周辺ではクスギ節の樹木は非常に多く、建築材として身近な樹木であったことが推定される。なお、これらコナラ亜属の樹木以外にクリ属、アカガシ亜属、スギ属などの樹木が多いことから、クスギ節の樹木を選択的に利用していることが伺われる。

引用文献

徳永重元(1982): 8-1. 日高遺跡の花粉分析. 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団「日高遺跡、一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集一」、349-360.

第4章 調査のまとめと理科学分析

図版1. 白井二位屋遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真



1a. クヌギ節(横断面) bar: 1mm



1b. 同(接線断面) bar: 0.5mm



1c. 同(放射断面) bar: 0.5mm



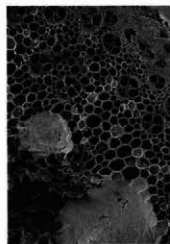
2a. ネムノキ(横断面) bar: 0.5mm



2b. 同(接線断面) bar: 0.1mm



2c. 同(放射断面) bar: 0.5mm



3a. ササ節(横断面) bar: 0.5mm



3b. 同(接線断面) bar: 0.1mm



3c. 同(放射断面) bar: 0.1mm

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の 製鉄関連遺物の金属学的調査

大澤正己

古代に推定される白井二位屋遺跡出土の製鉄関連遺物と、周辺遺跡の鉄滓と砂鉄を調査して次の事が明らかになった。

- (1) 当遺跡は出土鉄滓からみて、鉄素材の成分調整の精錬鍛冶から、鉄器製作の鍛錬鍛冶までが行われた鍛冶工房跡と考えられる。
- (2) 鍛冶原料は、荒鉄(製錬生成鉄で、表皮付着スラグや捲込みスラグ、また炉材粘土ら不純物を含む原料鉄)の鉄塊系遺物や、製錬炉内洋中の鉄塊割り出しなどの選別品が充当された可能性をもつ。又、荒鉄の始発原料は、吾妻川砂鉄系が候補に上げられる。
- (3) 鉄塊系遺物の炭素含有量は、極低炭素鋼(C:0.01%以下)から共析鋼(C:0.7%前後)までが存在した。鉄器用途に応じて軟鋼・硬鋼の使い分けがなされたであろう。又、多様な炭素量の異なる鉄塊から精錬鍛冶の必要性が読みとれる。
- (4) 鉄器半製品は、鉄中の非金属介在物(鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物)からウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)系が検出されて在地砂鉄の使用が想定された。なお鉄器半製品は高炭素系が多く、炭素含有量が1.1%から過共晶組成の白銅鉄が認められた。廃鉄器再生材の鉄器製作も考えられる。
- (5) 鍛冶技術は、鉄の本質を弁えて一定水準を保持したと考えられる。例えば鉄塊は過熱組織で韌性不足となったものは、焼きなまし処理を施して鋼質改善(網状セメントタイト→球状セメントタイト)を計っていた。
- (6) 比較参考試料としての子籠製鉄址採取鉄滓は、鉱物組成にウルボスピネルを晶出して白井二位屋遺跡出土製鉄滓と同系である。しかし、砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO_2)が11.35%と高めであって、鯉沢バイパス採取砂鉄(TiO_2 : 7.69%)との結びつきが有望と考えられた。

1 いきさつ

白井二位屋遺跡は、群馬県北群馬郡子持村大字白井に所在する。遺跡は子持村の南端部の利根川と吾妻川の合流点よりやや西北に位置し、利根川によって形成された河岸段丘上の平坦面で、標高184~189mに立地する。

本遺跡では半ば埋もれかかった40号住居跡の窪みに大量の鉄滓が破壊され、他に4号住居その他からも製鉄関連遺物が出土して注目された。

この遺跡の周辺には、渋川市金井製鉄遺跡を初めとして、子持村の子籠製鉄址、白井城内の吹屋製鉄跡などの吾妻川の砂鉄を利用したと考えられる製鉄遺構も多く、古代から中世にかけての鉄生産地であったと推定される。発掘区域内からは、残念ながら製鉄遺構は検出できず、鉄滓らの年代を決定付ける資料は欠けた。しかし、住居跡を覆う浅間B軽石(As-B 天仁元年(1108)降下)から推定して古代の可能性が考えられている。

一方、ここから派生する問題として、例えば、白井地区における製鉄の開始時期とその規模、対岸の金井製鉄遺跡との関係、製鉄の実態と工人集団の問題など、今後遺跡の性格を見極める上で数多くの課題を提供してくれる。これらの背景を基にして製鉄関連遺物の専門調査の依頼を、群馬県埋蔵文化財調査事業団より要請されたので、金属学的調査を行った。それらの結果について若干の考察を加えたので報告しておく。

2 調査方法

2-1 供試材

Table. 1に示す。白井二位屋遺跡出土遺物は、鉄滓5点、鉄塊系遺物2点、鉄器半製品2点、羽口先端溶融部1点の計10点と子製鉄遺跡鉄滓1点、無沢バイパス発掘区域採取砂鉄1種で総計12点である。

2-2 調査方法

- (1) 肉眼観察
- (2) 顕微鏡観察

供試材の鉄滓をはじめ鉄塊系遺物らは、水道水できれいに洗浄乾燥後、中核部をバークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研磨をダイヤモンドの3 μ と1 μ で仕上げて光学顕微鏡で観察を行った。なお、金属鉄の炭化物はピクリル(ピクリン酸飽和アルコール液)で腐食(Etching)し、フェライト結晶粒はナイトル(5%硝酸アルコール液)腐食を行った。

(3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成の金属鉄の組織同定を目的として、マイクロ・ビッカース断面硬度(Micro Vickers Hardness Test)の測定を行った。試料は鏡面琢磨した試料(顕微鏡試料併用)に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その荷重を除いた商を硬度値としている。

(4) CMA(Computer Aided X-ray Micro Analyzer)調査

分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に捉えて画像化し、定性的な測定結果を得、これを標準試料とのX線強度の対比から元素定量値を得ることができるコンピューター内蔵の新鋭機器である。旧器はX線マイクロアナライザーともEPMA(Electron Probe Micro Analyzer)とも呼ばれている。

(5) 化学組成

分析は次の方法で実施した。

容量法：全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第1鉄(FeO)。

燃焼容量法、燃焼赤外吸収法：炭素(C)、硫黄(S)。

ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)誘導結合プラズマ発光分光分析：二酸化珪素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化磷(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)。

3 調査結果と考察

3-1 白井二位屋遺跡40号住居廃絶後の窪み及び4号住居掘土出土品

(1) No.2 鉄滓(砂鉄製錬滓)

① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、粗鬆肌に木炭痕(5~6cm)と鉄錆及び気泡を多発する。表面は、やはり木炭痕に粘土を付着する。炉内残留滓で人工的破砕痕を有し、鉄塊を割り取った残欠と考えられる。表裏に付着土砂多い。調査試料は長軸端部の緻密な個所を採取した。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の④～⑧に示す。鉱物組成は、矽鉄製錬滓の晶癖を呈する淡灰褐色多角形のウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と半還元矽鉄粒子及び淡灰色盤状結晶で大きく成長したファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)と基地の暗黒色ガラス質スラグらである。外観観察で錆が認められた様に、又、含鉄鉄滓で鉄塊割り取り残欠とみた様に金属鉄が残存していた。⑦⑧の不定形白色部がMetalである。又、⑥の白色粒状部は半還元矽鉄粒子に晶出したMetalである。還元過程での鉄の初期生成状況を留めた組織写真である。なお、金属鉄は、還元初期のため吸炭反応はほとんどなされず炭素の含有はなく純鉄にちかいフェライト(Ferrite)である。⑤の白い地はフェライト、黒い細い線はフェライト粒界をしめす。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 1の⑧にフェライトの硬度測定の結果を示す。硬度値は100Hvである。通常フェライトは80Hv前後を指すが、該品はやや高め傾向を呈している。

④ 化学組成

Table. 2に示す。含鉄鉄滓の成分傾向である。全鉄分(Total Fe)は52.19%に対して金属鉄(Metallic Fe)は4.45%を残存し、酸化第1鉄(FeO)が33.64%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)が鉄錆を含みで比較的多くて30.87%を含む。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は17.51%と少なく、このうちの塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)が4.78%を含有する。矽鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)は8.34%、バナジウム(V)0.23%で含鉄滓なので若干低めであるが矽鉄製錬滓としての成分傾向を示している。酸化マンガン(MnO)も0.46%と高めで製錬滓傾向を有している。含鉄滓なので硫黄(S)も多くて0.192%あって、銅(Cu)も0.010%とやや高め傾向を呈していた。

(2) No.4 鉄滓(精錬鍛冶滓)

① 肉眼観察

No.4: 平面が楕円形で790gの大型塊形滓である。色調は赤褐色を呈し、全体に茶褐色の鉄錆を発生。上面は凹凸が激しく1cm程の気泡と木炭痕を散在させる。側面の一部には弱い波面がみられ、両端が反り上がる形態をもつ。裏面底部は鍛冶炉の粘土(砂質で灰白色)を薄く付着する。鉄滓の上半部と下半はまとまりの悪い滓が固着した状態を呈していた。供試材は、長軸端部の上半鉄滓を用いた。

② 顕微鏡組織

Photo. 2の④～⑧に示す。鉱物組成は、白色粒状のヴスタイト(Wüstite: FeO)と淡灰褐色多角形のウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、淡褐色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、基地の暗褐色ガラス質スラグから構成される。⑦⑧は鍛造剥片らしき形状でヴスタイト主体鉱物が認められた。鍛造剥片に認定するには、外周の形状にシャープさが欠ける。晶癖は精錬鍛冶滓の特徴を呈する。

③ 化学組成

Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は46.97%に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.30%、酸化第1鉄(FeO)43.65%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)18.22%の割合である。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)も多くて31.82%あり、このうちの塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)も6.37%と高めである。精錬鍛冶も初期段階の排出であろう。矽鉄特有元素も高めで4.92%がこれを裏付ける。バナジウム(V)0.21%である。酸化マンガン(MnO)は0.26%と低下して製錬滓より低下している。他の随伴微量元素も若干低減気味で、酸化クロム(Cr_2O_3)0.030%、硫黄(S)0.033%、五酸化燐(P_2O_5)0.44%、銅(Cu)0.005%であった。成分的にも精錬鍛冶滓としての傾向は認められた。

(3) No.5 鉄滓(精錬鍛冶滓)

第4章 調査のまとめと理科学分析

① 肉眼観察

108 gと小型碗形滓で、側面は4面ともに破面を呈す。全体は赤褐色の酸化物に覆われ、上面は細かい凹凸に薄皮状の鉄滓層、その下に比較的大きな気泡が並ぶ。下半部は密な鉄滓層、底部は5mm大の木炭痕が散見された。形状は極めて緩いU字状で底部もわずかに弧状を呈している。

調査試料は碗形の中核部を採取する狙いから長軸短部を用いた。

② 顕微鏡組織

Photo. 3の①～⑤に示す。該滓は精錬工程も後工程側である。鉱物組成は淡茶褐色で多角形状のウルボスピネルはみられずに白色粒状のヴスタイト主体で、その粒内に僅かにウルボスピネルが認められる程度であった。これに長柱状ファイヤライトと基地の暗黒色ガラス質スラグ、金属鉄が加わる構成である。碗形滓中にメタルを逃がしており、此の工程は、うまく作業がなされていない。

①の右側の金属鉄は研磨のままでまだ腐食(Etching)を加えていない状態で、④はピクラル腐食で表われた極く微量のセメントイト(Cementite: Fe₃C)、炭素含有量としては、0.008%前後の極低炭素鋼である。⑤はナイトル腐食でフェライトの結晶粒界のみられる組織を示した。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 3の⑤に金属鉄フェライト組織の硬度測定圧痕写真を示す。硬度値は81.2Hvであった。組織に見合った硬度値である。

④ 化学組成

Table. 2に示す。精錬鍛冶滓としては、最も鉄分が多くガラス質成分は少ない傾向をもつ。精錬鍛冶滓としては後工程に属する。全鉄分(Total Fe)は57.68%に対して金属鉄(Metallic Fe)が8.84%と多く、酸化第1鉄(FeO)44.45%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)20.43%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は20.89%あって塩基性成分(CaO+MgO)が5.04%が含まれる。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は前述したNo.4よりは低減して3.45%、バナジウム(V)0.16%となる。同じく酸化マンガン(MnO)も0.22%と少ない。他の随伴微量元素は硫黄(S)が0.061%と高めであるが他は低減傾向にある。

(4) No. 6 鉄滓(精錬鍛冶滓)

① 肉眼観察

表裏共に赤黒色を呈した碗形滓のはほぼ完形品に近いものである。表面は粗糲な肌に木炭痕を残し、多くの気泡を露出する。裏面は青灰色に変色したが材粘土を付着する。試料は側面の一部を欠損する箇所より採取した。

② 顕微鏡組織

Photo. 3の⑥～⑧に示す。⑥の左側は厚み40μmの鍛造剥片が表皮の錆化鉄に取りこまれた状態を表す。その右側は精錬鍛冶滓の晶癖でヴスタイト(Wüstite: FeO)とウルボスピネル(Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂)、ファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグらの構成である。⑦⑧も同様の組織であるが、⑧のヴスタイトの拡大組織において粒内析出物のウルボスピネルの微小析出物を提示しておく。精錬鍛冶においても鍛打作業が速まっているのが当該試料から推定できる。

③ 化学組成

Table. 2に示す。該滓は前述してきたNo.4とNo.5の中間工程に納まる鉄滓と考えられる。全鉄分(Total Fe)は、49.20%、金属鉄(Metallic Fe)0.68%、酸化第1鉄(FeO)38.47%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)26.62%の割合である。ガラス質成分は26.74%に対して塩基性成分(CaO+MgO)5.40%と、かなり高い。また、砂鉄特有元

素の二酸化チタン(TiO_2) 5.58%、バナジウム(V) 0.26%、酸化マンガン(MnO) 0.28%も多く、精錬鍛冶も初期段階近くが想定される。酸化クロム(Cr_2O_3)は0.103%と多いのも特徴的であった。

(5) No.3 鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

① 肉眼観察

表裏共に茶褐色を呈する一部欠損の輪形滓である。肌は流動状緻密質で表面に気泡を露出する。破面は側面2面とも銀色光沢を有する。表面は気泡が多発し剥離が認められた。供試材は緻密な側面部を用いる。該品タイプは、白井二位屋遺跡では数少ないうちの一点であった。

② 顕微鏡組織

Photo. 2の①~③に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイトと針状析出物及びファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。該滓は鍛錬鍛冶の折返鍛接の高温作業で排出された滓に想定される。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 2の③にヴスタイト結晶の硬度測定の写真を示す。硬度値は514Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は450~500Hvである。若干高めを指すがヴスタイトの結晶と同定できる。

④ 化学組成

Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)多くて61.59%、金属鉄(Metallic Fe)は0.19%、酸化第1鉄(FeO) 58.78%、酸化第2鉄(Fe_2O_3) 22.46%の割合である。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は逆に少なくして16.81%で、塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)も2.83%と低減傾向にある。更に砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO_2)も激少して0.53%、バナジウム(V) 0.02%、酸化マンガン(MnO) 0.05%と、製錬滓や精錬鍛冶滓らより1桁下がる傾向を呈している。その他の随伴微量元素も少なくなり、酸化クロム(Cr_2O_3) 0.001%、硫黄(S) 0.005%、五酸化燐(P_2O_5) 0.16%となるが、銅(Cu)のみは鉄中に固溶するので増加して0.015%を含有している。該滓は外観的には緻密質で精錬鍛冶滓の傾向にみられたが、組成的には砂鉄特有成分が低減傾向にあって鍛錬鍛冶滓に分類された。

(6) No.7 鉄塊系遺物

① 肉眼観察

表裏共に赤黒色の鉄錆を発する不定形の鉄塊系遺物である。表面は平坦に近く、下面は凹凸を有しU字状を呈する。一見すると輪形状にもとれるが、側面の一部に1cmの木炭痕、端部に金属鉄の錆化した円形錆があって、これより放射線状に亀裂が走る。全体的に比重が大で磁石の反応も強い。中核部は、金属鉄の残留が多いことが推定される。鍛冶炉で処理された鉄素材の可能性をもつ。調査試料は付着土砂や錆化部を避けて長軸端部中核を用いた。

② 顕微鏡組織

Photo. 4の①~④に示す。①は左側に表皮付着スラグのヴスタイト、右側の白色部は金属鉄である。②は錆化鉄のゲーサイト(Goethite: $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$)に取りこまれた鍛造判片、③は同じくゲーサイトに囲まれたウルボスピネルである。また、④⑤は左側にヴスタイトの付着があってヴスタイト粒内には、微小析出物のウルボスピネルが認められる。鍛造判片と鉄滓の鉱物組成からみて該品は精錬鍛冶系の鉄塊に分類される。金属鉄は、ピクル腐食(Etching)で全面パーライト(Pearlite: フェライトとセメントタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)で、これの占める面積は炭素含有量の増加にともなって増え、焼きならし状態で0.4%前後で半分、0.77%で全部パーライトとなる。該品は過共析鋼で炭素量は0.8%前後と推定される。なお、⑥の左側は過熱組織(Over Heated Structure)が表れた箇所を示している。鍛冶炉中で850℃以上の温度

第4章 調査のまとめと理科学分析

に加熱されてウィッドマンステッテン(Widmannstatten)組織を生じていた。白い針状はフェライト(Ferrite: α 鉄)、黒いところはパーライトである。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 4の⑧は鍛造判片、⑨は過共析鋼の硬度圧痕写真を示す。⑧は鉍物組成がヴスタイトの凝集組織である。硬度値は485HVであった。ヴスタイトの文献値の450~500HVの範囲内に収まっている。⑨は279HVであって過共析鋼の炭素量からみて妥当な数値である。

④ CMA調査

鉄塊系遺物の表皮に付着した鉄滓の高速定性分析結果をTable. 3に示す。分析の対象はPhoto. 9のSE(2次電子像)に示した白色粒状のヴスタイト(Wüstite: FeO)と、その粒内の微小茶褐色析出物、淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグらである。検出元素を強度(Count)順に並べると次の様になる。鉄(Fe)、珪素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミ(Al)、マグネシウム(Mg)、チタン(Ti)、カリウム(K)、マンガン(Mn)、ナトリウム(Na)らである。これに極微量のパナジウム(V)、燐(P)が加わる。チタン(Ti)、パナジウム(V)は砂鉄特有元素である。鍛冶に供された鉄素材の始発原料は砂鉄系と判る。

高速定性分析結果を視覚化した特性X線像をPhoto. 9に示す。分析元素の存在は、白色輝点の集中度によって読みとれる。例えばSE(2次電子像)のヴスタイト(FeO)は、鉄(Fe)とチタン(Ti)に白色輝点が集まる。ヴスタイトは FeO の化学式、ヴスタイト内の微小析出物は、ウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)系と想定できる。同じく、ファイヤライトは $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ の化学式でみられる様に白色輝点は、鉄(Fe)と珪素(Si)、これにマグネシウム(Mg)に白色輝点が認められる。場合によってはファイヤライト・マグネシアン(Fayalite, Magnesian: Fe.Mg.SiO_4)のカンラン石と表現すべきかも知れない。細かい詰めは粉末X線回折が必要であって、後日の検討課題としておきたい。

Table. 4は摺き込みスラグの高速定性分析結果である。構造鉍物は前述した表皮スラグに淡灰褐色多角形結晶のウルボスピネルの結晶が加わった組織である。検出元素はTable. 3に近似するが、該滓は砂鉄特有元素として、新たにジルコン(Zr)が認められた。チタン(Ti)、パナジウム(V)、ジルコン(Zr)らが砂鉄特有元素であって3者の検出は、鍛冶素材の始発原料が砂鉄系であることを決定づけられる。

Table. 5は、錆化鉄のゲーサイト(Goethite: $\alpha\text{-FeO} \cdot \text{OH}$)中に取り囲まれた鍛造判片の高速定性分析結果である。ベースが鉄の酸化物であるので、鉄(Fe)に強度(Count)が集中して、錆化鉄中に侵入した土砂からくる汚染物質の珪素(Si)やアルミ(Al)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、カリウム(K)、ナトリウム(Na)らが検出される。この結果の特性X線像をPhoto. 11に示した。鍛造判片と周囲のゲーサイトに鉄(Fe)の白色輝点が集まって認められた。汚染物質の珪石類には、ガラス質元素が集中する。

⑤ 化学組成

Table. 2に示す。鉄塊系遺物といっても金属鉄のみではなく、錆化鉄や鉄滓の摺き込みがあるので成分もそれらの反映が出ている。全鉄分(Total Fe)は52.43%に対して金属鉄(Metallic Fe)が2.48%、酸化第1鉄(FeO)14.55%、錆化鉄が多くて酸化第2鉄(Fe_2O_3)55.25%となる。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は多くて18.16%が含まれる。鉄塊であるので砂鉄特有元素は低減されて二酸化チタン(TiO_2)0.84%、パナジウム(V)0.04%となった。また酸化マンガン(MnO)も少なくて0.06%であった。しかし、他の随伴微量元素からは、高め傾向にあって、酸化クロム(Cr_2O_3)0.13%、硫黄(S)0.132%、銅(Cu)0.010%となる。なお、炭素(C)の1.10%は、汚染物質含みの値であって数値の信頼度は低いものと見做される。

(7) No.8 鉄塊系遺物

① 肉眼観察

指頭大で緩やかな板状の鉄塊系遺物である。表裏共に赤黒色の錆に覆われ、亀裂が走る。上・下面ともにU字状を呈し、一部に鍛打された痕跡を残す。調査試料は長軸側1/2を用いた。

② 顕微鏡組織

Photo. 5の①～⑤に示す。①は表面層に埋込まれたスラグである。暗黒色ガラス質スラグに囲まれて淡灰色多角形状のウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)が存在する。スラグは錆化鉄(Goethite: $\alpha\text{-FeO} \cdot \text{OH}$)が取りまいていた。②③はビクラル腐食(Etching)で表されたセメントタイト(Cementite: Fe_3C)である。炭素量を推定すると0.01%前後となる。⑤は試料の断面方向をナイタル腐食で表したフェライト結晶の組織である。セメントタイトの析出量は偏析はなく、局所に極く微量のパーライトも析出するが極低炭素鋼に分類される。フェライト結晶は細粒と粗大粒が混在し、鍛打加工の歪を残存させる。恐らく600℃前後の温度から放冷された熱履歴が想定された。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 5の④に硬度痕写真を示す。フェライト結晶粒界に微量セメントタイトを析出する個所の硬度値は85.0Hvであった。極低炭素鋼(C: 0.01%以下)であるので軟質であって妥当な値と考えられる。

④ CMA調査

Table. 6に埋込みスラグの高速度分析結果を示す。分析対象箇所はPhoto. 12のSE(2次電子像)に示したウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と暗黒色ガラス質スラグ、これを取り囲んだ錆化鉄のゲーサイト(Goethite: $\alpha\text{-FeO} \cdot \text{OH}$)である。検出元素は、暗黒色ガラス質スラグからくる硅酸分の硅素(Si)が最も強く、次に鉄(Fe)があって、アルミ(Al)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、カリウム(K)、マンガン(Mn)、硫黄(S)、塩素(Cl)が続く。鉄素材は砂鉄由来なのでチタン(Ti)が強く検出されている。

これらの結果を視覚化した特性X線像をPhoto. 12に示す。淡灰色多角形のウルボスピネルの結晶にチタン(Ti)、と鉄(Fe)が検出されて白色輝点が集中しているのが認められる。当鉄塊系遺物が砂鉄を原料とすることを明瞭に証明する埋込みスラグであった。

なお、化学組成は試料の量が足りないで実施しなかった。

(8) No.9 鉄器(半製品)

① 肉眼観察

表裏共に赤黒色の錆に覆われた円盤状の崩れ面を有する板状鉄器である。側面の1箇所は最近の割れであるが、他の側面4面は直線上を呈して鋳込み痕跡を残す。当初はタガネ様の工具の剪断痕かとも考えていた。試料は25×31mmと小さく厚みは11mmであったので1/3程度を顕微鏡試料に当て、他は保管したので化学組成はやっていない。

② 顕微鏡組織

Photo. 6の①～⑤に示す。該品は白鑄鉄(White cast iron)である。別名白鉄ともいい、破面が銀白色を呈することからこの様に呼ばれている。⑤の組織からみて過共晶組成(C: 4.23%以上)の白鑄鉄で、白色板状結晶は初晶のセメントタイト、地はオーステナイト(Austenite, 常温ではパーライトになる)とセメントタイトの共晶のレデブライト(Ledeburite)である。

①は研磨のままの組織で左側は自然腐食を受けて白鑄鉄組織の痕跡が認められる。右側の白色部は金属鉄であって、これをビクラル腐食をすれば、②③⑤に示す様な白鑄鉄組織が表れる訳である。

第4章 調査のまとめと理科学分析

③ ビッカース断面硬度

Photo. 6の④に蜂の巣状にみえるセメンタイトとオーステナイトの共晶であるレデブライト部を測定した硬度圧痕を示す。硬度値は硬くて870Hvであった。組織に見合った値である。

(9) No.10 鉄器(半製品)

① 肉眼観察

半月形の平面をもつ赤黒色錆に覆われた鉄器半製品である。断面は長軸側が板状、短軸側が半月型を呈す。長軸側の一方は錆による膨れ、他方は切断されたものか直線状である。供試材は、長軸側狭まった側の約1/3を用いる。化学組成は試料保存のため実施していない。

② 顕微鏡組織

Photo. 7の①～⑤に示す。①は鉄中の非金属介在物である。暗黒色ガラス質スラグとその中に茶褐色多角形状のウルボスピネル(Urnöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)やルチル(Rutile: TiO_2)に近い鉱物であろう。②～④はビュラル腐食(Etching)で表れた不完全な球状セメンタイト(Globular Cementite)である。白い粒や線状の結晶がセメンタイト、地はフェライトである。該品は過共析鋼(C: 1.1%前後)に分類される。製鉄炉で還元され荒鉄が炉内で高熱過熱後徐冷されて網状セメンタイト(Network Cementite)を析出し、そのまま使用すれば硬くて伸びや衝撃に対して弱く、鋼質を改善するために750℃前後の温度に一定時間加熱して徐冷されている。

前述した様に白いフェライト地に球状または不規則な形状のセメンタイトが遊離散在している。これはパーライトを形成していたセメンタイトと、網状セメンタイトが球状化焼なましにより、共に細かく分離し、それぞれの表面張力により球状化しつつあるが、徐冷不足で不完全さを残して完全球状化になり切れなかったと推定される。

しかし、いずれにしても鋼質改善の熱処理技術は知っていた事が、この組織から証明できる。⑤は表層からの連続写真で全体像を示した。前述した過共晶組成の白鈍鉄といい、該品と高炭素鋼の存在を明らかにする鋼材である。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 7の④に不完全な球状セメンタイトの鋼に硬度測定を行った圧痕写真を示す。硬度値は233Hvであった。過共析鋼であるが球状化焼なまし処理により、鋼質は改善されて靱性の優れた材質になっている。

④ CMA調査

Table. 7に鉄中の非金属介在物の高速定性分析結果を示す。分析箇所は、Photo. 13のSE(2次電子像)に示す暗黒色ガラス質スラグと、その中に析出した淡茶褐色板状結晶や茶褐色スピネル状結晶である。検出元素を、強度(Count)順に並べると次の様になる。鉄(Fe)、珪素(Si)、アルミ(Al)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、カリウム(K)となる。

以上の結果を視覚化した特性X線像で表すとPhoto. 13である。SE(2次電子像)に1と番号を打った淡茶褐色板状結晶の介在物は、チタン(Ti)に強く、マグネシウム(Mg)に弱く白色輝点が集中する。更にこの個所の定量分析値をみると77.93% TiO_2 -14.90% MgO -5.70% FeO -3.68% Al_2O_3 が得られる。鉄-チタン化合物とみるよりはチタン単体に近いのでルチル(Rutile: TiO_2)系介在物とみた方がよさそう。次に2と番号を打った茶色角状介在物はアルミ(Al)とマグネシウム(Mg)に白色輝点が集中する。定量分析結果は、65.7% Al_2O_3 -28.05% MgO -6.54% FeO -21% TiO_2 となる。スピネル系介在物である。更に3の箇所はファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)と暗黒色ガラス質スラグをエリアで分析している。此の箇所はガラス質成分の総

て(Si, Al, Ca, Mg, K)に白色輝点が集中していて定量値は、39.05% SiO₂-19.56% CaO-15.48% Al₂O₃-11.59% TiO₂-9.43% MgO-4.79% FeO-1.38% K₂Oとなる。1, 2, 3の箇所より二酸化チタン(TiO₂)が77.93%、2.1%、11.59%と大量に検出されて始発原料が砂鉄であることを明瞭に表す介在物であった。鍛打作業があまり加わっていないので、非金属介在物の伸展があまり表れていない。材質調整を終えた鉄塊系遺物である。鍛打加工の前処理の熱処理が施されているので半製品と云えぬことはないので試料呼称はそのままとした。

(10) No.12 羽口先端溶融物

① 肉眼観察

羽口先端部の溶融鉱物で黒色ガラス化して気泡を露出している。先端以外は茶褐色の酸化色を呈し、5~10mm大の木炭痕の密集する滓を付着する。羽口胎土はスサが多量に添加され、羽口長軸側にむくスサが多い。羽口は粘土板を巻き付けて成形したためか、胎土は砂質でやや軟質である。

② 顕微鏡組織

Photo. 8の⑥~⑧に示す。鉱物組成は、粘土の溶融したガラス質スラグに半還元砂鉄粒子が懸だくし、局部的に微細結晶のマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)が晶出する。砂鉄粒子は粘土中に混在するものが、羽口の溶融で被熱化したものと考えられる。

③ CMA調査

Table. 8に羽口先端溶融物の中で懸だくした被熱砂鉄粒子と暗黒色ガラス質スラグの分析結果を示す。検出元素を強度順に並べると次の様になる。珪素(Si)、アルミ(Al)、鉄(Fe)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、カリウム(K)、ナトリウム(Na)となる。

Photo. 14に高速定性分析結果にもとづいて検出された各元素の特性X線像を示す。被熱砂鉄からは、鉄(Fe)とチタン(Ti)に白色輝点が集中する。また、被熱砂鉄の熱影響部の多孔質化した箇所からは珪素(Si)、アルミ(Al)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)らガラス質成分が検出された。

次に暗黒色ガラス質スラグ中に微細結晶のマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)の高速定性分析結果をTable. 9に示す。検出元素は、ガラス質成分(Si, Al, Ca, Mg)主体で、これに鉄(Fe)とチタン(Ti)が加わる。Photo. 15に特性X線像を示す。白色微結晶のマグネタイトに白色輝点が集中する元素は、鉄(Fe)とチタン(Ti)である。羽口胎土中には砂鉄粒子が混在することを表している。又、当羽口は精錬鍛冶用に使われて表皮付着スラグの製錬系鉄滓らの成分影響があるものと推定された。

④ 化学組成

Table. 2に示す。黒色ガラス化物質の分析結果である。全鉄分(Total Fe)は16.41%に対して金属鉄(Metallic Fe)はほとんど含まれず0.33%、酸化第1鉄(FeO)11.96%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)9.70%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)が主体となっているので74.11%と多い。又、塩基性成分(CaO+MgO)は結構多くて5.88%あって、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)2.42%、バナジウム(V)0.08%とガラス質スラグとしては高めである。表皮スラグの製錬滓成分の影響がみられて精錬鍛冶用羽口の可能性が読みとれる。酸化マンガン(MnO)も0.16%と含まれていた。

3-2 子籠製鉄遺跡表面採取品

(1) No.1 鉄滓(製錬滓)

① 肉眼観察

白井二位屋遺跡から約5km北、子持山の裾にある子籠の製鉄址から表面採取された鉄滓である。

第4章 調査のまとめと理科学分析

表裏共に黒褐色を呈し、表皮は木炭痕と気泡を露出した炉内流動滓である。平面は台形、底部はU字状で比重は大きい。長軸2分の1程に1cm大の木炭痕をもつ個所があり、これより流動が開始しつつある。他方は、細かい気泡が密集した緻密部をもつ。裏面の一部は、灰褐色の炉壁粘土が付着する。炉内滓と鉄と滓の分離しつつある位置の滓かも知れない。

供試材は、長軸端部のやや流動化しつつある個所より採取した。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の①～③に示す。鉱物組成は、白色多角形のウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と淡灰褐色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。塩基性砂鉄を始発原料とした製錬滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 1の③にウルボスピネルの結晶を測定した硬度の痕痕を示す。硬度値は707Hvであった。マグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)の文献硬度値が500～600Hvである。これに対してウルボスピネルはチタンを固溶するので硬さは増加する。白色多角形状の結晶はウルボスピネルに同定される。

④ CMA 調査

Table. 10に高速定性分析結果を示す。分析箇所はPhoto. 16のSE(2次電子像)に示したウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、ファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグらである。検出元素は、珪素(Si)、鉄(Fe)、チタン(Ti)、アルミ(Al)、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)、マンガン(Mn)らである。分析対象の鉱物組成に見合った検出元素である。

Photo. 16は、高速定性分析で検出された結果を視覚化した特性X線像である。白色多角形結晶のウルボスピネルは、鉄(Fe)とチタン(Ti)、アルミ(Al)に白色輝点が集中される。該滓が砂鉄特有の元素のチタン(Ti)が強く検出されて、砂鉄を始発原料とした製錬滓であると分類される。

⑤ 化学組成

Table. 2の示す。全鉄分(Total Fe)は34.44%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.44%、酸化第1鉄(FeO)39.62%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)4.58%の割合である。鉄収率は良好である。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は40.84%あって、このうち塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)が10.25%と高値は自溶剤としての鉄と滓の分離によく効いたと考えられる。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)11.35%、バナジウム(V)0.32%は塩基性砂鉄系が原料となろう。酸化マンガン(MnO)は0.66%と該地では高め傾向にある。他の随伴微量元素らは特異な点は認められず、酸化クロム(Cr_2O_3)0.031%、硫黄(S)0.020%、五酸化燐(P_2O_5)0.56%、銅(Cu)0.001%であった。

3-3 舞沢バイパス発掘区域内採取砂鉄

(1) No.11 砂鉄

① 肉眼観察

粒度の大きい砂鉄である。色調は黒褐色を呈し、光沢を有する粒子も混在する。

② 顕微鏡組織

Photo. 8の①～⑤に示す。粒子は小さいもので200 μ 、大きい粒は500 μ を有するものまで存在する。砂鉄中の主なる鉱物組成は磁鉄鉱(Magnetite: $\text{Fe}_3\text{O}_4 \cdot \text{FeO}$)で、格子組織をもつチタン鉄鉱(Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)は認められなかった。砂鉄粒内に点在する包裹鉱物(輝石、角閃石、石英等)は少なく純度のよいものであった。

③ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は56.33%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.19%、酸化第1鉄(FeO)24.13%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)53.45%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は12.36%であって、この内の自燬剤となる。塩基性成分(CaO+MgO)は高めで3.48%である。砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO₂)7.69%、バナジウム(V)0.08%が含まれる。他の随伴微量元素は通常レベルであって酸化マンガン(MnO)0.47%、酸化クロム(Cr₂O₃)0.042%、硫黄(S)0.017%、五酸化燐(P₂O₅)0.47%、銅(Cu)0.010%であった。

4 まとめ

白井二位屋遺跡の古代の可能性をもつ40号住居廃絶後の窠み及び4号住居出土の製鉄関連遺跡(鉄滓、鉄塊系遺物、鉄器半製品、羽口先端溶融物)を調査した。

(1) 出土鉄滓の主体は精錬鍛冶滓である。40号住居廃絶後窠み遺構の周辺に荒鉄を原料とする成分調整を目的とした大鍛冶的作業の鍛冶炉の存在が推定される。

(2) 精錬鍛冶に供された荒鉄(鉄塊系遺物)は地元に賦存する砂鉄使用の可能性をもつ。吾妻川砂鉄系が鉄塊の一つに挙げられる。なお、炉内滓残存鉄塊を割り取った残滓製錬滓も確認できた。

(3) 遺存した鉄塊系遺物は、亜共析鋼の極低炭素鋼(C:0.01%前後)から共析鋼クラス(C:0.7%前後)が認められた。後者の鉄塊表皮には鍛造剥片が付着して、周辺での鍛打作業も連想できた。

(4) 鉄器半製品は過共析鋼(C:1.1%)から過共晶組成の白鑄鉄(C:4.23%)までが検出された。廃鉄器再生から侵炭(なめかけ法)、下げろ各種熱処理技術の存在が想定された。また、これら半製品の鉄中非金属系在り物や鉄塊系遺物の表皮スラグからウルボスピネルが検出されて在地製作品の可能性が考えられた。

(5) 40号住居出土の羽口は、先端部の溶融物の二酸化チタン(TiO₂)が2.42%と高めで精錬鍛冶用と推定された。

(6) 4号住居埋土出土鉄滓は、鍛錬鍛冶滓に分類されて、当遺跡内で精錬鍛冶から鉄器製作(折り返し鍛錬の高温作業)までの鍛冶一貫作業の実施が想定された。

(7) 周辺遺跡の子籠製鉄採取製錬滓は、二酸化チタン(TiO₂)が11.35%と高めで、鯉沢バイパス採取砂鉄(TiO₂:7.69%)との関係が強そうである。操業年代は、難還元性砂鉄の使用からみて白井二位屋遺跡より新しくなりそうである。

(8) 過去の古代製鉄研究データの蓄積から、製錬・精錬鍛冶・鍛錬鍛冶と工程を進めるに従って鉄滓中の砂鉄特有元素のチタン(Ti)とバナジウム(V)の含有量は減少傾向を示すことが判っている。これに加えて、鍛造剥片、鉄塊系遺物も同様である。これらの事を基にしてTi/Total FeとV/Total Feの相関図を採って遺跡ごとの傾向をみると、或る齟りがある事が判明した。製鉄関連遺物は45°の直線上に分布し、作業工程に従って左下がり傾向を示す。ただし砂鉄は製鉄滓の約1/2以下であって製錬によって濃縮される。Table. 2のデータを基にして作図したのがFig. 1のTi・V相関図である。

白井二位屋遺跡出土遺物に対して子籠製鉄採取製錬滓と鯉沢バイパス砂鉄で結んだ点線の45°直線は、僅かにずれる。更に金井遺跡出土の製錬滓と前庭部出土砂鉄は平行移動して離れて分布する。同じく五日牛遺跡のガラス質の傾向も45°直線の傾向で認められた。

製鉄の操業の違いによって45°の振れが僅かずつ異なる事が4遺跡によって顕気ながら認められる。一方、

第4章 調査のまとめと理科学分析

鉄製品の調査において上記4遺跡に製造履歴が由来するものが存在すれば、Fig. 1の45°直線左下の楕円網目内に分布する可能性があるものと考えられる。これらの鉄器調査を含めてTi・V相関図は今後に残された研究課題となるであろう。

注

① 日刊工業新聞社「焼結組織写真および識別法」1968

符号	硬度測定対象物	硬度実測値	文献硬度値※1
	Fayalite (2FeO·SiO ₂) ※2	560, 588	600~700Hv
	鍛 鉄 鋼 ※2	513, 506	530~600Hv
	マルテンサイト ※2	641	633~653Hv
	Wustite (FeO) ※3	481, 471	450~500Hv
	Magnetite (Fe ₃ O ₄) ※4	616, 623	500~600Hv
	白 鉄 鉄 ※5	563, 506	458~613Hv
	亜共析鋼 (Ce : 0.4%) ※6	175	160~213Hv

※1 日刊工業新聞社「焼結組織写真および識別法」1968他

※2 滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物 7 C末~8 C初

※3 兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓 4 C後半

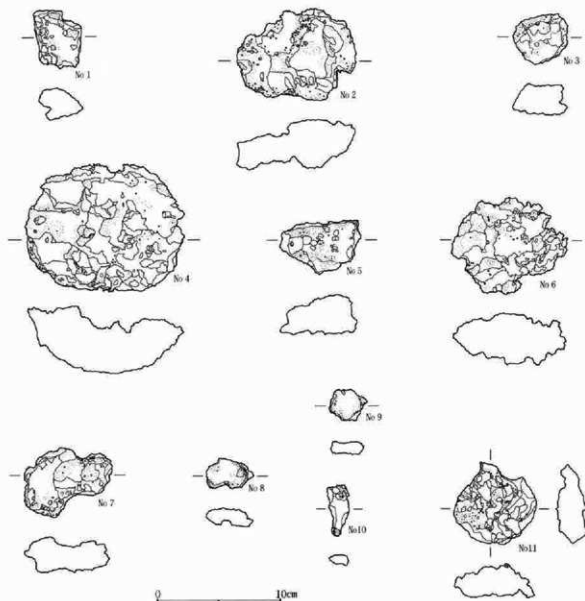
※4 新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製鉄滓 Uhwosphei 平安時代

※5 大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鍛造鉄滓 古墳時代前期

※6 埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鋼 5 C中頃

- ②-(イ) 櫻橋「松丸製鉄遺跡出土鉄滓の金属学的調査」[城井谷] I (築城町文化財調査報告書第2集) 福岡県築城町教育委員会 1992
- (ロ) 櫻橋「田東半島における古代・中世の鉄生産」[浜崎寺山遺跡] (大分県国東町文化財調査報告書第10集) 国東町教育委員会 1993
- (ハ) 櫻橋「矢部奥田遺跡・矢部古墳群A・飯越遺跡出土鉄滓の金属学的調査」[山陽自動車道建設に伴う発掘調査] 6 (岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書82) 岡山県古代古跡文化財センター編集、岡山県教育委員会 1993. 3
- (ニ) 櫻橋「金山遺跡出土の鍛冶関連遺物の金属学的調査」[金山遺跡] (栃木県埋蔵文化財調査報告書第135集) 栃木県文化振興事業団 1993. 3

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査



供試材実測図

Table 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目			
					大きさ(mm)	重さ(g)	顕微鏡組織	ピカース断面硬度	CMA	化学組成
No1	子 籠	鉄 滓	表面採取	古 代	40×45×25	48	○	○	○	○
No2	白井二位屋	*	40号住居南端後の窪み	*	70×96×45	280	○	○	-	○
No3	*	*	4号住居埋土	*	35×42×26	71	○	○	-	○
No4	*	*	40号住居南端後の窪み	*	96×123×40	790	○	-	-	○
No5	*	*	*	*	22×63×32	108	○	○	-	○
No6	*	*	*	*	75×90×44	230	○	-	-	○
No7	*	鉄塊系遺物	*	*	42×75×27	130	○	○	○	○
No8	*	*	*	*	23×37×14	23	○	○	○	-
No9	*	鉄器半成品	*	*	25×31×11	17	○	○	-	-
No10	*	*	*	*	17×38×12	14	○	○	○	○
No11	熊沢バイパス	砂 鉄	発掘区域内	F/P中			○	-	-	-
No12	白井二位屋	羽口先端溶融物	40号住居南端後の窪み	古 代	65×65×25	71	○	-	○	○

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

COMMENT 1 (7)5-1
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT I: 5.010E-08 (A)
 STAGE POS.: I X 40000 Y 40000 Z 11000

20-NOV-92

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOD)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOD)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOD)
Y -1	6.45	174	*****	TI-4	2.75	677	*****	BI-1	1.14	45	*****
RE-4	6.73	297	*****	3A-1	2.78	76	*****	PB-1	1.18	60	*****
SR-1	6.86	147	*****	CP-1	2.89	79	*****	TL-1	1.21	49	*****
W -4	6.70	160	*****	SC-4	3.13	82	*****	MS-1	1.24	55	*****
*SI-4	7.13	4356	*****	I -1	3.15	69	*****	AL-1	1.28	67	*****
TA-4	7.25	130	*****	TE-1	3.29	63	*****	PT-1	1.31	67	*****
RP-1	7.32	115	*****	*CA-3	3.34	1015	*****	SD-1	1.35	62	*****
OF-4	7.54	90	*****	SB-1	3.44	64	*****	UN-1	1.39	58	*****
LJ-4	7.84	70	*****	SM-1	3.60	44	*****	ZK-4	1.44	59	*****
YB-4	8.15	72	*****	*K -4	3.74	214	*****	CU-4	1.54	62	*****
*AL-4	8.24	938	*****	TW-1	3.77	41	*****	WI-4	1.64	37	*****
SR-1	8.27	294	*****	U -4	3.91	33	*****	TR-1	1.72	32	*****
ER-4	8.82	47	*****	CD-1	3.94	34	*****	CO-4	1.79	34	*****
SE-1	8.99	44	*****	7W-4	4.14	23	*****	*PFZ-4	1.94	5671	*****
SD-4	9.20	37	*****	AD-1	4.15	24	*****	SD-1	2.05	24	*****
OV-4	9.59	34	*****	FD-1	4.37	20	*****	*NN-4	2.10	41	*****
NI-1	9.67	25	*****	RP-1	4.60	17	*****	EU-1	2.12	18	*****
*RO-4	9.89	709	*****	CL-4	4.73	13	*****	SI-1	2.20	13	*****
TP-4	10.00	45	*****	SU-1	4.85	13	*****	CR-4	2.20	11	*****
SE-1	10.44	24	*****	S -4	5.37	13	*****	NS-1	2.37	7	*****
SA-1	11.29	19	*****	MO-1	5.41	16	*****	PC-1	2.46	7	*****
*NA-4	11.91	38	*****	ND-1	5.72	8	*****	*V -4	2.50	23	*****
SR	14.72	9	*****	ZR-1	6.07	4	*****	CE-1	2.50	9	*****
F -4	18.32	3	*****	*F -4	6.16	10	*****	LA-1	2.67	5	*****

RESULTS:
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 NA MG AL SI K CA TI NI FE ← 検出元素
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 P V ZR

Photo. 9のSE (2次電子像) に示す表面スラグの白色粒状のウスタイト (Wustite) と、その粒内析出物、淡灰色粒状結晶のファイヤライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂)、暗灰色ガラス質スラグからの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。炭 (Fe) 5.671、硅素 (Si) 4.358、カルシウム (Ca) 1.015、アルミ (Al) 938、マグネシウム (Mg) 709、チタン (Ti) 699、カリウム (K) 216、マンガン (Mn) 41、ナトリウム (Na) 38となる。これに微量量のバナジウム (V) 23、錳 (P) 10、が加わる。チタン (Ti)、バナジウム (V) の検出から該品の検出原料が鉄鋼と想定される。

Table. 3 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物表皮スラグ (No.7 その1) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

COMMENT 1 (7)5-5
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT I: 5.000E-08 (A)
 STAGE POS.: I X 40000 Y 40000 Z 11000

20-NOV-92

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOD)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOD)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOD)
Y -1	6.45	173	*****	*TI-4	2.75	1010	*****	BI-1	1.14	73	*****
RE-4	6.73	283	*****	3A-1	2.78	107	*****	PB-1	1.18	60	*****
SR-1	6.86	159	*****	CP-1	2.89	78	*****	TL-1	1.21	60	*****
W -4	6.70	159	*****	SC-4	3.03	81	*****	MS-1	1.24	45	*****
*SI-4	7.13	5637	*****	I -1	3.15	69	*****	AL-1	1.28	63	*****
TA-4	7.25	138	*****	TE-1	3.29	66	*****	PT-1	1.31	59	*****
RP-1	7.32	106	*****	*CA-3	3.34	936	*****	SD-1	1.35	57	*****
OF-4	7.54	93	*****	SB-1	3.44	63	*****	UN-1	1.39	56	*****
LJ-4	7.84	77	*****	SM-1	3.60	40	*****	ZK-4	1.44	52	*****
YB-4	8.15	72	*****	*K -4	3.74	209	*****	CU-4	1.54	65	*****
*AL-4	8.24	1219	*****	TW-1	3.77	41	*****	WI-4	1.64	35	*****
SR-1	8.27	340	*****	U -4	3.91	34	*****	TR-1	1.72	33	*****
ER-4	8.82	45	*****	7W-4	4.14	25	*****	CO-4	1.79	37	*****
SE-1	8.99	35	*****	AD-1	4.15	24	*****	*PFZ-4	1.94	5751	*****
SD-4	9.20	39	*****	FD-1	4.37	23	*****	SD-1	2.05	22	*****
NI-1	9.67	35	*****	RP-1	4.60	19	*****	*NN-4	2.10	23	*****
*RO-4	9.89	409	*****	CL-4	4.73	13	*****	EU-1	2.12	17	*****
TP-4	10.00	32	*****	S -4	5.37	15	*****	CR-4	2.20	20	*****
SE-1	10.44	20	*****	MO-1	5.41	15	*****	NS-1	2.37	13	*****
SA-1	11.29	16	*****	ND-1	5.72	5	*****	PR-1	2.46	7	*****
*NA-4	11.91	29	*****	ZR-1	6.07	5	*****	*V -4	2.50	34	*****
SR	14.72	7	*****	*F -4	6.16	7	*****	CE-1	2.50	4	*****
F -4	18.32	4	*****					LA-1	2.67	8	*****

RESULTS:
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 NA MG AL SI K CA TI V FE ← 検出元素
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 CR NI ZR NO

Photo. 10のSE (2次電子像) に示す粒内スラグの淡灰色多角形のウルゴスピネル (Urosopinel : 2FeO・TiO₂)、白色粒状結晶のウスタイト (Wustite : FeO) と、その粒内析出物、淡灰色粒状結晶のファイヤライト (Fayalite : 2FeO・SiO₂)、基底の暗灰色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。炭 (Fe) 5.751、硅素 (Si) 3.037、アルミ (Al) 1.319、チタン (Ti) 1.010、カルシウム (Ca) 938、マグネシウム (Mg) 409、カリウム (K) 208、バナジウム (V) 34、マンガン (Mn) 33、クロム (Cr) 20、モリブデン (Mo) 15、ジルコニウム (Zr) 2となる。検出元素のチタン (Ti)、バナジウム (V)、ジルコニウム (Zr) の3元素が明確に検出されて検出原料が鉄鋼と想定づけられる。

Table. 4 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物捲込みスラグ (No.7 その2) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

第4章 調査のまとめと理科学分析

COMMENT : (7)13-3
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 4.702E-08 (A)
STAGE POS. : 40000 Y 40000 Z 11000

28-NOV-92

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	158	*****	TI -h	2.75	116	*****	BI -1	1.14	60	*****
RE -h	6.73	105	*****	BA -1	2.78	86	*****	PR -1	1.18	53	*****
SR -1	6.86	130	*****	CB -1	2.89	79	*****	TL -1	1.21	28	*****
W -h	6.98	137	*****	SC -h	3.03	77	*****	NO -1	1.24	52	*****
SI -h	7.13	3077	*****	I -1	3.15	71	*****	AO -1	1.28	42	*****
Ta -h	7.25	125	*****	TE -1	3.29	49	*****	PT -1	1.31	28	*****
RB -1	7.32	101	*****	CA -h	3.36	481	*****	IR -1	1.35	47	*****
HF -h	7.54	92	*****	SB -1	3.44	40	*****	OS -1	1.39	53	*****
LU -h	7.84	67	*****	SM -1	3.60	40	*****	Zn -h	1.44	49	*****
Yb -h	8.17	51	*****	K -h	3.74	45	*****	CU -h	1.54	50	*****
AL -h	8.24	584	*****	IR -1	3.77	32	*****	NI -h	1.64	24	*****
BR -1	8.37	182	*****	U -h	3.91	20	*****	TR -1	1.73	34	*****
ER -h	8.82	41	*****	CD -1	3.96	29	*****	CO -h	1.79	36	*****
SE -1	8.99	38	*****	TR -h	4.14	26	*****	PF -h	1.94	437	*****
HO -h	9.20	37	*****	AG -1	4.15	23	*****	GD -1	2.05	21	*****
DT -h	9.29	33	*****	PD -1	4.27	20	*****	MM -h	2.10	23	*****
AS -1	9.57	40	*****	SM -1	4.40	18	*****	EU -1	2.12	15	*****
MG -h	9.89	441	*****	CL -h	4.73	18	*****	SM -1	2.20	14	*****
TS -h	10.00	30	*****	KU -1	4.85	17	*****	CR -h	2.29	14	*****
EE -1	10.44	17	*****	S -h	5.37	11	*****	MO -1	2.37	9	*****
DA -1	11.29	20	*****	MO -1	5.41	6	*****	PR -1	2.44	8	*****
HA -h	11.91	47	*****	MB -1	5.72	5	*****	V -h	2.50	8	*****
SI	14.72	4	*****	IR -1	6.87	5	*****	CE -1	2.54	4	*****
F -h	18.32	4	*****	F -h	6.16	9	*****	LA -1	2.67	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

NA MG AL SI K CA FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

TI CU

Photo.11のSE (2次電子像) に示す酸化鉄のゲーサイト (Goethite: α-FeO·OH) 中に取り囲まれた鍛造測片の分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。鉄 (Fe) 5,388, 硅素 (Si) 3,077, アルミ (Al) 566, カルシウム (Ca) 481, マグネシウム (Mg) 441, カリウム (K) 65, ナトリウム (Na) 47 とする。これに無数量のチタン (Ti) と銅 (Cu) が加わる。主相は鍛造測片のFeOとゲーサイトのα-FeO・OHであるので鉄 (Fe) の強度が高いのは当然である。ガラス質成分の硅素 (Si)、アルミ (Al) は土壌の成分で汚染物質であろう。銅ではあるがチタン (Ti) の検出は鉄鉱石の表れであろう。

Table. 5 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物付着鍛造測片(No.7 その3)のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果

COMMENT : (8)14-3
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.910E-08 (A)
STAGE POS. : 40000 Y 40000 Z 11000

28-NOV-92

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	141	*****	TI -h	2.75	1322	*****	BI -1	1.14	59	*****
RE -h	6.73	277	*****	BA -1	2.78	94	*****	PR -1	1.18	63	*****
SR -1	6.86	144	*****	CB -1	2.89	66	*****	TL -1	1.21	26	*****
W -h	6.98	152	*****	SC -h	3.03	74	*****	NO -1	1.24	62	*****
SI -h	7.13	4942	*****	I -1	3.15	63	*****	AO -1	1.28	50	*****
Ta -h	7.25	140	*****	TE -1	3.29	58	*****	PT -1	1.31	26	*****
RB -1	7.32	112	*****	CA -h	3.36	924	*****	IR -1	1.35	32	*****
HF -h	7.54	97	*****	SB -1	3.44	45	*****	OS -1	1.39	54	*****
LU -h	7.84	74	*****	SM -1	3.60	47	*****	Zn -h	1.44	40	*****
Yb -h	8.17	60	*****	K -h	3.74	40	*****	CU -h	1.54	42	*****
AL -h	8.24	2155	*****	IR -1	3.77	30	*****	NI -h	1.64	24	*****
BR -1	8.37	573	*****	TR -h	4.14	28	*****	TR -1	1.73	28	*****
ER -h	8.82	36	*****	CD -1	3.94	29	*****	CO -h	1.79	35	*****
SE -1	8.99	40	*****	TR -h	4.14	28	*****	PF -h	1.94	407	*****
HO -h	9.20	32	*****	AG -1	4.15	23	*****	GD -1	2.05	20	*****
DT -h	9.29	34	*****	PD -1	4.27	20	*****	MM -h	2.10	48	*****
AS -1	9.57	40	*****	SM -1	4.40	18	*****	EU -1	2.12	15	*****
MG -h	9.89	581	*****	CL -h	4.73	31	*****	SM -1	2.20	13	*****
TS -h	10.00	45	*****	KU -1	4.85	14	*****	CR -h	2.29	11	*****
EE -1	10.44	22	*****	S -h	5.37	35	*****	MO -1	2.37	7	*****
DA -1	11.29	19	*****	MO -1	5.41	11	*****	PR -1	2.44	8	*****
HA -h	11.91	31	*****	MB -1	5.72	9	*****	V -h	2.50	16	*****
SI	14.72	5	*****	IR -1	6.87	5	*****	CE -1	2.54	4	*****
F -h	18.32	4	*****	F -h	6.16	9	*****	LA -1	2.67	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

MG AL SI S CL K CA TI OH FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

NA NO

Photo.12のSE (2次電子像) に示す捲込みスラグのウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂) や緑黄色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。硅素 (Si) 4,942, 鉄 (Fe) 4,437, アルミ (Al) 2,156, チタン (Ti) 1,322, カルシウム (Ca), マグネシウム (Mg) 581, カリウム (K) 170, マンガン (Mn) 48, 硅素 (S) 35, 塩素 (Cl) 31 とする。チタン (Ti) の検出から砂鉄系鉄鉱石に位置づけられる。

Table. 6 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物(No.8)捲込みスラグのコンピュータプログラムによる高速定性分析結果

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

COMMENT 1 11010-3
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT (nA): 0.01E-08 (A)
STAGE POS. 1 X 40000 Y 40000 Z 11000

28-NOV-92

CH(1) TAP			CH(2) PET			CH(3) LIF		
EL	WL	COUNT INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	247	TI -1	2.75	670	BI -1	1.14	87
SE -1	6.73	273	SI -1	2.78	124	PI -1	1.10	87
DI -1	6.86	186	CS -1	2.89	121	TL -1	1.21	100
U -1	6.98	179	SC -1	3.03	103	HO -1	1.24	83
SI -1	7.13	1246	I -1	3.15	99	AD -1	1.26	84
TA -1	7.25	135	TE -1	3.29	85	PT -1	1.31	90
RI -1	7.32	129	CA -1	3.36	590	IR -1	1.35	86
RF -1	7.54	61	SI -1	3.44	61	OS -1	1.39	85
LU -1	7.84	70	SM -1	3.60	56	ZK -1	1.44	73
YF -1	8.15	43	K -1	3.74	77	CO -1	1.54	66
AL -1	8.34	682	IN -1	3.77	44	NI -1	1.64	52
SR -1	8.37	177	U -1	3.91	50	TH -1	1.73	47
ED -1	8.62	49	CD -1	3.94	35	CO -1	1.79	43
SE -1	8.99	49	TM -1	4.14	29	FE -1	1.94	10670
HO -1	9.20	40	AD -1	4.15	35	SD -1	2.05	28
DY -1	9.59	32	DI -1	4.37	23	HO -1	2.10	23
AS -1	9.67	39	SM -1	4.60	28	EU -1	2.12	24
HO -1	9.89	314	CL -1	4.73	23	SM -1	2.20	22
TR -1	10.00	41	SI -1	4.85	15	CR -1	2.29	18
SE -1	10.44	27	S -1	5.37	14	HO -1	2.37	14
DA -1	11.29	17	HO -1	5.41	14	PF -1	2.46	15
NA -1	11.91	23	SB -1	5.72	10	W -1	2.50	11
SS	14.72	5	ZR -1	6.07	8	CE -1	2.56	10
F -1	18.32	16	P -1	6.16	10	LA -1	2.67	7

RESULTS

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NO AL SI K CA TI FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

Photo.13のSE (2次電子像) に示した鉄中非金属介在物の分析結果である。非金属介在物は暗黒色ガラススラグに取り囲まれて淡茶褐色状結晶のスピネル系化合物内炭素とシリコン化合物を分析対象とした。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。鉄 (Fe) 10,670, 硅素 (Si) 1,340, アルミ (Al) 682, ナタン (Ti) 678, カルシウム (Ca) 598, マグネシウム (Mg) 316, コリウム (K) 77となる。ナタン (Ti) の強い検出から炭素原料の結晶原料が確認される。

Table. 7 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄器半製品 (No.10) 鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

COMMENT 1 12110-7
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT (nA): 0.01E-08 (A)
STAGE POS. 1 X 40000 Y 40000 Z 11000

28-NOV-92

CH(1) TAP			CH(2) PET			CH(3) LIF		
EL	WL	COUNT INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	126	TI -1	2.75	1219	BI -1	1.14	40
SE -1	6.73	275	SI -1	2.78	81	PI -1	1.10	49
DI -1	6.86	154	CS -1	2.89	73	TL -1	1.21	35
U -1	6.98	147	SC -1	3.03	54	HO -1	1.24	24
SI -1	7.13	9991	I -1	3.15	55	AD -1	1.26	49
TA -1	7.25	143	TE -1	3.29	46	PT -1	1.31	43
RI -1	7.32	114	CA -1	3.36	737	IR -1	1.35	49
RF -1	7.54	61	SI -1	3.44	54	OS -1	1.39	50
LU -1	7.84	70	SM -1	3.60	30	ZK -1	1.44	40
YF -1	8.15	40	K -1	3.74	214	CO -1	1.54	34
AL -1	8.34	3166	IN -1	3.77	29	NI -1	1.64	31
SR -1	8.37	871	U -1	3.91	30	TH -1	1.73	23
ED -1	8.62	43	CD -1	3.94	30	CO -1	1.79	21
SE -1	8.99	37	TM -1	4.14	25	FE -1	1.94	2614
HO -1	9.20	40	AD -1	4.15	21	SD -1	2.05	16
DY -1	9.59	29	DI -1	4.37	11	HO -1	2.10	19
AS -1	9.67	34	SM -1	4.60	14	EU -1	2.12	15
HO -1	9.89	372	CL -1	4.73	16	SM -1	2.20	14
TR -1	10.00	33	SI -1	4.85	9	CR -1	2.29	11
SE -1	10.44	17	S -1	5.37	7	HO -1	2.37	10
DA -1	11.29	17	HO -1	5.41	9	PF -1	2.46	8
NA -1	11.91	12	SB -1	5.72	6	W -1	2.50	12
SS	14.72	5	ZR -1	6.07	4	CE -1	2.56	7
F -1	18.32	4	P -1	6.16	6	LA -1	2.67	5

RESULTS

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA NO AL SI K CA TI FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
P CD RE OS BI

Photo.14のSE (2次電子像) に示した焼熱鉄砂と暗黒色ガラススラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。硅素 (Si) 9,991, アルミ (Al) 3,660, 鉄 (Fe) 2,614, ナタン (Ti) 1,219, カルシウム (Ca) 737, マグネシウム (Mg) 372, コリウム (K) 214, ナトリウム (Na) 129となる。分析対象物に見合った検出元素であった。

Table. 8 白井二位屋遺跡40号住居出土羽口先端溶融物中焼熱鉄砂 (No.12) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

第4章 調査のまとめと理科学分析

POS. NO. 8

COMMENT I 1210-8
ACCEL. VOLT. (KV) 15
PROBE CURRENT I 5.000E-09 (A)
STAGE POS. I X 40000 Y 40000 Z 11000

20-NDU-Y2

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	110	*****	*Ti -k	2.75	310	*****	Si -1	1.14	38	*****
RE -k	6.73	249	*****	Sn -1	2.79	73	*****	Fe -1	1.18	40	*****
DR -1	6.86	161	*****	Cr -1	2.87	46	*****	Tl -1	1.21	45	*****
W -k	6.98	164	*****	Se -k	3.03	37	*****	Mo -1	1.24	43	*****
⊙ Si -k	7.13	12161	*****	I -1	3.15	55	*****	Ag -1	1.28	47	*****
Ta -k	7.25	178	*****	Te -1	3.29	38	*****	PT -1	1.31	45	*****
RP -1	7.32	108	*****	*Ca -k	3.36	848	*****	Ir -1	1.35	40	*****
HF -k	7.54	75	*****	Sb -1	3.44	53	*****	Os -1	1.39	42	*****
LU -k	7.84	72	*****	Sm -1	3.60	35	*****	Zn -k	1.44	40	*****
TP -k	8.15	71	*****	*K -k	3.74	207	*****	Cu -k	1.54	33	*****
⊙ Al -k	8.34	4124	*****	Te -1	3.77	28	*****	Hf -k	1.66	31	*****
RP -1	8.37	948	*****	W -k	3.91	22	*****	Tm -1	1.73	21	*****
ER -k	8.82	35	*****	Cr -1	3.96	24	*****	Co -k	1.79	28	*****
SE -1	8.99	35	*****	Th -k	4.14	21	*****	*Fe -k	1.94	217	*****
HD -k	9.20	32	*****	As -1	4.15	16	*****	Os -1	2.05	16	*****
DT -k	9.59	34	*****	Pd -1	4.37	15	*****	*PM -k	2.10	32	*****
ND -1	9.67	31	*****	Rn -1	4.60	15	*****	U -1	2.12	11	*****
* HD -k	9.89	211	*****	Cl -k	4.73	11	*****	Sm -1	2.20	11	*****
TP -k	10.00	23	*****	Ru -1	4.85	11	*****	Cr -k	2.29	9	*****
SE -1	10.44	22	*****	S -k	5.37	6	*****	ND -1	2.37	6	*****
SD -1	11.29	12	*****	Mo -1	5.41	6	*****	Pr -1	2.46	7	*****
* MA -k	11.91	202	*****	NO -1	5.72	3	*****	V -k	2.50	9	*****
ER -k	14.72	3	*****	Zr -1	6.07	2	*****	CE -1	2.56	6	*****
F -k	18.32	3	*****	P -k	6.16	6	*****	La -1	2.67	3	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
Ba Nb Al Si K Ca Ti Mn Fe ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
S V CR

Photo. 15(9) SE (2次電子像) に示す暗黒色ガラス質スラグ中品出マグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) の分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に表示すると次の様になる。元素 (Si) 12, 161, アルミ (Al) 4, 121, 鉄 (Fe) 2, 191, カルシウム (Ca) 848, マグネシウム (Mg) 511, ナタン (Ti) 310, カリウム (K) 209, ナトリウム (Na) 202, マンガン (Mn) 32となる。鉱物組成に見合った検出元素であった。

Table. 9 白井二枚屋遺跡40号住居出土土羽口先端溶融物(No.12 その2)中マグネタイトのコンピュータプログラムによる高速定性分析結果

COMMENT I (11)-1
ACCEL. VOLT. (KV) 15
PROBE CURRENT I 6.772E-09 (A)
STAGE POS. I X 40000 Y 40000 Z 11000

20-NDU-Y2

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	126	*****	* Ti -k	2.75	288	*****	Si -1	1.14	58	*****
RE -k	6.73	291	*****	Sn -1	2.79	76	*****	Fe -1	1.18	57	*****
DR -1	6.86	166	*****	Cr -1	2.87	73	*****	Tl -1	1.21	49	*****
W -k	6.98	129	*****	Se -k	3.03	66	*****	Mo -1	1.24	48	*****
⊙ Si -k	7.13	5062	*****	I -1	3.15	59	*****	Ag -1	1.28	49	*****
Ta -k	7.25	144	*****	Te -1	3.29	51	*****	PT -1	1.31	55	*****
RP -1	7.32	105	*****	* Ca -k	3.36	1001	*****	Ir -1	1.35	58	*****
HF -k	7.54	101	*****	Sm -1	3.44	54	*****	Os -1	1.39	54	*****
LU -k	7.84	75	*****	SR -1	3.60	42	*****	Zn -k	1.44	54	*****
TP -k	8.15	59	*****	* K -k	3.74	167	*****	Cu -k	1.54	36	*****
⊙ Al -k	8.34	1741	*****	Te -1	3.77	36	*****	Hf -k	1.66	36	*****
RP -1	8.37	399	*****	U -k	3.91	33	*****	Tm -1	1.73	33	*****
IR -k	8.82	41	*****	Th -k	4.14	27	*****	Co -k	1.79	34	*****
ND -1	8.99	41	*****	As -1	4.15	24	*****	* Fe -k	1.94	373	*****
HD -k	9.20	37	*****	Ag -1	4.15	24	*****	Os -1	2.05	16	*****
DT -k	9.59	39	*****	Rn -1	4.37	17	*****	* PM -k	2.10	46	*****
ND -1	9.67	45	*****	Sm -1	4.60	19	*****	U -1	2.12	13	*****
⊙ NO -k	9.89	1362	*****	Cl -k	4.73	12	*****	DR -1	2.20	12	*****
TP -k	10.00	74	*****	Mo -1	4.85	20	*****	* CR -k	2.29	20	*****
SE -1	10.44	24	*****	* S -k	5.37	14	*****	ND -1	2.37	11	*****
SD -1	11.29	20	*****	NO -1	5.41	9	*****	Pr -1	2.46	8	*****
* MA -k	11.91	26	*****	HP -1	5.72	9	*****	* V -k	2.50	55	*****
ER -k	14.72	8	*****	Zr -1	6.07	3	*****	CE -1	2.56	9	*****
F -k	18.32	5	*****	P -k	6.16	6	*****	La -1	2.67	5	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
Ba Nb Al Si K Ca Ti Mn Fe ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
S V CR

Photo. 16(9) SE (2次電子像) に示したウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO・TiO₂)、ファイヤイト (Fayalite: 2FeO・SiO₂)、黒色の暗黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に表示すると次の様になる。元素 (Si) 5, 062, 鉄 (Fe) 3, 730, ナタン (Ti) 2, 888, アルミ (Al) 1, 741, マグネシウム (Mg) 1, 362, カルシウム (Ca) 1, 001, ナトリウム (Na) 202, マンガン (Mn) 66である。これに検出物のバナジウム (V) 55, クロム (Cr) 20, 硫黄 (S) 4が加わる。砂鉄質元素のナタン (Ti) とバナジウム (V) があって砂鉄派と判る。

Table. 10 土製鉄土表面採取鉄鱗(No.1)のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

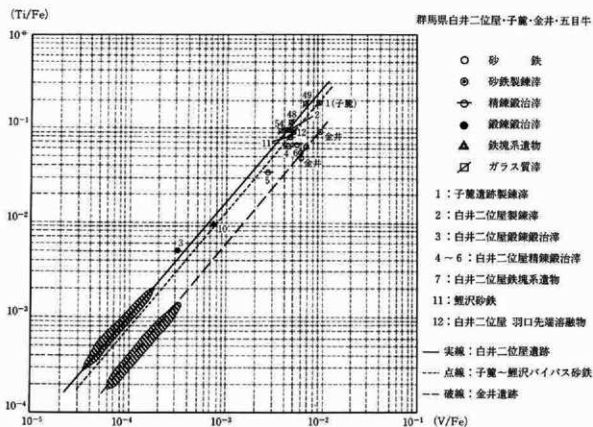


Fig-1 白井二位屋・子籠・金井・五日牛遺跡出土製鉄関連遺物の Ti と V の相関図

群馬県白井二位屋遺跡 五日牛南組遺跡 $Ti=0.5994TiO_2$

試料No	種別	データより			計 算			記号
		T-Fe	TiO ₂	V	Ti	Ti/T, Fe	V/T, Fe	
(白井二位屋遺跡)								
1	製錬滓	34.44	11.35	0.32	6.8031	0.19753	0.00929	⊙
2	⊖	52.19	8.34	0.23	4.9989	0.09578	0.00440	⊙
3	鍛錬鍛冶滓	61.59	0.53	0.02	0.3176	0.00515	0.00032	●
4	精錬鍛冶滓	46.97	4.92	0.21	2.9490	0.06278	0.00447	⊖
5	⊖	57.68	3.45	0.16	2.0679	0.03585	0.00277	⊖
6	⊖	49.20	5.58	0.26	3.3446	0.06798	0.00528	⊖
7	鉄塊系遺物	52.43	0.84	0.04	0.5034	0.00960	0.00076	▲
11	砂鉄	56.33	7.69	0.27	4.6093	0.08182	0.00479	○
12	羽口	16.41	2.42	0.08	1.4505	0.08839	0.00487	⊠
(五日牛南組遺跡)								
2149	ガラス質鉄滓	2.96	0.96	0.02	0.5754	0.19440	0.00675	⊠
2148	⊖	6.22	1.18	0.03	0.7072	0.11371	0.00482	⊠
2154	⊖	5.40	0.82	0.02	0.4915	0.09102	0.00370	⊠
					X0.599			
KANA	金井製錬滓	39.4	6.3	0.39	3.7737	0.096	0.00989	⊙
A	砂鉄、金井	56.48	4.0	0.34	2.396	0.042	0.0060	○
B	⊖ 吾妻川	51.66	5.3	0.35	3.1747	0.0615	0.0068	○
C	⊖ 中居川	54.73	4.8	0.33	2.8752	0.0525	0.0060	○

第4章 調査のまとめと理科学分析

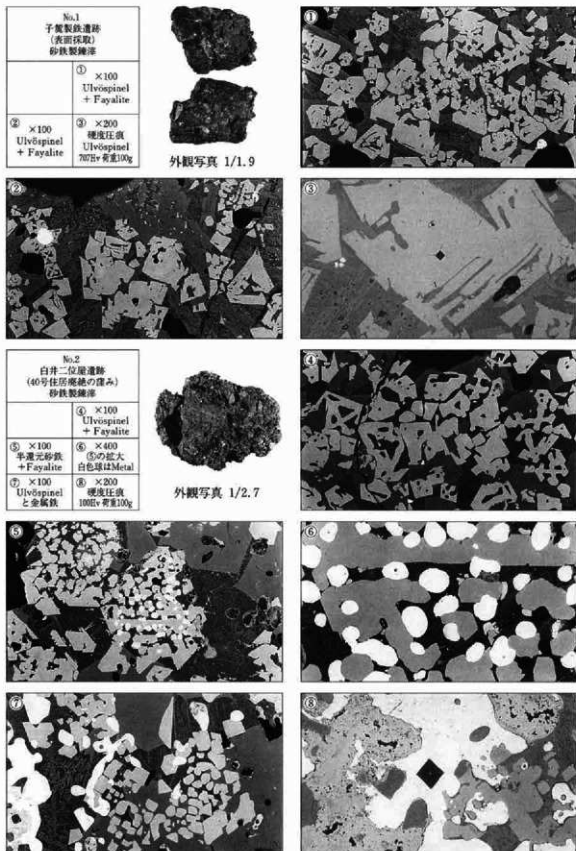


Photo.1 砂鉄製錬滓の顕微鏡組織

第2節 白井二位層遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

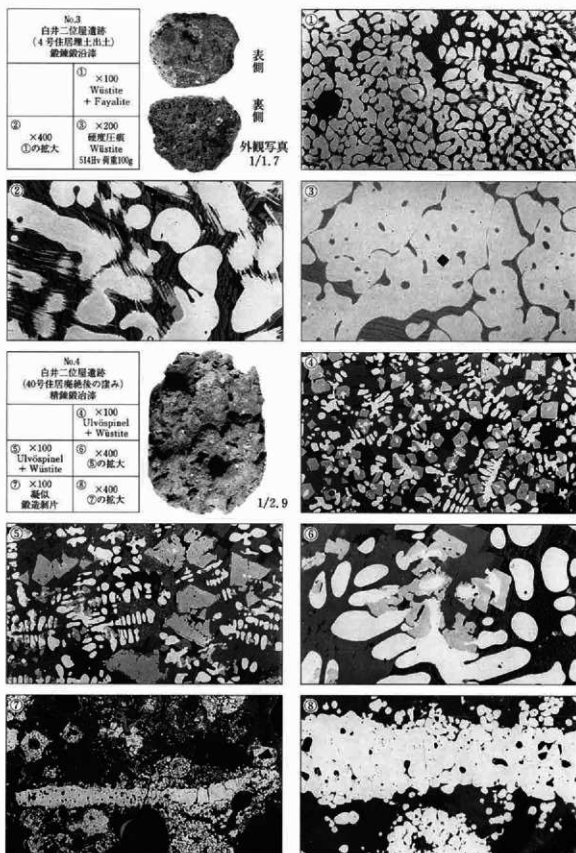


Photo.2 鉄滓の顕微鏡組織

第4章 調査のまとめと理科学分析

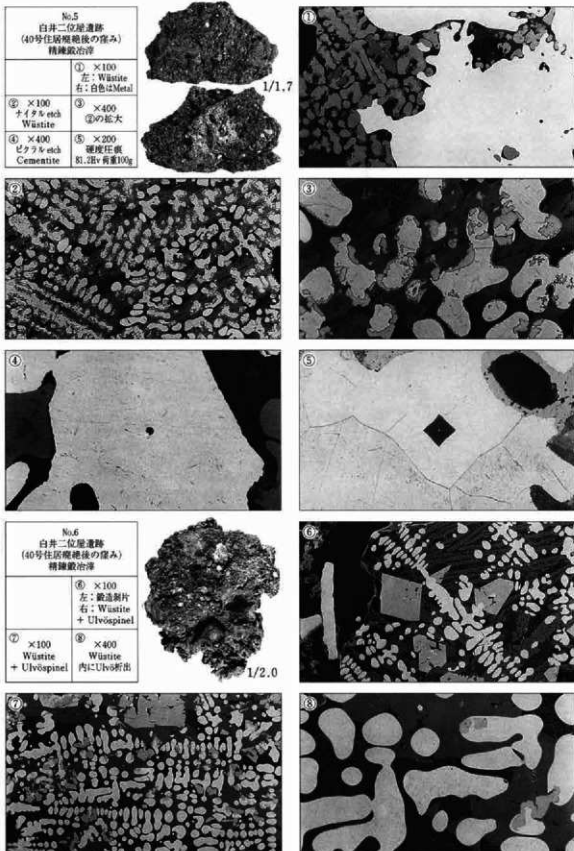


Photo.3 鉄滓の顕微鏡組織

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

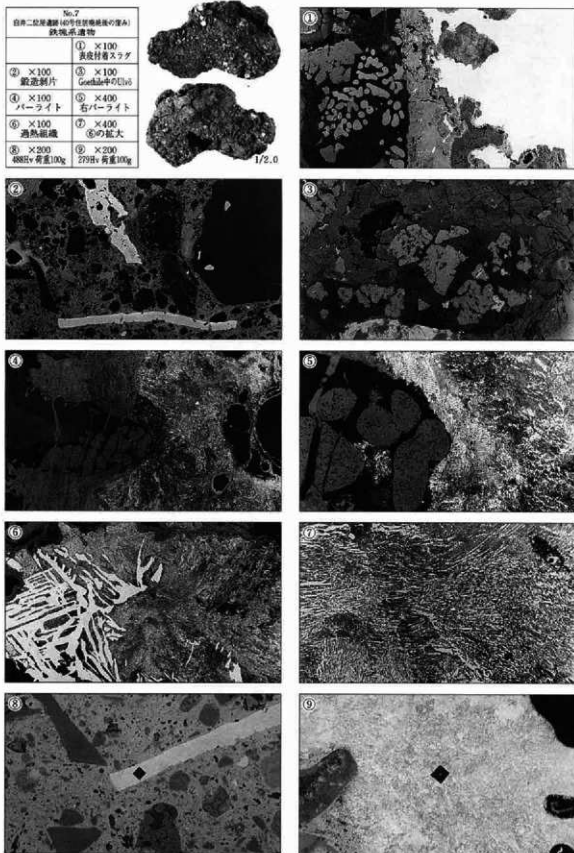


Photo.4 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

第4章 調査のまとめと理科学分析

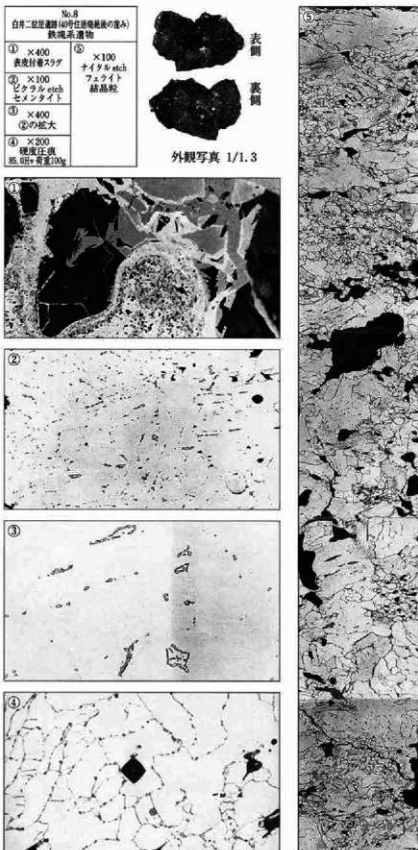


Photo.5 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

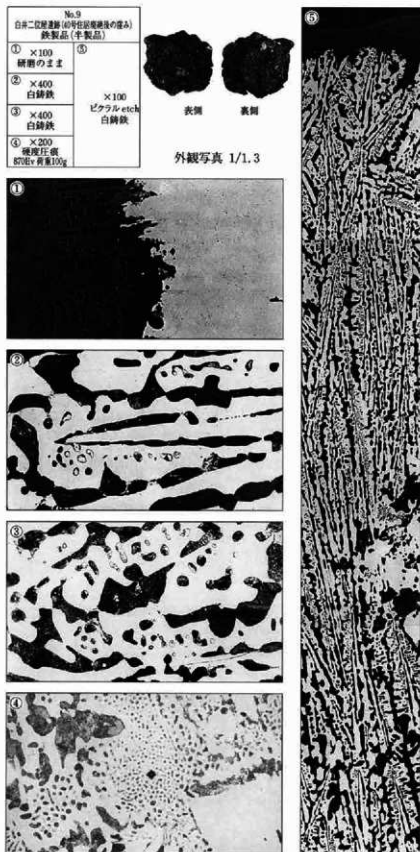
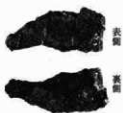


Photo.6 鉄器(半製品)No.9の顕微鏡組織

第4章 調査のまとめと理科学分析

No.10 白鉄二重塗層(40号仕切機絶縁体の塗み) 鉄製品(半製品)	
① ×400 非金属含有物	⑤
② ×400 セメントイト	×100 ナイタルetch 不完全 球状セメントイト
③ ×400 セメントイト	
④ ×200 縦横正置 233H+荷重100g	



外観写真 1/1.3

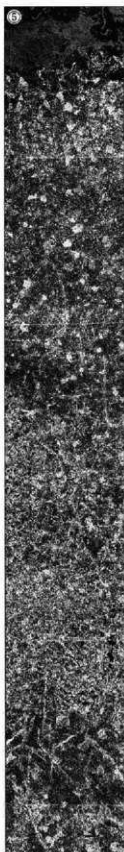
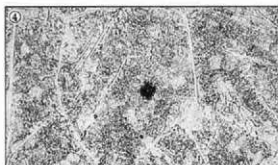
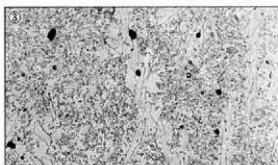
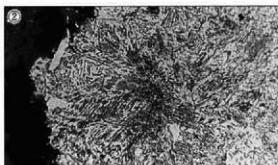


Photo.7 鉄器(半製品)の顕微鏡組織

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

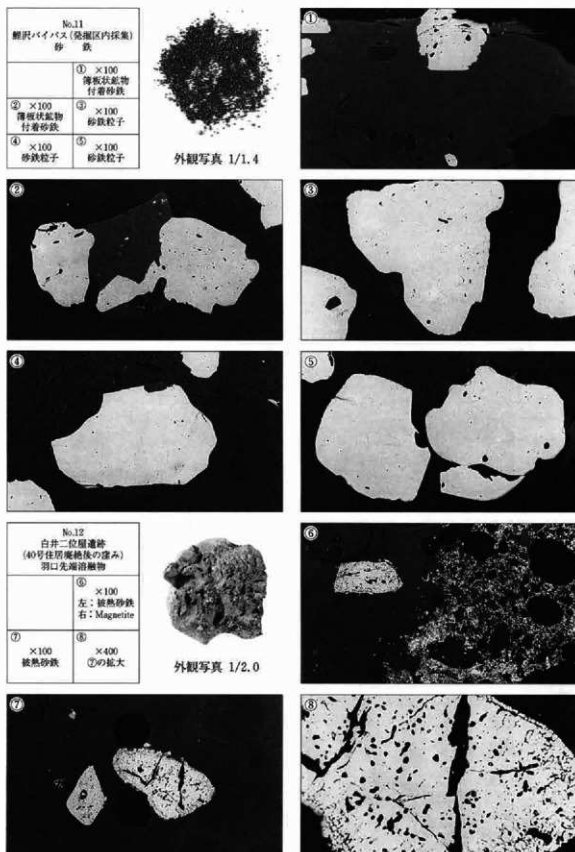


Photo.8 砂鉄粒子と羽口溶融物の顕微鏡組織

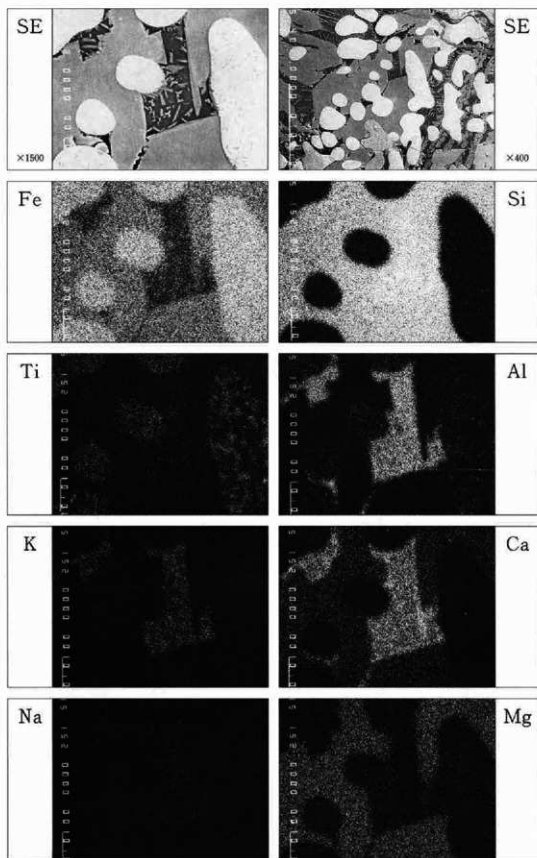


Photo.9 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物(No.7 その1)表皮スラグの特性X線像

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

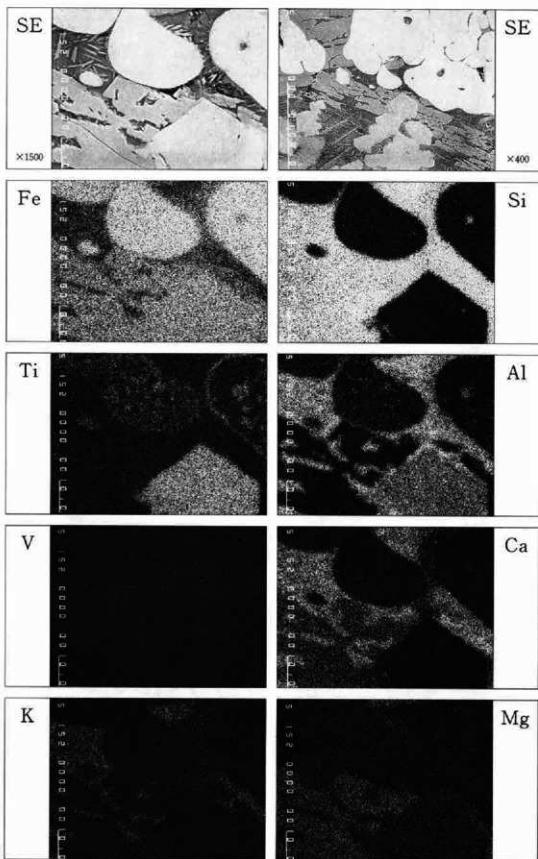


Photo.10 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物(No.7 その2)捲込みスラグの特性X線像

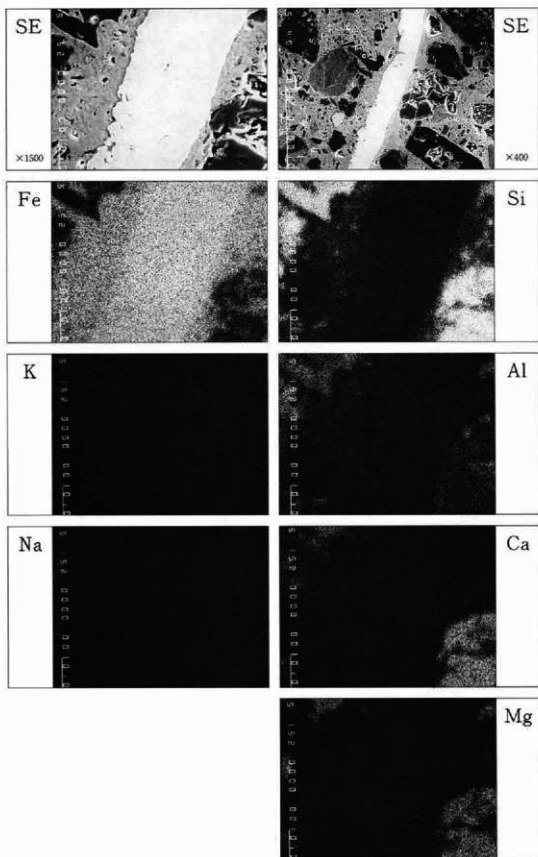


Photo.11 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物(No.7 その3)鍛造裂片の特性X線像

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

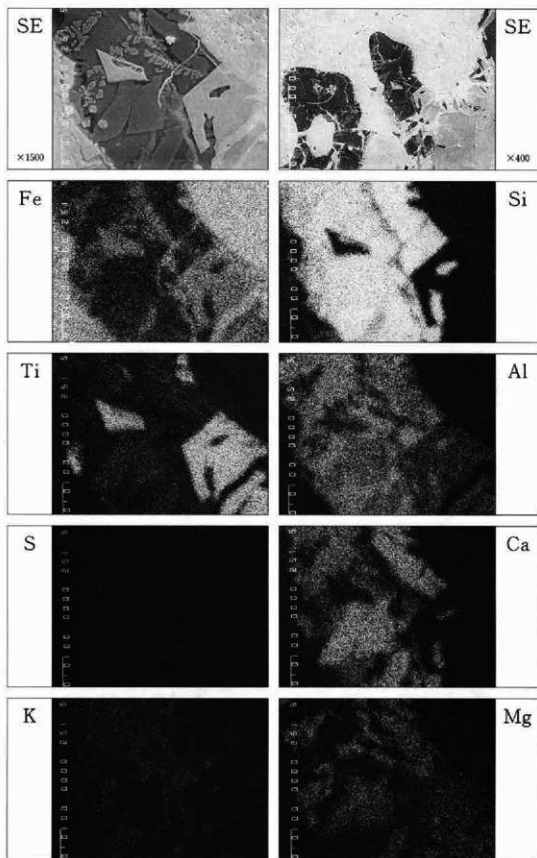
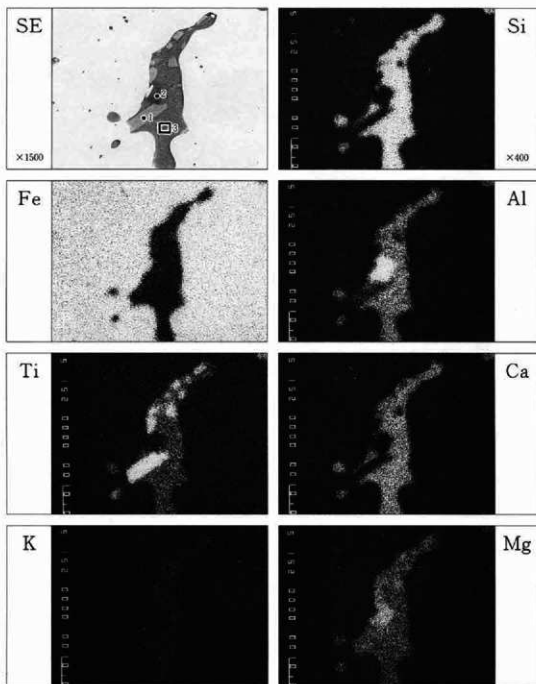


Photo.12. 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄塊系遺物(No.8)拖込みスラグの特性X線像

第4章 調査のまとめと理科学分析



	SiO2	CaO	FeO	F	AL2O3	K 2O	MnO	MgO	S	TiO2	Na2O	ZrO2	CR2O3	TOTAL
1	0.132	0.271	5.696	0.000	3.675	0.048	0.061	14.898	0.000	77.925	0.035	0.020	0.087	102.848
2	0.086	0.031	6.540	0.000	45.698	0.015	0.000	28.051	0.000	2.095	0.000	0.023	0.073	102.613
3	39.049	19.561	4.793	0.000	15.479	1.381	0.053	9.433	0.000	11.593	0.683	0.000	0.008	102.035

Photo.13 白井二位屋遺跡40号住居出土鉄器半製品(No.10)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

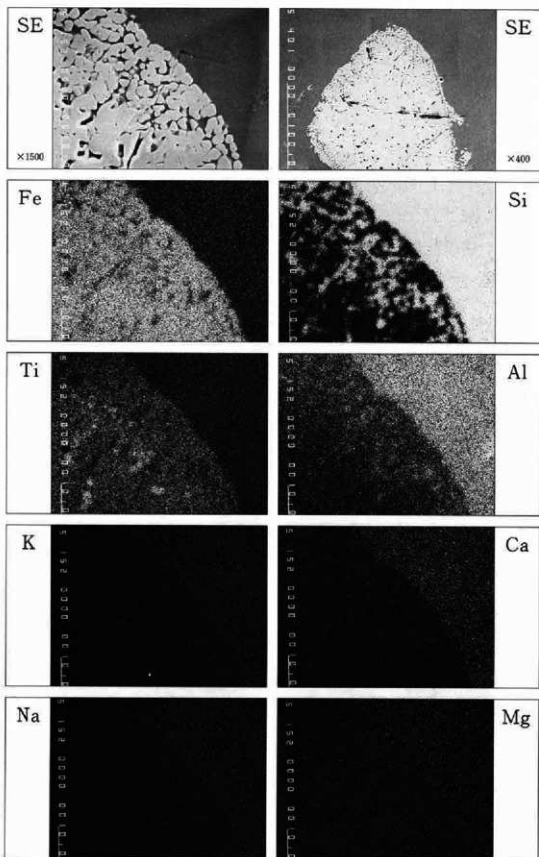


Photo.14 白井二位屋遺跡40号住居出土土羽口先端溶融物(No.12)中被熱砂鉄の特性X線像

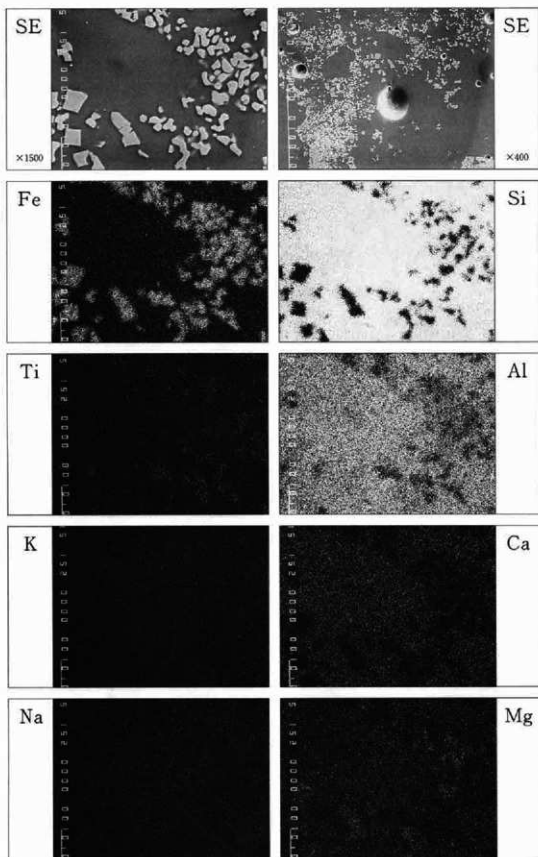


Photo.15 白井二位屋遺跡40号住居出土羽口先端溶融物中マグネタイトの特性X線像

第2節 白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査

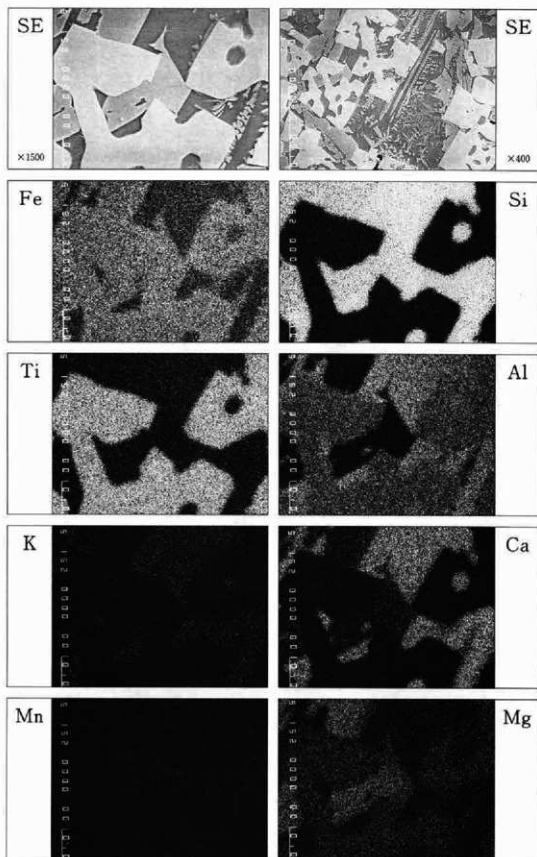


Photo.16 子尾製鉄址表面採取製煉滓(No.1)の特性X線像

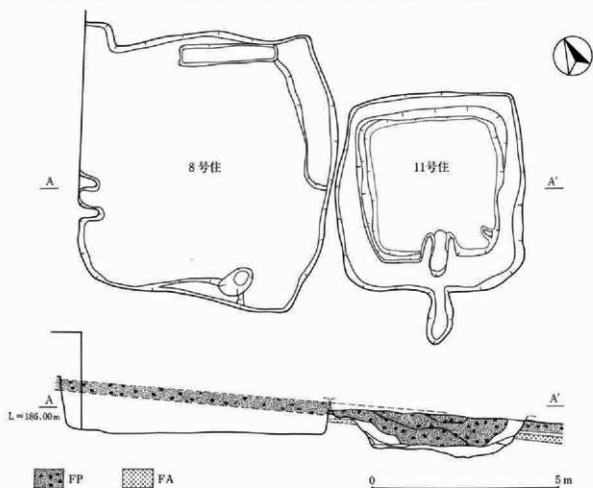
第3節 埋めもどされた住居跡について

神谷佳明

白井二位屋遺跡では、FP層上面で古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡を74軒ほど検出した。これらの住居跡の埋没土は、大部分がFPを多量に含む暗褐色土で占められている。これらの竪穴住居跡の埋没状態は、住居廃絶後周囲の土砂が自然にそして割合短期間に流れ込んで埋没したものと推定される。竪穴住居跡の埋没土には多量のFPが混入していることから住居構築時に掘削した土だけでなく、住居を掘削する際上位に位置するFPを混ぜ合わせて住居周囲に周堤帯を構築していたと想定され、竪穴住居跡の埋没土はこの周堤帯の土砂が流れ込んだものであると考えられる。

こうしたなかで2区で検出された11号住居跡は、土層断面図やPL.8に見られるように北壁ぎわと東壁ぎわに褐色土が若干堆積した後、多量のFPで埋没している。このFPは、下半分に若干の褐色土が混入されているが、上半分はFPの純層に近いような状態で堆積していた。

11号住居跡の位置する現地形は若干東に傾斜している程度であるが、当住居跡西側では表土下で直にFA下層の褐色土やローム層が確認され後世の削平によりFP層～FA等が消失している。住居跡の東側ではFP層の上面にAs-Bが混入した黒褐色土が確認されていることからFP層の削平は行われていないことがわかる。以上のような状況から住居構築当時は、FP層の残存部分の下面の状況などを考慮すると現在よりもっ



第1図 8号・11号住居跡

と傾斜のある斜面に立地していたと想定される。

11号住居跡の詳細は54頁に記載されているとおりであるが、白井二位屋遺跡の中では残存状態の良好なもので床面の周辺に幅0.3～0.7mで割合と平坦面をもつテラスが廻っており、他の住居跡とはテラスの状態が若干異なっている。竈は、南壁の中央部に位置し河原石を組み併せて構築している。また、遺物の出土はほとんど見られず図示できるものは土師器杯が1点だけで住居廃絶時に持ち出したようである。この土師器杯は、床面直上からの出土で当住居跡に伴うものでこの遺物から11号住居跡の年代は7世紀後半に比定される。11号住居跡のような壁周囲にテラスをもつものは他に7世紀代では28号、74号住居跡、8世紀代の6号住居跡等に見られ、南壁に竈をもつものは他に74号住居跡だけである。なお、74号住居跡は出土遺物から11号住居跡とほぼ同様の時期のものである。

11号住居跡は、確認面での他住居跡との重複関係は見られないが、7世紀代に比定される8号住居跡と8世紀前半代に比定される9号住居跡と接するように位置する。

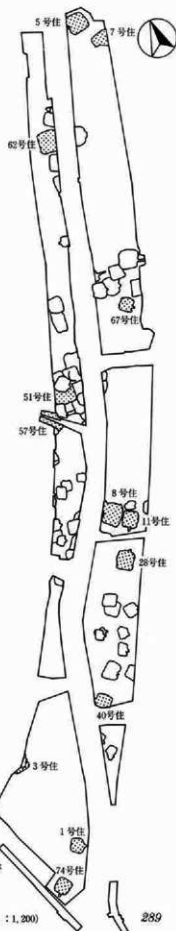
この11号住居跡は、前述のように大部分がFPで埋没しているが、このFPは土層断面の観察から西側から流れ込んでいることが解る。11号住居跡の西側には、前記のように近接するように8号住居跡が位置している。

8号住居跡は、11号住居跡の西側で接するように位置し、緩い傾斜地で11号住居跡より高い位置に立地する。8号住居跡は、上半を後世の削平によって消失しており、また、西壁側は村道下に伸びるため全貌及び詳細は不明である。8号住居跡は、11号住居跡より1～2mほど大きく住居東側ではテラス状の段も確認されている。出土遺物は、土師器杯、甕等が見られ、その形態から11号住居跡とほぼ同じ時期かやや新しい時期に比定される。

このような状況から11号住居跡の大部分を埋没させたFPは、8号住居跡の構築時に掘削した際に掘り出されたものと想定される。

こうした状況から8号住居跡の構築時期には、11号住居跡の土層断面より北・東側の周堤帯は大部分崩壊しているのに対して南・西側の周堤帯の一部が崩壊して住居壁際を埋め戻しているもののまだ大部分が存在していたと想定される。8号住居跡構築の第1段階としては、まずこの残存していた周堤帯の土砂の移動から始まり、次に住居予定地の表土の掘削、そして表土下のFPの掘削を行い大きな窪み化している11号住居跡をこのFPで埋め戻したと想定される。

前記のような過程で11号住居跡は、埋没したと想定



第2図 白井二位屋遺跡住居跡分布図 (S-1:1,200)

できる。白井二位屋遺跡は、8号や11号住居跡のような7世紀代の住居跡を初現として10世紀代まで連続と継続して集落が営まれている。このうち7世紀代の堅穴住居跡を抽出すると第2図のようになり、1、3、5、7、8、11、28、51、57、62、67号住居跡など11軒が確当する。これらの住居跡同士では、重複関係は見られず、8号住居跡と11号住居跡のように近接した時期の住居との接するような位置関係も他には見られない。このような堅穴住居跡の配置状況から見ると8号住居跡と11号住居跡の関係は、非常に希な例と考えられる。しかし、まだほとんど埋没していない住居跡を埋め戻してまで新たに住居を構築しなければならなかった状態から推察すると当時においても土地利用のうえでの何らかの制約があったことが窺える例である。今後、白井南中道遺跡でのFP降下後の集落跡の状況を見ながらこの白井遺跡群での土地利用についてより一層の追及をおこないたい。

第4節 白井二位屋遺跡の獣骨類

宮崎 重雄

I、はしがき

白井二位屋遺跡は群馬県北群馬郡子持村大字白井に所在し、平成2年4月から平成5年3月まで3次に渡って発掘調査され、獣骨類を多数出土した。ここに、その獣骨類の調査結果について報告する。

II、本文

A. 4号住居址 時代：9世紀後半

1. ウマ (*Equus caballus*)

①第21図41：左上顎臼歯の破片で、第1または第2後臼歯と推定される。歯冠長は25.6mm、歯冠幅15.0+mm、歯冠高は68.7mmである。Levin(1982)による推定法で得られた年齢は5～7歳であり、幼令期の終りから壮令期の初めのものである。ヒトでいえば20～30才程度に相当する。

2. ウシ (*Bos taurus*)

①第21図42：右上顎第3後臼歯で、歯冠長は38.3+mm、歯冠幅16.6mm、歯冠高は頰側が50.3mm、舌側が55.5mmで、後葉はわずかに残るだけである。歯冠高が高く、まだ若い個体である。Degerboel(1970)によれば、第3後臼歯の後葉の脱臼が開始されるのは約5才であり、本個体はほぼこの時期にあたっており、5才程度が推定される。

B. 31号住居址 時代：7世紀末～8世紀初頭

①第67図22：保存全長73.7mmの左落角で、角幹は第1分岐直上で、擦り切られており、第1枝と外側面は破損している。角疣と角皸の発達は良好である。第1分岐高は大塚式(Otsuka and Shikama, 1977)で、3.0mm、鹿間式(Shikama, 1949)で60.0+mm、角座直上の前後径は45.6mmである。

②第67図23：保存全長287.0mmの角幹から第2分岐部までが残存する左角で、角幹中央部の左右径は27.8mm、前後径は33.5mmである。加工痕は見い出せない。

③保存全長48.3mmまでの細骨片が多数出土している。

C. 40号住居址 時代：7世紀後半

1. ウマ

①第88図20：左上顎第3または第4前臼歯で、頰側歯冠高が73.0mm、舌側歯冠高が67.0mmである。咬合面の傾斜は85°である。Levin(1982)による推定法で求めた年齢は5～7才である。4号住居址の41と同年齢である。若いウマの歯が1本だけ出土するのは何を意味するのであろうか。

②保存全長18mmの骨片2片が存在する。

D. 44号住居址 時代：不明

①保存全長46.0mmまでのウマの脛骨片など47片が出土している。

E. 45号住居址 時代：8世紀後半

1. ウマ

①第94図11：右上腕骨の遠位部の内側半が残存したもので、保存全長は94mmである。破断面は発掘時以降のものである。骨端は癒合している。

F. 48号住居址 時代：8世紀後半

1. ニホンジカ (*Cervus nippon*)

①第97図15：近位骨端部の離脱した基節骨で、亜成獣のものである。保存全長38.4+mm、遠位骨端幅13.8mm、遠位骨端前後径13.0mm。

②第97図17：右膝蓋骨で、遠位端・近位端の左右が破損している。現生足尾産ニホンジカの雄よりやや大きい。

③第97図19：ニホンジカ？の腰椎破片で椎頭・椎窩の骨端は離脱している。

④第97図16：ほぼ完存する右距骨で、現生足尾山地産ニホンジカの雄より大きい(表-3)。

2. ニホンイノシシ (*Sus scrofa leucomystax*)

①第97図12：左上顎の第1切歯で、咬耗はかなり進んでいる。

②第97図14：左下顎第3後臼歯の歯冠部が残存したもので、Hayashi et al.(1977)の区分Ⅳに相当し、3.5才程度の年齢が推定される。現生ニホンイノシシの雄より大部大きく、本標本も雄の可能性が強い(表-6)。

③第97図13：左下顎三角の破片で、保存全長は67.0mmである。破断面は打ち割られたような痕跡を示す。

④第97図21：ニホンイノシシの仙骨破片で、保存全長は44mmである。強い力で割られている。

3. その他

①第97図20・22・23・26・27：保存全長52.7mmまでのニホンジカまたはニホンイノシシの四肢骨片で、強い力で打砕された痕跡を示す。

②第97図25：48号住居址の床下から出土したもので、保存全長22.7mmの四肢骨小片である。数100°Cの熱を受けている。

③第97図24：保存全長28.0mmの種不明の椎体破片で、椎頭・椎窩は離脱している。

④以上のほかに、巻き貝片2片、保存全長36.4mmまでの頭蓋片・椎骨片、カマドから19.4mmの骨片が出土している。

G. 49号住居址 時代：8世紀前半

1. ニホンジカ

①第104図91：右前頭骨(角座骨)の破片で、保存全長は69.1mmである。角座骨外側基部を前後方向に擦る切り、その切り痕は4本ほど観察され、板間層まで至ったところで折っている。骨表面以外は黒褐色に変色した焼骨である。頭部は脳以外に食料になる部分は少ないにもかかわらず、火熱を加えているのは、食料目的以外に何を意図したのだろうか。

第4章 調査のまとめと理科学分析

②第104図92：保存全長58mmの骨片で、おそらくニホンジカの大腿骨であろう。打ち割られ、フレーク状になっている。

③第104図93：右脛骨の遠位骨端で骨体から離脱している。遠位幅横径は32.7mm、前後径は28.5mmである。

④この他に鹿角片他4片と、ニホンジカのものと思われる脛骨片など13片が出土している。

H. 50号住居址 時代：7世紀末～8世紀前半

1. ニホンジカ

①図版なし：角片で断面形は長楕円形をなし、角幹の分岐部に近いところと思われる。角の周囲から切り込み、角芯の海綿質部に至ったところで折っている。多少変形しているが、現状での最大前後径は36.3mmである。

2. ニホンイノシシ

①第107図15：右下顎第3後臼歯で近位端は破損している。歯冠長は30.0mm、歯冠幅16.1mm、歯冠高は8.4mmである。現生ニホンイノシシの歯よりやや大きい。

I. 51号住居址 時代：7世紀後半

1. ニホンジカ

①第113図84：中手骨遠位骨体と骨端が残存したもので、保存全長は75.3mmである。現生足尾山地産の雄の成獣のそれより大きい。

②第113図83：中手骨骨体部で、保存全長は133mmである。

③第113図85：中足骨骨体部で保存全長は101.1mmである。強い力で打砕されたような破断面を示している。

④第114図92：基節骨で、近位端を欠損する。保存全長は43mmで、遠位端幅は15.1mm、遠位端径は14.5mmである。

⑤第114図99：ほぼ完存する左中心第4足根骨で現生足尾産雄のニホンジカよりやや大きい(表—4)。

⑥第113図79：第1枝・第2枝間の角幹部と思われる角片で、現状での全長は70.0mmである。中央部の角の径は30.0×34.0mmである。角疣は多少目立つ。角は上端・下端とも鉋で叩き切るような方法で切断されている。81とは同一の角である可能性もある。

⑦第113図81：第1枝・第2枝間の角幹上端部を切り取った角片で、全長は75.5mmである。中央部の径は30.2×36.21mmで、角疣はほとんど見られない。上端・下端とも鉋で叩き切るような方法で、切断されている。

⑧第113図77：右落角で、角幹は第一分岐部で切断されている。鉋で切込むような方法で周囲から切り、海綿質に至った所で折っている。第一分岐の高さは大塚式(Otsuka and Shikama, 1977)で42mm、鹿岡式(Shikama, 1949)で67mm、第一枝の長さは166mm、角座の前後径は55mm、左右径は51mm、角座直上の前後径は48mm、同左右径は36mmである。

⑨第113図82：角座の直上・直下で切り取った円盤状の角片で、最大厚8.5mm、角座径64.9×60.3mmである落角かもしれないが確認はできない。角座の周辺部も多少磨いて加工してある。中心部より少し外側によったところに径3mmの円形の穴が開いており、角座周辺部にも、径4mmから0.8mmまでの小孔がいくつか開いているが、少なくとも、この内の最大のものはもともとあった孔を人工的にさらに拡大したように思われる。

⑩第113図78：角片で、角疣は全く存在せず、角畝もごく弱く、幅5.4mmのものが2本見られるのみである。したがって、角幹の先端部が枝の一部と推定され、全長は80.0mmである。擦り切るような方法で切断されている。中央部には人工的に付けたとと思われるきわめて鋭利な刃物による極細の切痕が数本走っている。中央

部の径は20.5×16.6mmである。

⑪第114図88：椎頭・椎窩の骨端は離脱している頸椎である。

⑫第114図95・96：骨端の癒合している中節骨で、成獣のものである。保存全長はそれぞれ39.4、38.1+mmである。両者とも同一肢のものである可能性が高い。

⑬第114図92：右脛骨の離脱した近位骨端である。Lewall & Cowan(1963)よれば、オグロジカの脛骨近位端の骨端癒合は雄で2.8才、雌で2.9～5才である。本標本とは属・種が違うので、この年齢は参考にしかないが本標本に当てはめてみると、雄であれば2.8才以下、雌であれば最高でも5才には至っていないということになる。本標本の左右幅は62.3+、推定64mm、前後径は44.0+mmである。

⑭第114図86：保存全長66mmの左下顎骨破片で、骨体は緻密性を保ちきわめて保存良好である。第3前臼歯・第4前臼歯・第1後臼歯が植立している。現生足尾産ニホンジカの雄と比較すると、本標本はかなり大型で、むしろエゾシカに近い(表-5)。

大泰司(1980)に従い、歯の磨滅度による令査定を行ってみると、5才程度が得られる。また、第4前臼歯・第1後臼歯間の下顎骨高は29.7mmあり、大泰司の示すエゾシカの雄29.2mmに近く、雌の24.5mmよりかなり大きく、本個体が雄である可能性を強く示唆している。近心・遠心破断面は打砕された様相を示している。第1後臼歯では補維はなく、第2後臼歯は補維も咬耗を受けている。

⑮第113図80：骨頭部の離脱した保存全長92mmの大腿骨片である。Lewall & Cowan(1962)よれば、大腿骨の骨頭癒合は雄では2.8才、雌では2.4才である。このことからすると、この大腿骨は92の脛骨と同一個体である可能性もある。遠位破断面は強い力で打砕された様相を見せている。

⑯第114図94：環椎の右半分が残存したもので、鋭利な刃物による解体痕も数か所見られる。足尾山産ニホンジカより大きい。

⑰図版なし：鋭利な刃物で切り取った痕が5本ついている角片で、保存全長は37mmである。

2. ニホンイノシシ

①第114図100：きわめて保存良好な中節骨である。

②第114図93：右の末節骨である。最大前後長は32.6mm、床側面最大幅16.8mm、近位端最大上下径22.2mm、同最大幅14.7mmである。また、蹄底の対角線最大長35.5mm、背面長32.1mm、蹄底中央幅16.0mmである。

③第114図97：右踵骨で、亀裂と歪みが目立ち、焼骨で800℃程度の熱を受けたと思われる。近位骨端は離脱していて、成獣に至っていないことが分かる。

④第114図90：成獣の頸椎である。後半部が欠損している。

⑤第114図87：左下顎骨の破片で、第1後臼歯が植立し、第2後臼歯は歯槽のみが残存する。第1後臼歯は周囲を除く咬合面のはほぼ全面に象牙質が露出し、歯冠長は16.3+mm、歯冠幅は12.0mm、歯冠高は5.1mmである。Hayashi et al.(1977)の第1後臼歯の咬耗度による年齢査定法に従えば推定年齢は2.5才程である。

3. その他

①最大でも保存全長64mmまでのニホンジカまたはニホンイノシシの四肢骨片が6片があり、いずれも強い力で叩き割ったような様相をしている。さらに、51号住居址にはニホンジカの基節骨・末節骨、イノシシの臼歯・末節骨等の破片150片ほどの細片が含まれている。

4. 骨角器

①角(?)を材料にし、長軸方向に2分した保存全長42mmの骨角器で、その内側面の一方の縁に幅4mmの浅い溝が2mmおきに刻まれている。溝内は赤色系の塗料で着色されているように観察される。外面も自然面

第4章 調査のまとめと理科学分析

なく、整形されている。

J. 52号住居址 時代：8世紀前半

1. ウマ

①第119図19：前肢末節骨で、最大幅は57.7mm、最大前後径が55.5+mmである。関節面は内側端と外側端にわずかに残るのみである。床溝・床孔は一部残存するが、床管、冠縁・伸筋突起を欠き掌突起・掌突起切痕は左右とも欠いている。しかし、掌突起切痕は前方へ連続して最前端近くまで溢れる。

2. ニホンジカ

①第119図18：遠位部を欠く保存全長179mmの成獣の左中足骨である。近位端最大幅は27.8mm、中央幅は20.6mm、同前後径は23.2mmで、現在の足尾山地産の雄のニホンジカよりかなり大きい。

②第119図24：保存全長36.8mm鹿角片である。破断面は折り取られたような観を呈する。

③第119図28：保存全長44.3mmの角片で、ナイフのような鋭利な刃物で切り取った痕がある。

3. ニホンイノシシ

①第119図26：尺骨の近位部の保存全長74mmの破片で、大きさからして成獣のものである。近位関節面の最大幅は26.7mmである。

②第119図20：きわめて保存良好な成獣の基節骨である。

③第119図21：遠位端を欠く右第2中手骨で、保存全長41.4mmである。

④第119図22：右上顎第二切歯で咬耗がだいぶ進み、エナメルがわずかに残存するだけで、全長は30.9mmである。

3. ニホンザル (*Macaca fuscata*)

①第119図17：寛骨の右半分で、保存はかなり良好である(表-7)。

4. その他

①ニホンジカ鹿角片5、ニホンイノシシの雌の犬歯槽骨を含む上顎骨片、同中手骨または中足骨片1の他種不明の肢骨片7など保存全長67.8mmまでの45片の骨片が出土している。

②保存全長77.3mm、幅11.8mm、厚さ3mmのきわめて細長く薄い平板状の骨角器の破片である。全面に加工が施してある。

K. 53号住居址 時代：8世紀代?

1. ウマ

①第122図1：左大腿骨遠位半が残存したもので、保存全長は14.8mmである。骨は緻密堅固で、良好な保存状況を示し、直接的証拠はないが多少の加熱を受けているように思える。また近位破断面はシャープな割れ口をなし、強い力で割られたことを表し、骨髄食の可能性もある。骨端癒合が完了していることから、成馬である。明瞭な加工痕は認められない(表-1)。

L. 55号住居址 時代：不明

①第116図5：ウマまたはウシの肋骨片で、保存全長177mmあり、最大幅は23.6mmある。

②第116図6：ウマまたはウシの肋骨片で、保存全長260mmあり、最大幅は21.0mmある。

③第116図4：中型・大型哺乳動物の四肢骨片が4片あり、この中での最大長は31.5mmである。

④図版なし：保存全長32.2mmの犬科動物の軸椎で、棘突起と後突起が残存している。おそらくイヌ(*Canis familiaris*)であろう。

⑤この他に、保存全長50mmまでのウマの指骨を含む91片の骨片が出土している。

M. 56号住居址 時代：8世紀代？

1. ニホンジカ

①第121図30：右の角座骨つき角片である。角座骨の部分は人工的に頂部の取られた大略6角錐の形状を呈している。鋭利な刃物で切り取ったように思われる。第一枝は分岐部の基部からきれいに切り取られており、角幹は分岐部の直上で周囲から切り込まれ、中心部の海綿質至った所で折られている。角座の縁に近いところに小さな穴が1つ開いており、ここには紐が通されていたのかもしれない。保存全長は90.2mm、角座51.0×46.2mm、角座直上での角の径43.0×30.7mm、である。

②第121図31：角座の直上と第一分岐部最上部で角幹が切断されていて、第一枝は二次的に欠損している。保存全長は53.8mmで、変形しているが、角座直上の径は33.0×25.3mmである。角は鋭利な刃物で擦り切るような方法で、切り込み、角芯部の海綿質部に至ったところで折っている。

③この他に、保存全長26.0mmまでの鹿角片5片が出土している。

N. 58号住居址 時代：9世紀末～10世紀初頭

1. ウマ

①第128図11：左右不明の中手骨で、骨幹部と遠位骨端部がわずかに残存し、従後およびその周辺の関節面を損傷している。

②第128図12：骨幹部をわずかに残す遠位骨端部が残存した左右不明の中足骨である。近位破断面は発掘時以降に生じたものである。

③第128図13：遠位3分の1ほどが残存した左右不明の中手骨で、近位破断面は発掘時以降に生じたものである。従後遠位端に左右方向に鋭いエッジによる傷跡が6本程観察される。

以上3個の部位は同一個体と思われる。

④：この他に上記のいずれかの部位のものと思われる骨体片が2片見つかっているが、打碎された破断面を示している。

P. 65号住居址 時代：10世紀後半

1. ニホンジカ

①第127図4：左距骨である。一部破損があるが、人工的なものではない。外側最大長38.6mm、外側最大厚24.4mm、内側最大厚23.7mmである。

②第127図5：右距骨の焼骨で、黒褐色をしている。遠位端最大幅が28.2mmあり、足尾産現生雄のそれが25.0mmであるのみ比べると、だいぶ大きい。4は5より大きく、別個体と思われる。

2. ニホンイノシシ

①第127図6：左橈骨の骨体遠位部で、骨端は離脱している。ブタでは橈骨遠位端の骨端癒合は3.5才で癒合する(Silver, 1971)。おそらくこの個体もまだ3.5才の年齢にいたっていないのであろう。骨体遠位部幅および同前後径は本標本では38.7mm、28.5mmであり、現生岐阜県産の雄はそれぞれ32.0mm、27.1mmである。

3. その他

①ウマの基節骨などを含む保存全長53.8mmまでの骨片42片が出土した。

Q. 69号住居址

①ニホンジカの基節骨破片、末節骨破片、中足骨破片など47片の焼骨が出土した。亀裂や歪みが生じているものが多い。

R. 71号住居址

第4章 調査のまとめと理科学分析

1. ニホンジカ

①第148図9：左距骨で、外側半を一時的に欠いている。火熱を受けていて、多少変色している。内側最大長は38.7mmあり、足尾山産現生雄の37.3mmより多少大きい。

②第148図11：保存全長44mmの大腿骨骨体近位部で火熱を受け、褐色に変質している。

2. その他

①第148図10：ニホンジカまたはニホンイノシシの椎骨の破片で、保存全長は38mm、椎頭部最大横径は28mmである。火熱を全体に受け、骨表面は茶褐色、破断面は濃い褐色である。

②第148図12・13：四肢骨片でいずれも焼骨である。前者はニホンジカのものと思われる。保存全長はそれぞれ40mm、28mmである(表-2)。

③カマド：保存全長28.5mmまでの基部骨または中節骨片を含む90片の焼骨が出土している。食料とならない四肢末端部までカマドで焼いているのは何を意味するのだろうか。

S. 72号住居址

①：最大破片でも30.0+mmまでの四肢骨片を含む焼骨片70片が出土している。

引用文献

- Degerbol, M. (1970); Grigson, C. (1982) Sex and age determination of some bones and teeth of domestic cattle. *In* Wilson, B., Grigson, C. and Payne S. eds. *Ageing and sizing animal bones from archaeological sites* BAR British Series 109. B. A. R., England, 7-23より引用
- Duerst, J. U. (1926) *Verleichende Untersuchungsmethoden am Skelett bei Säugern*.
Hayashi, Y., Nishida, T. and Mochizuki, K. (1977) Sex and age determination of the Japanese wild boar (*Sus scrofa leucomystax*) by the lower teeth. *The Japanese Journal of Veterinary Science*, 39 (2), 165-174.
- Levin, M. A. (1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. *In* Wilson, B., Grigson, C. and Payne S. eds. *Ageing and sizing animal bones from archaeological sites*. BAR British Series 109. B.A.R., England, 223-250.
- Lewall, E. F. and Cowan, M. T. I. (1963) Age determination in black-tail deer by degree of ossification of the epiphyseal plate in the long bones. *Canadian Journal of Zoology*, 41, 629-636.
- 大寺町紀之(1980) 遺跡出土のニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節判定法. 考古学と自然科学, 13, 51-73.
- Otsuka, H. and Shikama, T. (1979) Studies on fossil deer of the Takao collection (Pleistocene deer fauna in the Seto Inland Sea West Japan, part 1). *Bulletin of National Science Museum Ser. C.*, (Geo.), 3 (1), 99-140.
- 斎藤弘吉(1963) 大科動物骨格計測法. 私家版.
- Shikama, T. (1949) The Kuzuu Ossuaries. Science Report of Tohoku Imperial University Ser. 2, Vol. 23, 1-201.
- Silver, I. A. (1971) The ageing of domestic animals. *In* Brothwell, D. and Higgs, E. eds., *Science in archaeology*. Thames and Hudson, 283-302.

表1

第122図1：ウマ大頰骨計測値

1	転子からの長さ	145.2+
16	骨体最小幅	73.2
22	Fossa polittia 最大幅	15.8
28	骨体最小径	43.2
29	骨体遠位最小径	45.2
30	遠位端最大径	94.0a

表2

第148図：ウマ中手骨・中足骨計測値

		10	12	11
		中手骨	中手骨	中足骨
1	最大長	44.2+	54.0+	11.0+
14	遠位端最大幅	50.6?	43.7	40.3
15	遠位関節面最大幅	43.0	38.1	

注：ウマの計測法は Duerst (1926) による。

表3

第97図16：ニホンジカ距骨計測値・比較表

	外側最大長	内側最大長	滑車最小長	内側最大頭径	遠位端最大幅	滑車溝長
白井二位層	42.2	39.4	32.7	22.4	25.8	32.7
現生足尾	38.5	37.2	30.8	21.0	25.3	

表4

第114図59：ニホンジカ中心第4足趾骨計測値

	白井二位層	足尾現生
最大幅	34.5	33.9
最大前後径	27.8	27.1

表5

第114図86：ニホンジカの白歯計測値・比較表

	歯冠長		歯冠幅		歯冠高		下顎厚		下顎高	
	白井二位屋	現生足尾	白井二位屋	現生足尾	白井二位屋	白井二位屋	現生足尾	白井二位屋	現生足尾	
第3前臼歯	14.5		8.4		12.8	13.7	11.4	22.1	20.8	
第4前臼歯	15.8	12.5	9.8	7.7	13.5	14.5	12.2	24.0	21.7	
第1後臼歯	16.0	15.1	12.1	9.8	11.8	16.3	13.4	30.1	25.3	

第3前臼歯から第1後臼歯までの歯列長：白井二位屋45.6mm、現生足尾38.2mm

表6

第97図14：ニホンイノシシ下顎第3後臼歯計測値・比較表

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
白井二位屋	44.0	22.2m	16.8
現生足尾	30.5	15.0	

以上各表とも単位はmm

表7

第119図17：ニホンザル寛骨計測値

1	寛骨長	42.4
5	髌骨最大幅	37.5
8	髌骨最小幅	21.2
9	髌骨頸部最大厚	8.2
10	関節窩前後径	20.6
11	関節窩横径	19.3
12	坐骨最小幅	14.6
13	坐骨骨厚	10.3
23	坐骨結節厚	11.7

注：計測法は森島（1963）による。

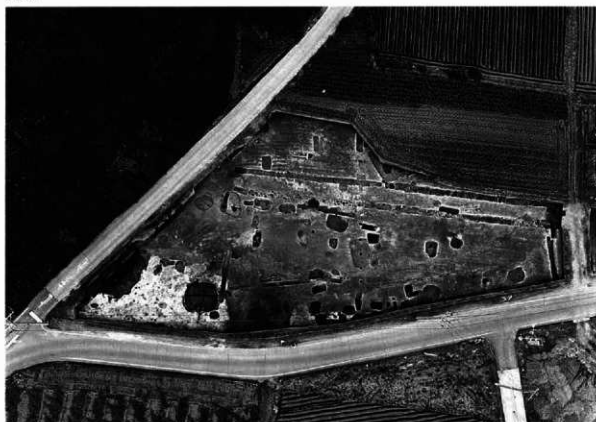
写 真 图 版



遺跡遠景 (東から)



遺跡遠景 (西から)



1区全景



1区全景斜方向



2区全景



3区部分



1号住居平面



1号住居掘り方



1号住居竈



1号住居竈掘り方



2号住居平面



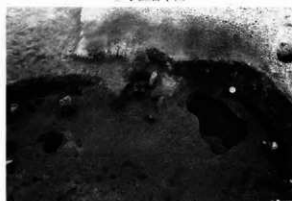
2号住居掘り方



3号住居平面



3号住居竈



4号住居平面



4号住居掘り方



4号住居竈



5号住居平面



5号住居掘り方



5号住居竈



6号住居道東部分



6号住居道西部分



6号住居竈



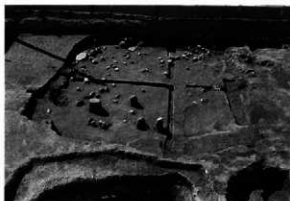
6号住居竈天井石除去



6号住居竈基部



7号住居平面



8号住居平面



8号住居竈



9号住居平面



9号住居掘り方



10号住居平面



11号住居平面



11号住居 FP 埋没状況



11号住居掘り方



11号住居竈



12・32号住居平面



13・14号住居平面



15号住居平面



16号住居平面



16号住居掘り方



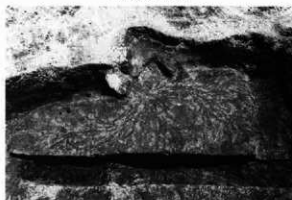
16号住居竈



18号住居平面



18号住居掘り方



19号住居平面



19号住居掘り方



20号住居平面



20号住居掘り方



21号住居平面



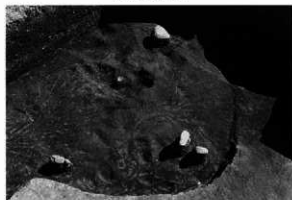
21号住居掘り方



22号住居平面



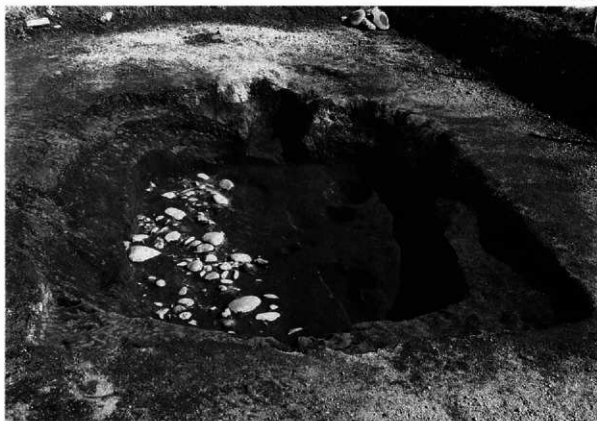
22号住居掘り方



23号住居平面



28号住居平面



28号住居掘り方



28号住居竈側面



28号住居竈正面



28号住居竈基部



24号住居平面



25号住居平面



27号住居平面



29・30号住居平面



29・30号住居掘り方



31号住居平面



31号住居掘り方



31号住居壺



31号住居鹿角出土状況



34号住居平面



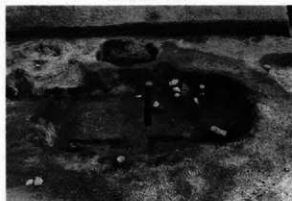
34号住居掘り方



35号住居平面



36号住居平面



37号住居平面



37号住居掘り方



37号住居竈



38・41号住居平面



38・41号住居掘り方



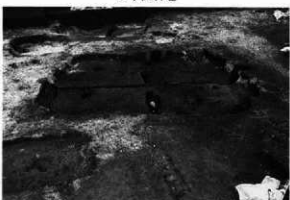
38・41号住居竈



41号住居竈



39号住居平面



39号住居掘り方



39号住居竈 2



39号住居床下土坑 1



39号住居床下土坑 2



39号住居紡錘車出土状況



39号住居灰釉桶出土状況



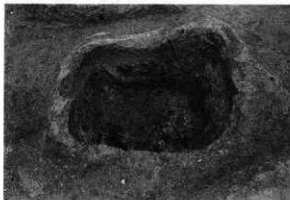
40号住居平面



40号住居掘り方



40号住居竈



1群1号烧成土坑



1群2号烧成土坑



1群4号烧成土坑



1群8号烧成土坑



1群10号烧成土坑



1群11号烧成土坑



1群13号烧成土坑



1群14号烧成土坑



1群14・15・16号焼成土坑



43号住居平面



43号住居竈



43号住居掘り方



43号住居骨検出状況



44号住居平面



44号住居竈



45号住居平面



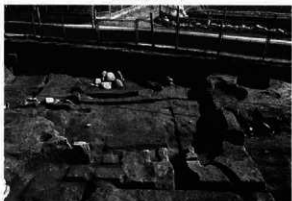
45号住居掘り方



46号住居平面



47号住居平面



48号住居平面



48号住居掘り方



48号住居竈



49号住居平面



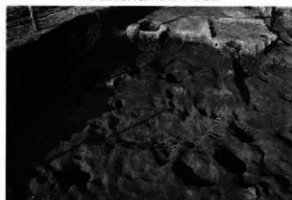
49号住居掘り方



49号住居紡錘車出土状況



50号住居平面



50号住居掘り方



51号住居平面



51号住居掘り方



51号住居鹿角出土状況



52号住居平面



52号住居掘り方



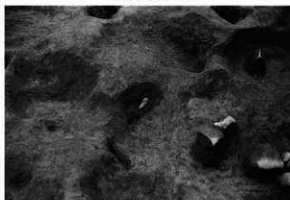
52号住居竈



53号住居平面



53号住居掘り方



53号住居遺物出土状況



54号住居平面



54号住居と同開珠出土状況



55号住居平面



55号住居掘り方



56号住居平面



56号住居遺物出土状況



56号住居鹿角出土状況



56号住居竈



57号住居平面



57号住居掘り方



58号住居平面



58号住居掘り方



61号住居平面



61号住居掘り方



61・62・63号住居平面



62号住居平面



62号住居壁段構造



63号住居平面



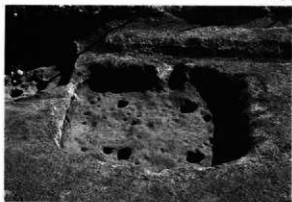
65・66号住居平面



66号住居炭化材



67号住居平面



67号住居掘り方



67号住居竈



67号住居竈掘り方



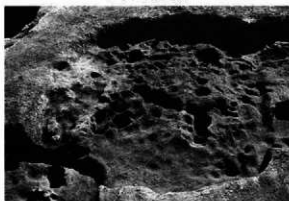
68号住居平面



68号住居掘り方



69号住居平面



69号住居掘り方



69号住居竈



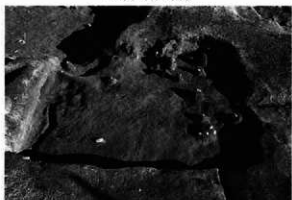
70号住居平面



70号住居掘り方



70号住居竈



71号住居平面



71号住居掘り方



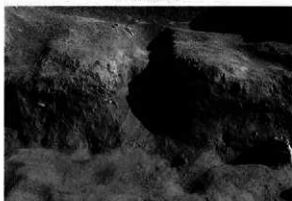
71号住居竈



71号住居竈



72号住居竈



72号住居竈掘り方



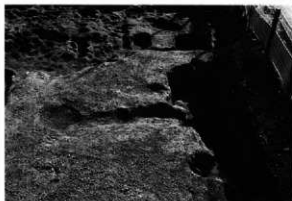
72号住居平面



72号住居掘り方



73号住居平面



73号住居掘り方



74号住居道北



74号住居道南



74号住居壙



74号住居壙正面



74号住居壙基部



74号住居棒状壙出土状況



74号住居竈基部



74号住居須恵器壺出土状況



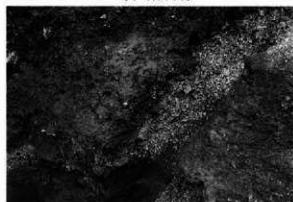
76号住居平面



76号住居掘り方



76号住居遺物出土状況



76号住居壁 FA 貼付状況



182号土坑平面



185号土坑平面



191号土坑平面



290号土坑平面



焼成土坑2群



2群1号焼成土坑セクション

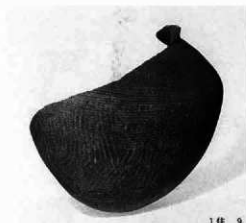


2群1号焼成土坑焼土



2群1号焼成土坑平面





1住 9



1住 10



1住 11



1住 12



1住 19



1住 22



1住 13



1住 14



1住 15



1住 20



1住 21



1住 16



1住 17



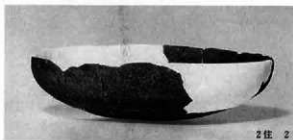
1住 18



1住 23



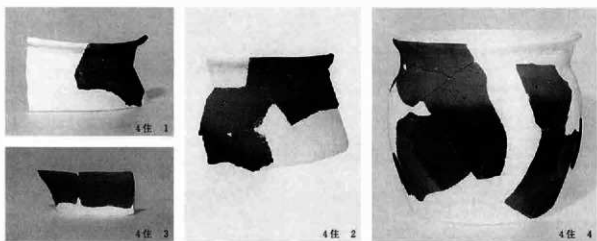
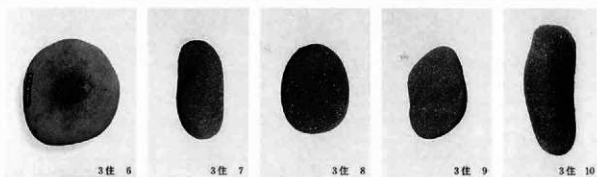
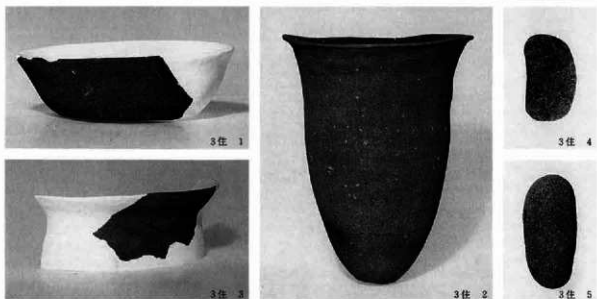
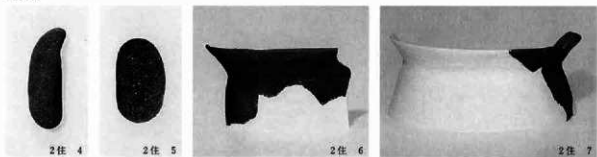
2住 1



2住 2

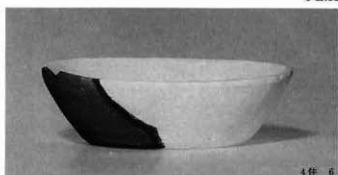


2住 3





4 住 5



4 住 6



4 住 7



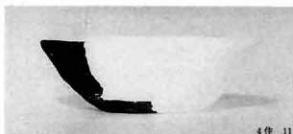
4 住 8



4 住 9



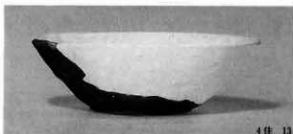
4 住 10



4 住 11



4 住 12



4 住 13



4 住 14



4 住 15



4 住 16







5住 13



5住 14



5住 15



5住 16



5住 17



5住 18



5住 19



5住 20



6住 1



6住 2



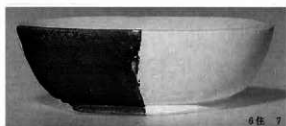
6住 3



6住 4



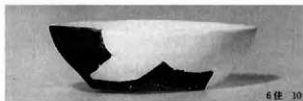
6住 5



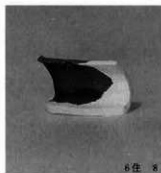
6住 7



6住 6



6住 10



6住 8



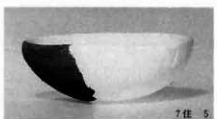
6住 9

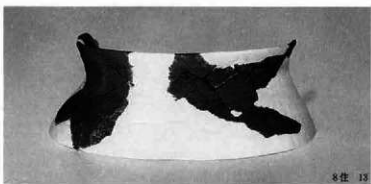


7住 2



7住 3







8住 27



8住 28



8住 29



8住 30



8住 31



8住 32



8住 33



8住 34



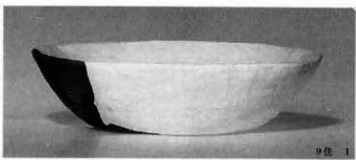
8住 35



8住 36



8住 39



9住 1



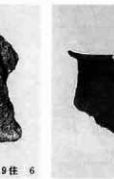
9住 3



9住 4



9住 5



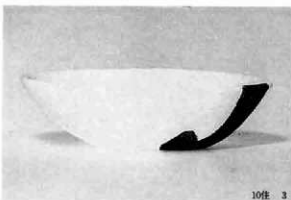
9住 6



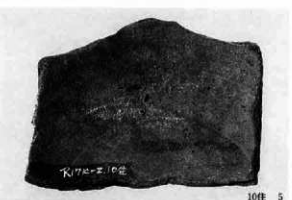
10住 1



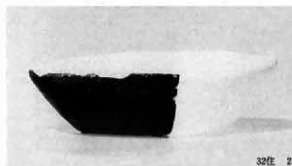
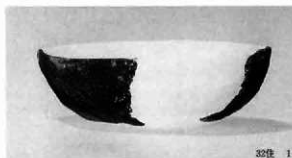
10住 2



10住 3



10住 5



10E 6

11E 2

10E 4

11E 1

12E 1

12E 2

32E 1

32E 3

12E 3

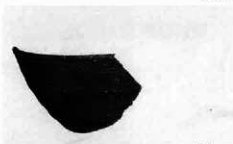
32E 2

32E 4

14E 1



13住 1



15住 1



15住 2



15住 3



15住 4



15住 5



15住 6



16住 1



16住 2



16住 3



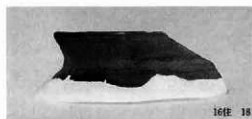
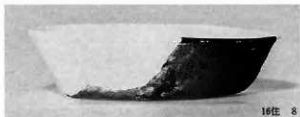
16住 4



16住 5



16住 6





16住 19



16住 24



16住 25



18住 1



19住 1



19住 2



19住 3



19住 4



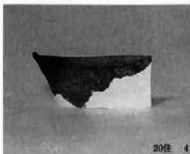
20住 1



20住 2



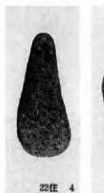
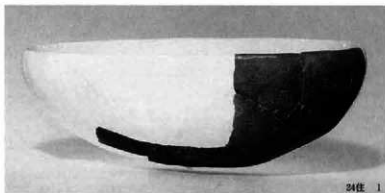
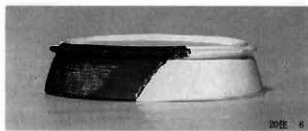
20住 3



20住 4



20住 10





28住 3



28住 4



28住 5



28住 6



28住 7



28住 8



28住 11



28住 12



28住 9



28住 10



28住 13



28住 15



28住 16



28住 17



28住 14





30住 2



30住 3



30住 4



30住 5



30住 6



30住 7



31住 1



31住 6



31住 2



31住 7



31住 3



31住 8



31住 4



31住 9



31住 5





31住 17



31住 20



31住 24

31住 19



31住 23



31住 22



34住 1



34住 2



34住 3



34住 4



37住 1



37住 2



37住 3



37住 4



37住 5



37住 6



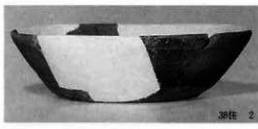
37住 7



37住 8



38住 1



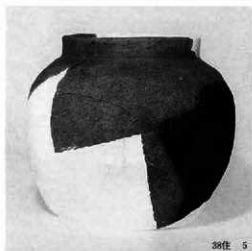
38住 2



38住 3



38住 4



38住 5



38住 6



39住 1



39住 2



39住 3



39住 4



39住 5



39住 6



39住 7



39住 8



39住 9



39住 10



39住 11



39住 12



39E 13



39E 14



39E 15



39E 16



39E 17



39E 20



39E 19



39E 18



39E 21



39E 22



39E 25



39E 23



39E 24



39E 30



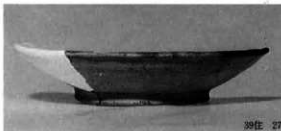
39E 26



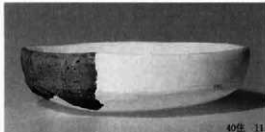
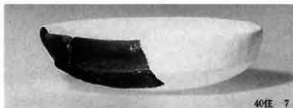
39E 28



39E 29



39E 27





40住 15



40住 17



40住 16



40住 20



40住 21



40住 22



40住 18



40住 24



40住 23



40住 25



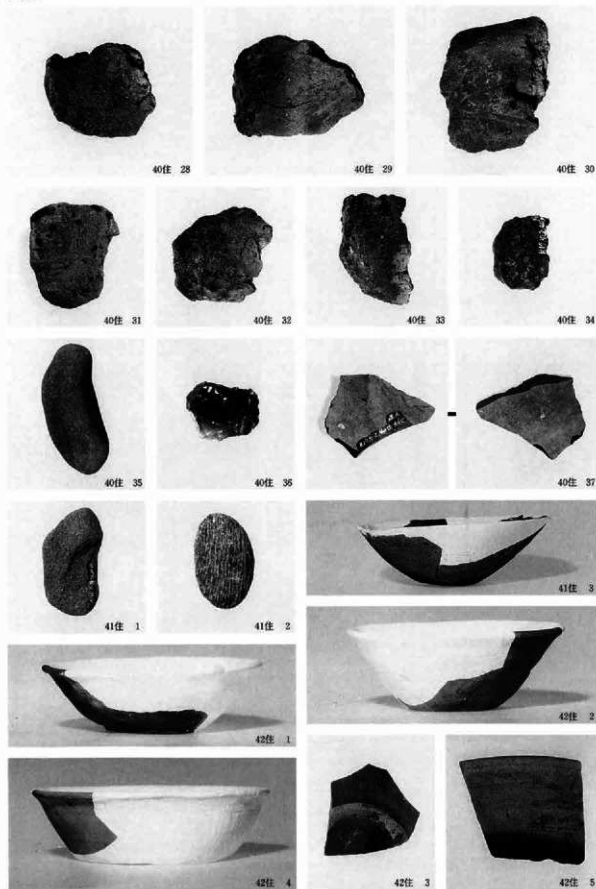
40住 26



40住 27

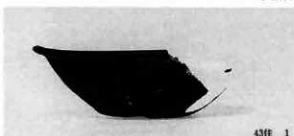


40住 19





43住 6



43住 1



43住 2



43住 3



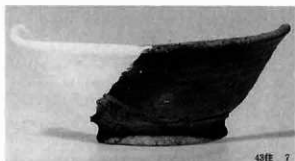
43住 4



43住 5



43住 6



43住 7



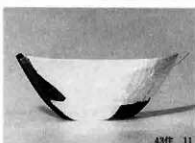
43住 8



43住 9



43住 10



43住 11



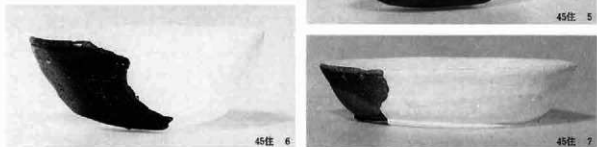
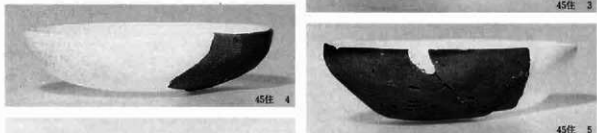
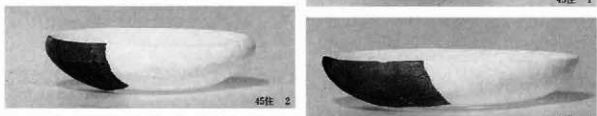
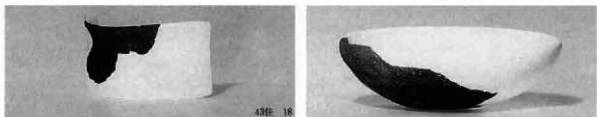
43住 12



43住 13



43住 14





46住 1



46住 2



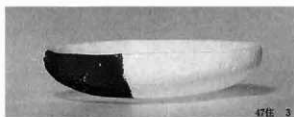
46住 3



47住 1



47住 2



47住 3



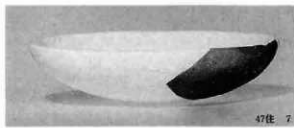
47住 4



47住 5



47住 6



47住 7



47住 10



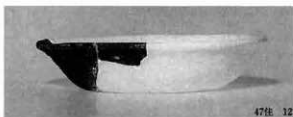
47住 8



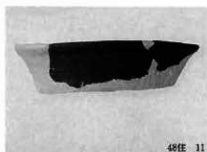
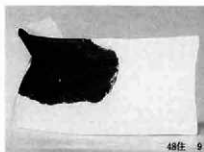
47住 9



47住 11



47住 12





48住 17



48住 18



48住 19



48住 21



49住 1



49住 2



49住 3



49住 4



49住 5



49住 6



49住 7



49住 8



49住 9



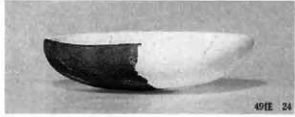
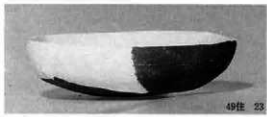
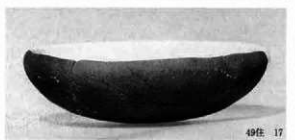
49住 10



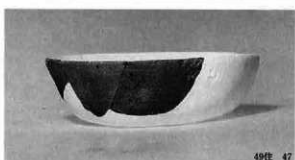
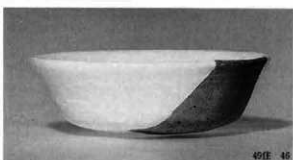
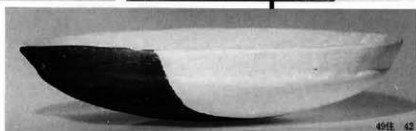
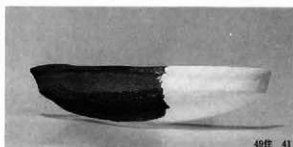
49住 11

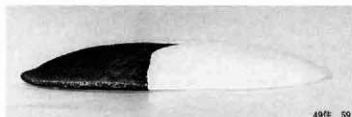
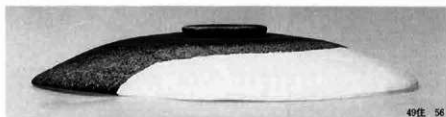
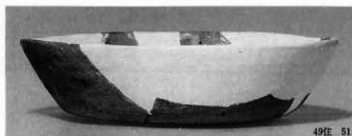


49住 12











49E 61



49E 62



49E 63



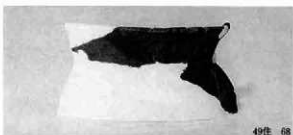
49E 64



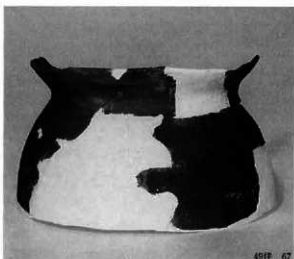
49E 65



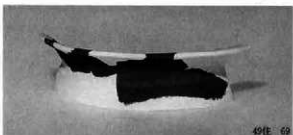
49E 66



49E 68



49E 67



49E 69



49E 70



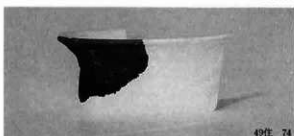
49E 71



49E 72



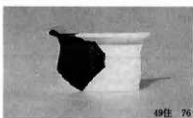
49住 73



49住 74



49住 75



49住 76



49住 77



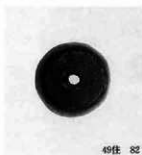
49住 78



49住 79



49住 80



49住 82



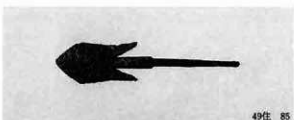
49住 83



49住 81



49住 84



49住 85



49住 86



49住 87



49住 88



49住 89



49住 90



49住 93



50住 1



50住 2



50住 4



50住 6



50住 3



50住 5



50住 7



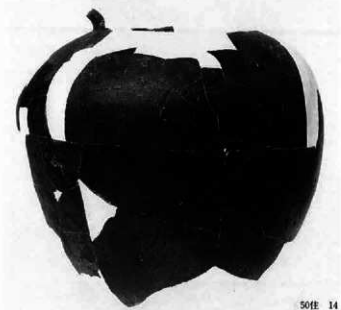
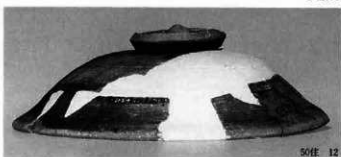
50住 9

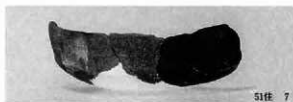


50住 8



50住 10







51住 23



51住 20



51住 24



51住 31



51住 25



51住 32



51住 26



51住 33



51住 27



51住 34



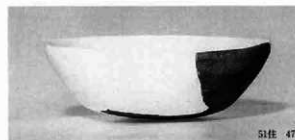
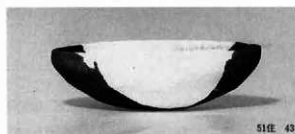
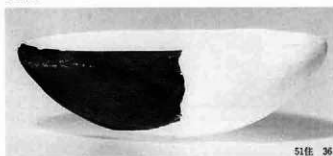
51住 28



51住 29



51住 35

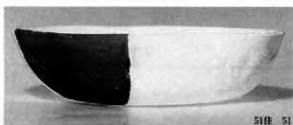




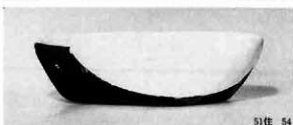
51住 49



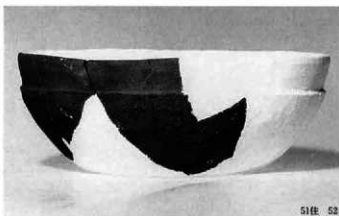
51住 50



51住 51



51住 54



51住 52



51住 55



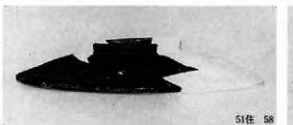
51住 53



51住 56



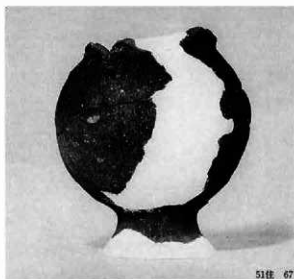
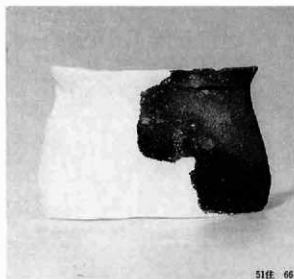
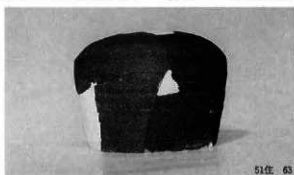
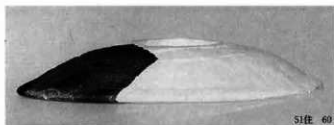
51住 57



51住 58



51住 59





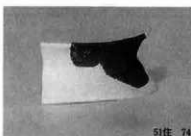
51E 71



51E 72



51E 73



51E 74



51E 75



51E 76



51E 81



51E 79



51E 77



51E 80



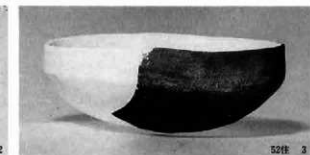
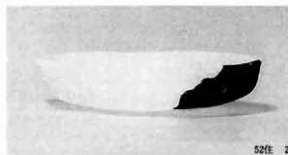
51E 78



51E 82



51E 84





52件 4



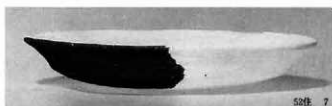
52件 5



52件 6



52件 8



52件 7



52件 9



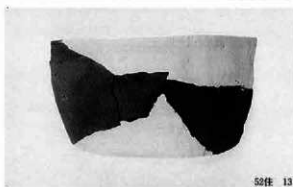
52件 10



52件 11



52件 12



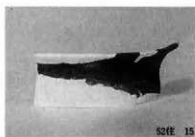
52件 13



52件 14



52件 14

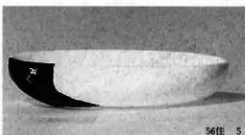


52件 15





56住 7



56住 5



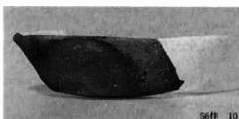
56住 6



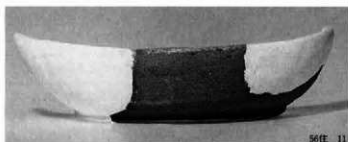
56住 8



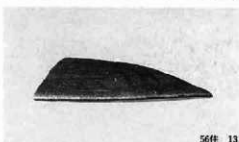
56住 9



56住 10



56住 11



56住 13



56住 12



56住 14



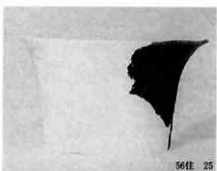
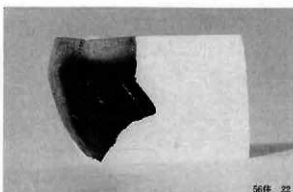
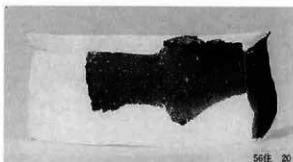
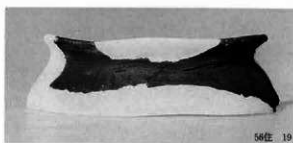
56住 15



56住 16



56住 18





56住 28



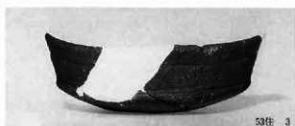
56住 29



56住 30



56住 31



53住 3



53住 4



53住 5



53住 6



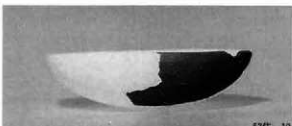
53住 7



53住 8



53住 9



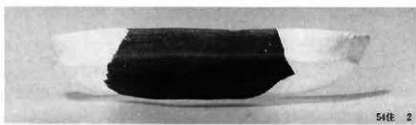
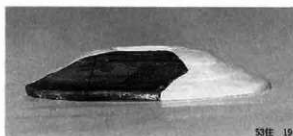
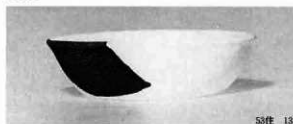
53住 10



53住 11



53住 12





54住 3



54住 4



54住 5



57住 4



57住 1



57住 2



60住 1



60住 2



60住 3



60住 4



60住 5



60住 6



62住 1



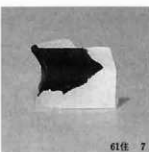
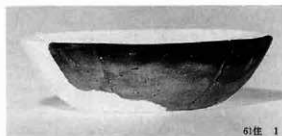
62住 2

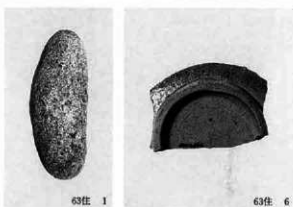
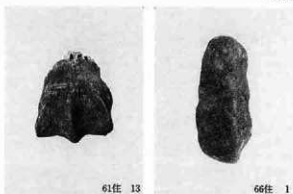
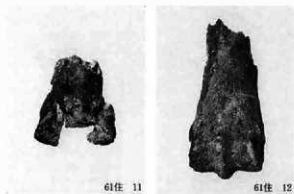


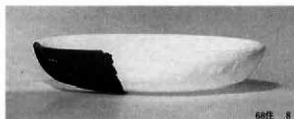
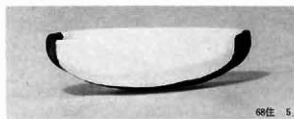
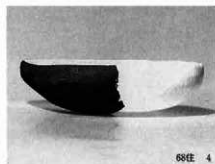
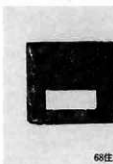
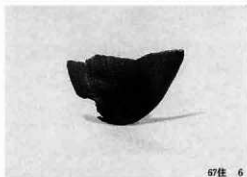
62住 3



62住 4









68住 11



68住 12



68住 13



68住 15



68住 16



69住 1



68住 17



69住 2



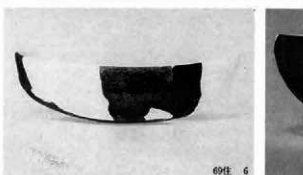
69住 3



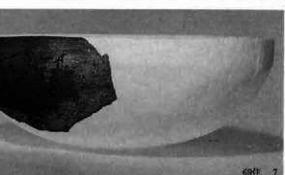
69住 4



69住 5



69住 6



69住 7



69住 8



69住 9



69住 10



69住 11



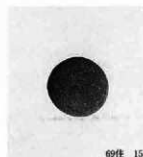
69住 12



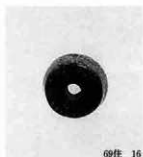
69住 13



69住 14



69住 15



69住 16



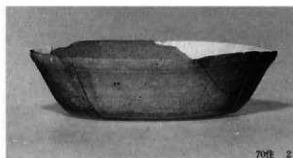
69住 17



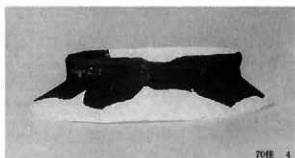
69住 18



70住 1



70住 2



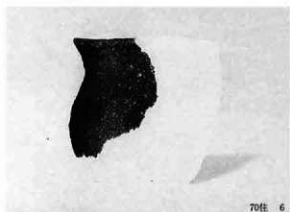
70住 4



70住 3



70住 5



70住 6



71住 1



71住 3



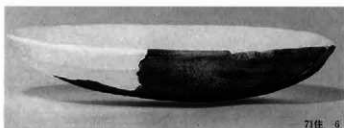
71住 2



71住 4



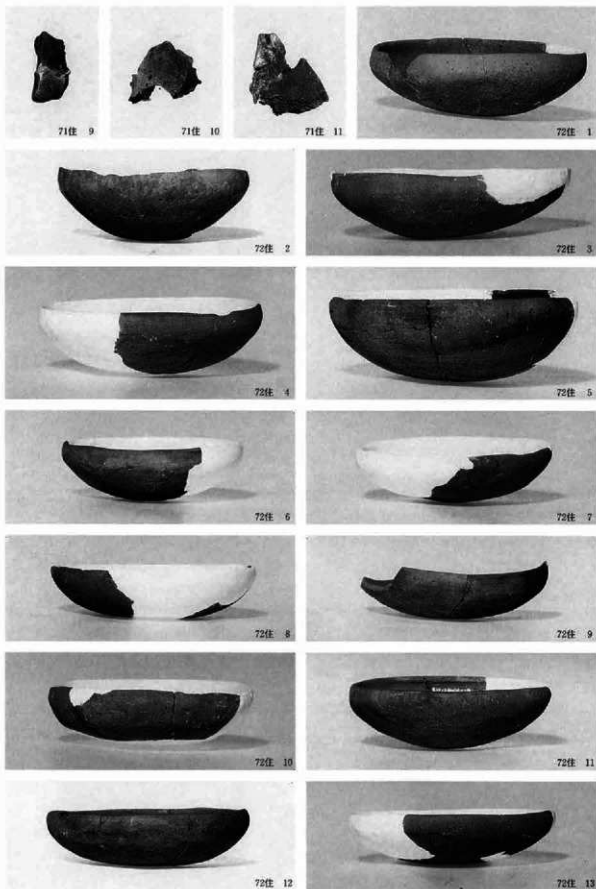
71住 5



71住 6



71住 7





72E 14



72E 15



72E 16



72E 17



72E 18



72E 19



72E 20



72E 21



72E 22



72E 23



72E 25



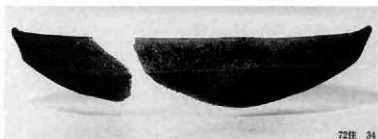
72E 24



72E 26



72E 27





72住 40



72住 41



72住 42



72住 43



72住 44



72住 45



72住 46



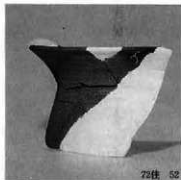
72住 50



72住 48



72住 51



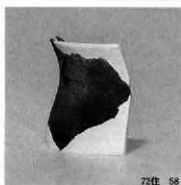
72住 52



72住 53



72住 54



72住 58



72住 57



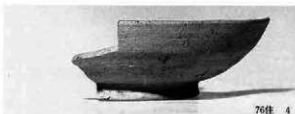
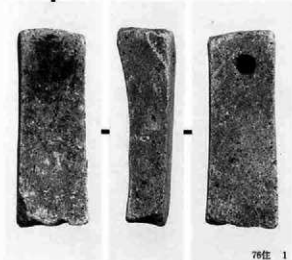
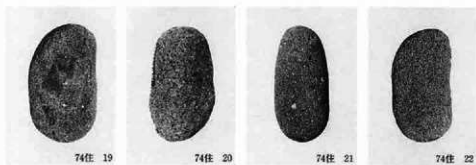
72住 55



72住 56





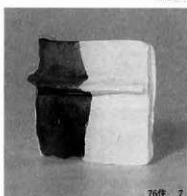




76住 5



76住 6



76住 7



76住 8



76住 9



76住 10



76住 11



182土坑 1



182土坑 2



182土坑 5



182土坑 4



182土坑 3



182土坑 9



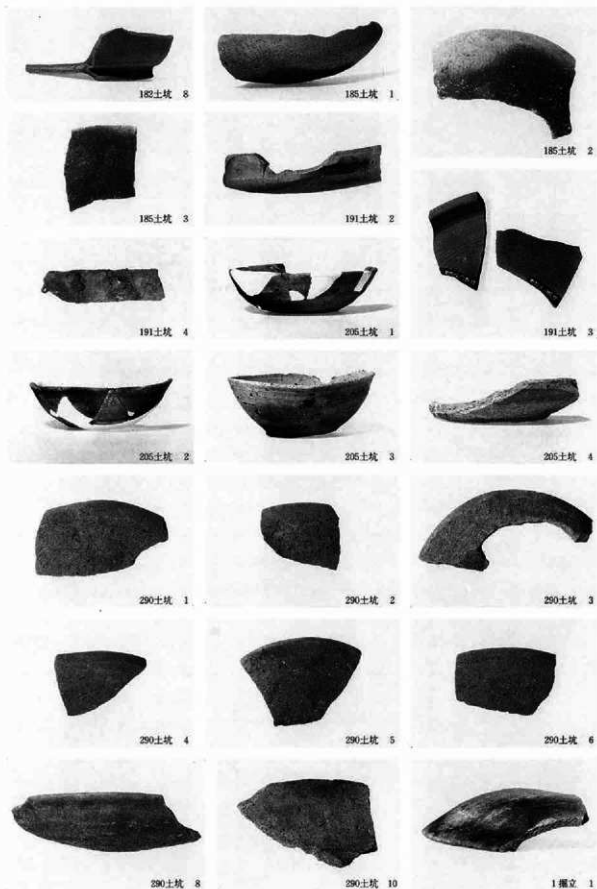
182土坑 6



182土坑 7



182土坑 10



白井遺跡群 - 集落編 I -
(白井二位屋遺跡)

一般国道17号(熊沢バイパス)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

平成6年3月15日 印刷

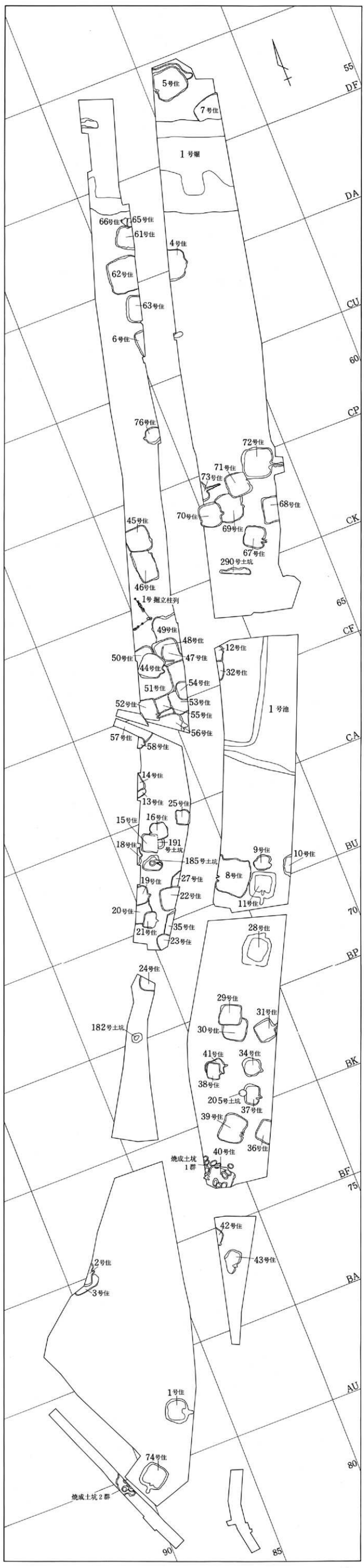
平成6年3月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局



付図1 白井二位屋遺跡全体図 (S=1/400)



○国家座標は第Ⅱ系（原点は北緯36°、東経139°50'）である。
 ○古墳番号は「上毛古墳総覧」（群馬県・1938年）掲載の旧長尾村古墳番号を示す。
 ○落合1号墳は「上毛古墳総覧」記載編の古墳で子持村教育委員会が調査した古墳である。
 石井克己氏のご教示を受けた。
 ○スクリーントーンは二位屋敷の推定される堀の一部を表す。